鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（15）

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

Ⅶ

中尾田遺跡

1981.3

鹿児島県教育委員会

序　　文

九州縦貫自動車道（えびの～鹿児島）建設に伴う姶良郡横川町中尾田遺跡の調査については，発掘調査を昭和53年５月15日から昭和54年10月６日の間に実施し，山城の構造について貴重な発見をしました。

その後，昭年55年度に整理調査を進め，ここに「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告第７集」として発刊することになりました。

県教育委員会としては，この報告書が文化財保護のため広く活用されることを願っています。

発刊に当たり，日本道路公団はじめ，地元町教育委員会及び調査に参加された方々に対し深く感謝の意を表します。

昭和56年３月

鹿児島県教育委員会
教育長　井之口　恒　雄

調査の状況

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査の経緯は，それぞれ「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－」で述べた。昭和46年，鉾良郡鉾良町小瀬戸遺跡で調査を開始して以来すでに９年間にも及んでいる。

この間，調査については，年度毎に日本道路公団福岡建設局との間に「発掘調査の委託契約」を行い，これに基いて実施してきた。この間発掘調査の対象とした遺跡は38個所であったが，昭和55年２月21日，木場A遺跡を最後にすべてを終了した。

一方，調査の整理・報告については，第Ⅰ集～第Ⅶ集で，27遺跡を発表したことになる。残された遺跡についても，今後，ひきつづき報告してゆく計画である。

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

（昭和46年～昭和55年２月）

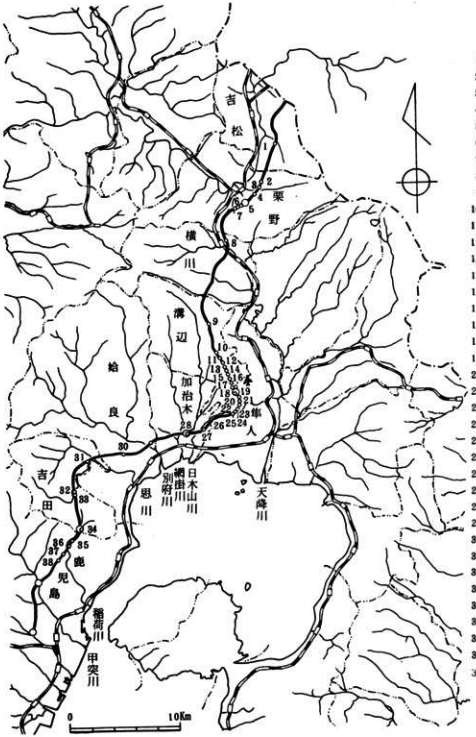
番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(㎡)	調査員	概要
1	堀之内B	吉松町川添	54．9．10 ～ 54．9．27	500	立神 青崎	○土師式土器の散布
2	木場A	栗野町木場	一次 53．12．11 ～ 54．3．31 二次 54．8．28 ～ 55．2．21	14,000	牛ノ濱 新東 宮田 池畑 長野	○旧石器，ナイフ他剥片，集石遺構，細石核・細石刃 ○縄文早前期土器片・集石遺構 ○土師式土器散布
3	木場B	〃	54．8．28 54．11．24	4,500	新東 出口 弥栄 中島	○土師式土器の散布 ○中世溝状遺構
4	木場C	〃	53．11．27 54．1．13	2,700	長野 出口	北部に湯ノ谷川，北に傾斜する台地中腹に土師器，弥生式土器の散布が見られる。
5	山崎A	栗野町山崎	52．12．13 53．3．26	6,000	吉永 牛ノ濱	①弥生，土師，須恵器片の散布。 ②中世（建物）
6	山崎B	〃	53．4．10 54．10．12	21,800	牛ノ濱 西田 中島 出口	○旧石器時代（細石核・細石刃） ○古墳時代・中世（青磁・陶磁器・建物跡・ ○縄文時代早～後期・集石遺構土壙

7	山崎C	栗野町山崎	52. 12. 13 53. 3. 26	3,000	中村 西田	土師器，須恵器，青磁片の散布
8	中尾田 (山城)	横川町中野	53. 5. 15 〃 54. 10. 6	9,800	新東 中島 井ノ上	○縄文時代・早・前・中期土器（前平・手向山・阿高）石器集石遺構 ○中世山城・建物遺構・青磁・陶磁器
9	木佐貫原	溝辺町木佐貫	51. 2. 6 52. 11. 31	17,000	吉永 牛ノ濱	●①縄文時代（前期・後期）土器片，炉穴 ②土師器片
10	石峰	溝辺町麓	一次 (50. 10. 2 (50. 12. 19 二次 51. 11. 24 53. 5. 15	20,000	河口 出口田 西崎 戸崎 青畑 池	●①縄文土器，住居跡1基，集石遺構 ②土師器片
11	柳ケ迫	〃	51. 3. 22 51. 5. 17	700	長野 西田	●①細石器剥片（黒曜石） ②縄文時代（後期）土器片
12	長ケ原	〃	50. 10. 1 50. 11. 28	1,140	新東 中村	●①細石器剥片（黒曜石） ②縄文時代（前期）土器片 ③弥生時代（後期）土器片
13	松木原	〃	50. 9. 18 50. 9. 26	420	新東 池畑 中村	●弥生時代（後期）土器片，黒曜石
14	葛根塚	〃	50. 9. 8 50. 9. 26	790	新東 池畑 中村	●①弥生時代（後期）土器片，石鏃（黒曜石）
15	七ツ次	〃	50. 8. 5 50. 9. 18	2,700	弥栄 池畑 中村	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片
16	松ケ迫	〃	50. 7. 14 50. 8. 11	600	弥栄 中村	●①弥生時代（後期）土器片
17	木屋原	〃	50. 4. 7 51. 3. 31	4,520	弥栄 立神	●①縄文時代（前期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片
18	山神	〃	49. 6. 13 50. 4. 28	6,950	平田 牛ノ濱 吉永	●①縄文時代(前-後期)土器片 ②弥生時代（後期）土器片 ③平安時代・建物遺構，溝状遺構，須恵器，墨書土器（甕，底～坏2，破片15）

19	曲迫	溝辺町麓	50．1．27 50．3．31	4,300	諏訪 弥栄	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片 ③土師器片
20	杤場	〃	49．6．5 50．3．27	2,500	平田，牛ノ浜，吉永	●①縄文時代（前・後期）土器片
21	西免	菅人町西光寺	49．5．25 50．2．8	1,500	平田 吉永	●①弥生時代（後期）土器片 ②玉髄，黒曜石 ③弥生時代（後期）土器片 ④土師器片
22	中尾	〃	49．9．25 50．2．10	2,500	出口 吉永	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生後代（終末期）土器片，磨製石鏃 ③土師器片
23	入道	〃	49．8．5 50．3．31	1,720	〃	●弥生時代（終末期）土器片，石鏃，土師器，溝状遺構
24	南十三塚	溝辺町崎森	49．7．16 49．9．20	600	出口 中村	●弥生時代（終末期）土器片
25	東原	〃	49．9．17 50．1．24	8,700	諏訪 弥栄 中村	●①縄文時代（早期）土器片， ②弥生時代（後期）土器片，住居跡1基 ③土師器片
26	桑ノ丸	〃	49．8．1 50．4．25	8,750	新東 牛ノ濱 中村	●①縄文時代（早・前・後期）土器片，石斧，石鏃
27	三代寺	加治木町 日木山	49．3．15 49．7．31	2,300	河口 新東 弥栄 牛ノ濱	●①縄文時代（早・前期）土器片，石斧，石鏃，集石遺構 ②弥生時代（終末期）土器片 ③土師器，土壙，ピット群
28	建馬場	加治木町反土	46．12．8 46．12．12	180	盛園 立神	①弥生時代（後期）土器片
29	松木田	姶良町鍋倉	46．12．12 46．12．15	42	〃	①柱穴～22個
30	小瀬戸	姶良町 西餅田	46．8．20 46．11．2	3,050	河口 戸崎神 立ノ上 尾間 中元 有	①縄文時代（前期）土器片（塞ノ神） ②弥生時代（中期）土器片 ③墨書土師器（伴，大伴，原仲家），青磁，白磁，緑釉陶器，須恵器，紡錘車，土錘，井戸枠，木製器，柱穴（多数）

31	小　山	吉　田　町 東佐多浦	46．11．6 47．2．10	1,050	河　口 戸　崎 立　神 尾ノ上 中　間 有　元	①縄文時代（早・前期）土器片（吉田，塞ノ神） ②弥生時代土器片 ③陶書土師器，須恵器片，青磁，白磁，緑釉陶器，滑石製石鍋
32	谷　口	吉田町本城	46．11．10 46．11．18	124	盛　園 立　神	①縄文時代（後期）土器片，黒曜石剥片 ②弥生時代土器片 ③土師器，白磁，滑石製石鍋
33	上城城址	〃	47．1．14 47．1．18	20,000 現地踏査	盛　園 田野辺	①中世～山城，青磁，白磁，瓦器
34	宮　後	吉田町宮ノ浦	46．11．10 46．11．18	44	〃	①縄文時代（晩期）土器片，石鏃（黒曜石） ②土師器
35	木の迫	鹿児島市 川　上　町	50．12．9 50．12．11	300	立　神 牛ノ浜 吉　永	①弥生時代（後期）土器片
36	加治屋園	〃	50．11．26 51．7．31	1,200	弥　栄 新　東 長　野 中　村	①細石器～細石刃，細石核，同時期土器片（有文） ②縄文時代前期土器片（塞ノ神式）集石遺構 ③弥生時代後期土器片
37	加　栗　山	〃	50．2．15 51．10．16	30,600	戸　崎 青　崎 立　神 吉　永 牛ノ浜	①細石器～細石刃，細石核，石鏃14，局部磨製石斧1，大型台形石器1 ②縄文時代（前期）土器片（吉田式，前平式），住居跡17，土坑72，集石遺構14，石鏃，陥陥石（軽石製） ③中世～山城，柵列跡，空堀，柱穴，青磁，瓦器
38	神の木山	〃	50．5．12 50．5．15	20	戸　崎 青　崎	①耕作土の下部はシラス層で遺物なし

（●は，調査報告書発行終了）



遺跡名	
1.	堀之内B
2.	木場A
3.	木場B
4.	木場C
5.	山崎A
6.	山崎B
7.	山崎C
8.	中尾田
9.	木佐貫
10.	石峰
11.	柳ケ迫
12.	長ケ原
13.	松木塚
14.	島根次
15.	七ツ屋
16.	松木迫
17.	木山原
18.	山曲神
19.	曲迫
20.	栫場
21.	西免
22.	中尾
23.	入道
24.	南十三塚
25.	東原
26.	桑丸
27.	三代寺
28.	建馬場
29.	松木田
30.	小瀬戸
31.	小谷口
32.	上ノ山
33.	宮ノ址
34.	木の後
35.	加治屋園
36.	加栗山
37.	神ノ木
38.	

縦貫道全遺跡地図

例　　言

1．この報告書は，九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設によって消滅する遺跡について行った事前調査のうち，昭和53年～昭和54年度に発掘した中尾田遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団の受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．発掘調査実施について横川町教育委員会の協力・援助を得た。
報告書作成に当って，鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳・五味克夫氏・九州歴史資料館亀井明徳氏の指導を得た。また，石塔関係には，河野治雄氏の教示を得た。

4．本書の執筆は次のとおりである。
第１章・第２章・第３章・第４章・第６章・第８章……新東晃一
第６章・第７章・第８章……中島哲郎
第５章・第６章・第８章……井ノ上秀文

5．放射性炭素年代測定については，日本アイソトープ協会（担当峯村明彦氏）に依頼した。
金銅製装飾金具の分析及び除錆については，鹿児島県機械金属センター出雲茂人氏の原橋及び指導を得た。

6．本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。

7．本書で用いた挿図中の遺物は，すべて通し番号である。図版も挿図同様に配列した。

8．整理・復元作業は，収蔵庫の整理作業員が行ない，出土品は，文化課収蔵庫に保管している。

本 文 目 次

中尾田遺跡の調査

第1章 序　文…… 18
　第1節 調査に至るまでの経過…… 18
　第2節 調査の経過…… 18
　第3節 調査の組織…… 18
　第4節 日誌抄…… 19

第2章 遺跡の立地と環境…… 24

第3章 調査の概要…… 29
　第1節 区割の設定…… 29
　第2節 層 序…… 30
　第3節 地層横転…… 37

第4章 第Ⅳ層の調査…… 41
　第1節 調査の概要…… 41
　第2節 遺 構…… 41
　第3節 遺 物…… 50

第5章 第Ⅲ層の調査…… 132
　第1節 調査の概要…… 132
　第2節 遺 構…… 132
　第3節 遺 物…… 135
　第4節 その他…… 197

第6章 山城の調査…… 203
　第1節 調査の概要…… 203
　第2節 遺 構…… 206
　第3節 遺 物…… 242

第7章 その他…… 254
　第1節 成川式土器…… 254
　第2節 近世墓…… 255

第8章 まとめにかえて…… 260

挿 図 目 次

第１図　中尾田遺跡と周辺の遺跡と地形…… 25
第２図　中尾田遺跡現況地形図…… 26
第３図　中尾田遺跡周辺地形図…… 28
第４図　中尾田遺跡区割図…… 29
第５図　中尾田遺跡の基本的層序…… 30
第６図　Ｇ－６区出土細石器…… 32
第７図　中尾田遺跡土層断面図（Ⅰ）……33～34
第８図　中尾田遺跡土層断面図（Ⅱ）……35～36
第９図　地層横転…… 38
第10図　第４層文化遺構配置図……39～40
第11図　№１号炉址（Ｂ－４区）…… 42
第12図　№２号炉址（Ｃ－５区）…… 43
第13図　№３号炉址（Ｇ－３区）…… 43
第14図　集石（Ⅰ）…… 45
第15図　集石（Ⅱ）…… 46
第16図　集石（Ⅲ）…… 47
第17図　集石（Ⅳ）…… 48
第18図　第４層土器分布状態…… 52
第19図　第１類土器，第２類土器分布図…… 56
第20図　第１類土器（Ⅰ）…… 57
第21図　第１類土器（Ⅱ）…… 58
第22図　第２ａ類土器（Ⅰ）…… 59
第23図　第２ａ類土器（Ⅱ）…… 60
第24図　第２ｂ類土器…… 61
第25図　第３類土器分布図…… 62
第26図　第３類土器（Ⅰ）…… 65
第27図　第３類土器（Ⅱ）…… 66
第28図　第３類土器（Ⅲ）…… 67
第29図　第３類土器（Ⅳ）…… 68
第30図　第４類土器・第５類土器分布図…… 69
第31図　第４類土器…… 70
第32図　第５類土器…… 72
第33図　第６類土器…… 73
第34図　第７類土器（Ⅰ）…… 74
第35図　第７類土器分布図…… 76
第36図　第７類土器（Ⅱ）…… 77
第37図　第６・８・９ａ・９ｂ・９ｃ・９ｄ類土器分布図…… 79
第38図　第８類土器…… 80
第39図　第９ａ類土器…… 82
第40図　第９ｂ類土器…… 83

第41図　第９ｃ類土器…… 84
第42図　第９ｄ類土器…… 85
第43図　第９ｅ類土器分布図…… 88
第44図　第９ｅ類（Ⅰ）…… 89
第45図　第９ｅ類土器（Ⅱ）…… 90
第46図　第９ｅ類土器（Ⅲ）…… 91
第47図　第９ｅ類土器（Ⅳ）…… 92
第48図　第９ｆ類土器分布図…… 95
第49図　第９ｆ類土器（Ⅰ）…… 96
第50図　第９ｆ類土器（Ⅱ）…… 97
第51図　第９ｇ・９ｈ類土器分布図…… 99
第52図　第９ｇ類土器…… 100
第53図　第９ｈ類土器…… 102
第54図　第９ｉ類土器分布図…… 105
第55図　第９ｉ類土器（Ⅰ）…… 106
第56図　第９ｉ類土器（Ⅱ）…… 107
第57図　第９ｉ類土器（Ⅲ）…… 108
第58図　第９ｉ類土器（Ⅳ）…… 109
第59図　第９ｊ類土器分布図…… 112
第60図　第９ｊ類土器（Ⅰ）…… 113
第61図　第９ｊ類土器（Ⅱ）…… 114
第62図　第９ｋ・９ｌ類土器分布図…… 116
第63図　第９ｋ類土器…… 117
第64図　第９ｌ類土器…… 119
第65図　第９ｍ・10類土器分布図…… 121
第66図　第９ｍ類土器…… 122
第67図　第９類土器（底部）…… 122
第68図　第10類土器…… 125
第69図　石器分布図…… 128
第70図　石鏃実測図…… 129
第71図　石匙…… 130
第72図　石斧・凹石・石磨…… 131
第73図　軽石製品…… 130
第74図　炉跡実測図…… 132
第75図　Ⅲ層遺構配置図…… 133
第76図　Ｄ－６区土坑と出土遺物…… 134
第77図　遺物出土状況…… 136
第78図　第Ⅰ類土器（１）…… 137
第79図　第Ⅰ類土器（２）…… 138
第80図　第Ⅰ類土器（３）と分布状況…… 139
第81図　第Ⅱ類土器（１）…… 141
第82図　第Ⅱ類土器（２）…… 142

第83図　第Ⅱ類土器（3）…… 143
第84図　第Ⅱ類土器（4）…… 144
第85図　第Ⅱ類土器（5）…… 145
第86図　第Ⅱ類土器（6）…… 146
第87図　第Ⅱ類土器（7）…… 147
第88図　第Ⅱ類土器（8）…… 148
第89図　第Ⅱ類土器（9）…… 149
第90図　第Ⅱ類土器（10）…… 150
第91図　第Ⅱ類土器（11）…… 151
第92図　第Ⅱ類土器分布状況…… 152
第93図　第Ⅲ類土器（1）（折込み）…… 153
第94図　第Ⅲ類土器（2）…… 153～155
第95図　第Ⅲ類土器（3）…… 156
第96図　第Ⅲ類土器（4）…… 157
第97図　第Ⅲ類土器（5）…… 158
第98図　第Ⅲ類土器（6）…… 159
第99図　第Ⅲ類土器（7）…… 160
第100図　第Ⅲ類土器分布状況…… 161
第101図　第Ⅳ類土器（1）…… 162
第102図　第Ⅳ類土器（2）…… 163
第103図　第Ⅳ類土器（3）…… 164
第104図　第Ⅳ類土器（4）…… 165
第105図　第Ⅳ類土器（5）…… 166
第106図　第Ⅳ類土器分布状況…… 167
第107図　底部（1）…… 168
第108図　底部（2）…… 169
第109図　底部（3）…… 170
第110図　第Ⅴ類土器…… 171
第111図　第Ⅵ類土器…… 172
第112図　第Ⅶ類土器…… 172
第113図　第Ⅷ類土器…… 173
第114図　Ⅸ，Ⅹ，Ⅺ，Ⅻ，XIII，XIV類土器…… 175
第115図　Ⅸ，Ⅹ，Ⅺ，XIII，XIV類土器分布状況…… 176
第116図　石鏃（1）…… 188
第117図　石鏃（2），石匙…… 189
第118図　石鏃分布状況…… 190
第119図　石斧…… 191
第120図　磨石（1）…… 192
第121図　磨石（2），敲石…… 193
第122図　磨石（3）…… 197
第123図　石皿…… 198
第124図　表層出土の石鏃，石斧…… 199

第 125図　表層出土の石斧・磨石・石皿…… 201
第 126図　山城遺構配置図…… 204～ 205
第 127図　堀切り断面図…… 207～ 208
第 128図　隧道ＳＴ（トンネル）断面図（Ⅰ）…… 209～ 210
第 129図　隧道ＳＴ（トンネル）断面図（Ⅱ）…… 211～ 212
第 130図　城壁断面図…… 213
第 131図　空堀４・５断面図…… 215
第 132図　空堀ＳＤ２断面図…… 216
第 133図　土塁ＳＷ・排水口ＳＨ平面位置図…… 217
第 134図　土塁跡断面図…… 217
第 135図　盛土範囲図…… 218
第 136図　盛土断面図…… 219～ 220
第 137図　柵例１・２（ＳＦ１・ＳＦ２）実測図…… 222
第 138図　掘立柱建物跡ＳＢⅠ…… 227～ 228
第 139図　掘立柱建物跡ＳＢ２…… 229
第 140図　建物跡ＳＢ３…… 231
第 141図　掘立柱建跡ＳＢ４…… 232～ 233
第 142図　掘立柱建物跡ＳＢ５…… 236
第 143図　掘立柱建物跡ＳＢ６…… 237
第 144図　掘立柱建物跡ＳＢ７・８…… 239
第 145図　土坑ＳＫ１…… 240
第 146図　土坑ＳＫ２…… 240
第 147図　土坑ＳＫ４…… 241
第 148図　磁器…… 243
第 149図　土師器…… 245
第 150図　備前焼…… 246
第 151図　常滑焼…… 247
第 152図　擂鉢・石製品…… 248
第 153図　火舎…… 248
第 154図　軽石製品…… 249
第 155図　金銅製装飾金具出土状態…… 250
第 156図　金銅製装飾金具…… 250
第 157図　古銭…… 250
第 158図　横川周辺の中世山城…… 253
第 159図　成川式土器…… 254
第 160図　近世墓…… 255
第 161図　古銭…… 256
第 162図　軽石石塔…… 257
第 163図　Cu，Fe（装飾金具）…… 258

表　目　次

第１表　横川町内の遺跡…… 24
第２表　土器類別表…… 51
第３表　類別各区出土量…… 53
第４表　第１類土器一覧表…… 55
第５表　第２類土器一覧表…… 61
第６表　第３類土器一覧表（Ⅰ）…… 63
第７表　第３類土器一覧表（Ⅱ）…… 64
第８表　第４類土器一覧表…… 71
第９表　第５類土器一覧表…… 72
第10表　第６類土器一覧表…… 72
第11表　第７類土器一覧表…… 75
第12表　第８類土器一覧表…… 78
第13表　第９ａ類土器一覧表…… 81
第14表　第９ｂ類土器一覧表…… 83
第15表　第９ｃ類土器一覧表…… 84
第16表　第９ｄ類土器一覧表…… 85
第17表　第９ｅ類土器一覧表（Ⅰ）…… 86
第18表　第９ｅ類土器一覧表（Ⅱ）…… 87
第19表　第９ｆ類土器一覧表…… 94
第20表　第９ｇ類土器一覧表…… 98
第21表　第９ｈ類土器一覧表…… 101
第22表　第９ｉ類土器一覧表（Ⅰ）…… 103
第23表　第９ｉ類土器一覧表（Ⅱ）…… 104
第24表　第９ｊ類土器一覧表…… 111
第25表　第９ｋ類土器一覧表…… 115
第26表　第９ｌ類土器一覧表…… 118
第27表　第９ｍ類土器一覧表…… 120
第28表　第10類土器一覧表…… 124
第29表　石鏃計測表…… 127
第30表　Ⅲ層出土土器一覧表（１）…… 177
第31表　Ⅲ層出土土器一覧表（２）…… 178
第32表　Ⅲ層出土土器一覧表（３）…… 179

第33表　Ⅲ層出土土器一覧表（4）…… 180
第34表　Ⅲ層出土土器一覧表（5）…… 181
第35表　Ⅲ層出土土器一覧表（6）…… 182
第36表　Ⅲ層出土土器一覧表（7）…… 183
第37表　Ⅲ層出土土器一覧表（8）…… 184
第38表　Ⅲ層出土土器一覧表（9）…… 185
第39表　Ⅲ層出土土器一覧表（10）…… 186
第40表　Ⅲ層出土土器一覧表（11）…… 187
第41表　Ⅲ層出土石鏃計測表（1）…… 194
第42表　Ⅲ層出土石鏃計測表（2）…… 195
第43表　Ⅲ層出土石鏃計測表（3）…… 196
第44表　表層出土石鏃計測表…… 200
第45表　掘立柱建物跡ＳＢＩ計測表…… 226
第46表　掘立柱建物跡ＳＢ２計測表…… 230
第47表　掘立柱建物跡ＳＢ４計測表…… 230
第48表　掘立柱建物跡ＳＢ５計測表…… 235
第49表　古銭計測表…… 250
第50表　横川町周辺の中世山城…… 252

図 版 目 次

図版1　遺跡全景（北から）…… 266
図版2　1.遺跡遠景（南から）2.調査前遺跡近景（北から）…… 267
図版3　層　序…… 268
図版4　1.地層横転（北から）2.同．断面（北から）…… 269
図版5　1.第Ⅳ層調査風景　2.軽石製品出土状態　3.土器出土状態　4.土器土状態…… 270
図版6　1.炉穴No 1 検出状態　2.炉穴No 1 …… 271
図版7　1.炉穴No 2（南から）2.炉穴No 2（北から）3.炉穴No 2（南から）…… 272
図版8　1.炉穴No 3（西から）2.炉穴No 3（西から）3.炉穴No 3（西から）…… 273
図版9　1.集石2号（東から）2.集石5号（北から）…… 274
図版10　1.集石6号（南から）2.同断面（東から）…… 275
図版11　1.集石8号（南から）2.集石7号（南から）…… 276
図版12　1.集石9号（北から）2.同断面（北から）…… 277
図版13　1.G－6区細石核　2.第1類土器（拡大）　3.第1類土器…… 278
図版14　1.第2類土器　2.第2類土器…… 279
図版15　1.第3類土器　2.第3類土器　3.第3類土器（文様拡大）…… 280
図版16　1.第3類土器　2.第3類土器…… 281
図版17　1.第4類土器　2.左：第2類土器　右：第5類土器…… 282
図版18　1.第6類土器　2.第7類土器…… 283
図版19　1.第8類土器　2．8類土器…… 284
図版20　1.第9a類土器　2.第9b類土器…… 285
図版21　1.第9c類土器　2．9d類土器…… 286
図版22　1.第9e類土器（Ⅰ）　2.第9e類土器（Ⅱ）…… 287
図版23　1.第9e類土器（Ⅲ）　2.第9e類土器（Ⅳ）…… 288
図版24　1.第9f類土器（Ⅰ）　2.第9f類土器（Ⅱ）…… 289
図版25　1.第9g類土器　2.第9h類土器…… 290
図版26　1.第9i類土器（Ⅰ）　2.第9i類土器　1の裏面（Ⅱ）…… 291
図版27　1.第9i類土器（Ⅲ）　2.第9i類土器（Ⅳ）…… 292
図版28　1.第9j類土器（Ⅰ）　2.第9j類土器（Ⅱ）…… 293
図版29　1.第9k類土器　2.第9l類土器…… 294
図版30　1.第9m類土器　2.第9類土器底部…… 295
図版31　1.第9類土器底部（左：上面，右：下面）　2.第10類土器…… 296
図版32　1 第Ⅳ層出土の石器（Ⅰ）　2.第Ⅳ層出土の石器（Ⅱ）　3.同軽石製品…… 297

図版33　1.2号炉跡検出状況（東から）　2.2号炉跡埋土状況（東から）…… 298
図版34　1.D－6区土坑…… 299
図版35　1.第Ⅲ層遺物出土状況　2.第Ⅲ層遺物，礫出土状況…… 300
図版36　第Ⅲ層遺物出土状況…… 301
図版37　第Ⅲ層遺物出土状況…… 302
図版38　1.第Ⅰ類土器（1）　2.第Ⅰ類土器（2）…… 303
図版39　1.第Ⅰ類土器（3）　2.第Ⅱ類土器（1）　3.第Ⅱ類土器（2）…… 304
図版40　1.第Ⅱ類土器（3）　2.第Ⅱ類土器（4）…… 305
図版41　1.第Ⅱ類土器（5）　2.第Ⅱ類土器（6）　3.第Ⅱ類土器（7）…… 306
図版42　1.第Ⅱ類土器（8）　2.第Ⅱ類土器（9）…… 307
図版43　1.第Ⅱ類土器（10）　2.第Ⅱ類土器（11）…… 308
図版44　1.第Ⅱ類土器（12）　2.第Ⅱ類土器（13）　3.第Ⅱ類土器（14）…… 309
図版45　1.第Ⅱ類土器（15）　2.第Ⅲａ類土器（1）　3.第Ⅲａ類土器（2）…… 310
図版46　1.第Ⅲａ類土器（3）　2.第Ⅲａ類土器（4）…… 311
図版47　1.第Ⅲａ類土器（5）　2.第Ⅲａ類土器（6）…… 312
図版48　1.第Ⅲｂ類土器　2.第Ⅲｃ類土器（1）…… 313
図版49　1.第Ⅲｃ類土器（2）　2.第Ⅳ類土器（1）　3.第Ⅳ類土器（2）…… 314
図版50　1.第Ⅳ類土器（3）　2.第Ⅳ類土器（4）　3.第Ⅳ類土器（5）…… 315
図版51　1.第Ⅳ類土器（6）　2.第Ⅳ類土器（7）…… 316
図版52　1.底部(1)　2.底部(2)　3.底部(3)　4.底部文様…… 317
図版53　1.第Ⅸ，Ⅹ，Ⅺ，Ⅻ類土器　2.第Ⅻ，ⅩⅣ類土器…… 318
図版54　1.第Ⅲ層出土石鏃(1)　2.第Ⅲ層出土石鏃(2)，石匙…… 319
図版55　1.第Ⅲ層出土石斧　2.第Ⅲ層出土磨石…… 320
図版56　1.第Ⅲ層出土磨石，敲石，凹石　2.第Ⅲ層出土石皿…… 321
図版57　1.山城遠景（北から）　2.北側の城壁　空堀　腰曲輪…… 322
図版58　1.城面調査風景　2.建物跡調査風景…… 323
図版59　1.南側平坦地調査前（北から）　2.南側平坦地近景（北から）…… 324
図版60　1.堀切りE18.9区付近（北から）2.堀切りF13区断面（北から）…… 325
図版61　1.隧道断面（西から）　2.隧道側壁陥没状態（西から）…… 326
図版62　1.隧道断面（西から）　2.隧道断面（西から）…… 327
図版63　1.空堀ＳＤ２遠景（東から）　2.空堀ＳＤ２断面（東から）…… 328
図版64　1.空堀ＳＤ４断面（東から）　2.空堀ＳＤ５断面（西から）…… 329
図版65　1.柵列ＳＦ１（西から）　2.柵列柱穴…… 330
図版66　1.柵列ＳＦ１遠景（西から）　2.柵列ＳＦ２（東から）…… 331
図版67　1.登道ＳＲ１と郭６付近（北から）　2.郭６遠景（東から）…… 332

図版68　1.郭６全景（北から）　2.郭５全景（北から）…… 333
図版69　1.空堀ＳＤ１全景（東から）　2.掘立建物跡ＳＢ１（西から）…… 334
図版70　1.郭４から郭３近景　2.郭１全景…… 335
図版71　1.建物跡ＳＢ３（北から）　2.建物跡ＳＢ３（北から）…… 336
図版72　1.建物跡ＳＢ４玉砂利敷遺構（東から）2.建物跡ＳＢ４玉砂利敷遺構(東から)… 337
図版73　1.建物跡ＳＢ４（西から）　2.玉砂利遺構　3.玉砂遺構断面…… 338
図版74　1.建物跡ＳＢ４（北から）　2.土坑ＳＫ５…… 339
図版75　1.建物跡ＳＢ３遺物出土状態（東から）　2.隧道内木器出土状態…… 340
図版76　1.堀切南側未端部（西から）　2.排水溝（東から）　3.排水溝（西から）…… 341
図版77　1.土坑ＳＫ１検出状態（西から）　2.土坑ＳＫ１（西から）…… 342
図版78　1.白磁　2.青磁…… 343
図版79　1.土師器　2.備前焼…… 344
図版80　1.常滑焼　2.軽石製品（左：表，右：裏）…… 345
図版81　1.擂鉢，滑石製品　2.火舎…… 346
図版82　1.金銅製装飾金具　2.古銭…… 347
図版83　1.成川式土器　2.近世墓（東から）…… 348
図版84　1.軽石石塔　2.古銭…… 349

第1章 序　　説

第1節　調査に至るまでの経過

日本道路公団は，昭和47年2月23日「日本道路公団の建設事業等，工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に基づき，鹿児島線（吉松～加治木線）の埋蔵文化財についての協議を求めた。これに対し，鹿児島県教育委員会文化室（当時）は，昭和47年8月2日～10日，同月18日～26日までの2回にわたり，延長38km，幅2kmにわたって分布調査を行なった。この結果に基づいて，文化室は路線の決定については，埋蔵文化財の保護の上から十分配慮されることを要望した。

さらに49年1月～2月，河口貞徳氏の協力を得て，再確認のための分布調査を実施し，これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決め，道路公団と協議した。そして保存する遺跡1ケ所（吉松町堂迫地下式横穴），記録保存する遺跡10ケ所（当遺跡等）が決定した。

第2節　調査の経緯

分布調査の結果，当該遺跡は記録保存することになり，調査については，昭和53年4月1日付けで日本道路公団福岡建設局と委託契約を行い，これに基づいて昭和53年5月15日から昭和54年3月31日の間に発掘調査を実施したが，年度中に終了できず，残部については昭和54年4月2日付けの新契約によって，昭和54年8月22日から昭和54年10月6日の間に実施した。以下発掘調査の詳細な経過は，日誌抄をもって第4節に記述する。

第3節　調査の組織

調査責任者	文化課長	谷崎哲夫	（昭和53年度）
	文化課長	山下典夫	（昭和54・55年度）
	課長補佐	荒田孝助	（昭和53年度）
	課長補佐	新　時弘	（昭和54・55年度）
調査企画	専門員	本蔵久三	（昭和53～55年度）
調査担当者	主事	新東晃一	（昭和53・54年度）
	文化財調査員	中島哲郎	（昭和53年度）
	文化財調査員	井ノ上秀文	（昭和53・54年度）
事務担当	管理係長	中条　享	（昭和53・54年度）
	管理係長	川畑栄造	（昭和55年度）
	主事	伊地知千晴	（昭和53年度）

主　　査　安藤幸次　（昭和54年度）
主　　事　天辰京子　（昭和53・54年度）

尚，発掘調査中，文化庁文化財調査官稲田孝司氏，鹿児島県文化財審議員河口貞徳氏，九州大学教授岡崎敬氏に御指導・御教示を得た事を記し，感謝の意を表したい。他に文化課主事弥栄久志・青崎和憲・長野真一・中村耕治・文化財調査員西田茂の発掘調査の応援をうけた。

第4節　日　誌　抄

発掘調査は，昭和53年5月15日～昭和54年4月13日までと昭和54年8月28日～10月6日までおこなった。その間の調査経過は，発掘調査日誌を整理して記載することにする。

〈昭和53年5月15日～31日〉

15日（月）　発掘調査開始，作業員へ調査上の注意と説明。発掘用具搬入。プレハブ設置。草木伐採作業。

17日（水）　調査区域内の草木伐採作業。ほぼ全域の伐採終了。グリッド設定作業，ＳＴＡ237＋20と237＋40を基軸に10m×10mのグリッド設定。一部グリッドに沿って確認用のトレンチ設定，掘り下げ開始。

19日（金）　排土の関係から北側から平面調査を開始する。Ｃ－11，Ｆ－11区の長土排除。

22日（月）　調査区中央に位置する堀切りの状態を確認するためＥ－６区にトレンチを設置，掘り下げにかかる。

23日（火）　Ｃ－11，Ｄ－11，Ｅ－11，Ｆ－11区の平面調査（表土剝ぎ作業）。

25日（木）　北側の堀切り部分，域壁部分の掘り下げ作業。

26日（金）　北側の堀切り部分の掘り下げ終了。写真撮影・断面実測。Ｄ・Ｅ－10区の平面作業に入る。原野であったため樹根が多く表土剝ぎ困難。

29日（月）　Ｄ，Ｅ－９，10区の堀切りの発掘作業。Ｅ－８～３区の堀切りの壁面の樹根排除作業及び表土剝ぎ作業。

〈昭和53年6月1日～30日〉

1日（木）　堀切りの掘り下げ作業（ＥＤ－10，９区）Ｄ－３，４区の表土排除にかかる。

5日（月）　Ｄ－７，８区の遺構検出作業。（Ｄ－８区に堀２検出）Ｄ－３～４区の遺構検出作業。柱痕跡あるが不明。

6日（火）　Ｆ－３，４区，Ｇ－５，６区の表土排除作業。磁器類わずかに出土する。縄文片（押型文など）もある。

7日（水）　堀切り（Ｄ，Ｅ７，８区）の掘り下げにかかる。

9日（金）　堀切り（Ｅ－７区）の断面清掃，写真及実測をおこなう。堀切りの壁面は，シラス上面の堆積層は崩壊している部分が多い。

12日（月）　Ｆ－７区～10区の表土排除に入る。

15日（木）　Ｄ－８区の堀（ＳＤ２）の清掃写真撮影。典型的なＶ字溝。床面に，ふみかため

た面があり，歩道に使用の可能性もある。

19日（月）　G－5，6区表土排除…排土は用地外の借地へ。表土排除をおこない本格的に城面の検出にかかる。

21日（水）　G－4～6区表土排除作業。F－7～9区遺構検出作業。検出の結果，城部の建物跡であることが判明。

26日（月）　F－8，9区の建物跡の床面より玉砂利数の検出。F－5区…遺構検出（隧道状になる）

28日（水）　G－4，5，6区掘り下げ作業。G－5の隧道掘り下げ続行。壁面に凹凸がみられるがこの部分は，トンネルの天井部が崩壊した状態を示している。

〈昭和53年7月3日～31日〉

4日（火）　F，G－7，8，9区の建物跡掘り下げ。G－5区の隧道断面清掃，写真，実測にかかる。埋土状態からもトンネルであることが確認される。

10日（月）　G－3，4区の遺構検出。掘立柱建物跡（SB2）検出。

12日（水）　F－8，9区建物（SB4）の礫床面の清掃。

13日（木）　南側傾斜面の伐彩作業を開始。自然壁面が城壁としていかに整形されているか確認のため。

14日（金）　堀切りーF－3，4区の掘り下げ。C10区表土排除。表土下直にシラス。柱穴検出（建物跡）

17日（月）　E－3区近世墓（江戸時代）検出。軽石製五輪と寛永通宝出土。遺物は散乱し，攪乱をうけている。

20日（木）　南側傾斜面にトレンチ設定，掘り下げ開始。表土下はほとんどシラス層である。

27日（木）　南側斜面下の旧宅地跡内トレンチ設定。中世の遺構は削平されている模様。横川町内社会科担当者（教師）遺跡見学会，説明。

〈昭和53年8月1日～31日〉

1日（火）　B－5区表土排除。D－8区の堀（SD2）断面実測。

2日（水）　雨が強くなり台風来襲のため，堀部分の防災作業（土のう積み）。

3日（木）　C－4，5区遺構検出作業。堀と柵列検出。堀の埋没後，柵列がつくられており，時期差確認。

7日（月）　城面の遺構検出がほぼ終了したので，城面の地形測量にかかる。

8日（火）　堀切りの掘下げ続行。掘り上げた土は，重機で，さらに北側の各部へ運搬。

10日（木）　南側傾斜面の地形測量にかかる。

21日（月）　堀切りの掘り下げ。E－4，5，6区。隧道出入口付近。隧道までは，床面は，1.5mの平担隧道より北側は，V字溝となる。

22日（火）　堀切りの掘り下げ（E－6～9区）にかかる。（ベルトコンベアーで）F－7，8，9区の建物跡清掃。

24日（木）　F－8，9区建物跡の礫床の実測開始。
25日（金）　堀切りーE－9，10，11区の掘り下げにかかる。
31日（木）　F－8，9の建物4，F－6，7区建物3の清掃。
〈昭和53年10月2日～31日〉
2日（月）　C，D－4区の柵列実測。
4日（水）　平地の遺構（中世）は，Ⅲ層を若干掘り下げないと不明なため，D，C－4区Ⅲ層（アカホヤ火山灰）の掘り下げ作業をおこなう。
5日（木）　堀切りの全体写真撮影。巾約10m，深さ約8m程度の堀切り全様が検出された。
9日（月）　D－3，4，区，C－3区，B－1，O区表土排除。細部の中世遺構検出作業。
12日（木）　C，D，E－3，4区のⅢ層掘り下げ。縄文中期の阿高式多数出土。
16日.（月）　D－3区を中心に掘立柱建物跡検出（SB1）。2柱間×5柱間で両庇の付くもの。主柱間は，195～ 200cmで庇柱間は，130～ 135cmのものである。
19日（木）　D，C－0区－1区掘り下げ中世山城遺構検出。登り口。曲輪検出。
23日（月）　D，C－0区付近の柱穴多数検出。壁際に配列するものあり，曲輪の壁柵状の柱穴配列か？。
31日（火）　B～E－1，2区の遺構検出（最終）をおこなう。柱穴は存在するが配列せず。
〈昭和53年11月1日～30日〉
1日（水）　D－6区，中世盛土（シラス）の掘り下げ作業。D－2区の一括遺物実測。C－2区の遺物実測取り上げ続行。
7日（火）　B－4区遺構検出。柵列検出（SB2）。柵列1とは，柱間と埋土が異なるようである。
8日（水）　D－6区盛土掘り下げ続行。中世時の城面盛土であること判明。
11日（金）　B－4，5区の柵列の清掃。B，C，D，E－1，0区の地形コンター実測続行。
13日（月）　F，G区の隧道部の中心部掘り下げ作業。埋土中より，ウルシ塗木器出土。塗金青銅金具出土。
14日（火）　D－E－1，2，7区のⅢ層掘り下げ。平行して遺物実測。阿高式が多い。
17日（金）　D－6，7区，中世盛土排除終了。盛土下面に成川式土器出土。
20日（月）　堀切りのF－2区以南の末調査部分開始。
21日（火）　F，G－3，4，5区の最終遺構検出。半分用地外に伸びる2柱間×5柱間（推定）で庇付の掘立建物跡（SB2）検出。また，F－4区にこの郭の排水溝検出。
24日（金）　F－10区に掘立柱建物跡検出，建物（SB7）周辺には備前焼，常滑焼破片多数出土。
28日（火）　F－9，10区の掘立柱建物跡（SB7）の清掃，写真，実測開始。
30日（木）　B，C－9，10区に掘立柱建物（SB5，6）検出，清掃。
〈昭和53年12月1日～22日〉

4日（月）　堀切り（F－2区以南）の掘り下げ終了。この附近では下面は，溶結凝灰岩を削平して床面を形成している。

5日（火）　C，D－4区，E－3区Ⅳ層（縄文早期）の掘下げ開始。さっそく押型文土器など出土。

6日（水）　C，D－3区掘立柱建物跡（SB1），F，G－6，7区掘立柱建物跡（SB3）の写真撮影。

8日（金）　C，D，E－3，4区のⅣ層掘り下げ終了。押型文が多い。D－4区，D－3区に集石遺構検出。集石（No2），集石（No3）。

12日（火）　D－3区の局部横転の平面実測，写真。Ⅲ層～シラス層までのきれいな横転が平面で確認される。

14日（木）　C，D，E－2区のⅣ層掘り下げ続行。平行して遺物実測，取り上げ。河口貞徳県文化財審議員来跡指導。

15日（金）　D－4区の中世土坑の清掃，写真，実測。土坑中には大礫3個が埋没していた。

19日（火）　C－2区，D－0，1区，E－1，2区のⅣ層掘り下げ。C－1区にⅣ層下は2m巾のトレンチ掘り下げ，下層の確認。

22日（金）　C，D－1区，D－3区のⅣ層と，畔の掘り下げ作業。本年度の作業終了。

〈昭和54年1月8日～31日〉

8日（月）　作業開始。Ⅳ層（縄文早期）の調査を本格的に進める。（D－0～3区E－1区付近から）並行して平板実測，遺物取り上げ。

12日（金）　F，G－3～5区のⅣ層掘り下げにかかる。石坂式の円筒土器出土。遺物が多い。

17日（水）　G－4区のⅣ層下部に，炉址検出。木炭が多量に残存。C^{14}測定用資料採取。円形プラン。（炉址　号）

22日（月）　C区列の0～4区西の大断面の壁面清掃。本遺跡の基本的層序をこの大断面で記録する。

25日（木）　B－4区付近で桜島降下パミス（SZP）検出。この層直上で遺物の出土は終る。Ⅳ層の下部に含まれるため，Ⅳb層とする。

30日（火）　G－3区土層トレンケのⅥ層（チョコレート層）に黒曜石片が出土したため，F－3，4区G－4区のⅥ層面を拡張する。

〈昭和54年2月1日～28日〉

6日（火）　E，F－9，10区のⅥ層掘り下げ作業。丘陵の最も頂部にあたる部分であるが，全面から押型文が出土する。

7日（水）　岡崎敬九州大学教授来跡。

14日（水）　F－6，7，8区のⅢ層掘り下げ作業，郭の土塁部分にあたるため上部に盛土残。そして土師器包含のⅡ層があり，その下がⅢ層となる。Ⅲ層中炉址検出（焼土）。

20日（火）　町田洋東京都立大助教授来跡。火山灰の貴重な指導を受ける。

27日（火）　C－9区集石（№9）検出。清掃後，写真，実測にかかる。

〈昭和54年3月1日～31日〉

1日（木）　F，－G－6，7，8区のⅣ層掘り下げがほとんど終了。下層確認のための深掘りトレンチの掘り下げにかかる。

5日（月）　D－6，7区のⅢ層掘り下げにかかる。縄文中期の阿高式多量に出土。

12日（月）　長崎県教育委員会職員安楽，副島両氏来跡。

22日（水）　5，6，7，8－C，D区Ⅲ層掘り下げ作業続行。

31日（土）　C，D－8，9区のⅣ層掘り下げ終了。遺物の実測とりあげ作業。本年度作業は今日で終了。機材かたづけ。

〈昭和54年4月9日～13日〉

9日（月）　発掘調査開始。B，C，D－5，6区中心にⅢ層の最下面の調査遺構検出。遺物実測。

11日（水）　E－9区の集石遺構（№10）検出，清掃，下部の石組は配石状に組まれている。

13日（金）　C－9区，B－1区など周辺残部のⅣ層掘り下げを終了し，本日で中尾田遺跡の調査は休止。インターチェンヂ予定地の山崎遺跡応援のため。

〈昭和54年8月28日～31日〉

28日（火）　発掘調査再開。D－5－8区のⅣ層掘り下げ作業。D－9，10区断面図用深掘りトレンチ掘り下げ。

〈昭和54年9月1日～29日〉

1日（土）　D－5～8区のⅣ層包含層掘り下げ継続，並行して，遺物実測。

6日（木）　D－5区に炉址検出。炉址内には，木炭，石片が多量に混入している。C^{14}年代用木炭資料採取。

10日（月）　C－5～8区のⅣ層包含層掘り下げにかかる。

19日（水）　文化庁稲田技官来跡，指導。

21日（金）　B－5区の集石（№7）の清掃，写真，さらに掘り下げ検出。河口貞徳県文化財審議員来跡，指導。

〈昭和54年10月1日～6日〉

1日（月）　調査事務所の跡地の調査など最終の調査に入る。（AB－3区など）B－5区集石，C－5区炉址の実測続行。

3日（水）　B－4区に炉址（№1）検出，清掃，写真，実測に入る。

6日（土）　B－4区の炉址（№1）清掃，実測，終了。本日で発掘調査完了。機材運搬。

第２章　遺跡の立地と環境

中尾田遺跡は，姶良郡横川町中ノに所在する。遺跡は，栗野岳から王ノ山へ連なる台地の舌状先端に位置し，端部には，国見岳を源として山ケ野方面から流れてくる支流と安良岳を源とし，山ノ口方面から流れてくる支流が合流した天降川が流れる絶好の場所に位置する。また，遺跡は（標高 223～ 210m）比高が眼下の水田面より約50m にもおよぶ高位に位置するため，天降川沿いの平地に発達した横川町の市街地や町境の東端を天降川に沿って走る国鉄肥薩線の横川駅などを一望視できる。天降川は，遺跡附近で蛇行しながら東流し，南流して牧園町へ流れ，そして，霧島山糸や溝辺台地の支流に集めて大河川となり，隼人町，国分市の沖積平野を形成して鹿児島湾（錦江湾）に注ぐ。

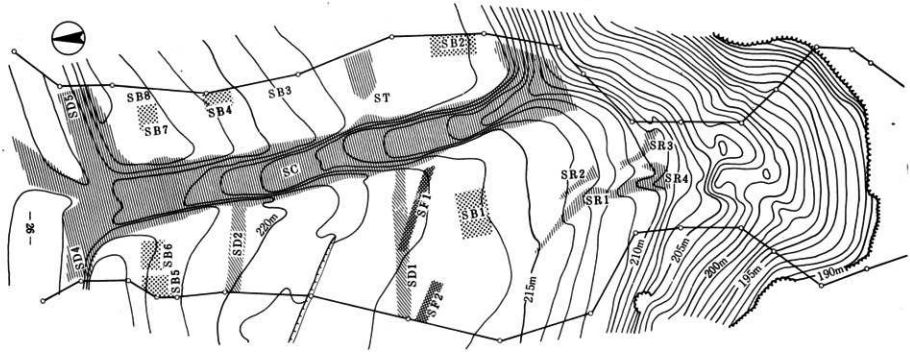
横川町は，この天降川とその支流によって形成されたわずかな各部平地に発達した集落からなり，かっては山ケ野金山などの宿場街として栄えたところでもある。

横川町内の遺跡を概観すると，これまで縄文時代遺跡４ケ所，弥生時代遺跡１ケ所，古墳～歴史時代遺跡６ケ所が知られており，他に，城跡（横川城，鳥越城），墓地（中尾田ー寛慶六年），田ノ神（中尾田，山ノ口，上深川），庚甲塔（川北），石碑（北原伊勢之介銘）などがあるが，他の地域に比較すると遺跡数は非常に少ない。これは，今回調査の中尾田遺跡の規模からみて遺跡数が少ないのではなく，この地域に研究者や関心を与せる人がいなかったことやこの地域を対象とする学術的な調査がおこなわれなかったことに起因しているようである。今回の中尾田遺跡の発掘調査は，横川町における最初の調査となった。

第１表　横川町内の遺跡

番号	遺跡名	所在地	立地	時代	出土遺物
1	谷口遺跡	姶良郡横川町中野谷口	山頂	縄文中期	阿高式
2	北園崩丸	〃　〃　上野北園崩丸	山麓	縄文早・前	石坂式・塞ノ神式類似
3	木浦	〃　〃　上野木浦	台地	縄文後	岩崎上層・指宿式
4	中尾田	〃　〃　中ノ中尾田	台地	縄文早・前中・中世	
5	川北馬場	〃　〃　川北馬場		縄文・弥生	
6	木浦	〃　〃　上野木浦		弥生	
7	前川内	〃　〃　下ノ前川内			土師器
8	谷口墓の下土壙	〃　〃　中野谷口墓の下横穴土壙	斜面地	古墳時代	人骨・土師器
9	谷ノ口横穴群	〃　〃　中野谷ノ口		古墳時代	
10	谷ノ口	〃　〃　中野谷ノ口			土師器・磁器
11	二石田	〃　〃　中野二石田			土師器・須恵器
12	木浦	〃　〃　上野木浦	台地	奈良～平安	須恵器（横べ）
13	横川城	〃　〃　中野川北	山頂	中世	
14	鳥越城	〃　〃　中野	山頂	中世	

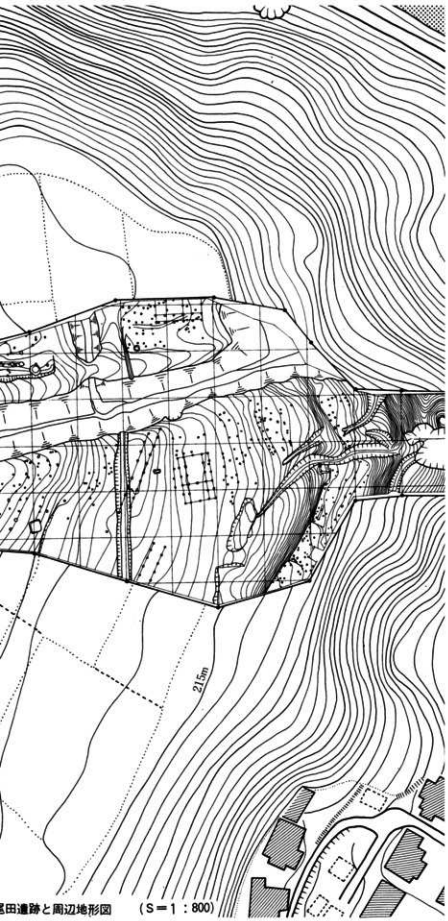
第1図　中尾田遺跡の位置及び周辺遺跡



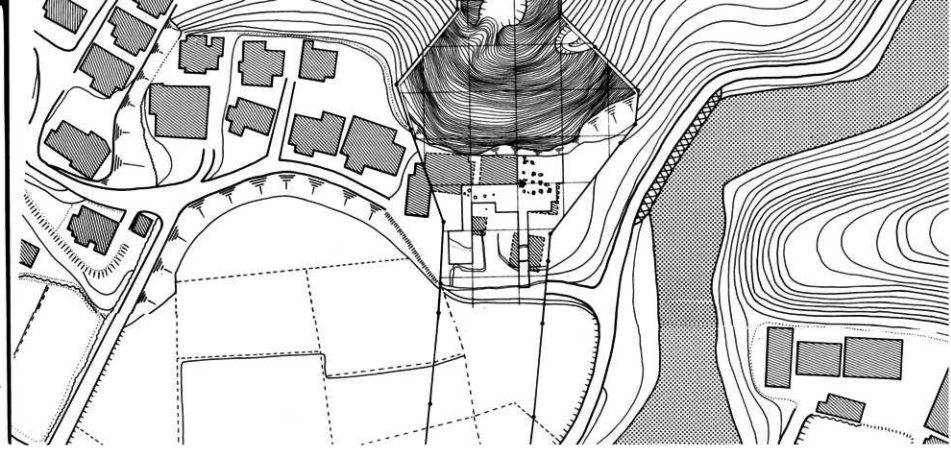
（網目は発掘調査後検出された遺構）
（コンターは現況コンター）

第2図　中尾田遺跡・現況地形図　（S＝1：800）

第3図　中



区田遺跡と周辺地形図　（S＝1：800）



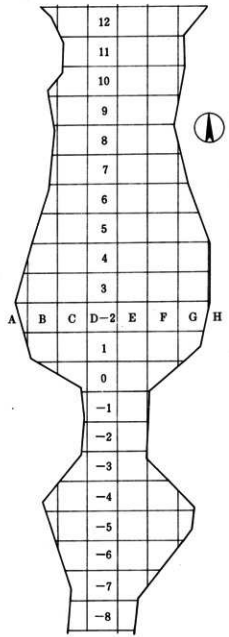
第3章 調 査 の 概 要

第1節 区割の設定

遺跡の地面は，かって畑地として開墾されたが，その後東側は徹置されて雑木，竹やぶと化し，西側は桧木林と栗畑となっている。

分布調査において台地地上のこの栗畑で縄文時代早期の押型文土器を採集し，さらに台地中央部には，堀状の凹地が確認されたが，雑木，竹やぶのため地形の全様を知ることは不可能であった。そのため，調査対象の遺跡面積は，台地中央部の約 3,500㎡とし登録されたが，調査に入って伐採，清掃の結果，調査対象面積は大幅に拡大することになった。（6,100㎡）。

区割は，縦貫道路線のセンター杭のＳＴＡ 237＋２０～ＳＴＡ 237＋４０を主軸に方向を定め，それを基準に10m ×10m のグリッド網をかぶせる方法をとった。そしてグリッドは，台地の南端を遺跡の南限と考え，その南西隅をＡ－１区として起点とし，主軸の南～北へ１，２～12，従軸方向にＡ，Ｂ；……Ｈと呼ぶことにした。尚，主軸の方向は，Ｎ－２°－Ｗでほぼ磁北に近い。その後，調査の進行と伴い本遺跡は，中世山城のほぼ中心であることが判明した。その結果，台地の南側傾斜面と台地下の平担面にも関連遺構の存在が想定され，さらに調査区域を拡大することになった。そのため，グリッドの起点を移動しなければならなくなったが，調査の途中でもあり，基点より南側は，便宜上，０，-1，-2～-8のように「－」を付けて呼ぶことにした。報告書作成にあたっては，整理し訂正する予定であったが，出土遺物・実測図などの厖大な資料のため混乱を防ぐため調査時に使用した状態のままで報告することにした。尚，北側は，13区付近で傾斜面の崩壊が観察され，この区域で発掘調査は打ち切ることにした。



第４図　中尾田遺跡区割図

第2節　層　序

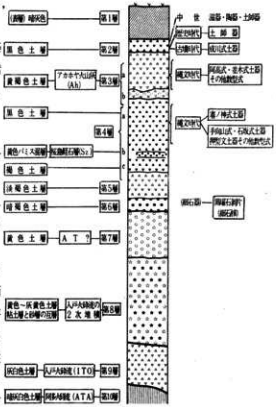
中尾田遺跡の基本的層序は，表層から基盤層の溶結凝灰岩（阿多火砕流＝Ata）まで10層の土層堆積が確認された。火山灰を主成分とする各層は，遺跡の面積が広いこと。地形に凹凸や傾斜がみられること。遺構による削平などの条件によって場所（区域）によってはその分布域に差異がみられたが，遺跡全体の基本的層序を整理し説明し，こまかな差異については，各層の説明中に付加することにした。尚，各層間の細区分は，基本的性分は同じであるが２次堆積など後の条件によって確実に分層されうるものについてａ，ｂ，ｃに区分し，その他不明なものは独立してあつかった。ただし，Ⅳｂ層の黄色パミス層（桜島降下軽石＝ＳＺＰ）については，その分布が極小区域に限られたため，Ⅳ層間の腐植化中の段階に降下し，地形的に保存良好な極小地域に残存したものであり，ｂ層として区分した。

Ⅰ層　表層（耕作土）である。暗灰色を呈し，開墾引きならしのため部分的には厚いところもあるが，平均15～20cmの厚さを測る。調査地域全域が，一度畑地として開墾された形跡を示しており，各時期の遺物が混在して出土しており，攪乱を受けたことを示している。

〈Ⅰ層とⅡ層の境〉Ⅰ層とⅡ層黒色土層との間には，磁器・陶器など中世の遺物が出土する。これは，基本的な関係であり，ほとんどが，Ⅰ層はⅢ層（黄褐色土層）と境をなす場合が多い。これは，城構築の削平規模によるもので，城構築後の腐植土壌の形成が進まなかったことを示している。

Ⅱ層　黒色土層で，土師器片を包含する。特に，掘切り遺構の東側郭の周囲に残存する土塁遺構の下部にみられる。土塁遺構の盤築盛土の下部に残存しているが，他の区域では山城遺構構築時に削平されている。このことから，中世以前の腐植土層と考えられるが，時期が判明する遺物はほとんどない。

〈Ｄ－６区付近の盛土下の黒色土層〉Ｄ－６区を中心に中世山城時の造成盛土面が存在するが，その下層に黒色土層が存在する。この黒色土層は色調・胎土ともⅡ層に類似するが成川式土器のみが存在した。これまで，溝辺台地付近を中心とした遺跡の成川式土器の包含層は，赤ボッコ層上部（本遺跡Ⅲａ層上部）に入り



第５図　中尾田遺跡の基本的層序

こも状態と理解されるきらいがあったが，包含層形成後（中世ごろ）他の層（火山灰や人工的盛土）の堆積によって被られ保護された成川式土器の包含層は，黒色有機質の腐植土層であることが判明した良好な層位資料を得た。このことから，本遺跡のⅡ層（黒色土）中には，成川式土器と土師器を包含することになるが，両者が重複し，あるいは共伴して出土する部分はみられない。

Ⅲ層　黄褐色を呈した火山灰層であり，鬼界カルデラ噴出のアカホヤ火山灰（Ah）に対比される。色調は，上層（Ⅱ層）と下層（Ⅳ層）とは明瞭に区分され，示標層として調査上重要な役割を果した。さらに，このⅢ層は，a，bに細分される。上部のⅢa層は，ホヤホヤの茶褐色に近い軟質層であり，堆積も約30～40cmと厚い。下部のⅢb層は，黄褐色の軽石粒（パミス）を含む粘質硬土であり，堆積は約5～10cmと薄い。

出土遺物は，Ⅲa層に包含されており，並木式土器・阿高式土器が多量に出土し，そのほか形式不明の数形式が若干含まれる。これらは，縄文時代中期から後期に属する土器形式であるが，層位的な土器型式の上下関係は不可能であった。最も多量に，また，広範囲に出土する阿高式土器の出土状態は，Ⅲa層の上部からⅢb層に接する面まで出土する。Ⅲb層は，無遺物層である。尚，このアカホヤ火山灰層（Ah）は，これまで多くのC^{14}年代測定値が得られているが，そのうち信頼できる測定値は，6,000年～ 6,500年B.P.に比定きている。

第Ⅳ層　腐植土を主体にした黒色土層であるが，A・B－3・4区付近では，この黒色腐植土層間に黄色軽石（パミス）層が存在していることから，a，b，cに細分した。b層の検出されない調査区においては，a層とc層の区分は不可能なほど性分は類似している。出土遺物は，Ⅳa層中に包含されており，Ⅳa～Ⅳc層は無遺物層である。Ⅳb層の確認されない区では，上，中位には遺物が包含されるが，下位にはみられない。尚，Ⅳa層は約30cmと厚く堆積し，Ⅳb層は約10cmでⅣc層は約20cmの比較的薄い堆積層である。

Ⅳa層中からは，多量の土器と石器が出土している。土器は，多数の型式が広範囲に出土するが，縄文早期を中心とする押型文系・撚糸文系および貝殻文系の土器型式が多い。

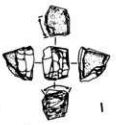
〈Ⅳb層＝桜島降下軽石（ＳｚＰ）層〉

Ⅳb層はこれまで溝辺台地などで確認された桜島降下軽石（ＳｚＰ）層と呼ばれる桜島起源の火山灰に比定され，栗野町付近でも保存の良好な場所では確認されている。本遺跡のⅣ層の堆積は，南向きの傾斜がみられるが，Ⅳb層の堆積が確認される区域は，比較的水平な堆積層である。また，Ⅳb層が確認されない傾斜面においてもⅣ層間に浮遊した軽石（パミス）が点々と確認されるところもある。このことから，全面に降下した軽石含火山灰が保存の良好な水平な部分にだけ層を残し，他は流失したことが想定される。このＳｚＰは，10，630± 220年B.P.と11,200±200年B.P.のC^{14}年代測定値が得られている。

Ⅴ層　淡褐色を呈し若干粘質をおびている。土質の性分は，下層のⅣ層に類似し，Ⅳ層との区分は不明確で漸移するところもある。Ⅴ層は，遺跡全体に確認されるが平均約10cmと薄い。

無遺物層である。

Ⅵ層　Ⅴ層と類似するが，色調が暗褐色を呈した腐植土層である。Ⅴ層と同様ほぼ全域にみられる。約10cmの厚みをもつ。G－3区の層位確認用の深掘りトレンチにおいてⅥ層上面より1（第6図）のような細石核と考えられる黒曜石が出土したため，Ⅵ層面を拡張した。その結果，6点ではあるが黒曜石砕片（チップ）が出土した。その後，各グリッドに2m巾のトレンチを設定して確認をおこなったが，G－6区以外は出土がみられなかった。


1

第6図　G－6区出土の細石器

これまで，細石器文化層は，近辺では溝辺台地（石峰遺跡・長ケ原遺跡）で，茶褐色土層（チョコレート色層）から発見されているが，本遺跡のⅥ層は，層位の序列や厚さ色調に若干の差異がみられ，チョコレート層に比定されるものか不明である。

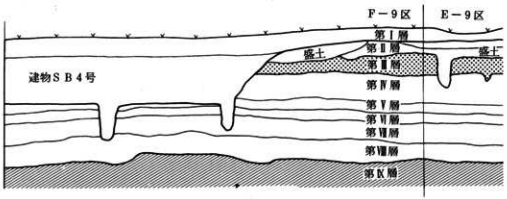
1は，G－6区出土で漆黒の良質黒曜石製の細石核。角礫（小）を用い，一度の打撃で打面を作出している。用いる角礫の選択に特徴がみられブランクの段階を省いている。これまで石峰遺跡・舟野遺跡・百花台遺跡などに類似品がみられる。

Ⅶ層　明るい黄色土層で粘質の強い硬質土である。層厚は，約50cmと厚い，無遺物層である。火山灰で，姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）ではないかとも考えられるが確証はない。

Ⅷ層　黄色～灰黄色を呈する水分の多い粘質土であり，ヌレシラスとも呼ばれている。粘質土と砂層の互層をなすところもあり，水成層と考えられる。この水成層と下位のⅨ層間に部分的に砂礫層を挟むところがある。そのため水成層をａ層，砂礫層をｂ層と細分した。Ⅷ層は，下のⅨ層を不整合に被っている。Ⅸ層上面は，侵食を受けた形跡がみられ，Ⅸ層の流堆積（2次堆積）したものがⅧ層と想定される。堆積は，区域によって異なり非常に厚いところや堆積のみられないところもある。

Ⅸ層　灰白色の火砕流であり，一般にシラスと呼ばれている。この火砕流中には，かなり大きな軽石（白色）が浮遊した状態で含まれているのが特徴である。入戸火砕流と呼ばれ，噴出源の姶良カルデラを中心に同心円状に堆積し，ほぼ南九州を被っている。入戸火砕流の噴出年代は，Ｃ^{14}年代測定によってほぼ明らかにされており，2.1万～2.2万年B.P.が得られている。Ⅹ層とは不整合の堆積をなす。

Ⅹ層　暗灰白色の溶結した火砕流である。Ⅹ層は，上のⅨ層が厚く遺跡全面には確認されなかったが，傾斜面下のG－2区付近や掘切りの床面付近に観察される。この火砕流は，阿多カルデラ噴出の阿多火砕流（Ata）であり，3万～4万年B.P.のＣ^{14}年代測定値が得られている。本遺跡では基盤層となる。

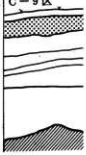


L=218.00m

堀切りＳＣ１埋土堆積状況

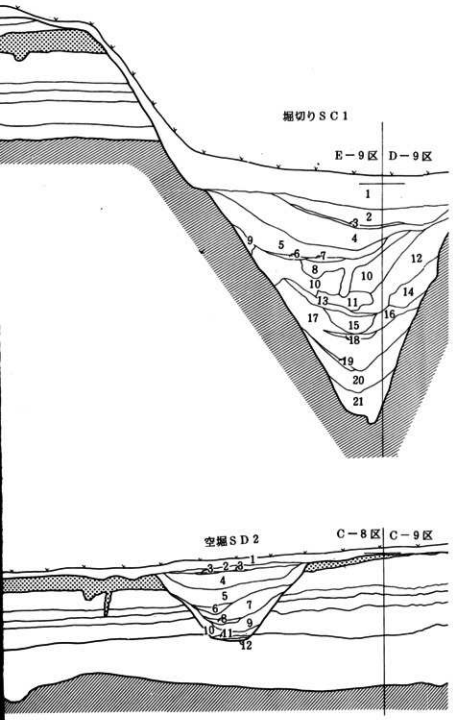
1. 表層
2. シラス混黒色腐植土
3. 黒色腐植土
4. パミス混褐色砂質土
5. パミス混褐色粘質土
6. 灰色シラス
7. 明褐色土
8. 褐色粘質土
9. 白色シラス
10. 褐色砂質土
11. シラス＋パミス
12. 黄褐色砂質土
13. 明黄褐色砂質土
14. シラス＋パミス
15. シラス＋パミス
16. 黄色シラス
17. 黄色シラス
18. 茶褐色の固い面
19. 砂層
20. シラス・砂の互層
21. シラス・砂の互層

L=220.00m
C－7区 C－9区

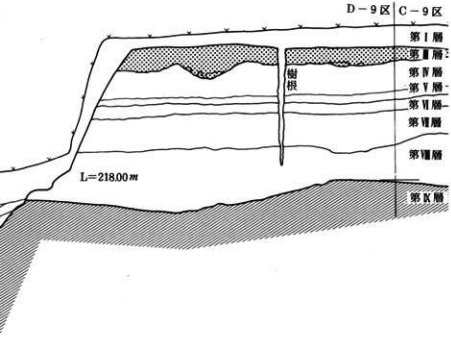


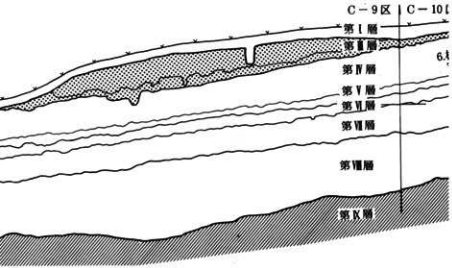
空堀ＳＤ２ 埋土堆積状況

1. 表層
2. 褐色土層
3. 赤ボッコ
4. 黄色パミス混色土
5. 黒褐色土
6. 褐色土
7. パミス混褐色土
8. 褐色土
9. 黒色粘質土
10. やわらかい褐色土
11. パミス混褐色土
12. 灰色硬質土

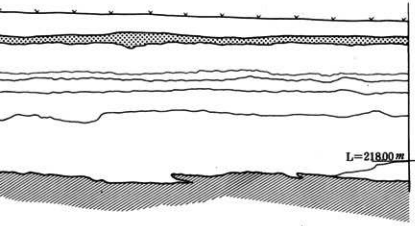

堀切りＳＣ１
Ｅ－９区
Ｄ－９区
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
空堀ＳＤ２
Ｃ－８区
Ｃ－９区
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

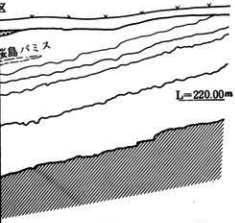
第７図　中尾田遺跡土層

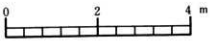

D－9区
C－9区
第Ⅰ層
第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層
第Ⅵ層
第Ⅶ層
第Ⅷ層
第Ⅸ層
樹根
L=218.00m

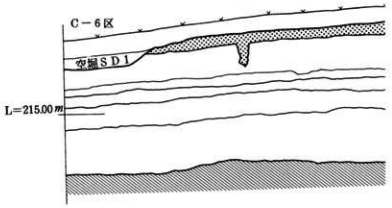

C－9区
C－10
第Ⅰ層
第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層
第Ⅵ層
第Ⅶ層
第Ⅷ層
第Ⅸ層

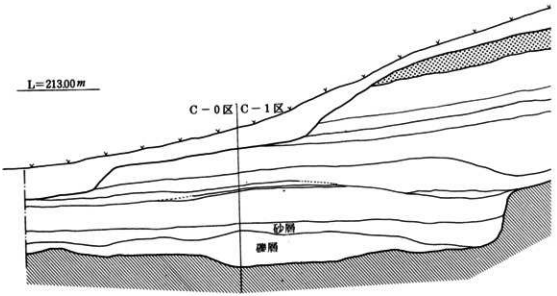
断面図（Ⅰ）

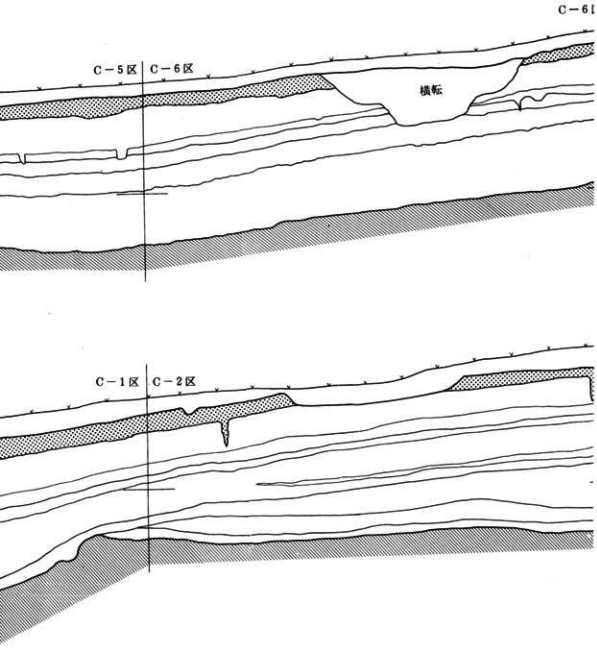

L=218.00 m


L=220.00m

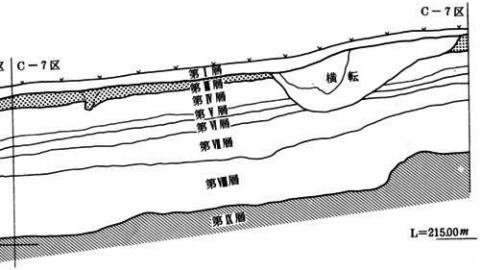

0
2
4 m

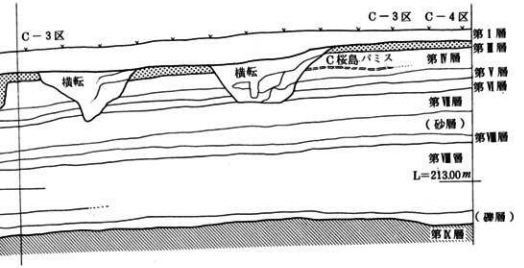

C－6区
空堀ＳＤ１
L=215.00m

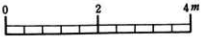

L=213.00m
C－0区
C－1区
砂層
礫層



第8図　中尾田遺跡土層断面図（Ⅱ）


C－7区
C－7区
第Ⅰ層
第Ⅱ層
第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層
第Ⅵ層
第Ⅶ層
第Ⅸ層
横転
L=215.00m


C－3区
C－3区
C－4区
横転
横転
C桜島パミス
第Ⅰ層
第Ⅱ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層
第Ⅵ層
第Ⅶ層
（砂層）
第Ⅶ層
第Ⅷ層
L=213.00m
（礫層）
第Ⅸ層


0
2
4m

第3節 地 層 横 転

溝辺町桑ノ丸遺跡の調査において，地層の焼曲が2ケ所検出された。その後，同様の地層の焼曲が各遺跡の調査で発見されるようになり，焼曲，地層横転，局部断層など色々な名称で呼ばれているが，ほぼ同一の現象をさしているものである。ここでは，地層横転の名称を用いることにする。これまで，発掘調査においては，桑ノ丸遺跡・山神遺跡・石峰遺跡・木佐貫遺跡・中尾田遺跡・山崎遺跡・花ノ木遺跡・木場A・B遺跡・加栗山遺跡などで発見されている。

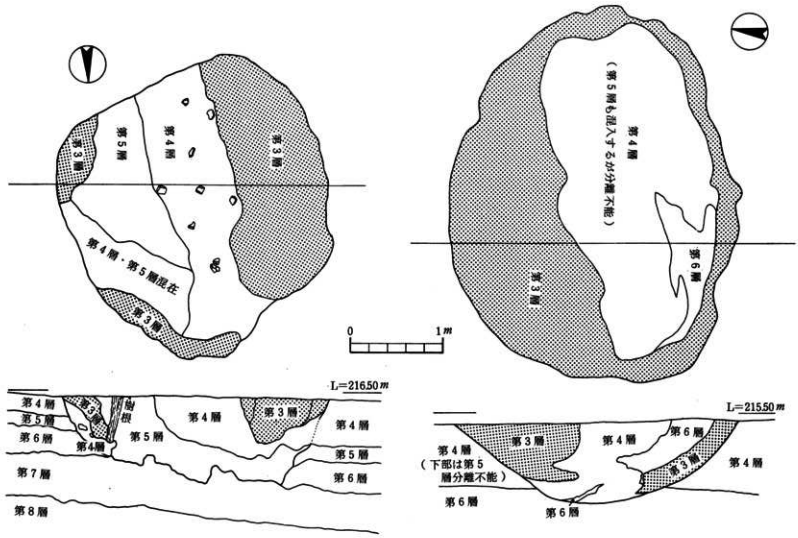
地層横転の発生の原因は，これまで風倒木や水による浸蝕や火山に関連するものなど色々考えられるが，いまだ原因が判明していない。

中尾田遺跡においては，13ケ所の地層横転が検出された。地層横転の分布は，B～D－1～5区付近に最も集中している（1,500㎡中に11ケ所）。ほかに，C・D－9区付近に2ケ所検出される以外はみられない。特に，C・D－7・8区付近やF・G区列にはほとんど検出されていないことは興味深い事実である。

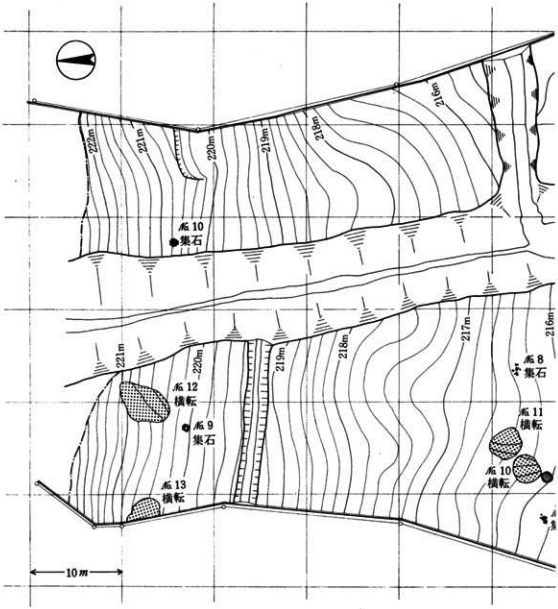
地層横転の形状について観察すると次のようになる（第9図）。平面形は，No10横転のようにいびつながら円形に近いものが7ケ所あり，No3横転のように楕円形に近いものが5ケ所存在している。このように，円形に近いものと楕円形に近いものに分けられるが，検出された深さによって形状が変化する場合もあり，一定ではない。断面を観察すると，水平層が地層横転内では垂直に転位している。つまり，それまで上下位に観察していた層位が，横転内においては横位に観察する形となる。層巾は若干間のびするところもあるが，明瞭に横転している。地層横転下面の輪郭は，半円形またはすり鉢状となる。

原因については今のところ明確ではないが，形成過程は若干理解される（第9図）。Ⅲ層が，局部的に落ち込み（上から圧力が加わったように），その影響でⅣ層，Ⅴ層が円孤すべり状に移動横転する。そのため下面は，餅を引っ張りちぎる様なブロック状の形状を呈する部分もある。さらに，落ち込み部分の対面（捲れ上った方）を中心に周円には，空間が生じ，ここにⅢ層が流入して空間を埋めている。3号横転は，周円全域にⅢ層の流入が確認される好例である。

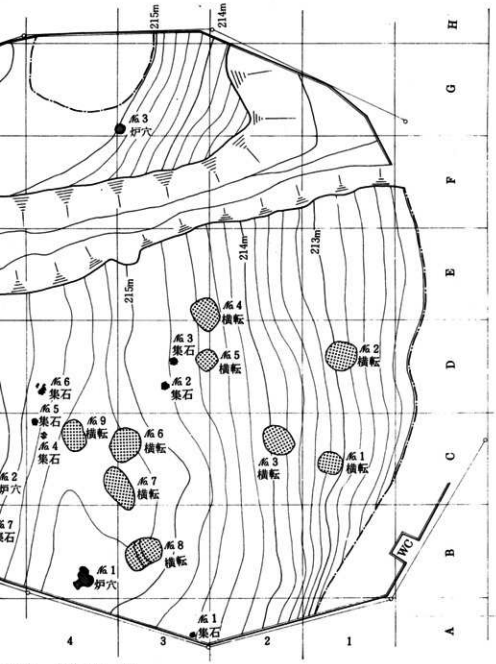
次に，横転の形成された時期であるが，横転内の層位の状態からある程度の観察は可能である。横転内の横位なった層位中，横転作用を受けている確実な部分の上限は（つまり，正常に横位になっている部分），Ⅲ層下部のパミス層であるり，少なくとも鬼界パミスの降下，あるいはアカホヤ火山灰（A_h）堆積までは，正常な堆積を示し，まだ地層横転は形成されていない。そのことは周円部分の空間にアカホヤ火山灰の流入が観察されることからもうかがえる。手がかりは，この赤ホヤ火山灰の性分をもつ周円空間部に流入した黄褐色であり，また表面に，この黄褐色土層が存在する時期の形成でなければならない。しかし本遺跡ではこの黄褐色土層（Ⅲa層）中には縄文時代前・中・後期に亘る型式の土器が含まれているため確実な年代をおさえることは不可能といえる。Ⅱ層の黒色土層中には土師器が含まれるが，周円空間部に黒色土層の流入がみられないところから，Ⅱ層形成以前には，すでに地層横転は形成されていたことになる。


第3層
第4層
第5層
第4層・第5層混在
第2層
0
1m
第4層
（第5層も加入するが分離不能）
第3層
第6層
L=216.50m
第4層
第5層
第6層
第7層
第8層
第5層
崩積
第4層
第5層
第3層
第4層
第5層
第6層
L=215.50m
第4層
（下部は第5
層分離不能）
第3層
第4層
第6層
第3層
第4層
第6層
第6層

第9図　地層横転実測図


222m
221m
220m
219m
218m
217m
216m
No 10
集石
No 12
横転
No 9
集石
No 13
横転
No 8
集石
No 11
横転
No 10
横転
10m
10
9
8
7
6
5

第10図　第Ⅳ層遺構


215m
214m
213m
H
G
F
E
D
C
B
A
4
3
2
1
WC
№3 炉穴
№4 横転
№3 集石
№5 横転
№2 横転
№2 集石
№6 集石
№5 集石
№9 横転
№6 横転
№4 集石
№3 横転
№1 横転
№7 横転
№8 横転
№1 炉穴
№1 集石

配置図　(S＝1：400)

第4章　第Ⅳ層の調査

第1節　調査の概要

層位の項で述べたように，Ⅲ層の黄褐色層下にⅣ層の黒色の腐植土層が存在する。Ⅲ層の黄褐色層はⅣ層の黒色土層と整合に堆積しており，その層相の異なりでより鮮明にみえる。

調査の結果，このⅣ層からは，押型文系や貝殻文系の土器をはじめ多数の縄文時代早期を中心とする遺物を出土した。さらに，Ⅳ層中・下位からは，炉穴（3基）・集石（11基）の遺構が検出された。

遺跡の地形は，北側はほぼ垂直に落ちており，10区付近からほぼ全面に南向きの緩やかな傾斜をもっている。Ⅳ層包含層は，丘陵頂部にあたる10区以北を除いては，この傾斜面全域に確認された。ただし，中世山城の構築において大きく破壊されている部分がみられる。この丘陵を南北に横断する巾約10m の堀切りによって消滅している部分をはじめ，この堀切り以東においては，隧道や階段状の郭の構築によって消滅しているところが多い。以西は，中世山城の遺構が小規模だったためか，C・D－8区付近の堀や掘立柱建物の柱穴やピット以外の遺構はⅣ層まで達せず，包含層の保存は良好であった。

今回発見された炉穴の型態は，本県においてはこれまでほとんど知られていない。熊本県楠島遺跡発見の炉穴に酷似するものであり注目される。集石は，本県においても多くの遺跡で多数の発見が報告されている。

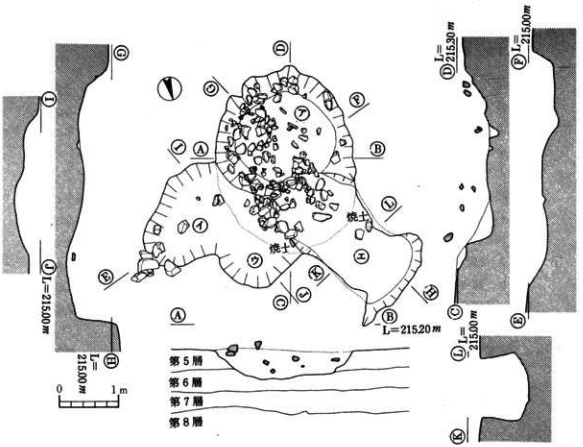
第2節　遺　構

(1) 炉　穴

炉穴は，B－4区（No 1）とC－5区（No 2）とG－3区（No 3）に検出された。No 1・No 2は，集石群に接する位置に検出されており集石との関係が注目される。

No 1 炉穴（第11図）

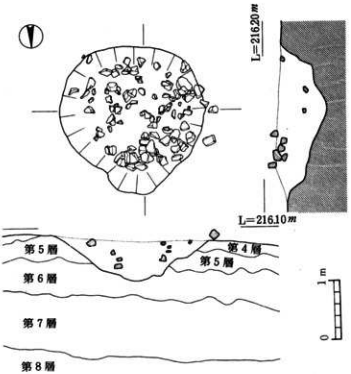
B－4区のⅣ層下面に検出された。Ⅳc層に無遺物層が存在するため，炉穴の掘り込みは，Ⅳ層途中かと考えられるが，炉穴の埋土がⅣc層と類似するため，Ⅳ層最下層まで掘り下げ検出する結果となった。第11図にみるように，炉穴の平面プランは，南隅の楕円形プランを中心に東方向と北西方向にのびている。炉穴内の埋土の切り合い関係は不明であるが，床面に切り合い状態がみられ数回に拡張あるいは移動して使用したことが考えられる（㋐㋑㋒㋓）。炉穴の最終使用の段階は，角礫を多量に含む南側に位置する楕円形プランが想定され（㋐），破線の部分は検出時に若干の色調の違いが確認されたものである。この炉穴㋐は南北方向の長径 160cm，東西方向の短径115cmをはかる。炉穴の深さは，検出面のⅣc層下部から25cmと比較的浅く，半円形状を呈する。底面は，Ⅴ層を掘り込み，Ⅵ層の中ほどまで達している（第11図A－B断面）。



第11図　No 1 炉穴実測図

次に，東方向に大きく飛び出した炉穴④とその北側に炉穴⑨が存在する。炉穴④⑨はいずれも長径を炉穴⑦に切られ，短径はお互い切り合っている。炉穴④の短径は約70cmで深さは10cmと浅い。炉穴⑨は，短径約60cmで深さ15cmをはかり炉穴④より若干深い。また，炉穴⑨は北西へのびた炉穴㉓とも切り合い，さらにその上を炉穴⑦に切られているため⑨と㉓の前・後関係は不明である。炉穴㉓は，掘り込みが袋状を呈し，これまでの⑦④⑨とは異った掘り込みをもつ。また，深さも40cmと最も深い。短径は，最も狭いところで50cmを測る。

埋土は，木炭片と木炭粉末の混入した黒色土が流入している。炉穴㋐は，この黒色土に焼けた角礫が混入している。この角礫は，無造作に投げ込まれた状態であり規則性はみられない。また，炉穴㋐を炉穴㋑には，約8～10cm程度の黄褐色の焼土塊が検出されている。埋土中には，年代の決め手となる遺物はほとんど共伴していない。ただ，炉穴㋐の角礫の上にのって第9e類土器とに属する山形押型文の細片が1点出土しただけである。



第12図　No2炉穴実測図

No2炉穴（第12図）

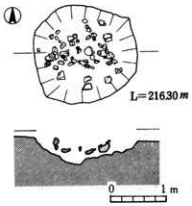
C－5区のⅣC層およびV層上面より検出。北にわずかに張り出しをもつが，東西 120cm，南北 110cm（張り出し部分で 125cm）のほぼ正円形プランを呈する。すり鉢状に掘り込まれ，底面はⅣ層中ほどに達している。深さは35cm。

埋土は，No1炉穴同様，木炭粉末の混入した黒色土が流入し，比較的多量の焼けた角礫が混在している。埋土中には共伴遺物はみられないが，検出面（炉穴上面）で第9e類に属する山形押型文の細片が2点出土している。

No3炉穴（第13図）

G－3区のV層上面に検出。平面プランは若干角張りをもつが略円形を呈する。南北径87cm，東西径92cmを測る。掘り込みの深さは最も深いところで25cmを測る。掘り込み断面は，半円形を呈するが，小さな凹凸面がみられるのが特徴である。

埋土は，炉穴No1・No2同様，木炭粉末の混入した黒色土に焼けた角礫が混在している。掘り込みの東端に7cm程度の木炭片が出土したが，時代を決る共伴遺物はない。



第13図　No3炉穴実測図

（2）集石　（第14図～第17図）

集石は，総数10基検出された。そのうち，B～D－3～5区に8基集中して検出され，炉穴（No 1・No 2）と隣接している点が注目された。他に，C－9区，E－9区に各1基離れて検出されたが，本遺跡発見のものでは，型態的に最も優れた集石であった。

No 1 集石　（第14図）

A－3区の用地巾いっぱいのところで検出された。集石は，南北48cmと東西40cmの小さな平面プランをもつ。4 a層中に検出され掘り込みは確認されないが，集石の下面は平担である。河原石を主体に角礫をわずかに含むが，石量は16個と少なく基部のみの残存とも考えられる。礫間には炭化物は検出されなかった。礫は，肉眼的には焼けた感じをうけた。

集石内に検出された遺物はないが，周辺から9 e類の山形押型文（209など）4片，9 f類連点文（369など）3片の出土があった。

No 2 集石　（第14図）

D－3区の4 a層中ほどで検出された。南北95cmと東西90cmのほぼ円形のプランをもつ。深さ約30cmの半円形状の掘り込みの底面に30cm～40cm程度の扁平な礫を配し，その上に挙大の礫が検出された（礫は総数48個）。本遺跡の中では，形態的に優れたものに入る。礫間には炭化物はほとんど検出されないが，礫は肉眼的には焼けているようである。

礫間には遺物は検出されなかったが，周辺からは多くの種類の土器が出土している。第3類（42）・8類・9 e・9 f類・9 j（319）類・9 l類土器などである。

No 3 集石　（第14図）

D－3区の4 a層下部で検出された。南北70cmと東西75cmの略円形プランを呈するが，周辺にバラックものもある。掘り込みは明瞭に確認されなかったが，集石の下面は，約10～20cmの凹みをもつ。礫は，大小様々使用しているが，No 2集石の下面のように，規側性はない。バラッキまで含め40個の礫数である。礫間には炭化物などの痕跡はみられないが，礫は肉眼的には焼けているようである。尚，No 2集石とは約2 m の距離で隣接する。

共伴遺物は検出されていないが，近辺からは，第6類・9 a類・9 e（213）類・9 l（366）類が出土している。

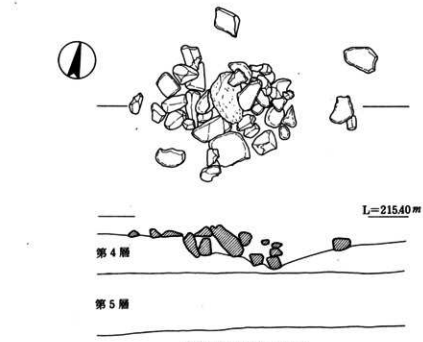
No 4 集石　（第15図）

C－4区の4 a層中ほどで検出されたが，南北80cm，東西60cmの平面に22個の礫が検出された。礫の集中しているところでも下面は平担であり，また，バラツキも大きいところから集石の痕跡をとどめるだけと考えられる。

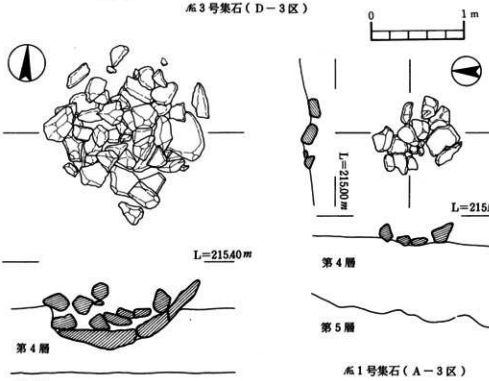
第9類が近辺から1片出土しているが共伴遺物はない。

No 5 集石　（第15図）

C－4区の4 a層の上面で検出され，南北50～60cmと東西90cmの楕円形の平面を呈する。礫間の埋土と4 a層の土質が同じのため掘り込みは明瞭でないが，25cm程度の深さに円錐状に4 a層の下面まで掘り込まれている。5 cm～10cm程度の挙大の礫を61個使用し，角礫より円礫が

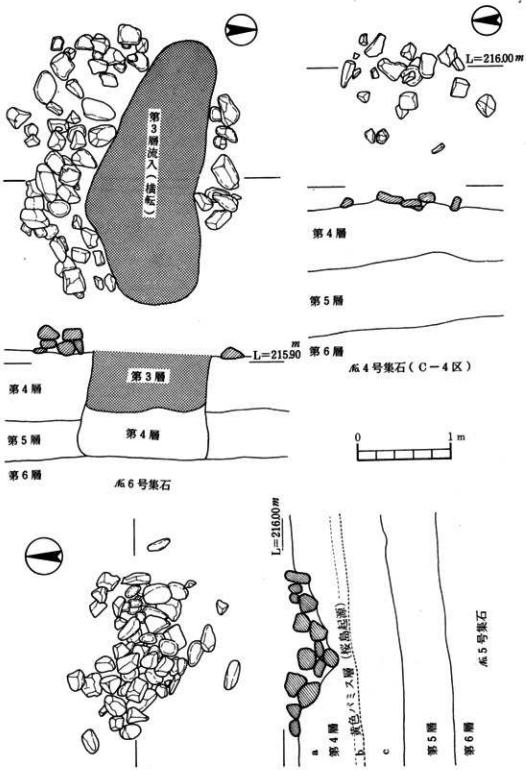


№3号集石（D－3区）

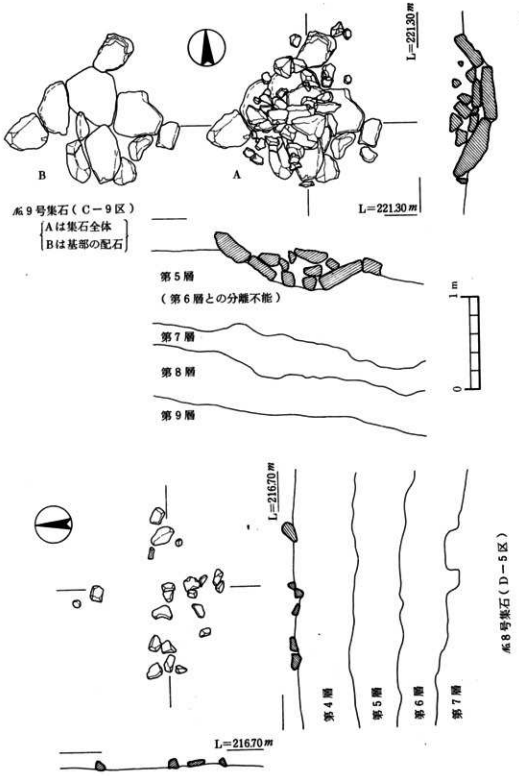


№2号集石（D－3区）　№1号集石（A－3区）

第14図　集石遺構実測図（I）



第15図　集石遺構実測図（Ⅱ）



第16図　集石遺構実測図（Ⅲ）

第10号集石

第7号集石（B－5区）

第17図　集石遺構実測図（Ⅳ）

多い。礫はよく積み込まれ，礫間の空間が少ない。

礫間には，時代の決めてとなる共伴遺物はみられない。

No 6 集石　(第15図)

D－4区の4 a 層中ほどで検出された。南北 120cm，東西 140cmの略円形の平面を呈する。本遺跡で最も大きな平面をもつ。集石底面は，掘り込みはなく平面を呈する。礫は，20cm前・後のものと5～10cmの拳大なものを使用しているが，礫間の空間が多い。尚，集石の中央北寄りは，南北約50cm，東西約 140cmの楕円形に地層横転状の攪拌が確認された。検出面には，Ⅲ層の黄褐色土が存在し，Ⅳ層はその下層に断層状に移動している。近辺から9 f 類が1片出土している。

No 7 集石　(第16図)

B－5区の4 a 層中ほどで検出され，南北50cmと東西70cmの小さな平面をもつ集石である。中央が皿状に約15cm程度落ち込む。大小様々な礫を使用し，円礫より角礫が多い。礫は28個を数える。

No 8 集石　(第17図)

D－5区のⅣ層中ほどに検出。約90cm四方に総数21個の，礫のバラツキがみられる。この礫のバラツキの範囲内に，木炭粒の痕跡が比較的顕著に検出された。礫面が平担でバラツキが大きいが，木炭粒の検出は，注目される。第9 e 類，9 f 類が近辺から出土しているが共伴遺物とはいえない。

No 9 集石　(第17図)

これまでの集石とは遠く離れてC－9区に検出された。Ⅳ層が薄く，Ⅴ層上面で検出された。本集石は，No 2 集石とNo10集石とともに形態的に最も優れた集石に属する。南北80cm，東西90cmの平面を呈している。底面に20～30cmの扁平な平石を花弁形に皿状に配し，その中に拳大の角礫が投げ込まれた状態で堆積している。ちなみに，礫は総数48個残存していた。掘り込みは明瞭ではないが，配石に沿って皿状に深さ20～30cmに掘り込まれているようである。集石内および礫間に含まれる遺物はみられないが，周辺から第9 e 類・9 f ・9 n 類（270）などが出土している。

No10集石　(第16図)

9－E区のⅣ a 層下面に検出された。南北75cmと東西85cmの円形プランをもつ。皿状の掘り込みに沿って20cm～30cmの大礫を配し，その中に拳大の角礫が投げ込まれている。No 9 集石同様，形態的に最もまとまりのある集石といえる。総数63個の礫が残存していた。集石内・礫間には共伴遺物はないが，近辺から第4類・9 e 類・9 n 類（262）などが出土している。

第3節　遺　　物

Ⅳ層の遺物包含層中からは，多量の土器，石器やその他（装飾品など）の遺物が出土した。特に，同一包含層中から多種の土器型式が出土したことは，本遺跡の特徴の一つといえる。

(1) 土　器

同一包含層中に多型式の土器が存在するため，包含層内での層位的土器型式の分類および前後関係の把握は困難であった。そのため，調査中，包含層の性格を知るために各土器型式の包含層中の原位置の把握に努め報告書作成にあたっては，各土器型式ごとの平面分布（図）・垂直分布（表）を示し各土器型式の包含層の原位置を図表化し記載することにした。これまで，南九州の縄文土器包含層は，非常に多くの土器細片や多くの型式を含んでいるが，このような土器包含層の在り方（形成）がどのようなものか，その実体をつかむ一つの方法として整理をおこなったものである。

土器型式は，それぞれ施文（文様）系統に区分されるが，それぞれの系統は，同じ施文方法をとりながら型態的に大きな差異が確認され，さらに，他の系統と型態的に類似するという複雑な様相も確認された。

まず，施文上の特徴から類別すると次のように大きく４つに区分される。

①貝殻文系　②撚糸文・縄文系　③押型文系　④その他

それぞれの系統には，次のような大きな特徴がみられる。

①の貝殻文系は，㋑口縁外面に貝殻縁で連続刺突を施すもの（政所式），㋺口縁外面に条痕文を巡するもの，㋩口縁外面に貝殻縁で連続刺文を施し，器面に条痕文を呈するもの（石坂式），㋥口縁隆部，外面に刻目文を施し，器面に条痕を呈するもの，㋭器面に櫛描文を施すもの，㋬貝殻縁の交互の刺突によって擬似押型文状の文様を施すものなどがある。貝殻文系の場合，特に㋑～㋭までは，これまでの独立した型式に属することが想定される特徴をもっている。

次に，②撚糸文・縄文系は，㋑撚糸文に施すもの，㋺網目撚糸文を施すもの，㋩変形撚糸文を施すもの，㋥縄文を施すものなどに類別される。が，㋑撚糸文には，円筒形の器形が所在し，㋺網目撚糸文には，壺形の器形が所在するなどの特徴的なものもある。

次に，③押型文土器は，㋑山形押型文，㋺楕円押型文，㋩菱形押型文，㋥同心円文押型文など，各種の押型施文がある。㋑山形押型文には，非常に間延びした押型施文が多く，器形も従来の押型文とは大きく異るものが多い。また，これまで，若干出土し注目されていたが，原体に同心円文（同心楕円文）を刻し，それを廻転施文する㋥同心円文押型文のほぼ器形が把握される資料が出土している。

次に，④その他には，㋑みみずばれと呼ばれる微隆起突帯文を施すもの，㋺凹線文を施すもの，㋩櫛描状の沈線文，円文を施すもの，㋥刺突連点文を施すものなどがある。㋑微隆起突帯文には，口縁内面に同じⓐ微隆起突帯文を施すもの，ⓑ押型文（山形文・円文）を施すもの，

ⓒ燃糸文を施すものなどがあり，他文様の融合が注目される。

以上のような施文を主体にした系統に区分されたが，各系統には，器形上大きな差異がみられるものが存在した。たとえば，①貝殻文系は円筒形を基本とするが，㋑は口縁部は外反し，胴部は「く」字に屈曲する器形を呈する。②燃糸文・縄文系は，さらにいくつかのバリエーションがみられる。口縁部が外反し胴部が「く」字に屈曲するものを主体とするが，㋑には，円筒形を呈するものがあり，㋺にはこれまで類例のない壺状の器形を呈するものが存在した。次に，③押型文系は，山形文が本遺跡Ⅳ層出土の総量中，最も多量に出土している。中に少量ではあるが，山形文の刻目が強く規則性があり，器壁が比較的に厚く，器形に極端な屈曲などは考えられないものである。その他の大多数は，山形文が間延びをして刻目が浅く，器壁が薄く，口縁が大きく外反し胴部が「く」字に屈曲する独得の器形をもつものが存在する。

第2表　土　器　類　別　表

文様			文様 主文様	文様 副文様	器形
貝殻文		政所式土器	貝殻刺突文		円筒形
		貝殻条痕円筒土器	a 貝殻条痕文帯 b 器面全体		円筒形で平底
		石坂式土器	貝殻縁刺突文 羽状条痕文		a 円筒形で口縁直口 b 〃 口縁外反
		条痕文土器	口縁部刻目文	条痕文	円筒形で口縁直口
		桑ノ丸3類土器	櫛描文		円筒形で口縁内湾
		貝殻刻目文土器	貝殻刻目文		胴部屈曲・口縁外反
燃糸文・縄文	燃糸文土器	燃糸文土器	器面全体に燃糸文	口縁内面に燃糸文	a 円筒形 b 胴部屈曲・口縁外反
		網目燃糸文土器	器面全体に網目燃糸文	口縁内面に網目燃糸文	a 口縁外反 b 壺状の口頸部
		変形燃糸文土器	器面全体に変形燃糸文		胴部屈曲・口縁外反
		押圧縄文土器	器面全体に押圧縄文		胴部屈曲・口縁外反
押型文		山形文土器	a 山形押型文		器壁が厚い
			b 山形押型文	同心円文	胴部屈曲・口縁外反・上げ底
		楕円形文土器	楕円押型文		口縁外反
		菱形文土器	菱形文	円文	胴部屈曲・口縁外反
		円形文土器	a 同心円文		胴部屈曲・口縁外反
			b 同心楕円文		
その他		みみずばれ文	みみずばれ 隆線文	山形文 同心円文 燃糸文	胴部屈曲・口縁外反
		凹線文	凹線文	凸帯刻目文	胴部屈曲・口縁外反
		沈線文	沈線文	円文	胴部屈曲・口縁外反
		連点文	連点刺突文		胴部屈曲・口縁外反
		塞ノ神式土器	貝殻刺突文 燃糸文 凹線文		口縁「く」の字外反

類別		
第1類		政所式土器
第2類a b		貝殻条痕円筒土器
第3類a b		石坂式土器
第4類		条痕文土器
第5類		桑ノ丸3類土器
第6類		燃糸文土器
第7類a b		山形押型文土器 楕円押型文土器
第8類		網目燃糸文土器
第9類	a	燃糸文土器
	b	網目燃糸文土器
	c	変形燃糸文土器
	d	押圧縄文土器
	e	山形押型文土器
	f	菱形押型文土器
	g	円形押型文(円)
	h	円形押型文(楕円)
	i	みみずばれ文土器
	j	凹線文土器
	k	沈線文土器
	l	連点文土器
	m	貝殻刻目文土器
第10類		塞ノ神式土器

第18図　第Ⅳ層土器分布状態

第1類　計10

	6区	5区	4区	3区	2区	1区
G	2		1			
F			2	1		
E						
D					2	1

第2類　計28

	9区	8区	7区	6区	5区	4区	3区	2区	1区
G	6						1	1	
F							1		8
E		4						1	
D		1							2
C						2			
B									

第3類　計112

	9区	8区	7区	6区	5区	4区	3区	2区	1区
G	1				4	1	4	2	
F				1	2	1	2	1	
E					1	2	10	5	1
D				1	1	5	11	7	1
C				1			7	26	7
B						4	1		1

第4類　計37

	10区	9区	8区	7区	6区	5区	4区	3区	2区	1区
G							1	5		
F	1	1		1			1	12	3	
E						1	1	1	4	1
D		1						2		
C							1			
B										

第6+9a+9b　計67

	10区	9区	8区	7区	6区	5区	4区	3区	2区	1区
G						1				
F		1		1				1		
E		2	1			2		1	3	2
D		1		1	6	7	2	7	6	1
C	2				1		1	8	4	4
B		1								

第7類　計28

	10区	9区	8区	7区	6区	5区	4区	3区	2区	1区
F	1	3	4				1			
E		2				3				
D						3				
C	1	1			1	2	2			1
B						1	2			

第8+9b類　計87

	10区	9区	8区	7区	6区	5区	4区	3区	2区	1区
G					2		1			
F		5	3				2	17	13	12
E	1	2				1		5	4	2
D		1				1		1	4	1
C	1				1		1	1		
B	1	3								

第9c計8

	10区	9区	8区
F	1	2	2
E		1	1
D			
C			
B	1		

第9e類　計681

	10区	9区	8区	7区	6区	5区	4区	3区	2区	1区	0区
H							1	1			
G			2	6	24	8	6	9	6		
F	1	29	29	14	11	13	7	11	2		
E	6	32	14	4	1	6	6	12	18	9	
D		8	2	5	15	56	24	47	29	1	
C	13	50	6	5	13	11	5	10	24	9	
B	4	16	1	1	5	5	3	8	5	4	1
A		2						4			

第3表　類別各区土器出土量

第 9f 類　　計 266

G					5	6	3		2	1	
F	4	12	6		8	10	1	11	3	1	
E	1	8	7		1		1	11	23	9	6
D		5				2	6	6	11	10	3
C	10	16	13		1	3			3	11	1
B		12				2	6			4	1
区	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	

第 9g 類　　計 94

H								1			
G				1	2			1			
F		1	2	2	8		1	1	2		
E		3						1	5	2	
D				1	2	3	1	6	14		
C		3		1	2	2		7	11	4	
B	4	1									2
区	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0

第 9h 類　　計 75

G						7					
F		1	4	2		5	1	1	1		
E		4	3						1	3	4
D		2	1					1	2	2	1
C	8	8	2			1	1				1
B		6								2	
区	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	

第 9i 類　　計 177

G		2	3	2	10	1		2			
F		4	3	6	2		1				
E	1	3	4	1			1	6	2	1	
D	1	14	6	2	5	4	5	7	6	1	1
C	3	10	2	2	3	2	1	3	12	3	
B	1				2	3		13	1	2	3
区	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0

第 9j 類　　計 38

F		1								
E									1	
D				7	3	7		1	2	1
C	2	3	1	2				1	1	1
B		1	2	1						
区	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

第 9k 類　　計 39

G			2			3			1	
F				1				1		
E								6		
D		1				1	2	1	3	
C			2					8	2	3
B	1									
A								1		
区	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

第 9l 類　　計 95

G					3	3			1	4	
F	3	1				4					1
E	1	1	1				3	8	2		
D			1			1	8	1	7	4	
C	3	4					2	2	4	5	1
B	2					2		1	4	3	4
区	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	

第 10 類　　計 22

F					1	1			1
E						1			
D				3	3	2			
C	1			1	2	2	2	2	1
B									
区	10	9	8	7	6	5	4	3	

無文土器　　計 1,784

H								6			
G					34	106	11	5	25	6	
F	8	132	76		21	17	17	27	16	12	
E	9	39	24		6	1	23	2	3	6	17	2
D		31	13		28	95	195	3	56	96	11	
C	39	92	22		25	46	50	3	9	86	35	
B	8	34	1		2	17	37	27	26	28	13	
A								4	3			
区	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	

以上のような型態的特徴から類別や記載は，次のような方法でおこなった。まず，施文・文様によってそれぞれ区分された各系統の土器を形態上の特徴から細別し並別することにした。この類別の中には，たとえば第３類・第４類のようにすでに型式把握がおこなわれて型式を比定しうるものも存在するが，第６類・第８類のように新たな資料で出土量も一個体分と一型式を求めるには不充分な資料もある。これらは，類例の増加を待つか，他の型式のバリェーションか今後の研究を待たなければならない資料である。また，第９類は，多くの文様型態を有するが，器形が酷似するという理由から一括したものもある。この中には，④の④のように②燃糸文や③押型文を共用するという明確な融合関係を示すものもあり，共通性が求められる。このような理由から第９類に一括して，さらにその特徴を細分する形となった。

以上の類別は，一型式や時代順を示すものではなく，形態上の特徴を検討した結果，便宜的にこのように細分したものである。なお，本包含層は，中世山城構築などにより大規模な削平・攪乱を受けた部分があり，この部分から出土した土器も合わせて記載する。

a．第１類土器　（第４表・第20～21図－２～９）

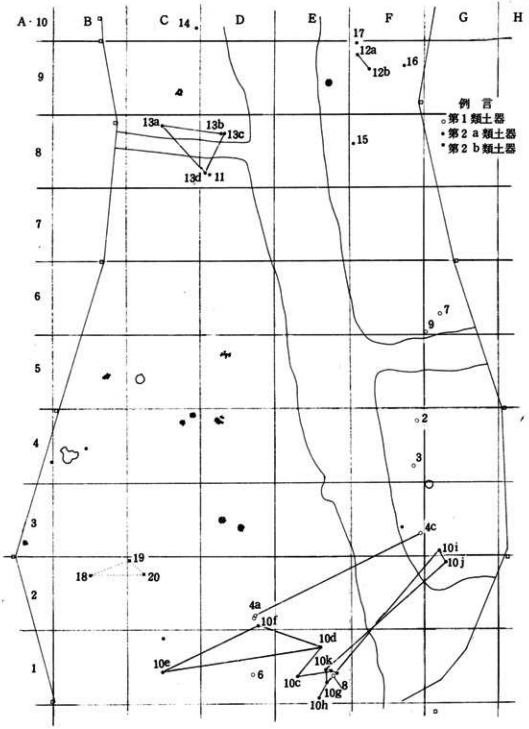
【分布】　D・E－１・２区およびF・G－３～６区に分布する。調査区域内においては，東南区域に分布するが，主分布域は東側の用地外の台地舌状部分にあることが想定される。土器４a，b，cは25mでの接合が確認された。このような土器の出土分布・接合を考慮すると，土器の廃棄後，かなりの移動が考えられる。

【土器の特徴】　器形は，口縁部がわずかに外反あるいは直口し，口唇部は丸味を持って終る。器壁は，いずれも１cm以上の厚みをもち，内面はていねいなヘラ磨き仕上げで光沢をもつ。焼成は良好であり，胎土は，長石を主に石英・雲母など混入する。

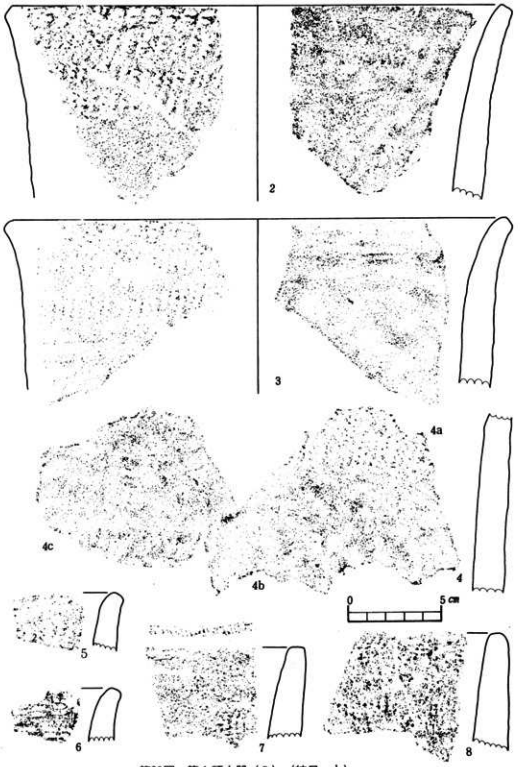
文様は，口唇部外側に貝殻腹縁による施文具で刺突文（線）を施文した文様をもつ。**2～6**

第4表　第　1　類　土　器　一　覧　表

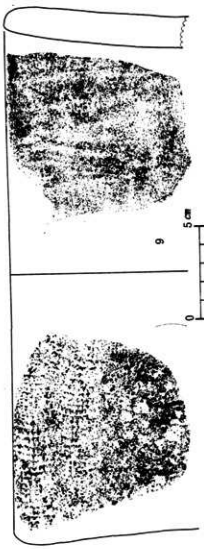
No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	F 4	Ⅳ	216.61	口縁部	口径 27 壁厚 1.2～1.6	口縁部外反し，端部は丸味をもち，正面に終る。内，外面はヘラ磨き仕上げ光沢をもつ。	口縁外面に貝殻縁刺突線 3粉施文具で4段に	長石・石英 雲母	良	黄灰色	
3	F 4	Ⅳ	216.42	口縁部	口径 27.5 壁厚 1.2～1.7		〃 4粉施文具で3段に	長石・石英	良	黄灰色	
4	F3，D2 a b c	Ⅳ	F3＝215.205 D2＝214.60	口縁近く	壁厚 1.7		〃 3粉施文具で2段以上	長石・石英	良	暗黄灰色	口唇部欠損 F3とD2が接合（25m）
5	G 4	Ⅰ		口縁部	壁厚 1.2		〃 4粉施文具	長石・石英	良	暗黄灰色	
6	D 1	Ⅲ	213.065	口縁部	壁厚 1.0～1.2		〃 粉方形，細片不明	長石・石英	良	黄灰色	
7	G 6	Ⅳ	217.005	口縁部	壁厚 1.2～1.7	口縁部直口，端部は丸味をもち平面に終る。内，外面ともヘラ磨き仕上げ光沢をもつ。	口縁外面に貝殻縁刺突線 粉7～9施文具で2段 貝殻縁刺突線が蛇状	長石・石英	良	黄褐色	同一個体 No 6とNo 8は約51m
8	E 1	Ⅳ	213.01	口縁部				長石・石英	良	黄褐色	
9	G 6	Ⅲ	216.945	口縁部	口径 31 壁厚 1.6～1.7			長石・石英	良	黄褐色	



第19図　第1類・第2類出土分布図　　(縮尺－1／500)



第20図　第1類土器（I）（縮尺－$\frac{1}{4}$）



第21図　第１類土器（Ⅱ）

は，貝殻刺突文（線）が直線をなし，貝殻施文具が３肋のものと４肋のものがある。**7～9**は貝殻刺突文（線）が紙状をなし連続に刺突する。

2～6と**7～9**には，器形と文様に若干の相違があり細分される可能性もある。

これまで本県での出土別はみられないが，大分県出土の敢所式に形態が酷似するものである。

b．第２類土器　（第５表・第22～24図－**10～20**）

【分布】　形態上，a，bの２類にわかれる。第２a類は，A～G－１・２区とA～F－８・９区に主な分布がわかれる。尚，**10**は，全形を知る形に復元されたが，この接合分布は，約40m範囲におよんだ。第２b類は，わずか３片の出土であり，B・C－２区に集中する。

【土器の特徴】　a・bに細分されるが，形態上大きな違いがある。第２a類は，平底を呈した円筒形の深鉢である。**10**のように口縁部は，外反気味に直口して胴部で若干張り，底部でしまる。口唇部は，**11・12**のように平担面をもつものもあるが，丸味をもって終るのが多い。口縁外面に巾５cm程度の条痕の文様帯をもつのが特徴であるが，胴部まで施されるものもある。内外面の整形は，ヘラ状のていねいな仕上げがおこなわれ光沢をもつ。

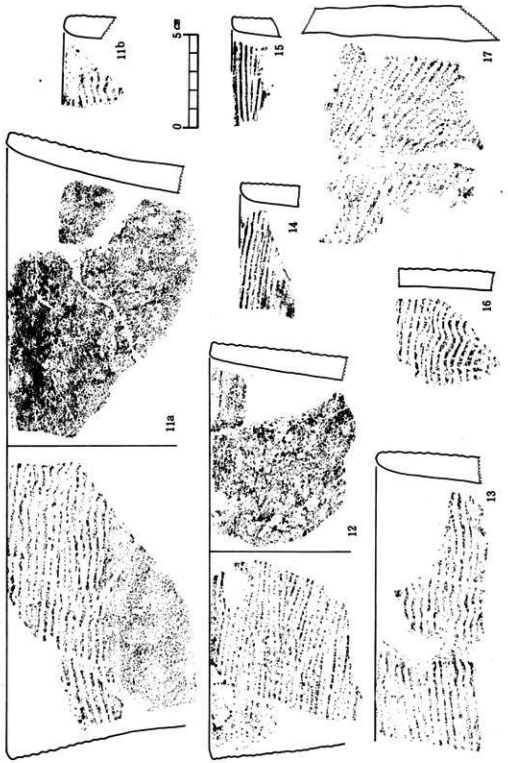
貝殻条痕文土器と呼ばれ，熊本県に多くの出土例がみられるが，本県でも栗野町花ノ木遺跡・溝辺町石峰遺跡など類例が増加している。

第２b類は，若干内弯気味であるが，円筒状の器形を呈する。口径は小さく，器壁は薄い。口唇部は平担面をもち胴部には凹凸がみられる。器外面には，横位の強い条痕が全面に施され内面は，ヘラ磨状の整形がおこなわれ光沢をもつ。

c．第３類土器　（第６表　第26～29図－**21～57**）

【分布】　その特徴からa，b，c類に細分されるが，a，bの分布は同一であり，cはa・bと離れて分布する。第３a・３b類は，B～G－１～６区までの本遺跡の中央平担面に広く分布している。第３c類は，F・G－７・８区の狭い範囲に集中する。第25図のようにかなり

第22図　第２ａ類土器（Ⅰ）（縮尺－$\frac{1}{3}$）

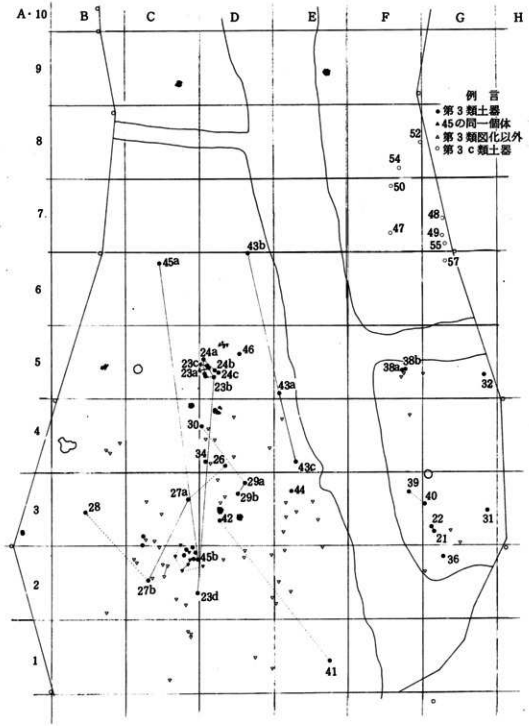


第23図　第２ａ類土器（Ⅱ）（縮尺－$\frac{1}{3}$）

第24図　第２ｂ類土器（縮尺－１／２）

第５表　第２類土器－覧表（No10～17－ａ類，No18～20－ｂ類）

No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
a	E－1	Ⅳ	213.0	口縁	口径26.8			長石・石英	良	黄灰色	同一個体
b	E－1	Ⅳ	213.04	口縁	現高27.2						C－1区～G－3区にかけて（40m）接合する。
c	E－1	Ⅳ	212.96	胴部				″	良	″	
d	E－1	Ⅳ	213.38	胴部	壁厚 1.0～1.4			″	良	″	
e	C－1	Ⅳ	213.09	胴部(底)				″	良	″	
f	D－2	Ⅳ	213.73	胴部(底)				″	良	″	
g	E－1	Ⅳ	212.92	口縁				″	良	″	
h	E－1	Ⅳ	212.77	胴部				″	良	″	
i	G－3	Ⅳ	215.27	胴部(口)				″	良	″	
j	G－2	Ⅳ	214.89	胴部(口)				″	良	″	
k	E－1	Ⅳ	213.01	口縁		口縁部は外反気味に直口し，胴部で若干張り底部でしまる。内面と，外面の無文部分は，ヘラ磨き仕上げで光沢をもつ。	口唇部隆線上に斜位の刻目口縁外面は，約5cm巾の条痕文様帯をつくる。	″	良	″	
l	C－1	Ⅳ	213.17	口縁				″	良	″	
11	D 8			口縁	口径 34 壁厚 1～1.5			雲母・石英・長石	良	茶～灰褐色	
12a	F 9			口縁	口径 22.5 壁厚 1～1.2			雲母・石英	良	茶褐色	
12b								雲母・石英	良	茶褐色	
13a	C 8			口縁	壁厚 1～1.3			雲母・石英	良	黄褐色	
13b	D 8							雲母・石英	良	黄褐色	
13c											
13d											
14	C10			口縁	壁厚 1.1			長石	良	暗褐色	同一個体
15	F 8			口縁	壁厚 0.9			長石	良	暗褐色	
16	F 9			胴部	壁厚 1.0			長石・石英	良	茶褐色	
17	F 9			胴部	壁厚 1.5～1.8			長石・石英	普通	黄褐色	
18	B 2	Ⅳ	214.49	口縁	口径 13.0 壁厚 0.7	内弯気味の口縁をもつ円筒形 口唇部平坦	口縁へ胴部外面横位の力強い条痕文 内面は，ヘラ磨き仕上げ	長石・石英	良	茶褐色	同一個体
19	C 2	Ⅳ	215.295	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	茶褐色	
20	C 2	Ⅳ	214.82	胴部	壁厚 1.1			長石・石英	良	茶褐色	



第25図　第３類土器分布図　　(縮尺＝１／500)

の接合分布が得られたが，30～40mおよぶ接合が確認されるものもあり，包含層中の高低差も25cm～30cmを測るものもある。他に，遺構との関係では，№9・№10集石の近辺に分布していないことが注目される。

【土器の特徴】　第3a類土器（第26図－21～25）は，口縁部が直口し，口唇部に平担面をもつ円筒形深鉢の器形を呈する。21・22と23～25の2個体に属し，器形は同じであるが，文様施文が若干異る。21・22は，口縁外側に，貝殻腹縁施文具で従位の連続刺突文が施文され，刺突文の下端には，一条の横位の刺突文が巡っている。刺突文を描く施文具は，六肋の貝殻縁を使用している。それ以下の器面は，綾杉状の貝殻条痕文が施文される。口唇部には，文様は施文されない。内面の整形は，ヘラ磨き状のていねいな光沢をもつ仕上げがみられる。

第3b類土器（第26～28図－26～46）は，最も出土量が多く第3類の主体を占める。円筒形平底の器形をもち口縁部が外反してわずかに肥厚する特徴をもつ深鉢である。口唇部は，丸味をもって平担面をつくる。器形は，ほとんど同一であるが，文様施文に小さな差異が認められる。口唇部から順に観察すると次のようになる。口唇部平担面は，半截竹管状の施文具で瓜形状に2条に連続に施文するもの（26～28），口唇部陵線上にヘラ施文具で刻目を施すもの（29，30），口唇部中央平担面に貝殻腹縁による1条の刺突線が巡るもの（31），貝殻施文具の2肋で刻目を施すもの（32），同じく3肋で施すもの（39～41・42），ヘラ状施文具で刻みを施すもの（34～38・43～45）などがある。なお，31の貝殻腹縁刺突文は，9肋の施文具のくりかえしが確認される。口縁外面は，口縁に沿って貝殻縁を横位に3条巡らすもの（26～28・43・44であるが，26～28は器面に垂直に刺突し，43・44は器面に斜位に刺突する），半截竹管施文具で刺突するもの（29・30），貝殻腹縁刺突文を口縁に沿って2～3条巡らし，その下に斜位にヘラ状施文具で刻目を施すもの（31），同じく貝殻腹縁刺文具で斜位に刻目をつけるもの（33～40・43・45），斜位の2肋の貝殻腹縁刺突文の刻目をつけるもの（42）などがある。

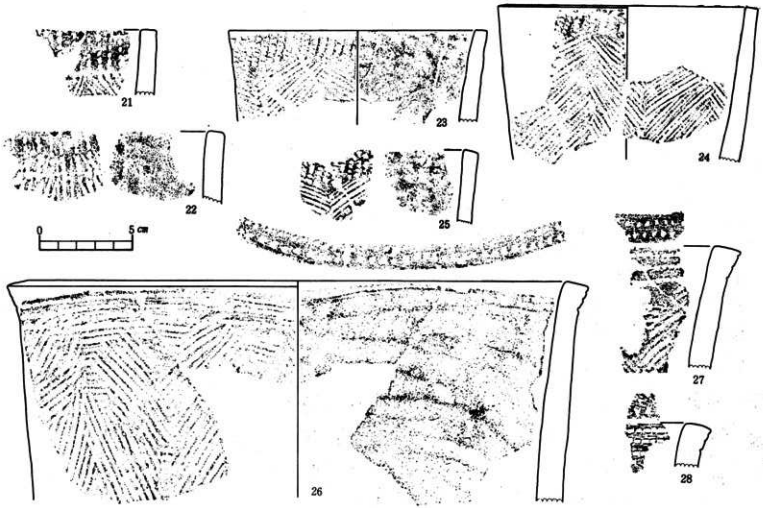
胴部文様は，貝殻条痕文を綾杉状に施文する（26・43・46）のが主体を占めるが，31のように従・横位に施されたものや，45のように横位に施されたものが多い。この条痕文は，底部側面まで施文され，底部外側の陵部にはこまかな刻目が施される。(46)。以上，第3b類の形態

第6表　第3類土器一覧表（I）

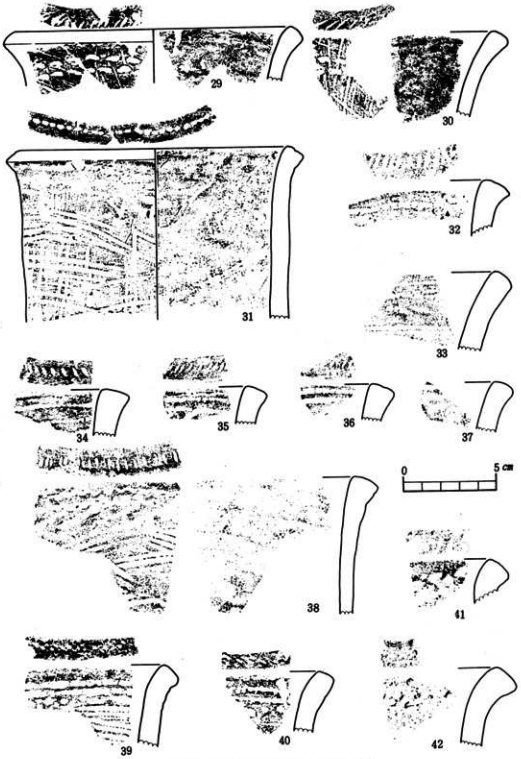
No	区	層	レベル m	器　種	法　量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
21				口　縁	壁厚　0.9	口縁部直口，口唇部平担	口縁外面に従位に貝殻腹縁刺突文下端を横位に区切る	長　石	良	黄褐色	同一個体
22	G 3	Ⅳ	215.305	口　縁	壁厚　1.0			長　石	良	茶褐色	第3a類
23 a	D 5	Ⅳ	216.18	口　縁	壁厚 0.9～1.0 口径　14	口縁部直口，口唇部平担	口縁外面に従位に貝殻腹縁刺突文肋の条痕文を施す。	長石・石英	良	赤褐色	同一個体
b	〃	〃	216.13								
c	〃	〃	216.24								
d	C 2	表									
24 a	D 5	Ⅳ	216.78	口　縁	壁厚 0.9～1.0 口径　14			長石・石英	良	赤褐色	
b	〃	〃	216.44								
c	〃	〃	216.23					長石・石英	良	赤褐色	
25		表			壁厚 0.9～1.0			長石・石英	良	赤褐色	第3a類

第7表　第3類土器一覧表（Ⅱ）

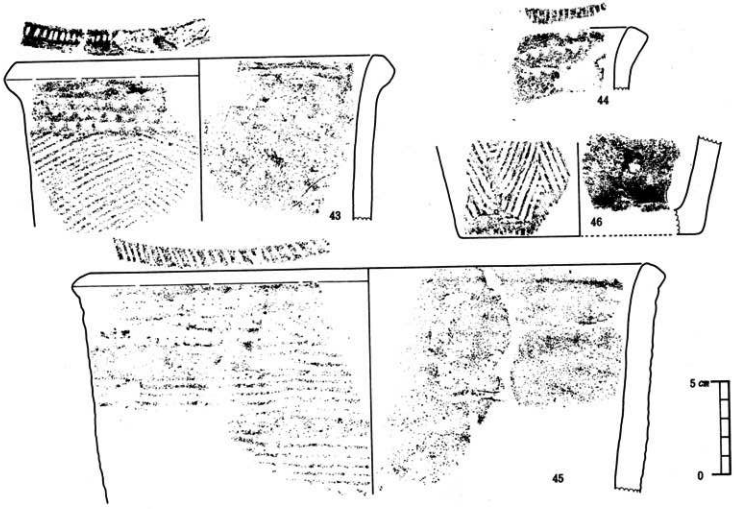
No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
26a	D 4	Ⅳ	215.52	口縁	壁厚 1.2～1.5	円筒形平底の深鉢。口縁外反，わずかに肥厚，口唇部は平担	口唇部に平載とる策状の連続刺突文 口縁外面は，3条の貝殻刺突線	石英・長石	良	暗赤褐色	同一個体
26b	E 3	表			口径 31.4						
27a	C 3	Ⅳ	215.18	口縁	壁厚 1.2			長石・石英	良	暗赤褐色	
27b	C 2	Ⅳ	214.685								
28	B 3	Ⅲ	215.35	口縁	壁厚 1.2			長石・石英	良	暗赤褐色	第3b類
29a	D 3	Ⅳ	215.43	口縁	壁厚 0.7		口唇部隆線上にヘラ状刻目 口縁外面に平載竹管刺突文	長石	良	赤褐色	同一個体
29b	D 3	Ⅳ	215.455		口径 16.2						
30	D 4	Ⅳ	215.765	口縁	壁厚 0.7			長石	良	赤褐色	第3b類
31	G 3	Ⅳ	216.03	口縁	壁厚 1.0 口径 16		口唇部に貝殻腹縁刺突線	長石	良	赤褐色	
32	G 5	Ⅳ	216.47	口縁	壁厚 1.1			長石	良	黄褐色	
33	E 3	表		口縁				長石	良	黄褐色	
34	D 4	Ⅳ	215.75	口縁	壁厚 1.2～1.3		口唇部平担面にヘラ状刻目文 口縁外面は，貝殻腹縁を2条巡し，その下に貝殻腹縁施文具による刻目	長石・石英	良	赤褐色	
35	C 3	Ⅳ	215.06	口縁	壁厚 1.1			長石・石英	良	赤褐色	
36	G 2	Ⅳ	214.80	口縁	壁厚 1.1			長石・石英	良	赤褐色	
37	C 2	Ⅳ	214.71	口縁	壁厚 1.0			長石・石英	良	赤褐色	
38a	F 5	Ⅳ	216.05	口縁	壁厚 0.7～0.9			長石・石英	良	赤褐色	
38b	F 5	Ⅳ	216.66								
39	F 3	Ⅳ	215.71	口縁	壁厚 1.1	器壁は均厚な円筒土器の胴部破片	口唇部貝殻施文具による刻目	長石・石英	良	赤褐色	
40	G 3	Ⅳ	219.92	口縁	壁厚 1.0			長石・石英	良	赤褐色	
41	E 1	Ⅳ	213.135	口縁	壁厚 1.1			長石・石英	良	赤褐色	
42	D 3	Ⅳ	215.23	口縁	壁厚 1.1			長石・石英	良	赤褐色	
43a	E 5	Ⅳ	216.15	口縁	壁厚 1.0		口唇部ヘラ状施文具による刻目 口縁外面横位の貝殻刺突線	長石・石英	良	暗灰褐色	同一個体
43b	D 6	Ⅳ	217.90		口径 21.1						
43c	E 4	Ⅳ		口縁				長石・石英	良	暗灰褐色	
44	E 3	Ⅳ	215.33	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	黄褐色	第3b類
45a	C 6	Ⅳ	217.66	口縁	壁厚 1.4		口唇部ヘラ状施文具の刻目文胴部横位の条痕文	長石・石英	良	赤褐色	第3b類
45b	C 2	Ⅳ	214.86		口径 32						
46	D 5	Ⅳ	216.52	底部	壁厚 1.2 底径 13.2	内外面とも，ヘラ磨き状の仕上げ。	底部側面隆線上に刻目文側面は縦杉状の条痕文	長石・石英	良	赤褐色	
47	F 7	Ⅳ	218.24	胴部	壁厚 1.0			長石・石英	良	暗褐色	
48	G 7	Ⅳ	217.82	胴部	壁厚 0.6			長石・石英	良	暗褐色	
49	G 7	Ⅳ	217.86	胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	暗褐色	
50	G 7	Ⅳ	218.535	胴部	壁厚 0.8		外面に貝殻腹縁刺突文で縦杉文を描く。	長石・石英	良	暗褐色	
51	F 7	表		胴部	壁厚 1.0			長石・石英	良	暗褐色	
52	F 8	Ⅳ	219.425	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	暗褐色	同一個体
53	F 7	表		胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	暗褐色	
54	F 8	Ⅳ	218.875	胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	暗褐色	
55	G 7	Ⅳ	289.5	胴部				長石・石英	良	暗褐色	
56	F 5	表		胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	暗褐色	
57	G 6	Ⅳ	217.61	胴部				長石・石英	良	暗褐色	



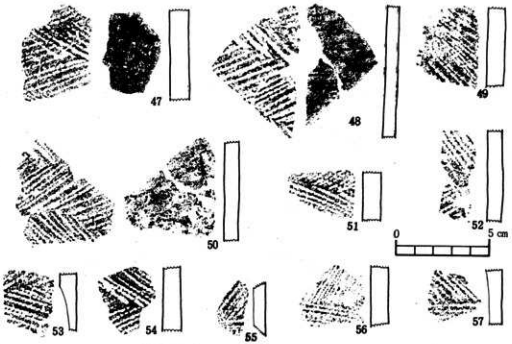
第26図　第３類土器（Ⅰ）（縮尺一十）



第27図　第３類土器（Ⅱ）（縮尺－$\frac{1}{4}$）



第28図　第３類土器（Ⅲ）（縮尺－十）



第29図　第　3　類　土　器（Ⅳ）　　（縮尺＝1／2）

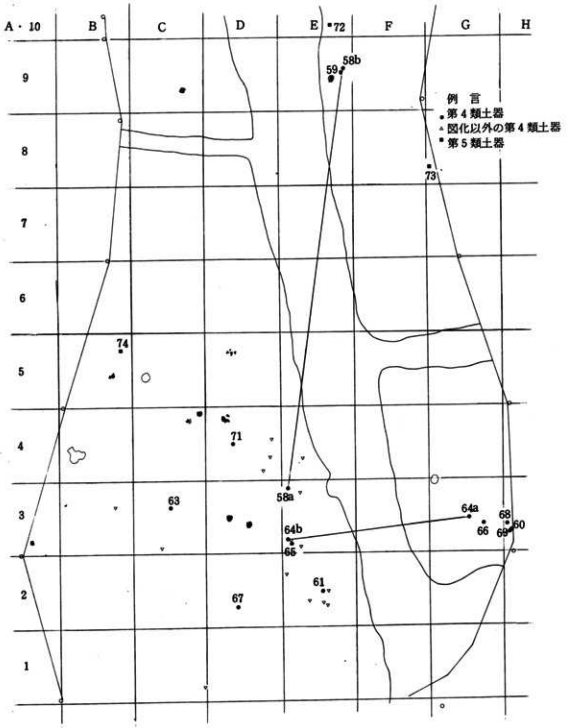
を説明したが，これらは，石坂式土器に属するものである。

第３ｃ類土器（第29図－47～57）は，胴部片だけの出土がみられ，全体の器形は不明であるが，かなり大きな円筒形の胴部が想定される。すべての破片は，同一個体である。内外面とも光沢をもっていねいなヘラ磨き状の仕上げがみられ，外面にはその上から貝殻腹縁による刺突文で横位の綾杉文がくりかえしていねいに施文されるものである。西之表市下剝峯遺跡出土のⅡｃ類に酷似するものである。

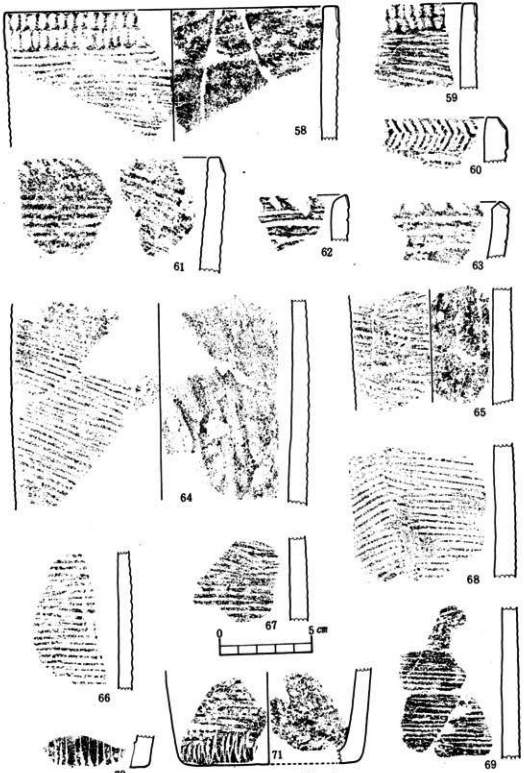
ｃ．第４類土器　（第８表　第31図－58～71）

【分布】　第４類土器は，出土量は総数14点と非常に少ないが，広範囲に分布し，90m の距離の土器が接合する注目すべき散布が確認された。58は，Ｅ－３区とＥ－９区で90m 間の接合があり，64は，Ｅ－３区とＧ－３区で25m 間の接合がみられた。分布域は，Ｇ・Ｈ－３区に最も集中し，Ｃ～Ｅ－２～４区やＥ－９区に若干散布している。

【土器の特徴】　円筒形平底の深鉢の器形を呈し，文様は口縁外面に刻目を施し円筒形の胴部には全面に条痕文を施文する。口縁部は，58のように直線的に直口するものが多い。口唇部は，平坦面をつくり，その外側陵線上に刻目を施すため，60・61のようにその平坦面が消滅するものが多い。58のように，口縁外面に刻目を施し，口唇部はそのまま平坦に残るものもある。また，62・63のように若干内傾気味に平坦面を作り，その頂部の陵線上に刻目を施す場合もある。



第30図　第4類土器・第5類土器分布図（縮尺＝1／500）



第31図　第4類土器（1／2）

第8表 第 4 類 土 器 一 覧 表

No	区	層	レベル m	器 種	法 量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
58 a	E 3	Ⅲ	230.5	口 縁	壁厚 0.9	刻目文が口縁側面に施文されるため，口唇部は平担面が残る。口縁直口	口縁外面にヘラ施文具による2段の刻目文	長石・石英	普通	暗褐色	E－3区とE－9区で接合(90m)同一個体
b	E 9	Ⅳ	221.265		口径 18.1						
59	E 9	Ⅳ	221.31	口 縁	壁厚 0.9			長石・石英	普通	暗褐色	
60	3 H G 3	Ⅳ	215.56	口 縁	壁厚 1.1	口唇部外側陸線上に刻目文，口縁直口	口唇部外側の陸線上に貝殻施文具による斜位の刻目文	長英・長石	普通	黄褐色	
61	2 E	Ⅳ	214.12	口 縁	壁厚 1.0		口唇部外側の陸線上に貝殻施文具による斜位の刻目文	長 石	普通	黄褐色	
62	G 4	表		口 縁	壁厚 0.9	口唇部は内傾した平担面その頂部の陸線上に刻目 口縁直口	ヘラ施文具による斜位の刻目文	長 石	普通	暗褐色	
63	C 3	Ⅳ	215.15	口 縁	壁厚 0.9			長 石	普通	暗褐色	
64 a	3 G		215.92	胴 部	壁厚 0.9	円筒形 内面は，ヘラ削り調整	斜位の条痕文	長 石	普通	茶褐色	E－3区とG－3区の25mで接合
b	3 E	Ⅲ	266.2		胴径 16.0						
65	3 E	Ⅳ	215.335	胴 部	壁厚 1.0 胴径 8.6		横位の条痕文	長 石	普通	茶褐色	
66	3 G	Ⅳ	215.84	胴 部	壁厚 0.7			長 石	普通	茶褐色	
67	2 D	Ⅳ	214.24	胴 部	壁厚 0.9			長 石	普通	茶褐色	
68	3 G	Ⅳ	215.85	胴 部	壁厚 1.1			長 石	普通	茶褐色	
69	3 H	Ⅳ	215.56	胴 部	壁厚 0.9			長 石	普通	茶褐色	
70	D 5	表		底 部	壁厚 0.9	平 底	底部側面に従位の沈線文	長 石	良	茶褐色	
71	D 3	Ⅲ	215.965	底 部	壁厚 0.9 底径 10.0			長 石	普通	茶褐色	

この場合，口唇部は，刻目のため小さな波状を呈したようにみえる。刻目は，ヘラ施文具により2段に施文されるもの（**58**）と1段に施文されるもの（**62・63**）や，貝殻腹縁施文具によって羽状（**60**）および斜位の刻目（**61**）のものがある。口縁部以下胴部は，斜位，横位の貝殻条痕文で器面調整がおこなわれている。これらの条痕文は，底部側面まで施文される。そして，底部下端の側面には，ヘラ施文具による従位の沈線文が施文されている（**70・71**）。内面の整形はヘラ削り状の比較的荒い仕上げである。

d．第5類土器　（第9表　第32図－72～74）

【分布】　わずか3点の出土であるが，独得の形態をもつため類別された。分布は，**72**がE－10区，**73**がG－8区，**74**がB－5区と単独に出土し，そのうえ少量のため接合資料はない。

【土器の特徴】　内弯気味の口縁をもつ円筒形の深鉢であり，口唇部平担面が内傾するのを特徴とする。内面は，ヘラ磨き状にていねいに整形されわずかに光沢をもつ。文様は，器面外に櫛状の施文具で羽状を描くものが多いが，櫛間の広いものやヘラ沈線を代用するものもある。

宮崎県田野町で完形品が発見され，溝辺町桑ノ丸遺跡でその型態が把握される好資料が出土しており，今後一型式が設定されると考えられている。

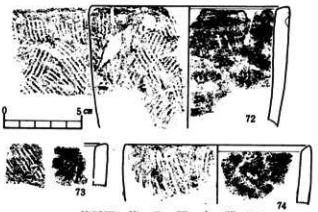
第9表　第5類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器　種	法　量	形態の特徴	文様の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
72	E10	Ⅳ	222.40	口　縁	壁厚　0.9 口径　12.9	円筒形深鉢，口縁部がわずかに内傾，口唇部平坦面が内傾する。内面はヘラ削	器外面は，櫛状施文具で連続に羽状文を描く	長石・石英	普通	灰黄褐色	同一個体
73	F 8	Ⅳ	218.875	口　縁	壁厚　0.8			長石・石英	普通	灰黄褐色	
74	B 5	Ⅳ	216.09	口　縁	壁厚　0.7 口径　12.0		ヘラ状沈線文	長石・石英	普通	灰黄褐色	

e．第6類土器

（第10表　第33図－75～85）

【分布】　D区列を中心に，C～E－1～6区にあたる遺跡中央に従位に傾斜面に沿って分布する傾向がある。他の撚糸文・縄文系の第8類・第9a類土器とは，分布をほぼ同じくするが，第9b類や第9c類土器とは分布を異にする。



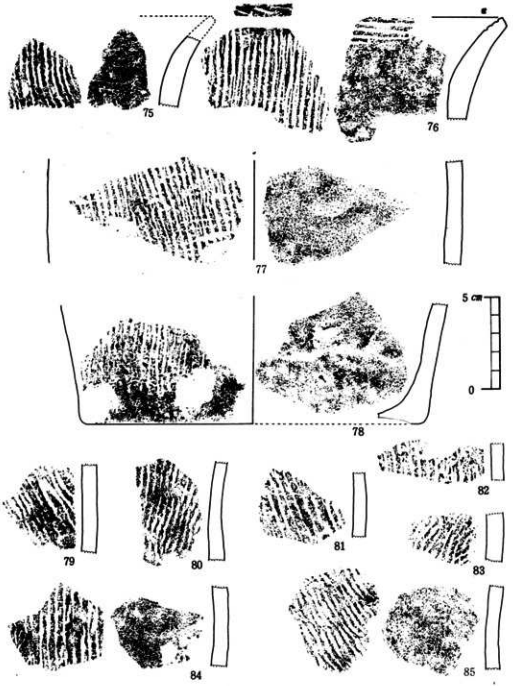
第32図　第5類土器（縮尺＝1／2）

【土器の特徴】　底部は平底で胴部は円筒形を呈し口縁部は若干外反する円筒形平底の器形をもつ深鉢である。破片の出土であるが，各部位の特徴は知ることができるが，破片から復元すると，底部径18.5cm，胴部径22.2cmと大型の深鉢である。文様は，口縁部や胴部そして底部下端約2cm上のところまで器外面全体に施文する。さらに，口唇部平担面にも施し，口縁内面に

第10表　第6類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器　種	法　量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
75	C 2	Ⅲ	215.14	口　縁	壁厚	口縁部外反胴部は円筒底部平底の円筒形深鉢	外面は従位に撚糸文口唇部に撚糸文口内面は横位に撚糸文	長　石	良	灰黄色	
76	C 1	Ⅳ	213.72	口　縁	壁厚			長　石	良	灰黄色	
77	C 1	Ⅳ	213.74	胴　部	胴径　22.2			長　石	良	灰黄色	
78	D 2	Ⅳ	215.005	底　部	底径　18.5		下端2cm上まで撚糸文施文	長　石	良	灰黄色	
79	C 3	Ⅳ	215.05	胴　部	壁厚		従位～斜位の撚糸文	長　石	良	灰黄色	
80	B 1	Ⅳ	213.47	胴　部	壁厚			長　石	良	灰黄色	
81	C 3	Ⅲ上		胴　部	壁厚			長　石	良	灰黄色	
82	D 6	Ⅳ	217.265	胴　部	壁厚			長　石	良	灰黄色	
83	D 7	Ⅲ	218.09	胴　部	壁厚			長　石	良	灰黄色	
84	D 6	Ⅳ	217.35	胴　部	壁厚			長　石	良	灰黄色	
85	1 E	Ⅳ	213.51	胴　部	壁厚			長　石	良	灰黄色	

は横位に撚糸文が施文されている。これまで，撚糸文の円筒形深鉢は，本県では初見であるが，熊本県沈目立山遺跡で発見されており，今後，類例が増加することが考えられる。



第33図 第 6 類 土 器 （縮尺－1／2）

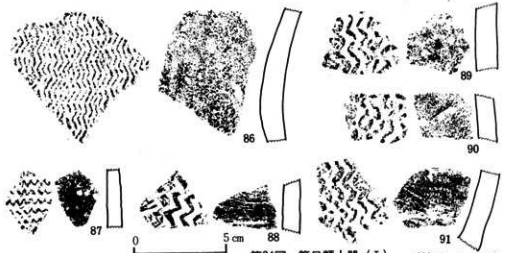
f．第７類土器　（第11表　第34・36図－86～ 118）

第７類土器は，山形押型文と楕円押型文土器である。本遺跡出土の押型文土器には，間延びをして刻目が浅く器形が著しく変形した第９ｅ類に細分した山形押型文土器が出土するが，型態上の違いからあえて第７類土器と第９ｅ類土器は区分して記載することにした。

【分布】　第７類土器は，山形押型文（ａ類）と楕円押型文（ｂ類）に細分される。第７ａ類の**86・87**はいずれも中世山城構築時の撹乱層から出土している。**88・91**は，型態上同一個体と考えられる。**88**がＦ－８区に１片出土した以外は，Ｆ・Ｇ－５区に集中する。いずれも東区に片寄った分布がみられ，東方用地外に主分布が存在することが想定される。第７ｂ類は楕円文であるが，細形と太形にわかれる。細形楕円文は，Ｅ～Ｆ－８～10区に限定した分布をもつ。太形楕円文は，Ｂ～Ｅ－３～５区に主に分布するが，Ｃ－９・10ＦやＦ－10区などに飛火したように散布するものもある。

【土器の特徴】　山形押型文（ａ類）と楕円押型文（ｂ類）に区分される。山形押型文は，撹乱層出土の**86・87**と同一個体の**88～91**にわかれる。**86**は，大きく外反しており口縁部近くと考えられる。器壁は厚く焼成が良い。いずれも彫刻の深い原体で施文されており，**86**の山形間は，1.3cmと大きく，**87**は 0.5cmと小さい。**88～91**は，型態から同一個体と考えられる。器壁が厚く焼成が良い。すべて胴部破片の出土であるが，**91**は底部近くの破片であり平底が想定されるものである。山形文の原体彫刻は，太く深く，山形間は 1.2cmを測る。

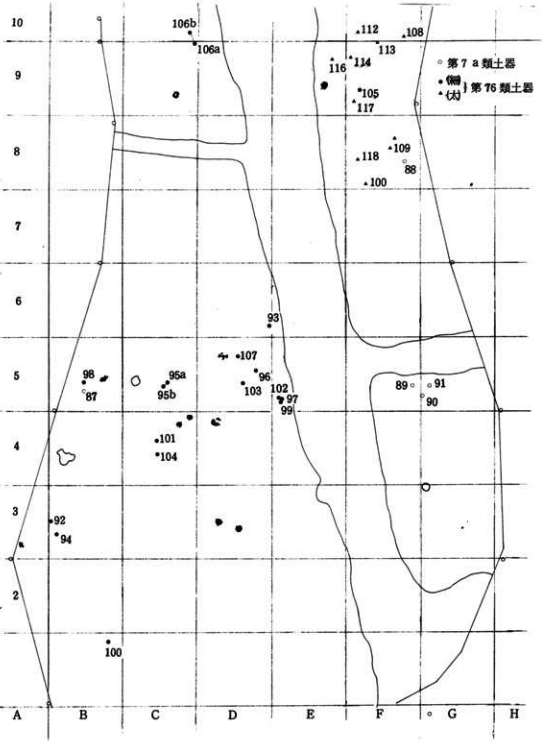
楕円押型文は，細粒（ 0.3cm× 0.5cm）の楕円文（**92～ 107**）と太粒（ 0.6cm× 0.9cm）の楕円文（ **108～ 118**）とがある。細粒の楕円押型文は，口縁部から底部までほぼ器形を知り得る破片が出土している。口縁部は若干外反し，口唇部は丸味をもって終る。**92**は，口径15cmの比較的小型のものである。胴部は若干張り気味で底部へすぼみ平底となる。口縁内面には，押型文は施文されない。内面の整形は，ナデ状のていねいな仕上げがみられる。太粒の楕円押型



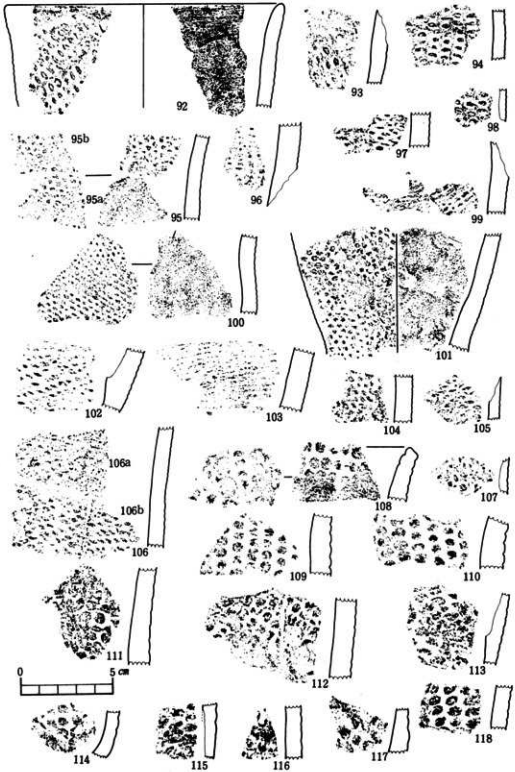
第34図　第７類土器（Ⅰ）　（縮尺＝１／２）

第11表　第７類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
86	H 4	表		口縁近く	壁厚 0.9～1.2	口縁近くの外反部分器壁が厚い	ていねいな山形押型文山間 1.0cm	長石・雲母	良	黄褐色	
87	B 5	Ⅲ		胴　部	壁厚 0.7		細か立山形押型文山間 0.4cm	長石・石英	良	黄褐色	
88	F 8	Ⅳ	219 35	胴　部	壁厚 0.9	器壁が厚く底部平底状の押型文土器	施文は、荒いが、刻目の深い山形押型文土器山間 1.0cm	長石・石英	良	茶褐色	同一個体
89	F 5	Ⅳ	216.565	胴　部	壁厚 1.2			長石・石英	良	茶褐色	
90	G 5	Ⅳ	216.69	胴　部	壁厚 1.0			長石・石英	良	茶褐色	
91	G 5	Ⅳ	216.84	底部近く	壁厚 1.0			長石・石英	良	茶褐色	
92	B 3	Ⅳ	215.67	口縁	口径 15.0 壁厚 0.8	口縁部は若干外反して口唇部は丸味をもって終る胴部は若干張り気味底部へすぼみ平底となる	棚粒（0.3cm×0.5cm）の楕円押型文 口縁内面は、施文はみられない。 内面は、ていねいなナデ状の仕上げ。	長石・石英	良	茶褐色	
93	D 6	Ⅳ	217.14	胴　部	壁厚 0.8			長石・石英	良	茶褐色	
94	B 3	Ⅳ	215.66	胴　部	壁厚 0.7			長石・石英	良	茶褐色	
95	C 5	Ⅳ	216.47	胴　部	壁厚 0.7			長石・石英	良	黄褐色	
	C 5	Ⅳ	216.45								
96	D 5	Ⅳ	216.165	胴　部	壁厚 1.2			長　石	良	黄褐色	
97	F 5	Ⅳ	216.38	胴　部	壁厚 1.0			長　石	良	灰褐色	
98	B 5	Ⅳ	216.07	胴　部				長　石	良	茶褐色	
99	E 5	Ⅳ	216.26	胴　部	壁厚 0.9			長石・石英	良	茶褐色	
100	B 1	Ⅳ	213.755	胴　部	壁厚 0.9			長石・石英	良	茶褐色	
101	C 4	Ⅳ	215.53	胴部（底）	壁厚 0.9			長石・石英	良	黄褐色	
102	E 5	Ⅳ	216.15	底　部	壁厚 1.1			長石・石英	良	黄褐色	
103	D 5	Ⅳ	216.35	胴　部	壁厚 1.1			長石・石英	良	茶褐色	
104	C 4	Ⅳ	215.335	胴　部	壁厚 0.9			長石・石英	良	茶褐色	
105	F 9	Ⅳ	211.07	胴　部	壁厚 0.6			長石・石英	良	茶褐色	
106	C 9	Ⅳ	221.52	胴　部	壁厚 0.7			長石・石英	良	黄褐色	
	C 10	Ⅳ	221.81								
107	D 5	Ⅳ	216.77	胴　部				長石・石英	良	黄褐色	
108	F 10	Ⅳ	212.01	口　縁	壁厚 1.0	口縁部は外反し口唇部は平坦面をつくる。	太粒（0.6cm×0.9cm）の楕円押型文 口縁内面にも楕円文を施文する。 内面は、ていねいなナデ状の仕上げ。	長石・石英	良	灰褐色	同一個体
109	F 8	Ⅳ	219.47	胴　部	壁厚 1.1			長石・石英	良	灰褐色	
110	F 8	Ⅳ	218.98	胴　部	壁厚 1.2			長石・石英	良	灰褐色	
111	G 6	表		胴　部	壁厚 1.0			長石・石英	良	灰褐色	
112	F 10	Ⅳ	212.26	胴　部	壁厚 1.1			長石・石英	良	灰褐色	
113	F 9	Ⅳ	212.03	胴　部	壁厚 0.8			長石・石英	良	灰褐色	
114	F 9	Ⅳ	211.61	胴　部	壁厚 0.7			長石・石英	良	灰褐色	
115	F 9	攪		胴　部	壁厚 0.7			長石・石英	良	灰褐色	
116	E 9	Ⅳ	221.6	胴　部	壁厚 0.8			長石・石英	良	灰褐色	
117	F 9	Ⅳ	221.43	胴　部	壁厚 0.8			長石・石英	良	灰褐色	
118	F 8	Ⅳ	219.47	胴　部	壁厚 0.8			長石・石英	良	灰褐色	



第35図　第７類土器分布図（縮尺＝１／500）



第36図　第7類土器（Ⅱ）（縮尺－$\frac{1}{3}$）

文（ 108～ 118）は，口縁部と胴部の細片の出土であり全形は不明である。口縁部（ 108）は若干外反し，口唇部に平担面を残す。器外面には，0.6cm× 0.9cm程の太形の楕円文が施文されている。口縁内面にも同じ楕円文が施文されている。

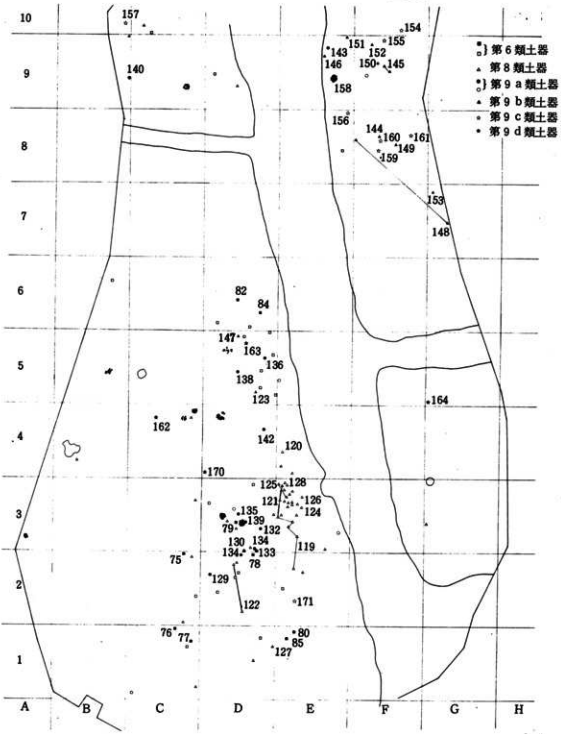
g．第８類土器　（第12表　第38図－ 119～ 128）

【分布】　C・D－9・10区に若干出土する以外は，E－3区を中心に傾斜下のC・D－1・2区へ分布する。特に，E－3区には多量に出土し，ここで廃棄された状況で出土している。第９ａ類の撚糸文とは分布は重なるが，第９ｂ類の網目撚糸文や第９ｃ類の変形撚糸文とは，分布を異にする。

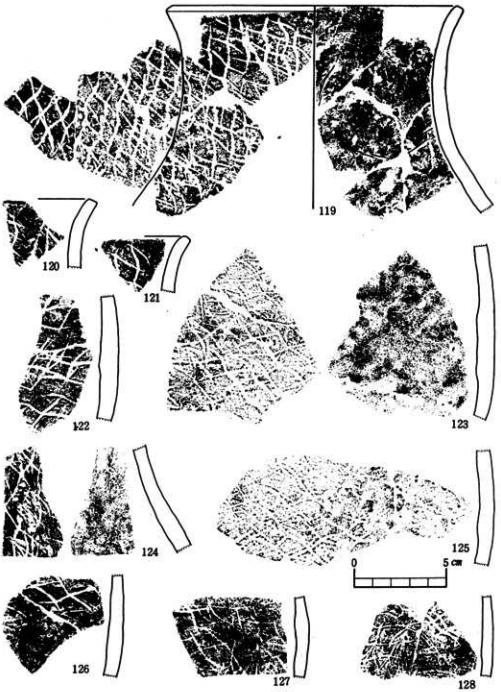
【土器の特徴】　第９ｂ類の網目撚糸文土器と施文方法は同じであり，他に，第９ａ類や第９ｃ類など撚糸文系の土器はみられるが，第６類土器と同様，著しく器形が異るため区分することにした。胴部が球状に張り，頸部がしまり，口縁部が外反する。いわゆる壺形を呈する器形である。底部は不明で，全形は知り得ないが`これまで類例のない形態である。本例は，一個体分の破片であり，特種な土器とも考えられるが，今後，資料が増加することも考えられるため，あえて類別した。 119は，口縁部であり，器形を知り得る破片である。口径は，16cmを測る。頸部はしまり，口縁部で外反し，口唇部は平担面をもつ。頸部内面は，凹凸がみられ頸部をすぼめた状況が観察できる。器壁は，0.7cm程の均整のとれた厚さである。他は，胴部破片であるが，球状を呈する断面をもつ。器外面は，口縁部から胴部まで（胴部以下は不明）網目撚糸文が施文されているが，重複するところが多く，ていねいな施文とはいえない。口唇部及び内面は無文である。内外面の整形は，ナデ状の整形で良好に仕上げられている。

第12表　第８類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器　種	法　量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
119				口　縁	口径 16 壁厚　0.8	口縁部が直状の最短頸部がつぼみ口縁が外反する。胴部は球状に張る。内外面ともナデ状のていねいな仕上げ	器外面の口縁部から胴部にかけて網目撚糸文	長石・雲母	良	黄褐色	同一個体
120	E 3	Ⅳ		口　縁	壁厚　0.7			長石・雲母	良	黄褐色	
121	C 1	Ⅳ	215.165	口　縁	壁厚　0.7			長石・雲母	良	黄褐色	
122	D 2 D 2	Ⅳ Ⅲ上	215.155 214.58	胴　部	壁厚 0.9～ 1.0			長石・雲母	良	黄褐色	
123	D 5	Ⅳ	216.245	胴　部	壁厚 0.8～ 1.0			長石・雲母	良	黄褐色	
124	E 3	Ⅳ	215.30	胴　部	壁厚　0.8			長石・雲母	良	黄褐色	
125	E E 3	Ⅳ Ⅳ	215.50	胴　部	壁厚 0.8～ 1.0			長石・雲母	良	黄褐色	
126	E 3 E 3	Ⅳ Ⅳ	215.44 215.30	胴　部	壁厚　0.8			長石・雲母	良	黄褐色	
127	D 1	Ⅳ	213.425	胴　部	壁厚 0.7～ 0.8			長石・雲母	良	黄褐色	
128	E 3	Ⅳ		胴　部	壁厚　0.6			長石・雲母	良	黄褐色	



第37図　第６類・第８類・第９ａ～ｄ類土器分布図　（縮尺＝１／500）



第38図 第 8 類 土 器 (縮尺＝1 / 2)

h．第９類土器　（第39～67図－ 129～ 400）

出土々器の中に，文様はそれぞれ異なるが，器形上の形態が非常に酷似する土器が多量にみられた。その中には，たとえば，第９ｊ類のように主文様以外の文様に，燃糸文（第９ａ類）や山形押型文（第９ｅ類）などを使用した近縁関係を示すものも存在した。このような結果から，それぞれを独立して扱わず，第９類の中に抱括してａ～ｍに細分する方法をとった。整理をおこなって最も問題となったものは，無文土器と底部の処理であった。これまで説明した貝殻文系などの土器は，その無文部分の破片にも形態上の特徴が観察され類別可能であったが，第９類に属する無文土器は，非常に類似してａ～ｍ類に細分することは不可能であった。底部も同様であった。裏がえせば，それほど形態上類似性があるということになるのかもしれない。

このような理由で第９類に抱括し，さらに，それぞれの特徴をａ～ｍ類に細別した。非常に薄手の整形で，器形は，胴部が「く」字に屈曲して口縁部が大きく外反する形態である。

①第９ａ類土器　（第13表　第39図－ 129～ 143）

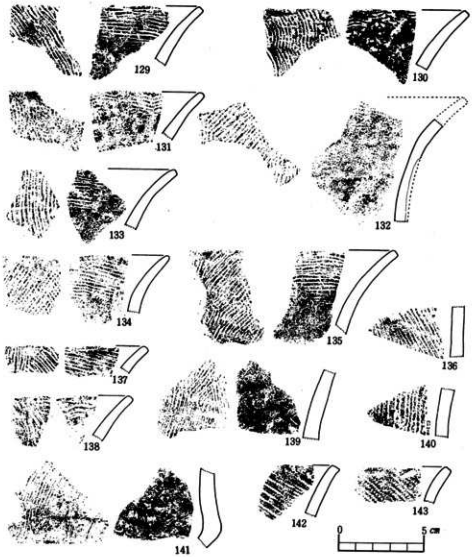
【分布】　129～ 139は，文様の形態から同一個体と考えられ，140・142・143は，これとは別個体のようである。そのためか，140・143は，Ｂ－９区，Ｅ－９区と大きく飛び離れて分布している。129～ 139は，Ｄ－２・３区を中心にＤ－５区までの比較的狭い範囲で分布し

第13表　第９ａ類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
129	Ｄ２	Ⅳ	214.875	口縁	壁厚 0.7	口縁部が大きく外反胴部は「く」の字に屈曲口唇は平坦内外面ともナデ状のていねいな整形	外面に燃糸文を縦位斜位に全面に施す。口縁内面には横位の燃糸文を施文口唇部平坦面にも燃糸文を施文するものもある	長石・石英	良	暗褐色	同一個体
130	Ｄ３	Ⅳ	214.93	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	黄褐色	器外面にスス損あり
131	Ｅ２	Ⅲ		口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	黄褐色	
132	Ｃ３	Ⅳ	215.12	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗褐色	
133	Ｃ３	Ⅳ	214.925	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	暗褐色	
134	Ｄ２	Ⅳ	214.975	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	暗褐色	
135	Ｄ３	Ⅳ	215.37	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗褐色	
136	Ｄ５	Ⅳ	216.83	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗褐色	
137	Ｄ２	Ⅳ	214.945	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	暗褐色	
138	Ｄ５	Ⅳ	216.635	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗褐色	
139	Ｃ３	Ⅳ	215.04	胴部	壁厚 0.7～ 0.8			長石・石英	良	暗褐色	
140	９Ｂ	Ⅲ	221.235	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗褐色	
141	Ｄ３	Ⅲ中	103.7	胴部	壁厚 0.9～ 1.0			長石・石英	良	暗褐色	
142	Ｄ４	Ⅲ上	144.88	口縁	壁厚 0.6	口縁部外反口唇部平坦	器外面に燃糸文上と原体が違る	長石・石英	良	暗褐色	同一個体
143	Ｅ９	Ⅳ	221.76	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	暗褐色	

ている。 142は，文様を観察すると 143と同一個体と考えられるが，50m 余のかなり離れた距離をもつ。

【土器の特徴】 口縁部は，大きく外反して口唇部は平担面をつくる。 134のように，口唇部が丸味をもって終るものもあるが，これは，局部的な状態であろう。器面は，内外面ともナデ状のていねいな整形がおこなわれ，器壁は薄い。胴部は， 141のように若干厚みを増し「く」字に屈曲する。器外面には，精巧な撚糸文が従位・斜位に施文されるが，重複する部分（ 134）や空間が生じる部分（ 141）もみられる。口縁内面にも横位に撚糸文が施文されている。 142・ 143は，撚糸文の原体が異なるもので施文されており，別個体と考えられる。



第39図 第 9 a 類 土 器 （縮尺＝1 / 2）

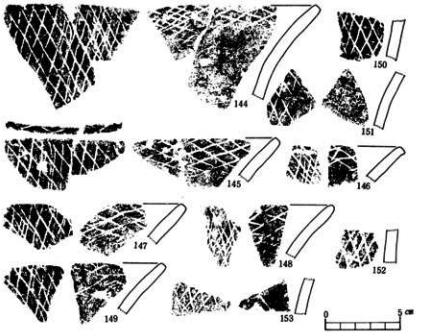
②第９ｂ類土器　（第14表　第40図－ 144～ 153）

【分布】　出土分布は，Ｅ・Ｆ－８・９区にほぼ集中する。ただ，147の１点が約40m離れたＤ－５区に出土している。第９ｂ類は，一個体に属するが，土器破棄後の土器の移動を知る好資料である。

【土器の特徴】　口縁部と胴部の破片のみであり全体の器形は知り得ないが，口縁部の形態から第９ａ類に類似することが考えられる。口縁部は，大きく外反して口唇部は平坦面をつくる。

第14表　第９ｂ類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器種	法量cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
144	E 8	Ⅲ		口縁	壁厚 0.8	口縁部外反 口唇部は平坦面	器外面に網目撚糸文を全面に施文	長石・石英	良	暗黒色	同一個体スス痕付着
	F 8	Ⅳ	219.87								
145	F 9	Ⅳ	211.365	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗黒色	
	F 9	Ⅳ	211.46								
146	E 9	Ⅳ	221.52	口縁	壁厚 0.7	内外垂ともナデ状のていねいな整形，器壁は均一	口唇部にも網目撚糸文を施文	長石・石英	良	暗黒色	
147	D 5	Ⅳ下	217.15	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	暗黒色	
148	G 7	Ⅳ		口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗黒色	
149	F 8	Ⅲ		口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗黒色	
150	F 9	Ⅳ	219.81	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗黒色	
151	E 9	Ⅳ	222.0	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗黒色	
152	F 9	Ⅳ	220.29	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	暗黒色	
153	G 6	Ⅳ	217.76	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗黒色	



第40図　第９ｂ類土器（縮尺＝１／２）

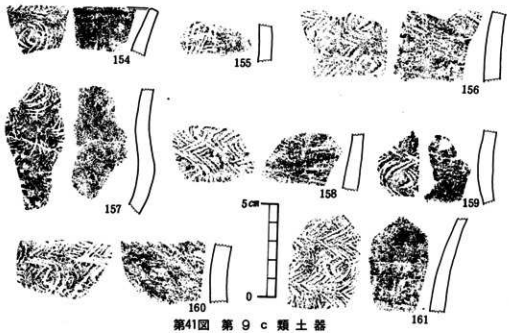
口唇部の平担面は，局部的には 146のようにはみ出したり， 148のように丸味をもって終るところもある。器内外面ともナデ状のていねいな整形がおこなわれ，器壁も 0.7cm前後の薄い作りである。器外面は，網目の撚糸文が施される。さらに，口唇部平担面と口縁内面の口唇部沿いにも同じ網目撚糸文が施されている。

③第９ｃ類土器　（第15表　第41図－ 154～ 161）

【分布】　同一個体に属する破片であり，少量で分布範囲は狭い。Ｅ・Ｆ－８・９区に集中するが， 157だけは離れてＢ－10区から出土している。尚， 158は，No10集石内から出土した。

第15表　第９ｃ類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
154	F 10	Ⅳ	212.075	口縁	壁厚 0.7	口縁部外反 胴部はゆるやかな「く」の字	口縁部から胴部に変形撚糸文を施文	石英・長石	良	灰褐色	同一個体(?)
155	F 9	Ⅳ	211.70	胴部	壁厚 0.7	(157)	口唇部平担面は無文	石英・長石	良	灰褐色	
156	E 8	Ⅲ	220.93	胴部	壁厚 0.8	口唇部は平担面		石英・長石	良	灰褐色	
157	B－10	Ⅳ	219.64	胴部	壁厚 0.8			石英・長石	良	灰褐色	
158	E 9	3号集石	213.68	胴部	壁厚 0.8			石英・長石	良	灰褐色	
159	F 8	Ⅲ	220.14	胴部	壁厚 0.7～ 0.8			石英・長石	良	灰褐色	
160	F 8	Ⅲ	220.24	胴部	壁厚 0.9			石英・長石	良	灰褐色	
161	E－8 F－9	Ⅳ	219.785	胴部	壁厚 0.5～ 0.8			石英・長石	良	灰褐色	



第41図　第９ｃ類土器

【土器の特徴】　口縁部が1点，，他は胴部片である。口縁部は，若干外反し口唇部は平担面をつくる。胴部は，ゆるやかな「く」字を描き屈曲する。文様は，器外面に変形撚糸文を施文する。 154と 157によると，口縁外面から胴部上半に施文されている。

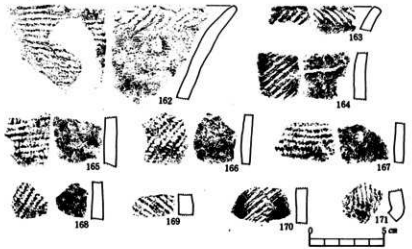
④第9d類土器　（第16表　第42図－ 162～ 171）

【分布】　C～G－2～8区内に非常に拡散した分布がみられる。わずか10片と少量の出土ではあるが，10m四方のグリッド内に2点以上出土している区はみられない。

【土器の特徴】　口縁部は，大きく外反する。口唇部は， 163は平担面を残すが， 162は丸味をもって終る。 171のように，「く」字に屈曲がみられる胴部が1片出土している。器内外面

第16表　第9d類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
162	C 4	Ⅲ上	156.0	口縁	壁厚 0.8	口縁部外反 (162) 胴部「く」の字に屈曲 (171) 内外面ともナデ状のていねい整形	縄文施文	長石・石英	良	黄褐色	
163	D 5	Ⅳ	216.885	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗黒色	
164	G 5	Ⅳ	216.66	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	灰黄色	
165	D 3	Ⅲ		胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	灰黄色	
166	G 6	Ⅳ	289.11	胴部	壁厚 0.5～0.7			長石・石英	良	黄褐色	
167	D 2	Ⅲ上	131.8	胴部	壁厚 0.6			長石・石英	良	黄褐色	
168	F 8	竪穴1		胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	茶褐色	
169	F 6	竪穴2		胴部	壁厚 1.0			長石・石英	良	黄褐色	
170	D 4	Ⅳ	215.585	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗黒色	
171	E 2	Ⅲ上	213.50	胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	暗黒色	



第42図　第9d類土器　（縮尺＝1／2）

ともナデ状のていねいな整形がみられ，焼成は良好である。文様は，太い縄目の荒い縄文が施文されている。器外面は口縁部と胴部に施文され，口縁内面の口唇部沿いにも施される。

⑤第９ｅ類土器　（第17・18表　第44～47図－ 172～ 221）

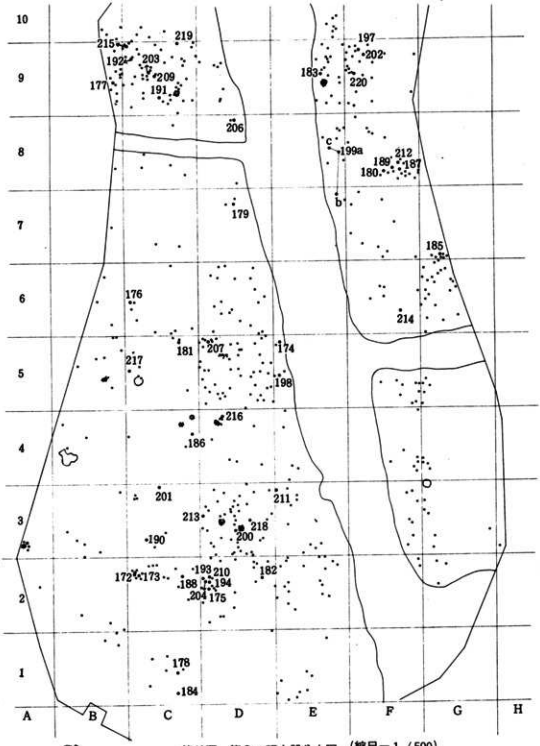
【分布】　第９ｅ類土器は，本遺跡の類別土器中では，最も多量に出土している。B区・C区列のように分布が若干薄い部分がみられるが，他はほとんど密集して出土している。尚，Ｇ－４・３区やＦ－７・８・９区にブロック状に空白部分が存在するが，この部分は中世山城構築において包含層が削平された部分である。特に分布の集中する部分は，Ｃ－９区のNo９集石からＥ－９区のNo10集石付近にかけてやＤ－３区のNo２・No３集石付近にかけてみられる。他にＤ－５区やＧ－６区付近にも集中する。遺構との関係は，No１（Ａ－３区），No２・No３（Ｄ－３区），No８（Ｄ－５区），No９（Ｃ－９区），No10（Ｅ－９区）集石周辺に密に分布し，その周係が注目される。尚，No１（Ｂ－４区），No２（Ｃ－５区）炉址などの近辺からは出土は少ない。

第17表　第９ｅ類土器一覧表（Ⅰ）

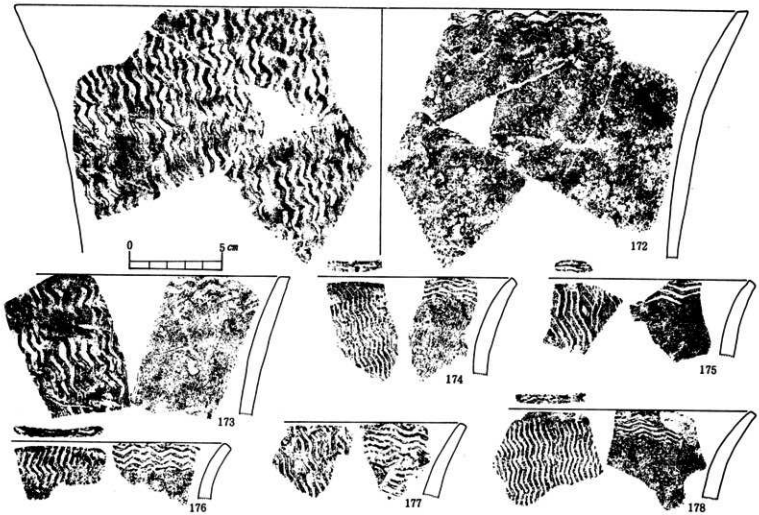
No	区	層	レベル m	器種	法量cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
172 a	Ｃ２	Ⅳ	214.86	口縁	壁厚 0.9	口縁部が大きく外反する。	間延びをした荒い山形文	長石・石英	良	茶褐色	
b	Ｃ２	Ⅳ	214.80		口径 39.6	口唇部は，水平に平坦面を作る。					
173	Ｃ２	Ⅳ	214.865	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	茶褐色	
174	Ｅ５	Ⅳ	217.075	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	黒褐色	
175	Ｄ２	Ⅳ	214.645	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	黒褐色	
176	Ｃ６	Ⅳ	216.94	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	黒褐色	
177	Ｂ９	Ⅳ	220.44	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	赤褐色	
178	Ｃ１	Ⅳ	213.05	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	黄灰色	
179	Ｄ７	Ⅳ	218.53	口縁	壁厚 0.7	口縁部は，大きく外反する。口唇部は平坦面をもつ整面の調整はていねいに仕上げられる。	口唇部および口縁部内面に同一施文がみられる。	長石・石英	良	黒褐色	スス付着
180	８Ｆ	Ⅱ	219.83	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	黄灰色	
181	Ｃ５	Ⅳ	216.925	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	黒褐色	
182	Ｄ２	Ⅳ	214.785	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	黄灰色	
183	Ｅ９	Ⅳ	221.22	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	茶褐色	
184	Ｃ２	Ⅲ	214.58	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	黄褐色	
185	Ｇ７	Ⅳ	217.66	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	黒褐色	
186	Ｃ４	Ⅲ		口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	黄灰色	
187	Ｆ８	Ⅳ	219.01	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	黄褐色	
188	Ｃ１	Ⅳ	213.49	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	黄灰色	スス付着

第18表　第９ｅ類土器一覧表（Ⅱ）

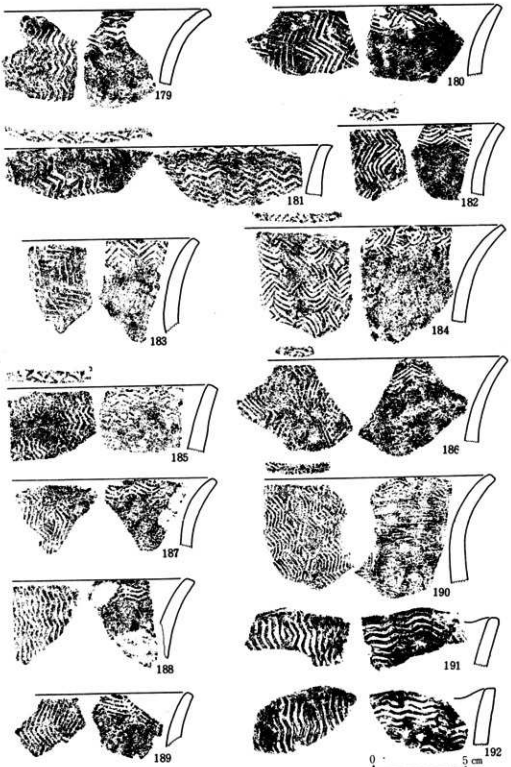
No	区	層	レベル m	器　種	法　量	形態の特徴	文様の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
189	F 8	Ⅳ	219.355	口　縁	壁厚　0.6	口縁部外反		長石・石英	良	黄褐色	
190	C 3	Ⅳ		口　縁	壁厚　0.8			長石・石英	良	黄褐色	
191	C 9	Ⅳ	220.28	口　縁	壁厚　0.7	口縁部は波状を呈る。		長石・石英	良	黄褐色	
192	C10	Ⅳ	320.835	口　縁	壁厚　0.7			長石・石英	良	黄褐色	
193	D 2	Ⅳ	214.73	口　縁	壁厚　0.7	口縁部外反	口縁内面と口唇部に同心円文が施文される。	長石・石英	良	暗褐色	ｽｽ付着第９ｅ類に関係
194	D 2	Ⅳ	214.785	口　縁	壁厚　0.6			長石・石英	良	暗褐色	
195	C 3	Ⅳ		口　縁	壁厚　0.5	口縁部外反		長石石英雲母	良	茶褐色	
196	F 6	表		口　縁	壁厚　0.7			長石・石英	良	褐　色	
197	F 9	Ⅳ	211.75	口　縁	壁厚　0.6			長石・石英	良	茶褐色	
198	E 5	Ⅳ	216.385	胴　部	壁厚　0.7			長石石英雲母	良	茶褐色	
199	E 8	Ⅲ	219.69	口　縁	壁厚　0.6			長石・石英	良	灰褐色	
	F 7	Ⅲ	219.52		口径　26.6				良		
	E 8	Ⅳ	219.755						良		
200	D 3	Ⅳ	215.245	胴　部	壁厚　0.9		大型のきれいな山形文	長石・石英	良	赤褐色	
201	C 3	Ⅲ	215.56	胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	赤褐色	
202	F 9	Ⅳ	211.94	胴　部	胴径　10.6	胴部は、ゆるやかに膨曲するものと、胴部外面に陵をもつように屈折するものがある。		長石・石英	良	黄灰色	
203	C 9	Ⅳ	220.74	胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	茶褐色	
204	D 2	Ⅳ	214.81	胴　部	壁厚　0.7			長石・石英	良	暗褐色	
205	E 6	表		胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	暗褐色	
207	D 8	Ⅳ	220.20	胴　部	胴径　19.8 壁厚　0.6~1.0			長石・石英	良	黄灰色	
208	D 5	Ⅳ	217.11	胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	黄褐色	
209	A 3	Ⅳ	214.73	胴　部	壁厚 0.6~0.9			長石・石英	良	茶褐色	
210	C 9	Ⅳ	220.925	胴　部	壁厚　0.7			長石・石英	良	灰黄色	
211	D 2	Ⅳ	214.65	胴　部	壁厚　0.7			長石・石英	良	灰黄色	
212	E 3	Ⅳ	215.24	胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	暗褐色	
213	F 8	Ⅳ	219.43	胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	茶褐色	
214	D 3	Ⅲ		胴　部	壁厚　0.7			長石・石英	良	褐　色	
215	F 6	Ⅳ	217.54	胴　部	壁厚　0.7			長石・石英	良	黄灰色	
216	C 9	Ⅳ	221.14	胴　部	壁厚　0.8			長石石英雲母	良	黄灰色	
217	D 4	Ⅳ	215.92	胴　部	壁厚　0.7			長石・石英	良	暗褐色	
218	C 5	Ⅳ	216.40	胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	黄褐色	
218	D 3	Ⅳ	215.015	胴　部	壁厚 0.5~0.9			長石石英雲母	良	茶褐色	
219	C 9	Ⅳ	221.315	胴　部	壁厚　0.7		屈曲部に円文が施文される。	長石・石英	良	赤褐色	
220	F 9	Ⅳ	211.07	胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	赤褐色	
221	E 5	表		底　部	壁厚　0.5 底径　10.5			長石・石英	良	赤褐色	



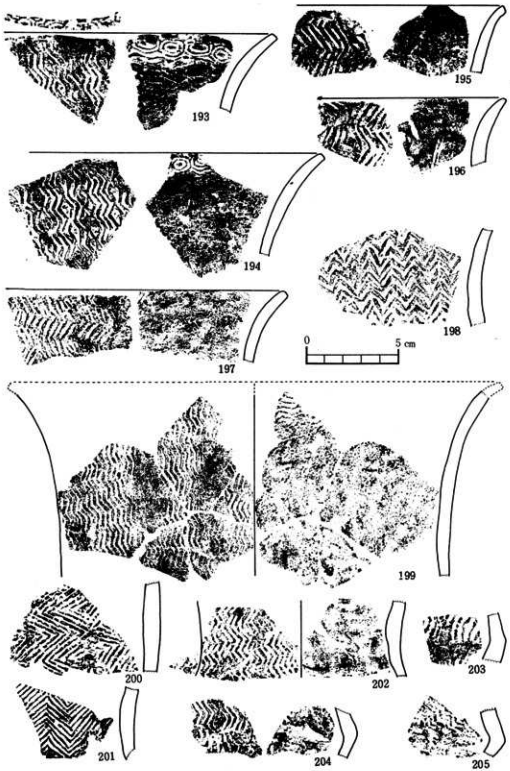
第43図　第９ｅ類土器分布図　(縮尺＝１／500)



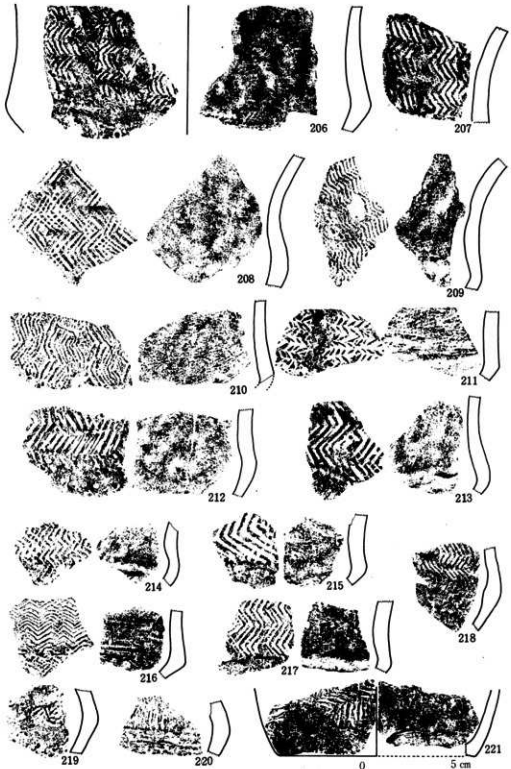
第44図　第９ｅ類土器（Ⅰ）（縮尺－$\frac{1}{3}$）



第45図　第９ｅ類土器（Ⅱ）（縮尺－$\frac{1}{3}$）



第46図　第９e類土器（Ⅲ）（縮尺－$\frac{1}{4}$）



第47図　第９e類土器（Ⅳ）（縮尺－$\frac{1}{3}$）

【土器の特徴】　山形文の押型文土器であるが，従来の山形押型文（第７ａ類土器）とは形態を著しく異にするところから，第９ｅ類と類別して説明することにした。口縁部が大きく外反し，胴部が「く」の字に屈曲して底部が上げ底状の平底を呈するものを基調とする。口縁部は，弓状に大きく外反するが，器形の小形のものほど外反が強い（ 179・ 192）。 173は直線的に外反しているようであるが， 172と同一個体であり口径39.6cmと大形の器形のため，さほど外反はめだたない。口唇部は， 187のように丸味をもって終るものもあるが，原則として平担面をもつものが多い。また，口唇部平担面は，器壁に直角につくる場合がほとんどである（ 174・ 175など）が， 172のように口縁に水平に作り，口唇端部は鋭角をなすものもある。さらに， 191・ 192のように口唇部が小さな波状を作るものもある。

胴部は， 205・ 206・ 216のように「く」の字に屈曲して外器面に陵をもつものや， 208・ 212のようにゆるやかに「く」の字を描くものもある。口縁部・胴部とも内外面は，ナデ状のていねいな整形がおこなわれている。器壁は，一般に薄く屈曲部で厚さを増す。これは，この屈曲部が，弓状に外反する口縁部と胴部下端との接合部になることにもよる。

底部は，押型文の施文されたものが１片出土したが，上げ底気味の平底を呈している。

第９ｅ類は，第９類中，最も多量に出土しているため個体数が多く，施文上の相違点が多い。 172のように浅く太い線の山形文の彫刻をもつ原体で間延びをした比較的荒い山形押型文が施文されるものや， 200・ 201のように大形の山形文が鋭利に施文されるものもある。一般に，山形文が間延びして原体の彫刻が浅いものが多い。山形文の施文は，器外面ではほとんどが口縁から胴部へ従位に施文されている。また， 199のように押型文の施文が間隔をもち無文帯を作るものもあった。さらに，押型文は，口縁部内面にも施文される。この場合，口唇部に沿って横位に施文される。また， 193・ 194のように，第９ｇ類土器に使用される同心円押型文が施文された珍しい例もある。 195のように無文のままで放置されるものも存在する。さらに，口唇部平担面にも押型文が廻転押捺されているが，これは，口縁内面の押型文と同じものが施文されるようである。つまり，口縁内面に山形文が施文されるものは，口唇部にも山形文の原体が使用され， 193のように口縁内面に同心円文が施されるものは，口唇部にも同心円文が施文されている。

⑥第９ｆ類土器　（第19表　第49・50図－ 222～ 240）

【分布】　第９ｆ類は，菱形押型文土器であるが，山形押型文（第９ｅ類）土器と同様にほぼ全域に分布を示している。その中で，８・９区列とＤ・Ｅ－２～４区に主な密集分布をもつ。出土土器のうち，８例の接合資料が得られたが，そのうち 223は，80m に近い接合距離が確認された。包含層内の土器の移動を考える良好な資料である。

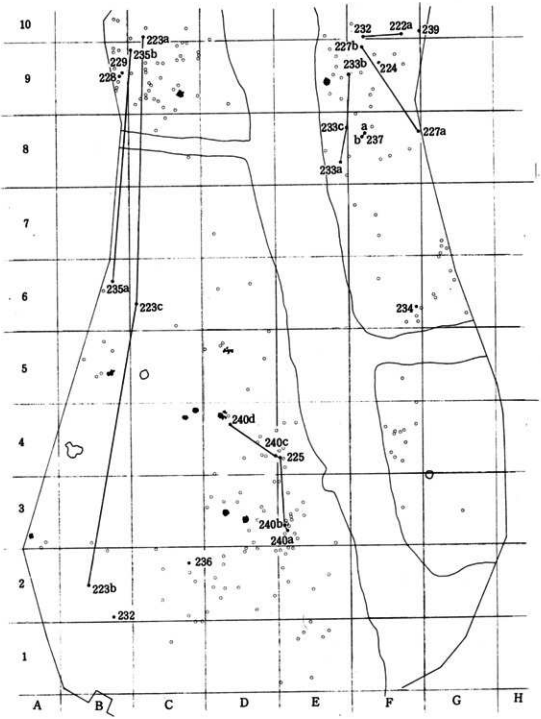
【土器の特徴】　第９ｆ類土器は，菱形文の押型文土器である。菱形文は，彫刻原体の異なるものが６種類（６個体）確認された。そのうち口縁から胴部の器形が判明するものは， 233～

239の個体である。これによると，胴部は「く」の字に屈曲して口縁部は大きく外反する。屈曲部の「く」の字部分は，陵はもたないが強い屈曲がみられる。 233の場合，波状口縁をつくり，口唇部は丸味をもった平担面をもつ。他の菱型文の場合も同様な器形を呈すると考えられるが，口縁部は平縁である。 226や 240に胴部屈曲の兆候が観察される。

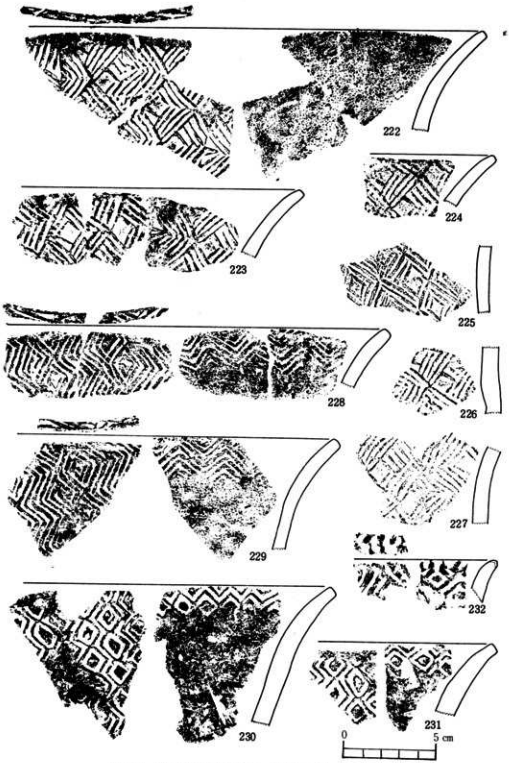
菱形文の原体文様は，個体によってそれぞれ異る。 222の場合は，菱形を作る刻目直線が連続しない。他のものは，山形文状に刻目をつけ，その谷部に菱形文を作る。そのため，菱形文の山形文は連続して２重の菱形を作る形となっている。これらの菱形文は，口縁外面から胴部屈曲部まで従位に施文されており，屈曲部下半は施文されないようである。 228・ 230・ 232は，口縁内面にも菱形文が横位に施文されている。また， 228は，口唇部平担面にも施文されている。なお， 232は，口唇部に交互の刻目が施文されている。尚， 237には円文がある。

第19表　第９ｆ類土器一覧表

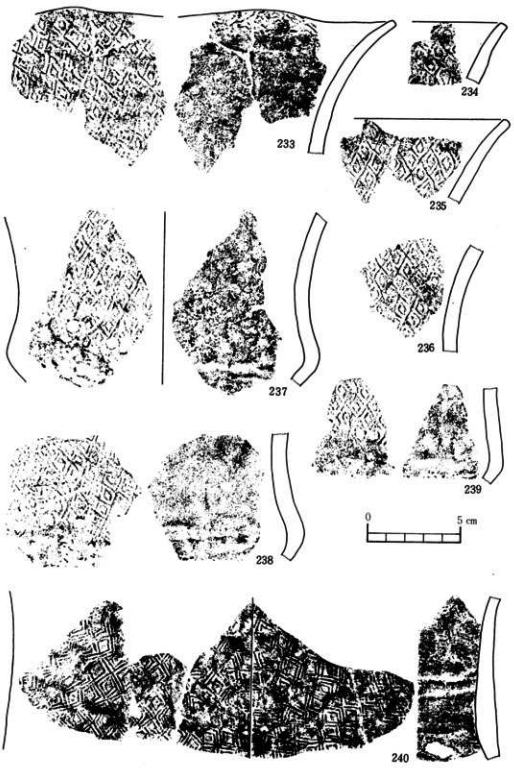
No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
222 a	F10	Ⅳ	211.91	口縁	壁厚 0.8	口縁部は大きく外反し，口唇部に平担面をつくる。	4本単位の沈線を斜交させて，文様の中心に菱形文を作る。口唇部にも同一施文がみられる。	長石・石英	良	茶褐色	同一個体
b	F10	Ⅳ	212.17								
223 a	C10	Ⅳ	221.52	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	茶褐色	
b	B 2	Ⅲ	214.855								
c	C 6	Ⅳ	216.985								
224	F 9	Ⅳ	220.02	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	茶褐色	
225	E 4	Ⅳ	215.88	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	茶褐色	228と同一個体
226	D 4	Ⅲ	123.5	胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	茶褐色	222と同一個体
227 a	F 8	Ⅳ	219.54	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	茶褐色	
b	F 9	Ⅳ	220.37								
228 a	B 9	Ⅳ	220.475	口縁	壁厚 0.7		山形文を左右対象に描き，菱形文をつくる。口唇部・口縁内部にも同施文	長石・石英	良	暗褐色	
b	B 9	Ⅳ	220.56								
229	B 9	Ⅳ	220.475	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗褐色	
230	F10	堀		口縁	壁厚 1.0	口縁は外反し，口唇部は平担面をつくるが，器壁が厚く，本来の押型文がもしれない。	口縁内面にも施文	長石・石英	良	茶褐色	同一個体
231	E 8	堀		口縁	壁厚 1.0			長石・石英	良	茶褐色	
232	B 2	Ⅲ	214.38	口縁	壁厚 0.7		口唇部に刻目がある。	長石・石英	良	赤褐色	
233 a	E 8	Ⅲ	220.18	口縁	壁厚 0.7	胴部で屈曲し，外弯気味に内傾して，口縁部で大きく外反する。口縁部は波状を呈する。内外面ともヘラ磨きのていねいな仕上げ。	口縁部内面にも同一施文。本資料では，屈曲部下半には施文はみられない。	長石・石英	良	赤褐色	
b	F 9	Ⅳ	221.405								
c	E 8	Ⅳ	219.94								
234	6 F	Ⅳ	217.55	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	赤褐色	
235 a	B 6	Ⅳ	217.35	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	赤褐色	
b	C 9	Ⅳ	221.19								
236	C 2	Ⅳ	214.905	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	赤褐色	
237 a	F 8	Ⅳ	219.81	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	赤褐色	
b	F 8	Ⅳ	219.825		胴径 16.9						
238	E 4	堀		胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	赤褐色	
239	F10	Ⅳ	211.94	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	赤褐色	
240 a	E 3	Ⅳ		胴部	壁厚 0.6～ 1.2			長石・石英	良	赤 赤褐色	
b	E 3	Ⅳ									
c	E 4	Ⅳ	215.795		胴径 27			雲母			
d	D 3	Ⅳ	216.035								



第48図　第９ｆ類土器分布図　（縮尺＝１／500）



第49図　第９ｆ類土器（Ⅰ）（縮尺－⅓）



第50図　第９ｆ類土器（Ⅱ）（縮尺－十）

⑦第９ｇ類土器　（第20表　第52図－ 241～ 257）

第９ｇ類土器は，同心円文の押型文土器であるが，次の第９ｈ類の同心楕円文土器とは押型文の形が違うだけで同じ形態に属するものであり近縁関係をもつが，整理上区分した。

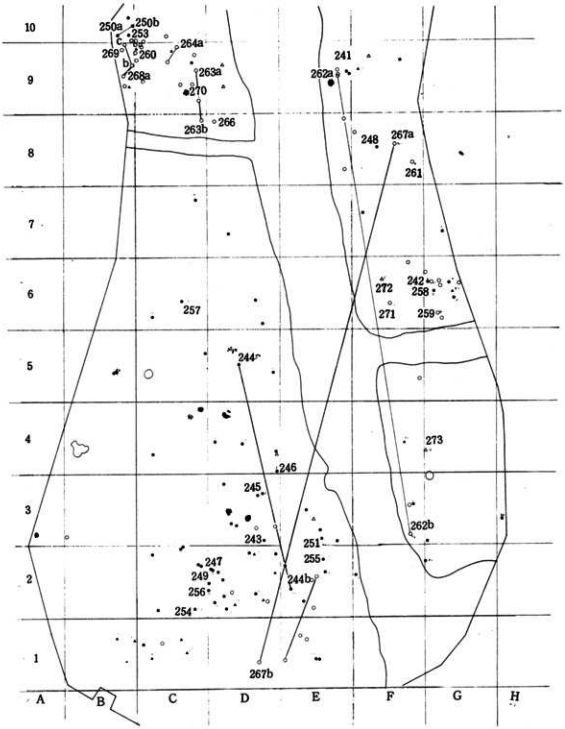
【分布】　第９ｇ類土器は，個体数が少ない割には遺跡全体に分布している傾向がみられる。その中では，Ｄ・Ｅ－２・３区に比較的出土が多い。接合資料では，244が34m の接合距離をもつ。型態上同一個体と考えられる 241と 250は30m，244と 248は64m の接合距離を測り，同一個体の拡散が非常に広いことが確認された。

【土器の特徴】　口縁部が外反して胴部が「く」の字に屈曲する。胴部の「く」の字屈曲は，251や 254のように強く屈曲して陵をつくるものも存在する。屈曲部の上部は器壁が厚くなり，口唇部には平坦面をつくる。内外面ともナデ状のていねいな整形が施される。底部付近は，257が１点出土しているが，平底が想定される。第９ｅ類土器などに酷似する器形をもつ。

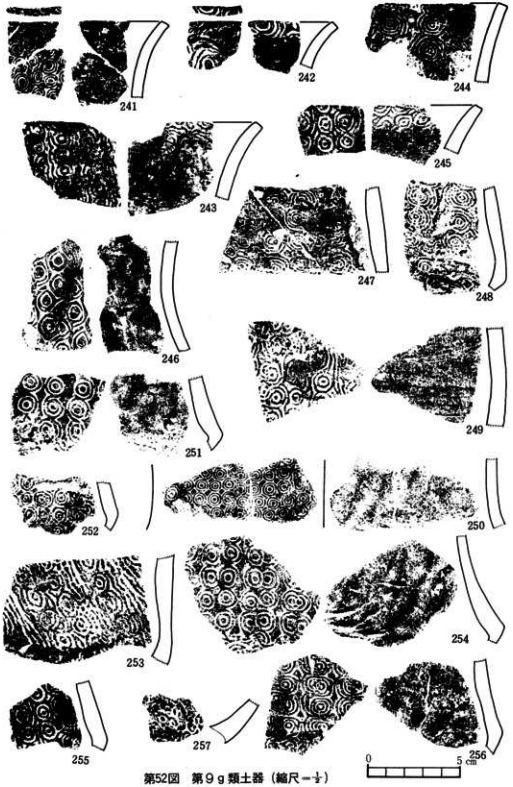
同心円文の原体は，原体棒の円周面に２～３重の同心円文を連続して彫刻したものであることが確認された。同心円文を観察すると６種類の原体のあることが確認された。それは，241の３重のもの（250同），242の４重のもの，243の２重のもの（253同），244の５重のも

第20表　第９ｇ類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
241 a	E 9	Ⅲ	221.40	口 縁	壁厚 0.6	口縁部は大きく外反し，口唇部に平坦面をつくる。内外面ともていねいなヘラ磨き仕上げ。	口縁内面，口唇部にも同一施文がみられる。	長石・石英	良	黄灰色	
b	E 9	Ⅳ	221.48								
242	G 6	Ⅳ	217.745	口 縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	黄褐色	
243	D 3	Ⅳ	214.95	口 縁	壁厚 0.7			長石・石英雲母	良	暗褐色	
244 a	D 5	Ⅳ	216.58	口 縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	黄褐色	
b	E 2	Ⅳ	213.86								
245	D 3	Ⅲ上	215.53	口 縁	壁厚 0.7			長石・石英	良	暗褐色	
246	D 4	Ⅳ	215.525	胴 部	壁厚 0.6	248や 256のようにゆるやかに屈曲するものもあるが，251や 254のように，胴部でするどく屈折するものがあり特徴的。	器面全体に同心円文を施文する	長石・石英雲母	良	暗褐色	
247	D 2	Ⅳ	214.795	胴 部	壁厚 0.8			長石・石英	良	黄灰色	
248	F 8	Ⅲ	220.20	胴 部	壁厚 0.7			長石・石英	良	黄灰色	
249	D 2	Ⅳ	214.795	胴 部	壁厚 0.8			長石・石英	良	黄灰色	
250 a	B10	Ⅲ	221.91	胴 部	壁厚 0.5			長石・石英	良	褐 色	
d	B10	Ⅳ	219.665		胴径 19.4						
251	E 3	Ⅳ		胴 部	壁厚 0.9			長石・石英	良	暗褐色	
252	E 2	Ⅳ	214.01	胴 部	壁厚 0.7			長石・石英	良	茶褐色	
253	B10	Ⅳ	219.60	胴 部	壁厚 0.6～ 0.9			長石・石英	良	灰黄色	
254	C 2	Ⅲ	214.525	胴 部	壁厚 0.5～ 1.0			長石・石英	良	灰黄色	
255	E 2	Ⅳ上		胴 部	壁厚 0.9			長石・石英	良	灰黄色	
256	D 2	Ⅳ	214.43	胴 部	壁厚 0.7			長石・石英	良	灰黄色	
257	C 6	Ⅳ	217.28	底 部	壁厚 1.0	底部に斜位に接合	底部近くまで，施文あり	長石・石英	良	茶褐色	



第51図　第9g・9h類土器分布図　(縮尺＝1／500)



第52図　第９ｇ類土器（縮尺－$\frac{1}{2}$）

の（ 247・ 248同），245の３重のもの（ 255同），251の３重のもの（ 254同）などである。同心円文を刻る場合，まず中心に点を刻り続いて円を刻っていくもの（ 241・ 242・ 245・ 251）と中心から円を刻るもの（ 244・ 243）があることが観察された。原体は， 254で確認されるが原体巾が 2.5cmを測り，原体長（原体棒の円周長）が 2.4cmを測る。

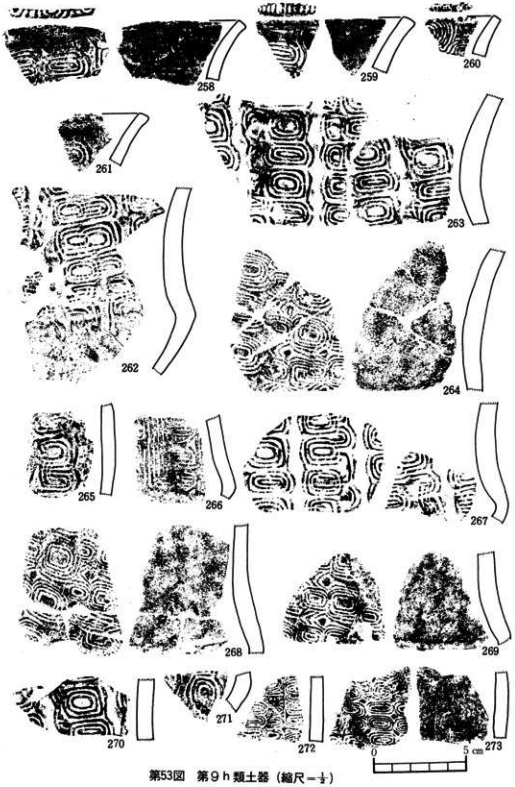
これらの同心円文は，口縁部から胴部屈曲部の外面に従位に施文される。屈曲部より下半は， 248・ 251は施文されないが， 254・ 255・ 256・ 257は施文される。口縁部内面と口唇部平担面にも施文される個体とされない個体がある。

⑥第９ｈ類土器　（第21表　第53図－ 258～ 273）

【分布】　第９ｈ類の同心楕円文押型文土器の分布は，第９ｇ類土器の同心円文土器と比較するとより限定された出土分布がみられ，平面的な拡散よりも線的な分布をもつようである。Ｅ－２区，Ｇ－６区，Ｅ－９区，Ｃ－９区付近を中心に分布する。これらの各分布ブロックは，接合資料が存在しつながりがあることが判明した。 262（Ｆ－９区）は，Ｆ－３区と接合して

第21表　第９ｈ類土器－覧表

No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
258	Ｇ６	Ⅳ	217.775	口縁	壁厚 0.6	口縁部は大きく外反する。内外面ともヘラ磨き状のていねいな整形	口縁部外面，口唇部に同心楕円文が施文される。	長石・石英雲母	良	茶褐色	
259	Ｇ６	Ⅳ	217.11	口縁	壁厚 0.7			長石・石英雲母	良	茶褐色	
260	Ｃ９	Ⅳ	221.24	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	良	茶褐色	
261	Ｆ８	Ⅳ	219.25	口縁	壁厚 0.6			長石・石英雲母	良	茶褐色	
262	a Ｆ３ b Ｅ９ c Ｅ９	Ⅳ Ⅳ Ⅳ	215.045 221.26 221.25	胴部	壁厚 0.6～1.1	262は，良く器形を残しているが，底部から内湾気味に外反して立上がる壁面は，胴部で屈曲し，外湾気味に内傾し，さらに外反して，口縁部へ続く。	263は，施文原体が確認される。原体巾 6cm，原体長 3.2cm 262，266をみる限り，屈曲部下半は，文様は施文されないようである。しかし，271は施文がみられる。	長石・石英雲母	良	茶褐色	
263	a Ｃ８ c Ｃ９	Ⅳ Ⅳ	220.19 220.86	胴部	壁厚 0.9～1.1			長石・石英雲母	良	茶褐色	
264	Ｃ９ Ｃ９ Ｃ９	Ⅳ Ⅲ Ⅳ	221.03 217.03 221.48	胴部	壁厚 0.8～1.0			長石・石英	良	茶褐色	
265	Ｅ２	Ⅲ上	216.31	胴部	壁厚 0.7			長石・石英雲母	良	茶褐色	
266	Ｄ８	Ⅳ	220.05	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	赤褐色	
267	a Ｆ８ b Ｄ１	Ⅳ Ⅳ	219.585 213.1	胴部	壁厚 0.6～1.1			長石・石英雲母	良	茶褐色	
268	Ｂ９ Ｂ９ Ｂ９	Ⅳ Ⅳ Ⅳ	219.24 214.94 219.32	胴部	壁厚 1.0			長石・石英	良	茶褐色	
269	Ｂ９	Ⅲ	221.70	胴部	壁厚 1.0			長石・石英	良	茶褐色	
270	Ｃ９	Ⅳ	220.70	胴部	壁厚 0.8			長石・石英雲母	良	茶褐色	
271	Ｆ６	Ⅳ	217.60	胴部	壁厚 0.8			長石・石英雲母	良	茶褐色	
272	Ｆ６	Ⅳ	218.015	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	赤褐色	
273	Ｇ４	Ⅳ	216.335	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	茶褐色	



第53図　第９ｈ類土器（縮尺－$\frac{1}{3}$）

64m の接合距離をもち，**267**（F－8区）は，さらに離れてD－1区と接合して74m を測る。これらの接合資料の分布をみると地形の傾斜に沿って土器の大きな移動があったことが想定される。

【土器の特徴】　第9h類土器は，前の第9g類土器とほぼ同様の器形を呈する。特に，**262**や**267**は，胴部屈曲の特徴を明確に観察できる資料である。尚，**260**と**271**は，不注意から混入したものであり，第9g類に属するものである。

文様は，同心状に楕円文を施す押型文土器であり，文様がより明確であり個体数の判別が易い。**263**に属するもの（**262**・**267**・**270**），**264**に属するもの（**268**・**269**），**273**に属するもの（**272**）の個体があり，他に**266**のもう一つが存在するかも知れない。特に，**263**は，原体および施文順序が判明される。原体は，原体巾 6.0cm，原体長（原体の円周長） 3.2cmを測る。そして，この原体円周面に楕円文2個を並列し，計4個彫刻している。施文は，従位に施文され，次に右に移動して施文され，左側が前の施文と若干重複している。**267**のように右から左へ逆の場合もある。**264**は，大形の楕円文と小形の楕円文を組み合せており，**273**は，小形の楕円文を組み合せている。この同心楕円文は，これまで類例のない珍しい押型文である。

⑨第9i類土器　（第22・23表　第54～58図－ **274～ 315**）

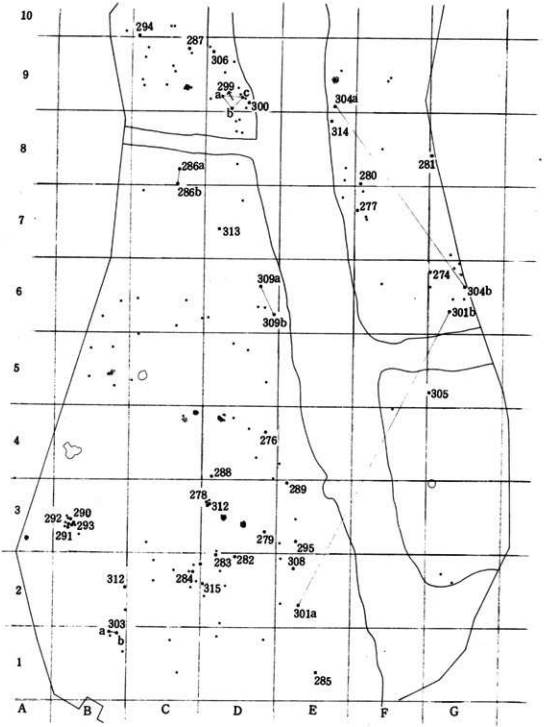
【分布】　第9i類土器の分布は，比較的全グリッドに拡散する傾向があり，密集して分布するところは少ない。強いて集中するところをあげれば，D－9区，G－6区，D－2区，B－2区であろう。そのうちB－2区は，**290～ 293**の同一個体である。接合資料は，**301**がG－6区とE－2区で45m，**304**がE－9区とG－6区で30m の接合距離を測る。第9i類土器もかなり移動した土器群の一つである。

第22表　第9i類土器一覧表（I）

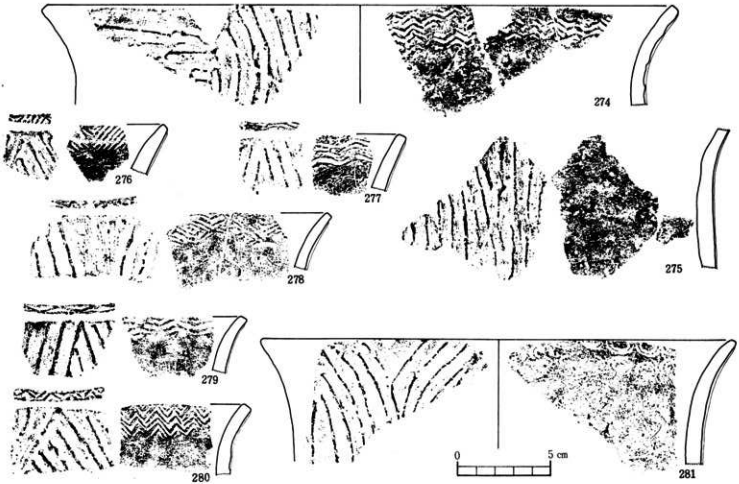
No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
274	G 6 F 6 F 7	Ⅳ 上層	217.835	口縁	口径 34.6 壁厚 0.8	屈曲する胴部から，外雰気味に内広し，口縁部で大きく外反する。 口唇部は平坦面をつくる。	口縁外面はみみずばれ文，みみずばれ文には，横位のものと縦位のものを直行させるもの，斜位のものを交差されるものなどがある。いずれも数本を単位とする。 内面と，口唇部に山形文を施文する。	長石	普通	赤褐色	同一個体
275	F 6 F 7	上層		胴部	壁厚 0.9			長石	普通	赤褐色	
276	D 4	Ⅳ	216.05	口縁	壁厚 0.8			長石	普通	赤褐色	第9e類と関係
277	F 7	Ⅳ	218.57	口縁	壁厚 0.7			長石	普通	黒褐色	
278	D 3 D 3	Ⅳ Ⅲ	215.355 215.24	口縁	壁厚 0.5			長石	普通	茶褐色	
279	D 3	Ⅳ	215.12	口縁	壁厚 0.6			長石・石英	普通	黄褐色	
280	F 8	Ⅳ	211.41	口縁	壁厚 0.7			長石・石英	普通	黄褐色	
281	F 8	Ⅳ	219.275	口縁	口径 25.7 壁厚 0.8		内面に同心円押型文を施文	長石	普通	暗褐色	第9g類と関係
282	D 2	Ⅳ	214.95	口縁	壁厚 0.6			長石	普通	黄褐色	

第23表　第9ｉ類土器一覧表（Ⅱ）

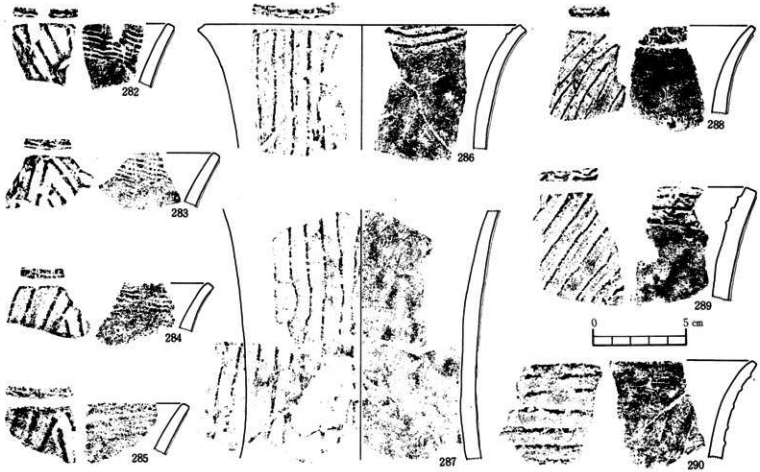
No	区	層	レベル m	器種	法量cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
283	D 2	Ⅲ	215.19	口縁	壁厚 0.6	287のように、胴部径が小さく、口縁部が上方に大きく延びるものも存在する。	口縁内面・口唇部に撚糸文を施文する。	長石	普通	茶褐色	第9ａ類と関係
284	C 2	Ⅳ	214.495	口縁	壁厚 0.5			長石	普通	黄褐色	
285	E 1	Ⅳ	214.015	口縁	壁厚 0.6			長石	普通	黄褐色	
286	C 8 C 8	Ⅳ Ⅳ	218.92 218.775	口縁	口径 17.8 壁厚 0.7		口縁内面みみずばれ文	長石	普通	暗褐色	
287	C 9 C 9	Ⅳ Ⅳ	221.395 221.48	胴部	胴径 12.4 壁厚 0.5～0.8			長石	普通	灰～暗褐色	
288	D 4	Ⅳ	215.72	口部	壁厚 0.4～0.8		口縁内面に沈んだ円文 口縁内面にみみずばれ文	長石	普通	暗褐色	第9ｇ類と関係
289	E 3	Ⅳ	215.52	口縁	壁厚 0.9		口唇部に山形文	長石	普通	茶褐色	第9ｅ類と関係
290	B 3 B 3	Ⅳ Ⅳ	215.05 215.00	口縁	壁厚 0.6			長石	普通	赤褐色	
291	B 3 B 3	Ⅳ Ⅳ	214.99 215.155	口縁	壁厚 0.7			長石	普通	茶褐色	
292	B 3	Ⅳ	215.12	口縁	壁厚 0.5			長石	普通	茶褐色	
293	B 3 B 3	Ⅳ Ⅳ	214.90 215.11	口縁	壁厚 0.5～0.7			長石	普通	茶褐色	
294	D 9	Ⅲ	221.85	口縁	壁厚 0.5			長石	普通	灰褐色	
295	E 3	Ⅳ	215.25	口縁	壁厚 0.5～0.7			長石	普通	黄褐色	
296	C 2	Ⅳ	214.935	口縁	壁厚 0.7		口唇部に撚糸文	長石	普通	暗褐色	第9ａ類と関係
297	D 4	Ⅳ	215.785	胴部	壁厚 0.4～0.9			長石	普通	暗褐色	
298	F 8	Ⅳ	219.18	口縁	壁厚 0.8			長石	普通	暗褐色	
299	D 9 D 9 D 9	Ⅳ Ⅳ Ⅳ	220.475 220.71 220.44	口縁	壁厚 0.7			長石	普通	黄褐色	
300	D 9	Ⅳ	220.39	胴部	壁厚 0.7			長石	普通	黄褐色	
301	G 6 2 E	Ⅳ Ⅳ	217.135 213.995	胴部	壁厚 0.8			長石	普通	赤褐色	
302	C 9	Ⅳ	221.42	胴部	壁厚 0.5～0.8			長石	普通	黄褐色	
303	B 0 B 0	Ⅳ Ⅲ	213.87 214.01	胴部	壁厚 0.7			長石	普通	暗褐色	
304	F 9 G 6	Ⅳ Ⅳ	220.58 289.34	胴部	壁厚 0.6～0.8			長石	普通	赤褐色	
305	G 5	Ⅳ	216.69	胴部	壁厚 0.6	胴部屈曲部からすぐ内傾したのち、直上に延びる傾向がある。		長石・石英	普通	赤褐色	
306	D 9	Ⅳ	221.18	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	普通	灰褐色	
307	E 5	Ⅲ	241.0	胴部	壁厚 0.6～0.9		屈曲部外面を凸帯状に作りその上に山形文施文	長石	普通	灰褐色	第9ｅ類と関係
308	E 2	Ⅳ	214.66	胴部	壁厚 0.5～1.0			長石	普通	灰褐色	
309	D 6 D 6	Ⅳ Ⅳ	217.56 217.575	胴部	壁厚 0.7			長石	普通	灰褐色	
310	F 9	Ⅳ	211.52	胴部	壁厚 0.4～0.7			長石	普通	赤褐色	スス付着
311	D 3 D 2	Ⅳ Ⅳ	215.355 215.3	胴部	胴径 19.5 壁厚 0.6～0.8			長石	普通	赤褐色	
312	B 2	Ⅳ	214.685	胴部	壁厚 0.5～0.9			長石	普通	黄褐色	
313	D 7	Ⅳ	217.915	胴部	胴径 14.4 壁厚 0.5～0.9			長石	普通	黄褐色	
314	E 8	Ⅳ	220.34	胴部	壁厚 0.6～0.9		屈曲部外面を凸帯状に作りその上に山形文施文	長石	普通	赤褐色	第9ｅ類と関係
315	C 2		214.75		壁厚 0.7			長石	普通	黄褐色	



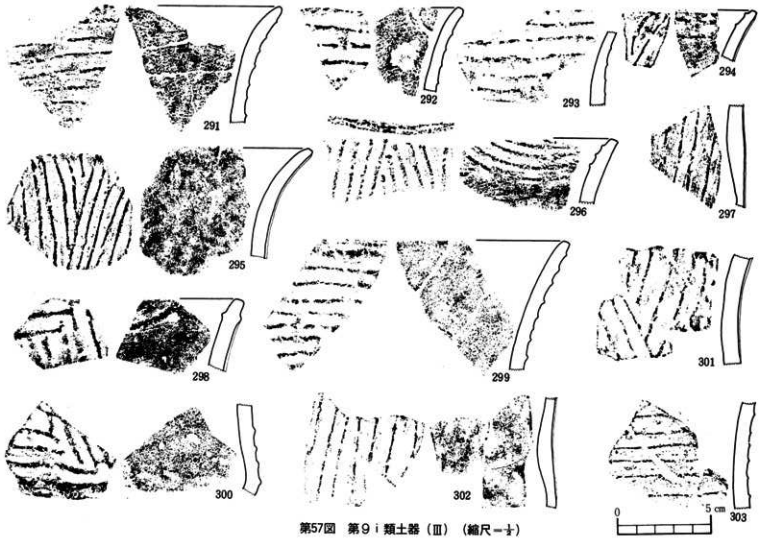
第54図　第９ｉ類土器分布図　　(縮尺＝１／500)



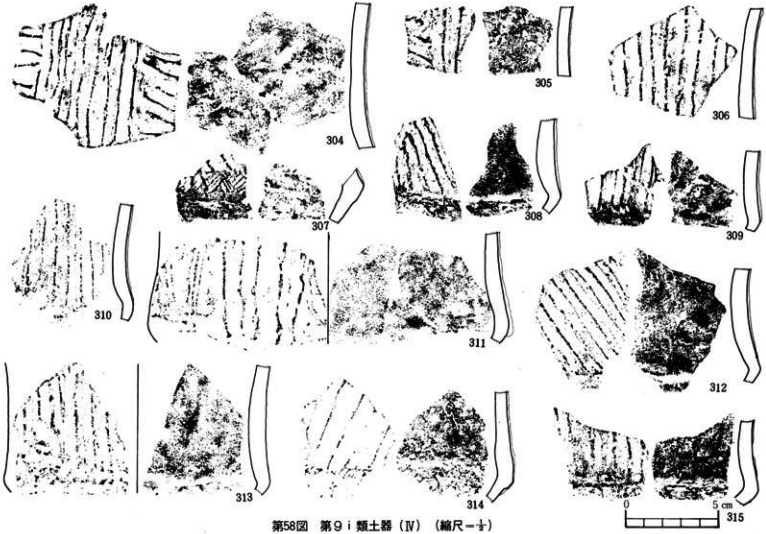
第55図　第9ｉ類土器（Ⅰ）（縮尺－$\frac{1}{4}$）



第56図　第9ｉ類土器（Ⅱ）（縮尺－$\frac{1}{3}$）



第57図　第9ｉ類土器（Ⅲ）（縮尺1/4）



第58図　第9ｉ類土器（Ⅳ）（縮尺－十）

【土器の特徴】　第９ｉ類土器は，器形はこれまでの第９類土器とまったく一致する。つまり，胴部が「く」の字に屈曲し，頸部から口縁部にかけては弓状に大きく外反している。しかし，胴部下半から底部にかけては，資料が欠損するため不明であるが，これまで発見の類例から上げ底状の平底を呈することが考えられる。

第９ｉ類土器は，ミミズバレ文と呼ばれる微隆起突帯文を主文様として施文しているものである。さらに，この微隆起突帯文土器には，他の各種の文様を併用するという特徴がみられる。

まず，この微隆起突帯文は，器外面の口縁部から胴部屈曲部上半に施文される。この部分においては，微隆起突帯文以外の文様が併用されるものはみられない。この微隆起線文は，従位に並行線文を構成するもの（ **286**など），従位のものに横位のものを直交させるもの（ **304**など），数本を単位として左右交互に斜行させ交差させたもの（ **283**など）などがある。このように微隆起突帯文の施文には，数本を単位として並行線文を構成して従走させ，横走させ，あるいは直交・斜行させて変化をつける特徴がみられる。器外面の口縁部から胴部上半の部分には，微隆起突帯文以外の文様が併用される例はないが，**307**と **314**には，胴部屈曲部分の陵線上に凸帯文を巡らせ，その上に山形押型文を施文する注目すべき例が存在した。

次に，口縁内面の施文であるが，同じ微隆起突帯文を施文するもの（ **286**など），山形押型文を施文するもの（ **274**など），同心円押型文を施文するもの（ **281**など），撚糸文を施文するもの（ **282**など），それに無文（ **295**など）の５タイプが併用されている。これらは，これまで微隆起突帯文と山形押型文が交互に組み合せ施文されるものが発見されているところから単独に使用されたとは考えられないが，本遺跡では，少なくとも５タイプを口縁内面の文様に併用していたことになる。さらに，口唇部平担面にも施文されるものがある。口縁内面に山形押型文が施文される **276**は，口唇部平担面には山形押型文が施文され，撚糸文が施される。**282**などは撚糸文が施される。ただし，内面に微隆起突帯文が施文される **289**などは，口唇部には山形文が施文されるという例があり，このことからも，口縁内面には２文様が交互に施文される可能性が強い。屈曲部下半については，不明な点が多い。出土したわずかの破片（ **307**・ **314**）では，無文である。

⑩第９ｊ類土器　（第24表　第60・61図－ **316**～ **340**）

【分布】　第９ｊ類土器は，凹線文を主文様に使用したもので，**316**～ **335**までと **336**～ **340**に大きく２つに分けられる。**316**～ **335**は，形態上２つ以上の個体があるものと考える。**316**～ **335**の分布は，少数の出土ながら非常に拡散する傾向がみられる。Ｂ－Ｅ－１～10区に分布し，そのうち，Ｄ－５区に密集するところがある。**331**～ **340**の分布は，比較的狭くなる。Ｄ－７区を中心に20m 四方に拡がりをもつ。同一個体という理由によるものかもしれない。そのうち接合資料は，25m の接合距離を測る。

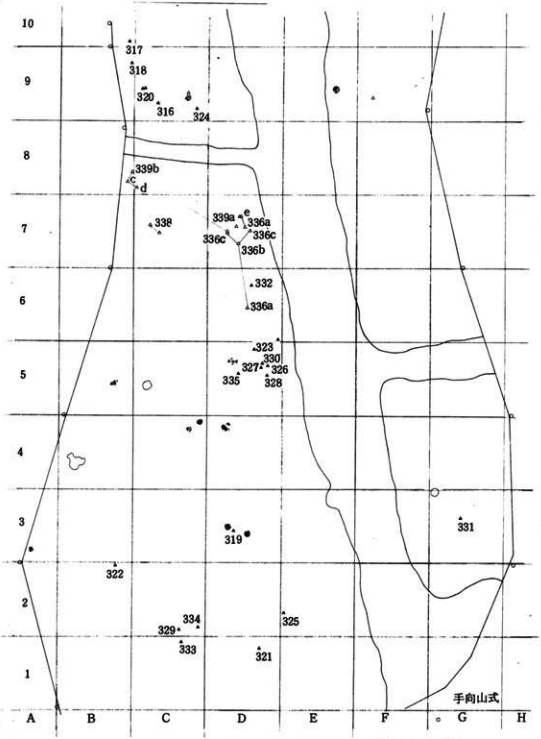
【土器の特徴】　口縁部で外反し，胴部では顕著な屈曲はみられない。「く」の字に折れない

で丸味をもって屈曲する（322など）。しかし，324のように屈曲の強いものもある。336～340は，口縁部付近の出土だけであり，胴部片の出土はない。

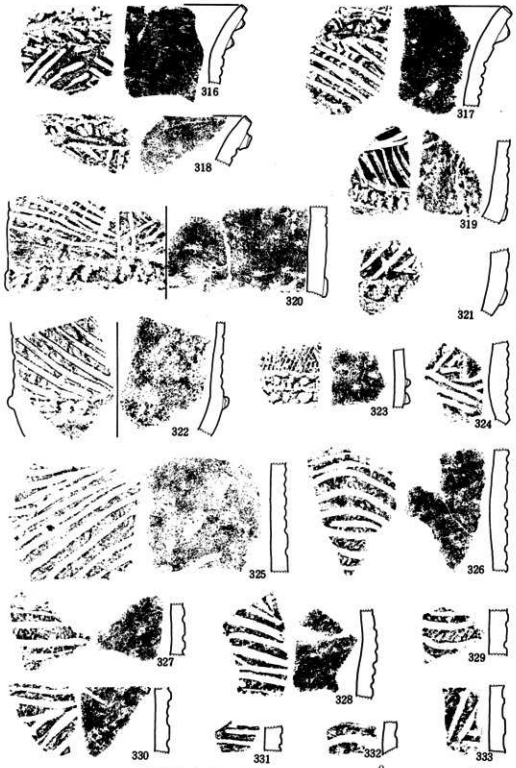
文様は，器面全体に凹線文を数本並行させて，斜位にあるいは交差し，また，226や324のように菱形文を描くものもある。そして，口唇部に沿った口縁部と胴部屈曲部へ比較的巾の広い凸帯文が貼付される。この凸帯文は，口縁部・胴部とも1～2条貼付され，その上に連続の刻目文が施文される。口唇部には，斜位の刻目をつけるもの（316～318）と口縁部の内面方向と外面方向に「∧」のように刻目を施すもの（336の個体）がある。尚，323は，胴部屈曲部に2条の連続刻目をもつ凸帯文を貼付するが，胴部上半の器面には撚糸文が施文されている。

第24表　第９ｊ類土器一覧表

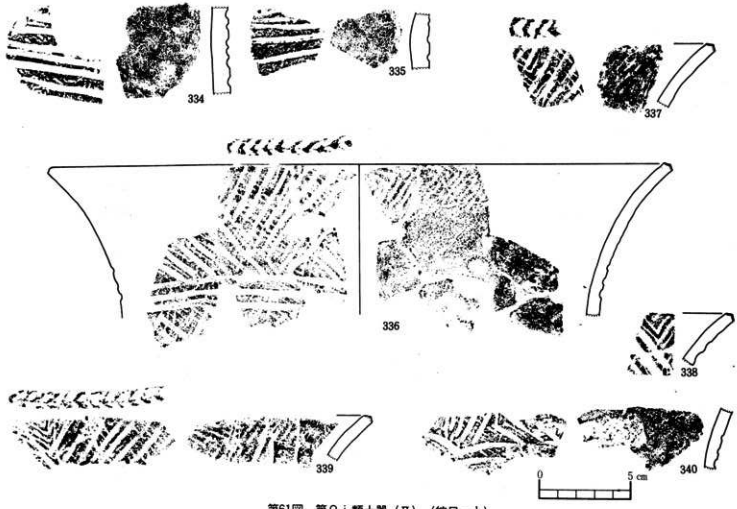
No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
316	C 9	Ⅲ	220.43	口縁	壁厚 0.6	口縁部に大きく外反，口唇部は平坦面をもつ内外面ともへう磨き状仕上げ。	口唇部に刻目，口縁部外面に凸帯文を巡らせ，その上に刻目，器面には並行する凹線文を斜位に施す。口縁内面には施さない。	長石・石英	良	茶褐色	
317	B 9	Ⅲ	221.625	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	茶褐色	
318	B 9	Ⅳ	221.555	口縁	壁厚 0.8			長石・石英	良	暗褐色	
319	D 3	Ⅳ	215.225	胴部	壁厚 0.6～0.9	胴部はゆるやかに屈曲するものがあいが，324のように強く屈曲するものもある。屈曲部から垂直に立ち上がり，口縁部で大きく外反する。内面へう磨き	屈曲部外面に凸帯を巡らせ，器面に凹線文を並行に，斜位にあるいは弧状に描く。	長石・石英	良	赤褐色	
320	C 9 C 9	Ⅳ Ⅳ	220.34 220.335	胴部	胴径 17 壁厚 1.0			長石・石英	良	灰褐色	
321	D 1	Ⅳ	213.535	胴部	壁厚 0.6～0.9			長石・石英	良	茶褐色	
322	B 2	Ⅲ	215.4	胴部	胴径 11.3 壁厚 0.4～0.8			長石・石英	良	赤褐色	
323	D 5	Ⅲ	217.12	胴部	壁厚 0.5		凸帯文を巡らせ，器面に撚糸文	長石・石英	良	赤褐色	第9ａ類か？
324	C 9	Ⅳ	220.275	胴部	壁厚 1.0	319以降に同じ	319以降に同じ	長石・石英	良	黄褐色	
325	E 2	Ⅳ	214	胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	茶褐色	
326	D 5	Ⅳ	216.86	胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	暗褐色	
327	D 5	Ⅳ	216.78	胴部	壁厚 0.7			長石・石英	良	灰褐色	
328	D 5	Ⅳ	218.595	胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	灰褐色	
329	C 2	Ⅳ	214.19	胴部	壁厚 1.0			長石・石英	良	赤褐色	
330	D 5	Ⅳ	216.95	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	灰褐色	
331	C	Ⅳ	215.975	胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	赤褐色	
332	D 6	Ⅳ	217.955	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	茶褐色	
333	C 1	Ⅳ	213.485	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	茶褐色	
334	D 6	Ⅲ	217.16	胴部	壁厚 0.9			長石・石英	良	茶褐色	
335	D 5	Ⅳ	216.79	胴部	壁厚 1.0			長石・石英	良	黄褐色	
336	D 7	Ⅳ	217.97	口縁	口径 33.6 壁厚 0.6	口縁部は，大きく外反する。器壁は均厚で，精巧胴部以下不明内面はへう磨き。	斜位の細い凹線文の上に，交差するように，また，これをかき消すかのように，太い凹線文が施文される。そのため，格子状にみえる部分もある。横位に巡る凹線文を中心に，斜位の凹線文が細み合せられる。口唇部に縦格状に刻目，口縁内面にも施文	長石	普通	暗褐色	一個体
337	F 9	Ⅳ	219.405	口縁	壁厚 0.6			長石	普通	暗褐色	
338	C－7	Ⅳ	218.02	口縁	壁厚 0.6			長石	普通	暗褐色	
339	B－8	Ⅳ	219.02	口縁	壁厚 0.6			長石	普通	暗褐色	
340	C－9		220.895	口縁	壁厚 0.6			長石	普通	暗褐色	



第59図　第9ｊ類土器分布図　（縮尺＝1／500）



第60図　第9j類土器（I）（縮尺－$\frac{1}{4}$）



第61図　第9ｊ類土器（Ⅱ）（縮尺$\frac{1}{4}$）

⑪第９ｋ類土器　（第25表　第63図－ 341～ 360）

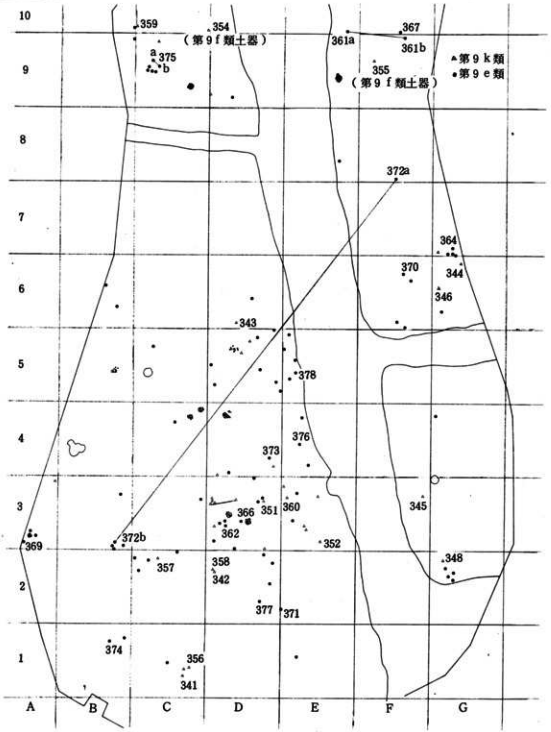
【分布】　第９ｋ類土器は，分布図に示すように拡散して単独に出土する傾向がみられる。出土範囲は，Ｃ～Ｇ－１～６区内である。Ｄ・Ｅ－３区に若干多く出土するが，集中するとはいえない。 **354**・ **355**は，検討の結果，主文様が菱形押型文であり第９ｆ類に属する。

【土器の特徴】　器形は，これまでの第９類土器とほぼ一致する。口縁部は大きく外反し，口唇部は平担面をもつものと丸味をもって終るものがある。胴部は，「く」の字に屈曲する。 **345**・ **357**の断面でわかるように，屈曲部から上の頸部が内弯してすぼむため，粘土にふくらみが生じ著じるしく厚くなる。

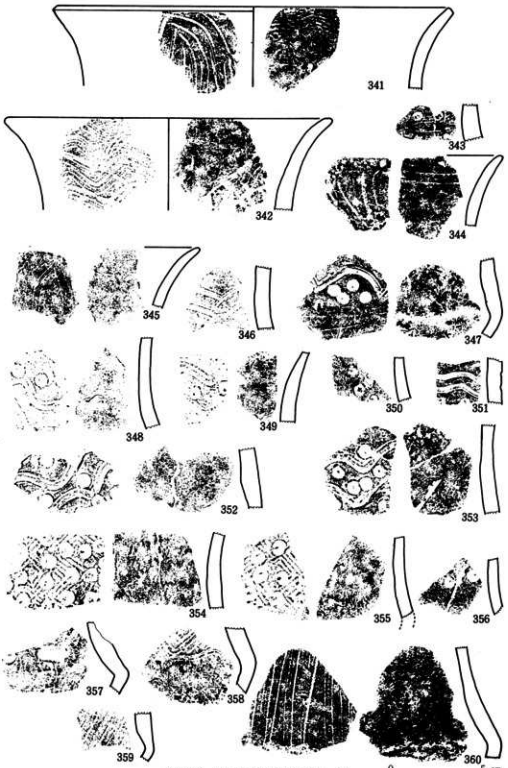
文様は，櫛先の揃わない櫛状施文具で，櫛描き文を描くもので，櫛描き沈線は揃わず，強弱がみられる。口縁部付近は，カーブを描きながら斜位に施すもの（ **341**）や流水文を横位に描くもの（ **342**）がある。胴部屈曲部上半は，横位に並行する櫛描き文で流水文を描くもの（ **352**）

第25表　第９ｋ類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器　種	法　量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
341	C 1	Ⅳ	213.905	口　縁	口径　21.5 壁厚　0.6	口縁部は大きく外反する。	口縁外面は，櫛状施文具をもってカーブを斜位に描くものや，流水文を描くものがある。 口縁内面に同じ文様を描くものもある。	長　石	良	暗褐色～暗褐色	
342	D 2	Ⅳ	214.8	口　縁	口径　17.7	口縁部は，平担面をつくるものと丸味をもって終るものがある。 内面はヘラ磨き状		長　石	良	黄灰色	
		Ⅳ	214.75		壁厚 0.7～ 0.9			長石・石英	良	暗茶褐色	
343	D 6	Ⅳ	217.33	胴　部	壁厚　1.0			長石・石英	良	黄褐色	
344	G 6	Ⅳ	217.81	口　縁	壁厚　0.6			長石・石英	良	灰褐色	
345	F 3	Ⅳ	215.94	口　縁	壁厚　0.5			長石・石英	良	赤褐色	
346	G 6	Ⅳ	217.60	胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	暗褐色	
347		表		胴　部	壁厚　0.8	外弯気味に内広して，外反する口縁部につづく胴屈曲部上部が若干厚くなる。内面へラ磨き状	櫛描き施文具で流水文を描く。胴部屈曲部に近い上半に円文を描く。円文は，同じ施文具と考えられる。	長　石	良	暗褐色	
348	G 2	Ⅳ	214.89	胴　部	壁 0.6～ 0.8			長石・石英	良	灰褐色	
349	D 3	Ⅳ	215.905	胴　部	壁厚 0.5～ 0.8			長石・石英	良	灰褐色	
350	C 1	Ⅳ	213.88	胴　部	壁厚 0.5～ 0.7			長石・石英	良	灰褐色	
351	D 3	Ⅳ	215.17	胴　部	壁厚　0.8			長石・石英	良	赤褐色	
352	E 3	Ⅳ	214.86	胴　部	壁厚 0.8～ 1.0			長石・石英	良	灰黄色	
353	E 3	Ⅳ	215.36	胴　部	壁厚 0.6～ 0.8			長石・石英	良	灰黄色	
354	D10	Ⅳ	221.65	胴　部	壁厚 0.6～ 0.8	第９ｆ類土器	菱形押型文の上に円文を描く。	長石・石英	良	暗褐色	第９ｆ類土器混入
355	F 9	Ⅳ	210.91	胴　部	壁厚 0.6～ 0.7			長石・石英	良	暗～灰褐色	
356	C 1	Ⅳ	212.915	胴　部	壁厚　0.6	胴部屈曲部はするどいものと，ゆるやかなものがある。 屈曲部上部内面は肥厚し，若干凹凸がみられる。	出土資料でみるかぎり，胴部，屈曲部下半は，施文はみられない。	長石・石英	良	灰褐色	
357	C 2	Ⅳ	215.06	胴　部	壁厚 0.7～ 0.9			長石・石英	良	灰褐色	
358	D 2	Ⅳ	214.75	胴　部	壁厚　0.9			長石・石英	良	灰褐色	
359	B10	Ⅳ	221.975	胴　部	壁厚 0.5～ 0.7			長石・石英	良	暗～灰褐色	
360	E 3	Ⅳ	215.38	胴　部	壁厚 0.6～ 0.8			長石・石英	良	暗茶褐色	



第62図　第9k・l類土器分布図　（縮尺－1／500）



第63図　第９ｋ類土器（縮尺－$\frac{1}{2}$）

や櫛描き文で連続弧状を描くもの（ 347）がある。さらに，この胴部屈曲部上半部分では，竹管文状にみえる円文が刻まれる。この円文は，櫛描き施文具を廻転させることによって生じたものと考えられる。また， 341には，口縁内面に山形押型文が施文される。第９ｋ類土器には，口唇部に施文がみられるものはない。

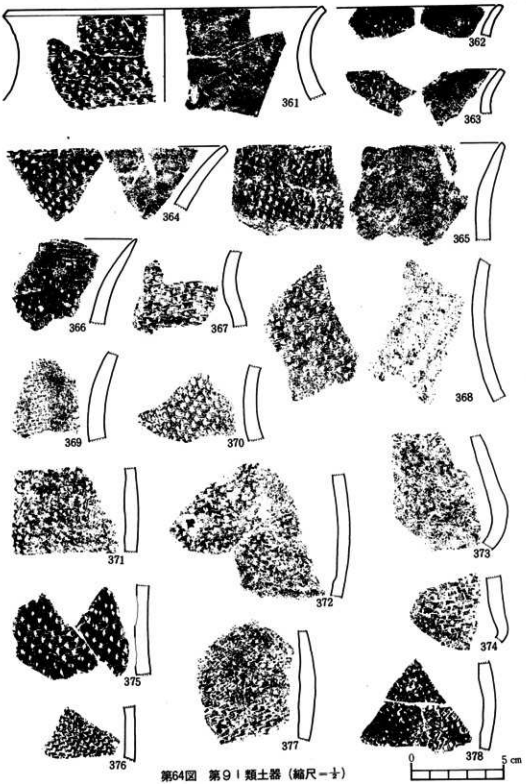
⑫第９Ｉ類土器　（第26表　第64図－ 361～ 378）

【分布】　第９Ｉ類土器は，全域に分布して出土量も比較的多い。そして各区ごとに小さな集中がみられる。たとえば，Ｃ－９区，Ｇ－７区，Ｄ－５区，Ｄ－３区，Ｂ－３区，Ａ－３区，Ｇ－２区などである。特殊な文様のため，個体数は判別しにくい。 372は，Ｆ－８区とＢ－３区の63m 間で接合する。

【土器の特徴】　器外面全体に，特殊文様の刺突連続連点文を施文するものである。器形は，口縁部が大きく外反し，胴部は「く」の字に外反する。 361は，壺状の口縁に復元された特殊な器形である。 374の胴部屈曲の状態は，第９類土器の特徴を示している。口唇部は，平担面

第26表　第９Ｉ類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
361 a	E 10	Ⅳ	222.285	口縁	口径 17.4	特種な器形	刺突連点文。連続性，規則性がみられるため連続する。施文具の可能性がある。口縁内面には施文はみられない。	長石	良	黄褐色	361は局部的な変化で同一個体の可能性もある。
b	F 9	Ⅳ	211.82		壁厚 0.4～ 0.8						
362	D 3	Ⅳ	214.72	口縁	壁厚 0.4	口縁部大きく外反し，口唇部が平担に終るものと，鋭角に終るものがある。		長石	良	暗黄褐色	
363	C 3	Ⅳ	214.99	口縁	壁厚 0.5			長石	良	黄褐色	
364	G 7	Ⅳ	217.86	口縁	壁厚 0.6			長石	良	黄褐免	
365	E 1	Ⅳ	213.21	口縁	壁厚 0.8			長石	良	黄褐色	
366	D 3	Ⅳ	215.22	口縁	壁厚 0.6			長石	良	黄褐色	
367	F10	Ⅳ	212.175	胴部	壁厚 0.7	胴部内湾気味にふち上がり，大きく口縁部へ外反する。		長石	良	黄褐色	
368	B 4	Ⅳ	215.63	胴部	壁厚 0.6			長石	良	暗黄褐色	
369	B 3	Ⅳ	214.855	胴部	壁厚 0.9			長石	良	黄褐色	
370	F 6	Ⅳ	217.66	胴部	壁厚 0.7			長石	良	暗黄褐色	
371	D 2	Ⅳ	214.44	胴部	壁厚 0.7			長石	良	暗黄褐色	
372 a	B 3	Ⅳ	215.04	胴部	壁厚 0.6		373で見るかぎり，胴屈曲部下半には施文はみられない。	長石	良	黄褐色	
b	F 8	Ⅳ	218.72								
373	E 4	表		胴部	壁厚 0.6～ 0.7	ゆるく屈曲する。内面ヘラ削き状		長石	良	黄褐色	
374	B 1	Ⅳ	213.525	胴部	壁厚 0.5～ 0.8	3671に隣と同じ		長石	良	黄褐色	
375 a	C10	Ⅳ	220.75	胴部	壁厚 0.7			長石	良	黄褐色	
b	C10	Ⅳ	220.68								
376	E 4	表		胴部	壁厚 0.5			長石	良	暗黄褐色	
377	D 2	Ⅳ	213.965	胴部	壁厚 0.5～ 0.8			長石	良	暗黄褐色	
378	E 5	Ⅳ	216.59	胴部	壁厚 0.7			長石	良	黄褐色	
	E 5	Ⅳ	216.63								
	E 5	Ⅳ	216.34								



第64図　第9Ⅰ類土器（縮尺－$\frac{1}{3}$）

をつくるが，366のように，口唇部が鋭角につくられるものもある。おそらく局部的な変化とも考えられる。刺突連点文様は，連続性・規則性がみられ，連続する施文具の可能性が強い。口縁部内面や口唇部平担面には，文様の施文はみられない。なお，内外面ともナデ状のていねいな整形で仕上げられている。

⑬第9m類土器　（第27表　第66図－ 379～ 390）

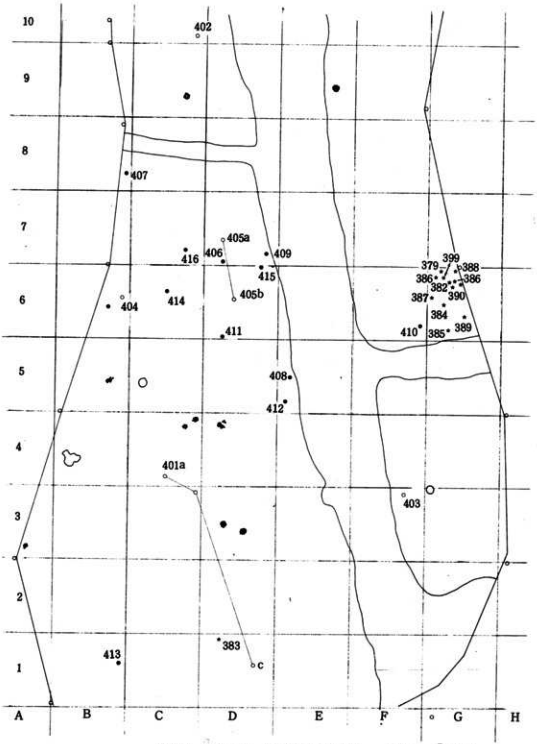
【分布】　同一個体の破片によるためか，G－6区に密集して出土した。383がD－1区に，380がF－7区（表土）に出土した以外は，すべてG－6区出土である。同一包含層内に，同一個体が拡散せずに分布している中において，383だけが，同じ包含層中において60m前後も移動した事実は，包含層形成を考えるうえにおいては興味ある事実である。

【土器の特徴】　口縁部は大きく外反して，口唇部は丸味をもって終る。385によると胴部は「く」の字に屈曲して，386のように内弯気味に立ち上り弓状に外反して口縁部へ続く。器形は，第9類土器に属すことが考えられる。

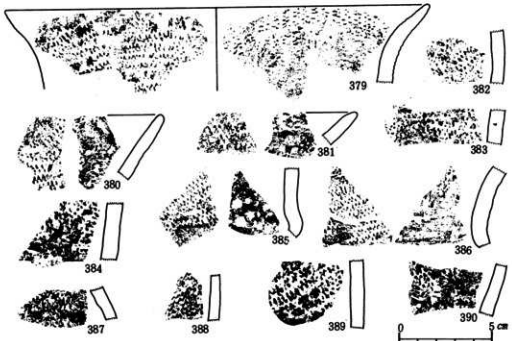
文様は，非常に特殊な手法をもつ。一見すると山形押型文を連想するが，文様の復元の結果，貝殻文であることが判明した。貝殻腹縁を器面に垂直に立て，腹縁部を固定させ軸にして前に傾けさらに後に傾ける。そして貝殻腹縁をもち上げ，次に移動してこれをくり返す。このような貝殻文は，器外面と口縁内面に施文される。器外面は胴部屈曲部まで施文されるが，口縁水平面に平行して貝殻腹縁をおき従位方向に施文をくり返す。若干斜位に施文される部分もある。口縁部内面は，口縁水平面に直交して貝殻縁をおき，口唇部に沿って施文される。非常に特殊な文様形態であるが，口縁内面に施文されることは，第9類に共通するところがある。

第27表　第9m類土器一覧表

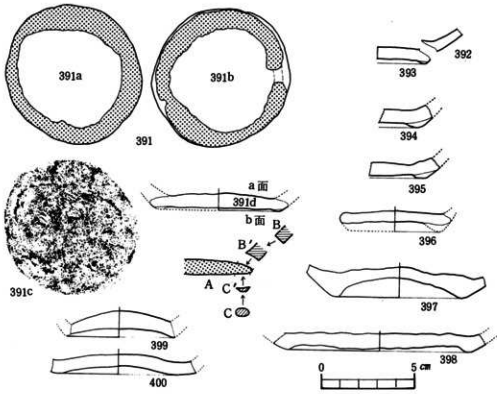
No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
379	G 6	Ⅳ Ⅳ	217.675 217.715	口縁	口径 23 壁厚 0.5～0.8	口縁部は，大きく外反し，丸味をもって終る。胴部は，丸味をもって屈曲し，外弯しながら内傾し，口縁部で大きく外反する。	貝殻文 貝殻腹縁を器面に垂直に立て，腹縁部を固定させ軸にして前に傾け連続して後に傾ける。そして貝殻腹縁施文具をもち上げ次に移動する。出土した土器（385）で見るかぎり，胴屈曲部以下は，施文はない。 口縁外面は，施文具を横位にあてて，縦位に施文し，口縁内面は，逆に，縦位にあてて，横位に施文する。	長石	普通	黄褐色	同一個体
380	F 7	表		口縁	壁厚 0.6			長石	普通	黄褐色	
381	G 6	Ⅳ	217.795	口縁	壁厚 0.6			長石	普通	黄褐色	
382	G 6	Ⅳ	217.795	胴部	壁厚 0.7			長石	普通	黄褐色	
383	D 1	Ⅳ	214.12	胴部	壁厚 0.8			長石	普通	黄褐色	
384	G 6	Ⅳ	217.485	胴部	壁厚 0.8			長石	普通	黄褐色	
385	G 6	Ⅳ	217.205	胴部	壁厚 0.7			長石	普通	黄褐色	
386	G 6	Ⅳ Ⅳ	217.80 217.625	胴部	壁厚 0.8			長石	普通	黄褐色	
387	G 6	Ⅳ	217.745	胴部	壁厚 0.6			長石	普通	黄褐色	
388	G 6	Ⅳ	217.85	胴部	壁厚 0.6			長石	普通	黄褐色	
389	G 6	Ⅳ	289.13	胴部	壁厚 0.7			長石	普通	黄褐色	
390	G 6	Ⅳ	21 779	胴部	壁厚 0.6			長石	普通	黄褐色	



第65図　第９ｍ類・第10類土器分布図　（縮尺＝1／500）



第66図　第９ｍ類土器　(縮尺－１／500)



第67図　第９類土器の底部　(縮尺－１／500)

⑭第９類の底部　（第67図－ 391～ 400）

第９類土器のａ～ｍに細分されたグループの中で，底部についてはほとんど記載することはできなかった。第67図のように，第９類土器に属する底部は，かなり出土したが，この底部が，第９類土器のどのグループに属するか確認することができなかった。理由の一つは，底部付近に文様が確認されないうえに胎土焼成が，いずれのグループにも酷似していることにもよる。裏がえせば，それほど共通性があり，文様を施文するもの以外は区分され得ないことになる。そのため，無文土器の破片が沢山とりあげられている（第３表）。

第67図のように，第９類土器に属すると考えられる底部は，ほとんどが上げ底状の特徴のある器形をつくる。大・小はみられるが，製作手法は，類似点がみられる。

391は，底部円盤がそのまま出土したものであり，円盤の表裏には剝離痕が残存しており，底部作成の工程を知る良好な資料である。**391**は，底部円盤であり，網目部分は，接合部分が剝離した痕跡を示している。**391 a**は底部内面であり，**391 b**は底部外面（下面）であり，その剝離痕跡を示している。内面は，**391 d**のように胴部側壁が外傾するため円盤一杯に接合部分がみられる。下面は，上げ底を形成するための高台粘土輪が貼りつけられるため円盤より若干内側に貼付ける傾向がみられる。上げ底状底部の作成は，**391**によって第67図のＡ（模式図）のようにおこなわれたことが想定された。まず，小型の円盤を作り，底部下面には，Ｃのような粘土輪を貼り付け上げ底をつくる。そして，内面には，Ｂのように胴部側壁を斜位に接合貼付する。すでに底部円盤は，斜めに貼付できるように**391 d**面を孤状に整形しているようである。小さな円盤底部のため，胴部最大径の屈曲部に側壁が続くためには，かなり斜位に接合しなければならない。その接合時においても側壁を外傾させるため工程の中で，底部中央部が孤状になり，より上げ底になるものと考えられる。最も上げ底の強いものは，**397**で底部中央部分が地面より 1.0cmも上っている。**392**と**393**は，接合部分が剝離した同一個体であり，底部作成の状態が理解されるものである。**391～ 398**は，この手法で作製されたことが確認されるが，**399・ 400**は，底部下面に粘土輪が貼付されなていないようである。

i．第10類土器　（第28表　第68図－ 401～ 416）

【分布】　第10類土器は，非常に個性の強い土器型式であり，これまでの他の型式との類別はより明確に区分された。 401のタイプ，407のタイプ，409のタイプの３個体以上があるようである。小量の出土ながら，出土範囲は拡散し集中しているところはみられない。たとえば，401のタイプは，C－１からC－10区の90m におよぶ範囲に分布している。

【土器の特徴】　口縁部が「く」の字に外反して胴部が円筒形を呈する塞ノ神式土器と呼ばれる型式に属する一群の土器である。 401の器形は，口径17.3cmの比較的小型の深鉢形を呈する。同一個体は，401～ 405であり，416もこのタイプに属するものかもしれない。口縁部は，小さく外反し口縁内面には「く」の字外反によって生じる陵線がつくられるが，外面は屈折せず外反している。そのため，内面の陵線付近の頸部壁厚は厚くなっている。口唇部は，鋭角に細くなるが丸味をもつ。胴部は，円筒形を呈するが，405には若干胴張りがみられる。

401の文様は，２本の並行する凹線を単位とする凹線文が口頸部と胴部に横位に施文され，その間には，凹線文で区画をされない網目撚糸文が従位に施文されている。 403も同じである。

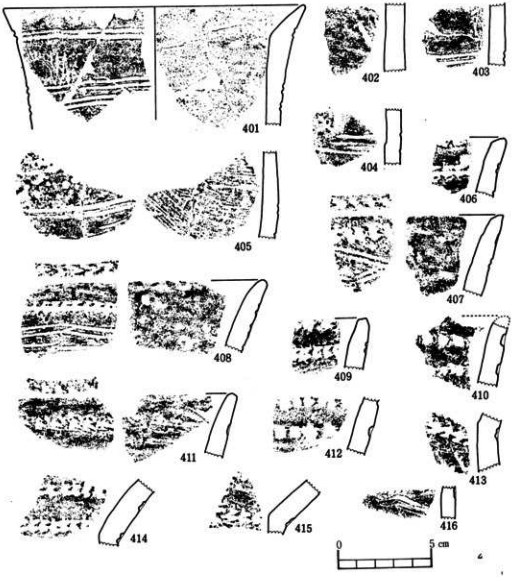
第28表　第10類土器一覧表

No	区	層	レベル m	器種	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
401	C3 C4 D1	最上	213.97 215.31	口縁	口径 16.3 壁厚 0.7～ 1.2	口縁部「く」字外反内面に陵をつくる。胴部はやや張るが円筒形の深鉢。	口唇部に刻目 口縁部は２本を単位とする凹線文を巡らす頭部に，凹線を巡らす。 胴部は，凹線文間に区画をもたない網目撚糸文	長石・石英	良	赤褐色	
402	C10	Ⅳ	221.59	胴部	壁厚 1.0			長石・石英	良	赤褐色	
403	F3			胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	赤褐色	
404	B6	Ⅳ	217.19	胴部	壁厚 0.8			長石・石英	良	赤褐色	
405	D7 D6	Ⅳ Ⅳ	218.11 217.64	胴部	壁厚 0.8	409以下に属す	二本を単位とした並行する凹線文	長石・石英	良	赤褐色	409以下と同一個体
406	D7	Ⅳ	217.63	口縁	壁厚 0.9			長石・石英	良	黄褐色	
407	B8	Ⅳ	218.98	口縁	壁厚 1.0	直線的に外広，口唇部丸味をもって終る。	口唇部に貝殻施文具の連続刻目 口縁外面は連続刻目の下凹線文を併用する。	長石・石英	良	黄褐色	同一個体
408	E5	Ⅲ	216.87	口縁	壁厚 1.0			長石・石英	良	暗褐色	
409	D7	Ⅳ	218.21	口縁	壁厚 1.0	頸部で「く」の字に屈折口唇部丸味をもって終る。 内面はヘラ削り仕上げ。	口唇部に貝殻施文具の連続刻目 口縁部外面貝殻施文具の連続刺突文のみ	長石・石英	良	黄褐色	同一個体
410	F6	Ⅳ	217.39	口縁	壁厚 1.0			長石・石英	良	暗褐色	
411	D6	Ⅳ	217.18	頸部	壁厚 1.0			長石・石英	良	暗褐色	
412	E5	Ⅳ	216.40	頸部	壁厚 1.0			長石・石英	良	茶褐色	
413	B1	Ⅲ	213.86	頸部	壁厚 1.1			長石・石英	良	黄褐色	
414	C6	Ⅲ	217.65	頸部	壁厚 1.2			長石・石英	良	暗褐色	同一個体
415	D6	Ⅳ	218.215	頸部	壁厚 1.1			長石・石英	良	黄褐色	
416	C7	Ⅳ	217.91	頸部	壁厚 0.7	内外面の整形が良い。	頸部に刻目（小）凹線文	長石・石英	良	黄褐色	

406～415は，口縁部および頸部破片である。頸部で「く」の字に強く屈折して口縁部は外反し，口頸部内面には陵をつくる。口唇部は，若干薄くなり丸味をもって終る。

文様は，外反する口縁部の外面や頸部屈折部に貝殻状の施文具で連続刺突文が施文される。407・408のように，連続刺突文の間に2本を単位とする凹線文が施文されるものと，409～411のように連続刺突文だけが施文されるものがある。

口唇部にも刻目文が施文されている。



第68図 第 1 0 類 土 器 (縮尺－1／2)

（2）石　器

石器は，Ⅳ層中より石鏃・石匙・磨石・凹石など出土しているが，土器の量に比べて非常に少ない。石鏃３０点・石匙７点・石斧３点・磨石５点・凹石１点・石弾状礫１点がみられる。その他に，剥片・チップ・礫などが多数出土している。

㋑石　鏃

石鏃は，黒曜石製が最も多く22点を数える。他に石英製６点，鉄凝灰岩・安山岩が各１点づつ出土している。形態的特徴から，次のⅠ～Ⅴ類に区分される。

Ⅰ　類

正三角形から二等辺三角形に近い形のもので，主要剥離面を大きく残すものや押圧剥離の荒いものである。そのうち，小形鏃のように正三角形に近いもの（巾に対する長さの比が0.88～1.17）をａ類とし，二等辺三角形に近いもの（比が1.21～1.58）をｂ類とした。

ａ類には，**417**のように薄い剥片を用い主要剥離面を残すものや，**418**・**422**・**426**のように一回り小さい鏃が含まれるが一般に押圧剥離が荒い。抉りの浅い凹基式である。

ｂ類は，基部に対して身が長くなるもので二等辺三角形に近いものである。**434**・**436**のように主要剥離面を残すものもある。また，**433**・**437**のように押圧剥離が荒く不定形になるものもある。抉りの浅い凹基式である。

Ⅱ　類

陵部に対して押圧剥離がシンメトリーにおこなわれた均整のとれたものである。**441**と**442**が属するが，辺部が若干反るのが特徴である。二等辺三角形に近いもので，凹基式である。

Ⅲ　類

いわゆる鍬型鏃で，抉りが深く長脚鏃である。**443**・**444**の２点出土しているが，表層にもみられる。これまで，押型文土器などの古い時期に伴出している。

Ⅳ　類

両辺部の基部に抉りを入れた，いわゆる一見アメリカ鏃に類似するものである（**445**）。これまで，あまり知られていない形状である。

Ⅴ　類

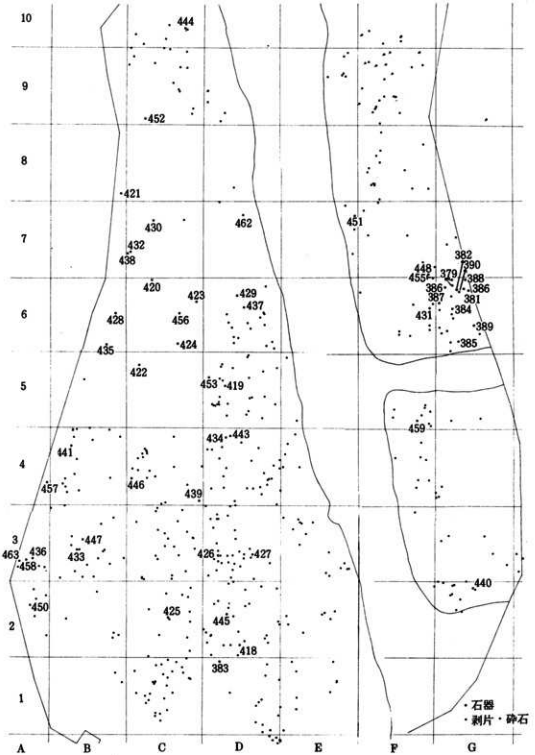
長身鏃で特異な形状をもち，脚部が短かく角度が鈍くなるものである（**446**）。特徴的な台をもつもので，これに類似するものが石峰遺跡で出土している。

㋺石斧

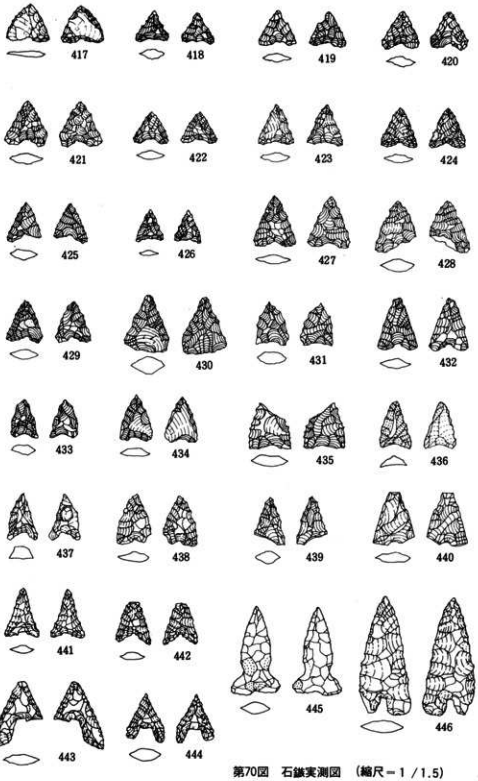
３本出土，**454**はＥ－４区出土。全長10.8cm，最大幅 3.6cm，最大厚さ 1.5cm，重さ67.9gの石斧で，一部ノミ状の研磨がみられる。**455**と**456**は，円礫を剥離しその剥片を使用したもので，片面には礫面が残るものである。**455**はＧ－７区出土で全長10.6cm，最大幅 7.3cm，最

第29表　石鏃計測表

点	出土区	石質	長さ mm	巾 mm	長さ/巾	厚さ mm	重さ g	タイプ及び備考
417	D−2	黒曜石	15	17	0.88	0.3		剥離面を大きく残す。浅い凹基　Ia類
418	D−2	黒曜石	12	13	0.92	0.4	0.38	小型で浅い凹基　〃
419	D−5	黒曜石	14	15	0.93	0.3	0.44	浅い凹基　〃
420	C−6	黒曜石	15	15	1.0	0.4	0.55	〃
421	D−8	黒曜石	18	18	1.0	0.4		〃
422	C−5	黒曜石	13	14	0.93	0.35	0.375	小型の浅い凹基　〃
423	C−6	黒曜石	15	14	1.07	0.35	0.6	剥離面を残す　〃
424	C−6	黒曜石	16	14	1.14	0.3	0.42	〃
425	C−2	黒曜石	16	14	1.14	0.4	0.53	〃
426	D−3	黒曜石	13	11	1.18	0.2	0.2	小型の浅い凹基　〃
427	D−3	黒曜石	20	17	1.18	0.3	0.98	〃
428	B−6	石英	21	18	1.17	0.5	1.18	〃
429	D−6	黒曜石	17	14	1.21	0.4	0.7	Ib類
430	C−7	黒曜石	23	18	1.28	0.7	1.85	〃
431	F−6	黒曜石	17	13	1.30	0.45	0.98	押圧剥離が荒く不定形　〃
432	C−7	石英	21	16	1.31	0.4	0.97	〃
433	B−4	黒曜石	15	11	1.36	0.4	0.53	押圧剥離が荒く不定形　〃
434	D−4	黒曜石	18	13	1.38	0.3	0.6	主要剥離面を大きく残す　〃
435	B−6	石英	(24)	17	1.41	0.4	1.175	〃
436	A−3	鉄凝灰岩	19	13	1.46	0.3	0.73	〃
437	D−6	黒曜石	19	13	1.46	0.5	0.8	主要剥離面を大きく残す。不定形　〃
438	C−7	黒曜石	21	14	1.5	0.4	0.87	〃
439	C−4	黒曜石	19	12	1.58	0.5	0.78	〃
440	G−2	石英				0.4	1.37	〃
441	B−4	黒曜石	20	14	1.43	0.3	0.55	押圧剥離が良好，辺部が若干反る。Ⅱ類
442	C−3	黒曜石	(20/17)	14	1.43	0.3	0.5	〃
443	D−4	石英	(26/22)	(24)	1.17	0.4	1.35	鍬型鏃　Ⅲ類
444	C−10	黒曜石	19	16	1.18	0.5	0.75	〃　〃
445	D−2	安山岩	35	20	1.75	0.5	2.46	両辺部に抉をもつ特異な形態　Ⅳ類
446	C−4	石英	47	23	2.04	0.5	4.13	長身鏃で特徴的な型態　Ⅴ類



第69図 石 器 分 布 図 (縮尺－1／500)



第70図　石鏃実測図　(縮尺－1／1.5)

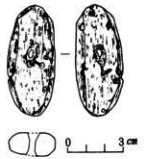
厚さ2cm，重さ　g。**456**はC－6区出土で，全長 9.2cm，最大幅 5.9cm，最大厚2cm，重さ　g を測る。

八石匙

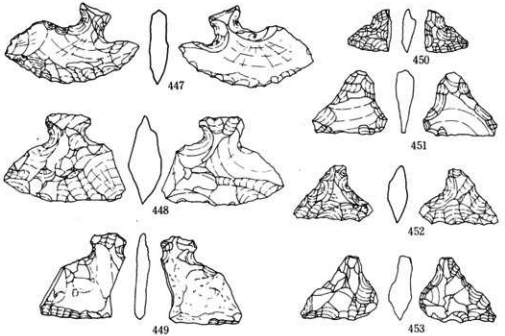
7点出土し，そのうち完形のものは2点ある。**447**はB－3区出土。石材は安山岩で，長さ3.2cm，幅 3.2cm，重さ10.3g 。横長剥片を利用した横型石匙。調整剥離で刃部形成。**448**はG－7区出土。石材は玄武岩で，長さ 3.5cm，幅 4.9cm，重さ16.3g 。横長剥片の打点方向を刃部にし，極状剥離で刃部形成。横型石匙。他の5点は，すべて破損品であるがいずれも横型石匙である。**449**・**451**・**453**は石英，**450**は黒曜石，**452**は玄武岩製である。

二叩石・磨石

458は，叩石でB－2区出土。楕円礫を素材とし，片面に凹みを作り明瞭な打痕を残している。**460～463**は，自然礫を素材とした磨石で両面に研磨がみられる。**461**は側面も研磨されるものである。その他，**459**のように球状を呈した石弾状の自然礫が出土したが使用痕は不明であった。



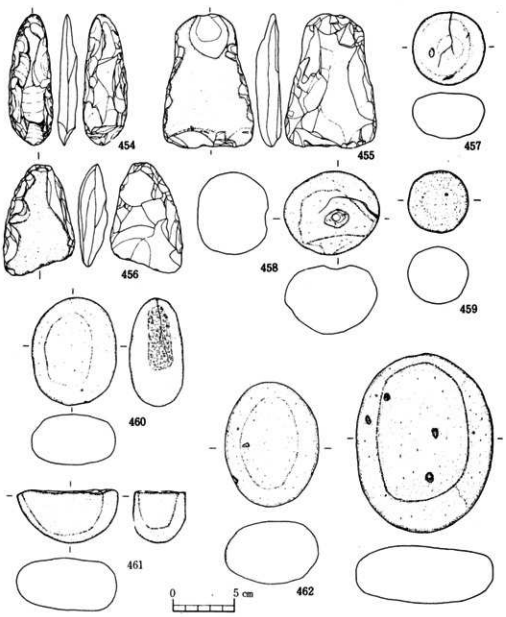
第73図　軽石製品（縮尺－1／3）



第71図　石　　匙　（縮尺－1／1.5）

赤軽石石製品　(第73図)

軽石（軟質凝灰岩）製で，B－2区Ⅳ層出土。最大長6cm，最大幅 2.5cm，重さ　g の楕円形に整形されたものであり，中央に縦長の円孔を穿つ。円孔は，両面から穿孔され'(約 1.2 × 0.6cm)，中ほどで 0.4cm× 0.2cmの円孔となっている。用途は，不明であるが装飾品などが想定される。



第72図　石斧・凹石・石磨　(縮尺－1／3)

第5章　第Ⅲ層の調査

第1節　調査の概要

城の遺構等の調査中にⅢ層は縄文中期の円線文を中心とした遺物の包含層であることが確認された。そこで城の調査が終了した段階でⅢ層面を全体に露出した後に遺構，遺物の検出を進行していった。

Ⅲ層は城の時期の縦横に走る大小の堀，あるいは東側にみられる傾斜地を削平して建てられた建物によって一部削平されている。またこの遺跡全体が北から南へ傾斜しているために特に北側部分の削平が著しくⅢ層はわずかしか残っていなかった。南側部分も柱穴をⅢ層まで掘り込んでいるが他の部分に比べると残りは良好であった。

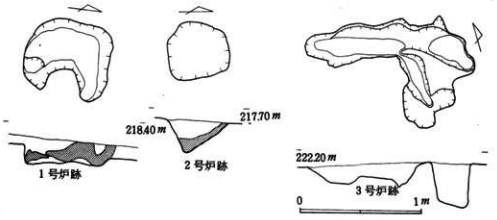
遺物は包含層の残りのよいB～E－1～6区を中心にⅢ層の残存する部分に全体的に出土した。包含層は厚い所は約50cmであるがその中からまんべんなく出土してかなりの量になった。土器は第81，84図に示すように復元できるものも数点出土している。石器は石鏃が68点と数が多く他に石匙，石斧，磨石，石皿の破片等がみられた。

遺構は土拡の中に焼土や細かい木炭片の入った炉跡とみられるもの（以下炉跡として扱う）が3基，同様の土拡で炉跡としたものと比べると深く，覆土に焼土や木炭片のみられないものが1基，なおこの中には土器片が1点入っていた。他に住居址等の遺構は検出されなかった。

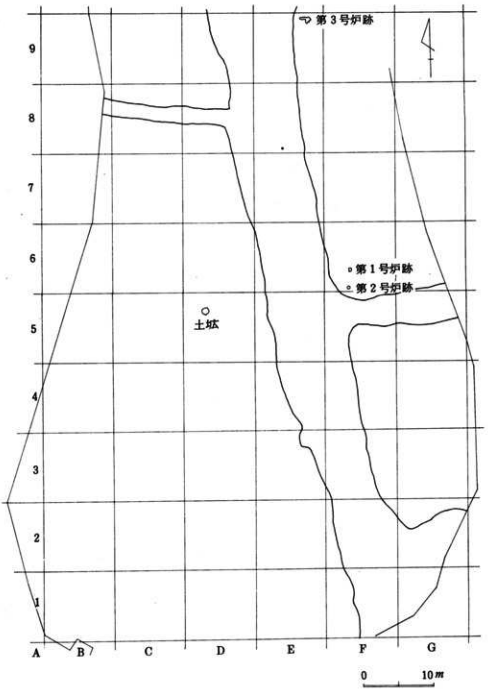
第2節　遺　構

(1)炉跡　（第74図）

炉跡はF－6区南側に南北に並んで2基，F－9区東側に1基検出された。F－6区北側のものを1号，南側のものを2号，F－9のものを3号として以下順に説明していく。



第74図　炉跡実測図



第75図　Ⅲ層遺構配置　(縮尺－1／500)

1号炉跡

Ⅲ層途中からⅣ層の黒褐色土にかけて掘り込まれたもので，Ⅲ層中ではその輪郭はほとんど確認できず北側部分にわずかに焼土がみられたのみであったがⅣ層上面で輪郭が確認できた。平面形は東側の1辺が凹んだ隅丸方形を呈しており，その大きさは南北70cm，東西は最も狭い部分が40cm，最も広い部分が60cmである。断面は深い所で16cm，浅い所は7cmを計る。埋土はⅢ層が主であるが焼けているためやや赤褐色を呈している個所がある。遺物はみられなかったが細かい木炭片が少量採取された。

2号炉跡

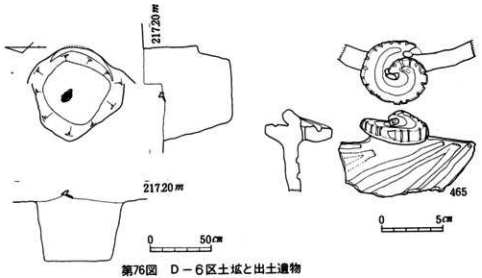
Ⅲ層中でわずかに焼土がみられたが輪郭はⅣ層上面まで確認できなかった。平面形は東西48cm，南北50cmで西側がややふくらんでいる隅丸の方形である。断面は逆三角形でその深さは27cmである。埋土は1号と同様Ⅲ層の流入であり，焼けて赤褐色をしている部分がある。底面から北側の壁にかけて焼土のまとまりがみられた。遺物その他のものは検出されなかった。

3号炉跡

1号，2号と同様にⅢ層中で焼土が確認されたが明確な掘り込みはⅣ層上面まで不明であった。平面形は長い部分がそれぞれ東西 140cm，南北50cmで短い部分はそれぞれ32cm，43cmの状である。凹んだ部分が3個所あり重複している可能性もあるが，埋土が前述の1号，2号と同様Ⅲ層の流入が主でわずかに赤褐色の焼土が混じる程度なので切りあいは確認できなかった。遺物の出土はなかったが，木炭片が少量出土した。なお，この木炭片はC^{14}年代の測定を依頼した。

(2)土坑　(第76図)

D－6区北側に位置し，直径80cmから90cmの大きさの不整円形を呈しており，深さは約72cmである。底面は1辺が約50cmの隅丸の方形に近い形である。東側の壁面途中に幅約6cmの段を



第76図　D－6区土坑と出土遺物

約50cmにわたってもつ。Ⅲb層からⅣ層にかけて掘り込んでおり，埋土はⅢa層が流入している。平面プランを確認した面から15cm下に第76図 465に示す土器が出土した。竹管状のもので施文した凹線文の土器の口縁部の破片である。口唇部には中央部に凹線をもつ渦巻状の装飾をもつ。胎土に長石とごく少量の滑石を含む。焼成は良好である。第87図 536と同一個体とみられるが接合しない。第Ⅱ類に分類される。

第3節　遺物

(1)土器

Ⅲ層中より発見された土器は縄文中期の凹線文土器を中心とするもので，胎土に滑石を多く含んでいるものもある。城の遺構が一部Ⅲ層まで及んでいる箇所もあるため，表層や掘の埋土内からも同様の土器が出土している。土器は城の大掘を中心として調査範囲の西側，中でも南半分に多く分布する傾向にある。これは東側及び北側部分は城の時期にかなりの削平が行なわれたことによるものである。

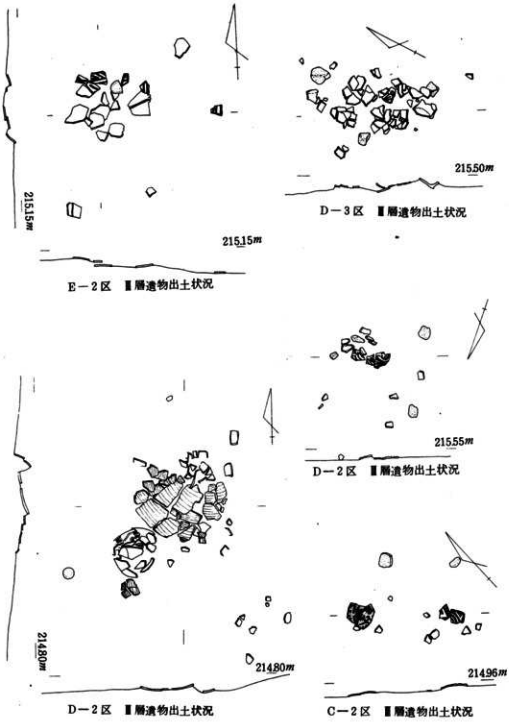
出土した土器は凹線文土器，凹線文の間に連点もしくは貝殻腹縁押圧の文様をもつもの，口縁部が肥厚してその部分にヘラや貝殻腹縁で施文したものや文様のないもの，晩期の黒色研磨土器などである。これらの土器を　類に類別した。以下順に説明していく，

第Ⅰ類　(第78図～第80図)

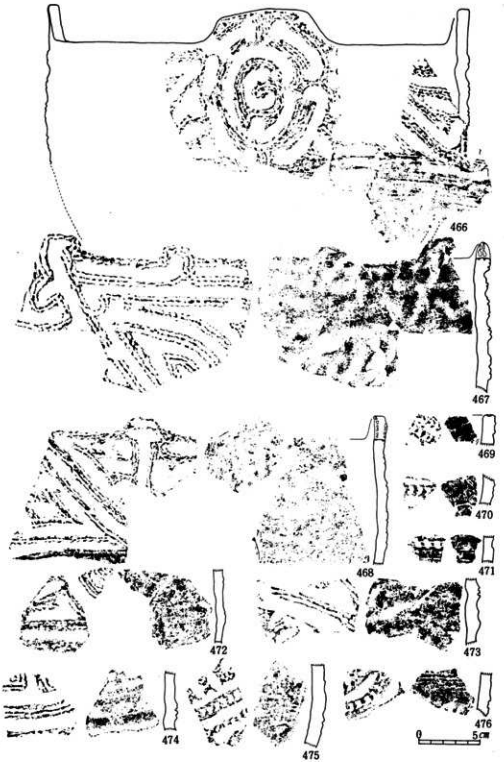
凹線文を基本として凹線の間に連点に近い2列の押引文あるいは貝殻腹縁の押圧文を施す土器である。第78図 466～ 468・ 472～ 474は指頭状のものによる凹線文の間に2列の連点に近い押引文を施文したものである。器形は口縁部がわずかに内彎する深鉢である。口縁部はいずれも山形の隆起をもつ。文様は凹線文を施した後押引文を施すもの（ 467・ 468），逆に押引文を施した後に凹線を施し，そのために押引文が消えている部分が観察されるもの（ 466）がある。胎土は全て滑石を含み焼成は良好である。第79図 477，479，480は凹線文の間にヘラ状のもので数条の不規則な沈線を施すものである。凹線を施文した後に沈線文を施している。器形は口縁部がわずかに外反する深鉢である。胎土に滑石を含み焼成は良好である。これらは同一個体とみられるが接合しない。第78図 469～ 471，475，476，第79図 481～ 494，第80図 495～ 500は凹線の間に貝殻腹縁による押圧文を施すものである。貝殻腹縁を凹線と平行に押圧するもの（第79図 481～ 494）と垂直に押圧するもの（第78図 469～ 471，475，476）とがある。第80図 496～ 500は押引文である。胎土には滑石を含まず，滑石混入のものに比べると凹線の幅が狭くなっている。裏面に条痕のみられるものがある（第79図 494，第80図 496～ 500）。第Ⅰ類土器調査範囲全体に点在するが，C～E－2区とB～D－5～6区にややまとまる傾向にある（第80図）。なおこの分布図に示したものは図に表した遺物のみである。

第Ⅱ類　(第81図～第91図)

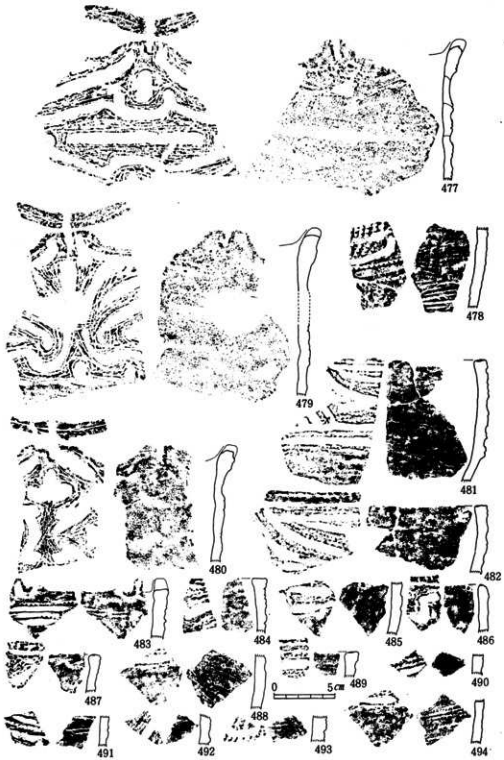
凹線文の土器である。施文具によって2つに大別できる。指頭状のものと竹管あるいは木等の棒状のものによって施文されたとみられるものである。


215.15m
215.15m
E－2区　Ⅱ層遺物出土状況
215.50m
D－3区　Ⅱ層遺物出土状況
215.55m
D－2区　Ⅱ層遺物出土状況
214.80m
214.80m
D－2区　Ⅱ層遺物出土状況
214.96m
C－2区　Ⅱ層遺物出土状況

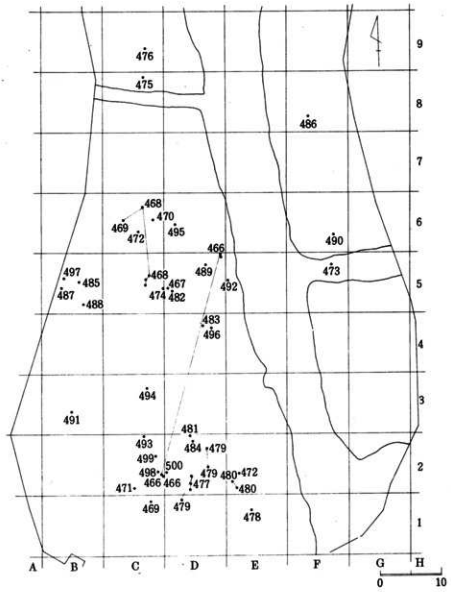
第77図　遺物出土状況



第78図　第Ⅰ類土器(1) (1/3)



第79図　第Ⅰ類土器(2)（$\frac{1}{3}$）



第80図　第Ⅰ類土器(3)（$\frac{1}{3}$）とその分布状況　（縮尺－1／500）

第81図 501～第83図 521は指頭状のもので施文された土器で太形凹線文と呼称されるものである。器形は深鉢で胴部が張り，口縁部が内彎するもの（第81図 501，第82図 504，507,508等）と胴部が張り，口縁部が外反するものがある。口縁部には4個所あるいは8個所の隆起した部分をもち，さらにその個所に刻みを入れている。（第81図 501，502）。第83図 503は口唇部に指頭状のもので刻みを入れて波状口縁をなしている。一方，破片でみる限り平縁で，第82図 508，第83図 514のように口唇部にヘラ状のもので沈線を廻らしているものがある。第83図 511は山形の口縁で口唇部に指頭状のものによる刻みをもつ。

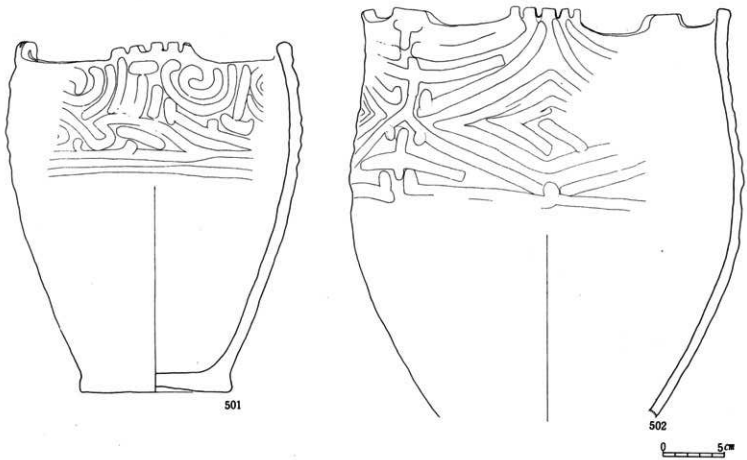
文様は胴部上半から口縁部にかけて集約されている。第81図 501の曲線文と直線文を組み合わせた文様を除き，そのほとんどが直線による文様を組み合わせたもので，文様のはじめ，もしくは終りの部がやや曲線化しているものがそのほとんどである。第83図 515には連点文がみられる。胎土にそのほとんどに滑石を含んでいるが第81図 502，第83図 513，515のように多量に含むものと，第82図 508のようにごく少量しか含まないものがある。焼成はいずれも良好である。

第84図 522から第88図 585は竹管あるいは木等の棒状のもので施文したものの中で，条痕のみられないものである。器形は深鉢で，第84図 522のように胴部がわずかにふくらみをもち，口縁部が内彎するものがあり，中にはほぼ直行するもの（第85図 523），外傾するもの（第85図527）もある。底部は第84図 522に示すように擬が広がる平底である。口縁部はそのほとんどが山形，あるいは波状口縁となり，第85図 523，524，第86図 530，531，第87図 536のように刻み目を入れているが，第84図 522のようにそのままのものもある。口唇部はところどころに刻みを入れ，沈線を廻らすもの（第87図 548，550），第87図 554のようにヘラ状のもので施文したと思われる幅の狭い刻みを入れるもの，あるいは指頭状のものにより波状口縁をなしているもの（第87図 551，第88図 582）がある。

文様は胴部上半から口縁にかけて集約され，文様帯の下端に凹線を廻らして無文の部分と区切りをつけているものが多い（第84図 522，第85図 525，529等）。文様の構は直線文と渦巻文の組み合わせ（第84図 522，第85図 523，第87図 538），入組文（第87図 535），あるいは直線文を主として直線の端部を一部曲線化したもの（第85図 524，525，528，529，第86図530，531，534，第87図 545，546）などである。なお，524，525と 530，531はそれぞれ同一個体とみられるが接合しない。また直線の組み合わせにより文様を構成するもの（第87図 548～555）がある。第86図 532，533は口縁部に透かしによる装飾をもつものである。連点文を施すことにより文様帯を区切っている。これらは同一個体と考えられるが接合しない。第88図 576～578，580，581は直線文と連点もしくは連点に近い短い直線文を組み合わせたものである。第88図 582～585はやや文様のみだれを感じさせる。

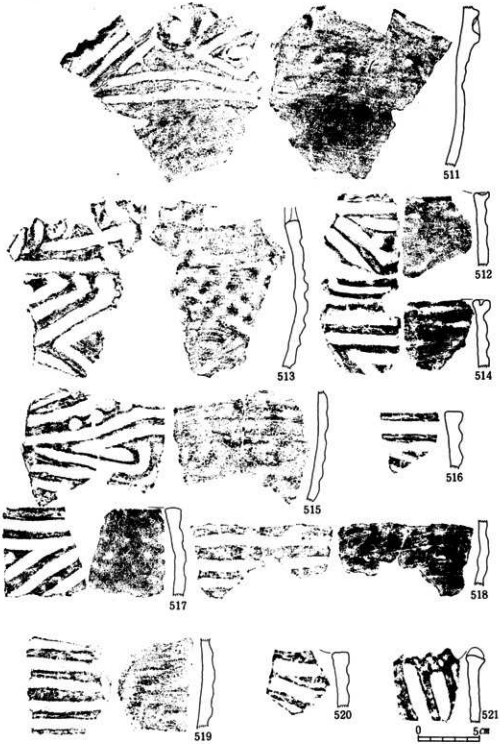
胎土はその量に差はあるものの，滑石を混入しているものが多い。焼成はいずれも良好である。

第89図 587から第90図 604は文様が単純化して，その断面観が比較的に浅くなり，条痕のみ

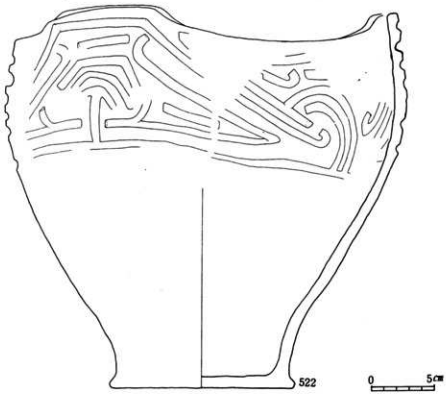


第81図　第Ⅱ類土器(1)（$\frac{1}{5}$）

第82図　第Ⅱ類土器(2)（$\frac{1}{3}$）



第83図　第Ⅱ類土器(3)（$\frac{1}{4}$）



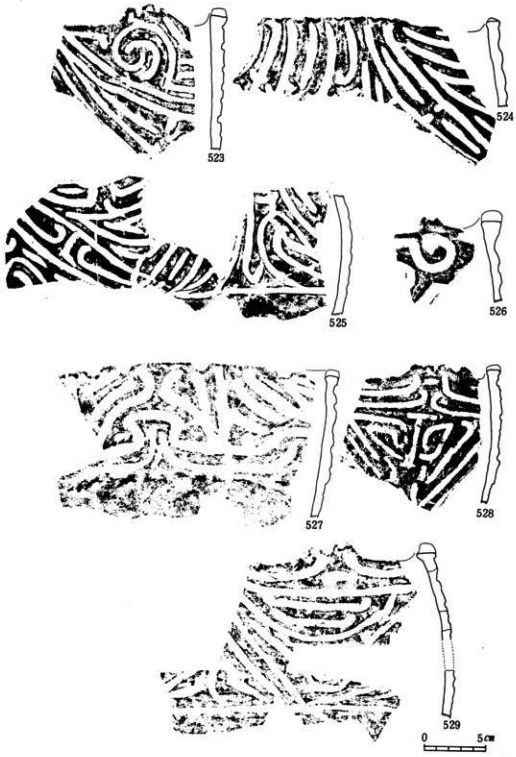
第84図　第Ⅱ類土器(4)　(1/3)

られるものである。器形はいずれも深鉢で口縁部が内彎するもの（第89図 **587**，**589**，**591**），ほぼ直行するもの（第89図 **588**，**592**，**594**，第90図 **603**），あるいはほぼ直線状に外反するもの（第89図 **590**，第90図 **598**，**600**，**602**）がある。口縁部には山形の隆起をもち，その頂部に刻みを入れるものと平口縁のものとがある。しかし山形部分はいずれも小さく，かつ平口縁の土器は破片が比較的小さいために，平口縁の土器も中には山形の隆起をもつ土器の一部であるものの可能性をもっている。

文様は単純化した直線文が多く，中には曲線文もみられるが文様が単純化しており，断面観も浅い。

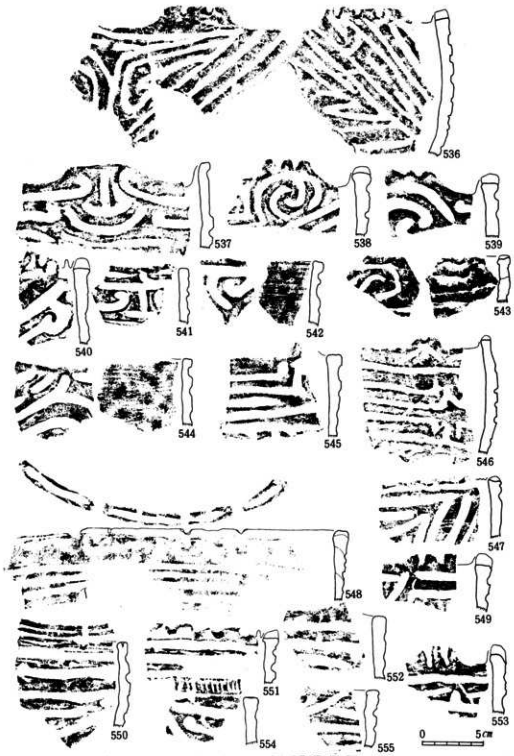
胎土にはいずれも滑石は含まず，焼成は普通である。第89図 **594**には補修孔とみられる穿孔がある。

第92図は第Ⅱ類として分類し図に示した土器の分布状況である。土器はほぼ調査範囲全体に分布しているが，西側の南部及び中央部の２個所にややまとまる傾向をみせる。実線で結んでいるものは接合したものであるが，かなり離れた地点のものも接合しており，土器片がだいぶ移動したことがうかがえる。



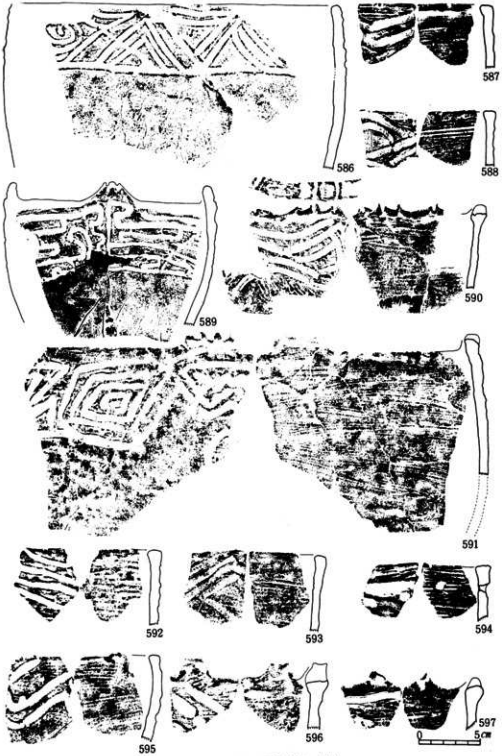
第85図　第Ⅱ類土器(5)（$\frac{1}{4}$）

第86図　第Ⅱ類土器(6)（$\frac{1}{3}$）

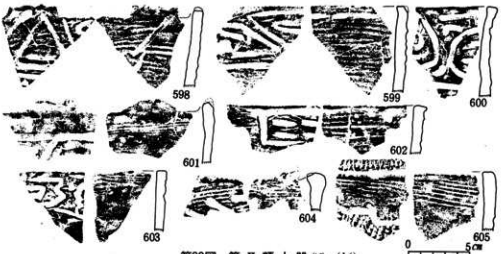


第87図　第Ⅱ類土器(7)（$\frac{1}{4}$）

第88図　第Ⅱ類土器(8) (1/3)



第89図　第Ⅱ類土器(9)（1/4）



第90図　第Ⅱ類土器(10)　(1/3)

第91図 **606～608**はいずれも胎土に滑石を含むが，凹線を施文しない土器である。**606**は胴部が張り，内彎しながら口縁端部でわずかに外反する深鉢である。口縁部がやや肥厚し，その部分に指頭状のものによる押圧の連点文を施す土器である。口唇部にも同様の連点を施す。このために内面にもわずかな段を形成している。胎土に滑石を含み，焼成は良好である。**607**，**608**は同一個体とみられるが接合しない。胴部がふくらみ口縁部が内彎する深鉢形である。口縁部は小さい山形になり，その頂部に刻み目を施す。胎土に多量の滑石を含んでおり，ヘラ状のものによる器面調整の痕跡が顕著にみられる。焼成は良好である。

これらの土器は凹線文を有しないものの，胎に滑石を含む点，あるいは器形等により一応第Ⅱ類として扱った。

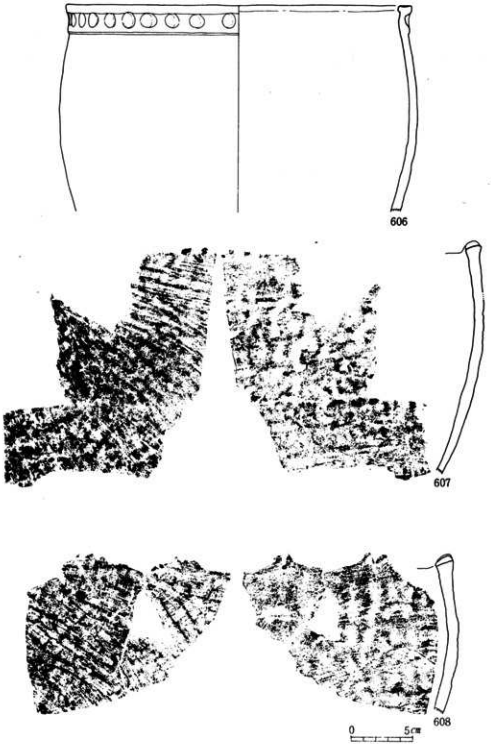
第Ⅲ類　(第93図～第99図)

第Ⅲ類として扱ったものは口縁部をやや肥厚させ文様帯を作出する土器を基本にするもので，肥厚した部分に文様を施すもの，肥厚した部分にさらに粘土紐を張り付けその上に施文するもの，無文のままのものの3つに分けられる。

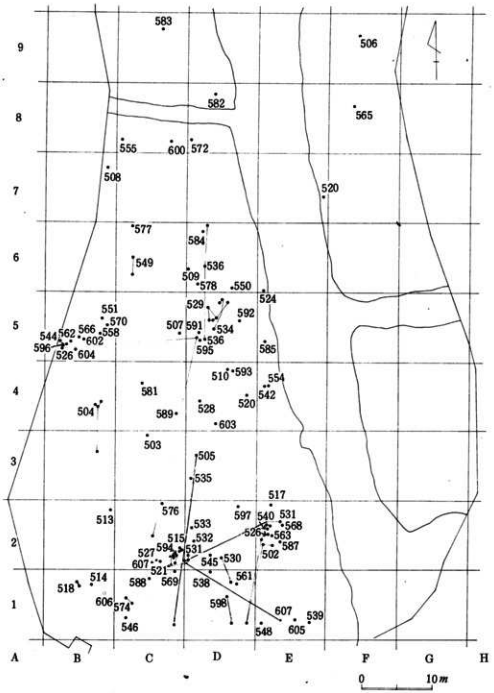
Ⅲａ類　肥厚した部分に文様のみられるものである。

器形は深鉢で，口縁部は文様が内彎するもの（第93図 **609**，**610**，第94図 **613**，**614**，**616**，第95図 **638**，**639**，**641**，第96図 **650**，**651**），口縁端部がわずかに内彎するもの(第95図**621**，第96図 **646**，第96図 **661**，**664**），直線状に外反するもの（第 図 **622**，**629**，**632**，第 図 **644**等）がある。

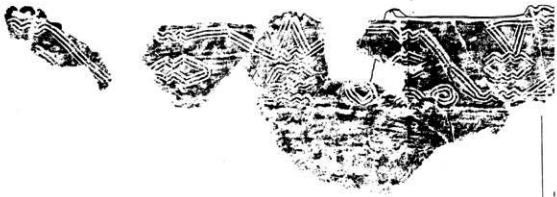
沈線文を施しているもの（第93図 **609**，**610**，第 図 **612**～ **614**，第95図 **617**～ **623**，第96図 **643**～ **649**）についてみると，第93図 **610**は三本の平行な直線を基本として，山形文もふく



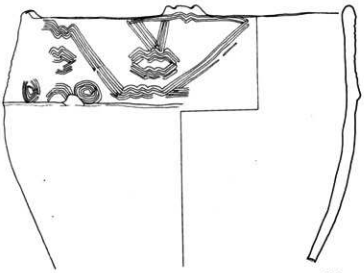
第91図　第Ⅱ類土器(3)



第92図　第Ⅱ類土器分布状況　（縮尺－1／500）



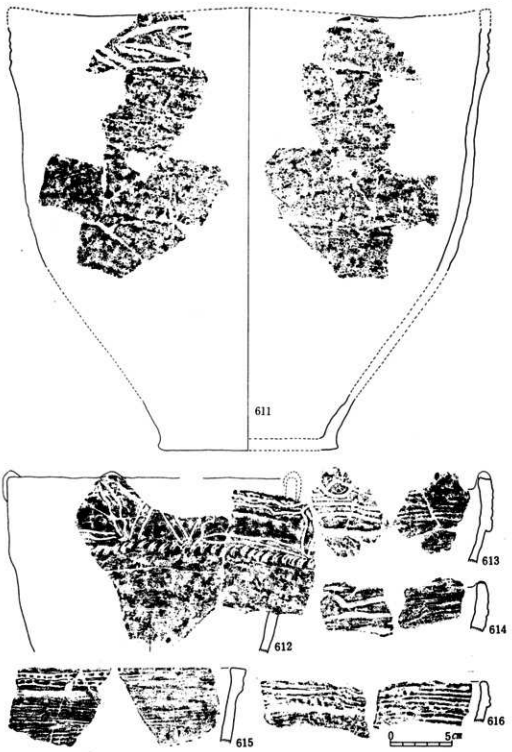
第93図　第Ⅱ類土器(1)



610

610

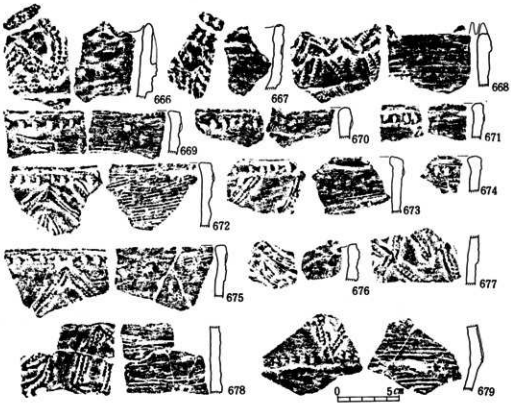
(1/4)



第94図　第Ⅲ類土器(2) (1/4)

第95図　第Ⅲ類土器(3)（$\frac{1}{4}$）

第96図　第Ⅲ類土器(4)（$\frac{1}{3}$）



第97図　第Ⅲ類土器(5)（⅓）

は同心円文を描くものである。口縁部に4つの山形をもち，沈線がその部分にも及んでいる。

第94図 **612**は口縁部下に縦位の爪形文を廻らして無文部と区分し，これより上部に2本の不揃いの沈線文を施している。第95図 **617～ 622**はヘラ状のもので削りとることにより沈線を描くもので，直線による波状文がその主たる文様である。第94図 **613，614**，第96図 **643～ 645**は竹管あるいは木等の先端の不揃いのものを施文具として用いたもので，直線あるいは曲線を主としている。

押引文を施文しているものには，先端の鋭いもので施文したもの（第94図 **611**，第95図 **636 639～ 641**）と凹部の浅い半截竹管状のものを用いて施文するもの（第94図 **615**）がある。

また，貝殻腹縁による押圧文を施すもの（第95図 **624～635，637，638**）や竹管あるいは木等の棒状の施文具を用いて連点文を施すもの（第96図 **652～ 664**）などがある。第96図 **650 651**は曲線を描く沈線文と連点文を組み合わせた文様をもつものである。

これらの土器はその内外面，特に内面に条痕が顕著にみられる。

Ⅲb類　　口縁部が肥厚することはⅢa類と同様であるが，その肥厚した部分にさらに粘土紐をはりつけ，その上に施文しているものである。

器形は直線状に外反するもの（第97図 **666**，**667**），口縁端部でわずかに内彎するもの（第97図 **669**，**671～675**）などがあり，いずれも深鉢である。第 図 **668**は山形に粘土紐がはりつけられており，その上に施文しているものである。文様は貝殻腹縁を押圧して施文したもの（第97図 **667～675**，**677～679**）や，先の鋭いヘラ状のものを用いて，押引文に近い連点文を施したもの（第97図 **666**）がある。第97図 **669～675**，**679**は口唇部直下，あるいは文様帯の下端に凸帯を廻らして，その上に貝殻腹縁の押圧文を施している。貝殻腹縁による押圧文は前述した凸帯上の施文を除き，そのほとんどが粘土紐と平行であるが，第97図 **667**は直行して押圧されている。

これらの土器はその内面のほとんどに条痕がみられる。

Ⅲc類　この類も口縁部が肥厚することは前述のⅢa類，Ⅲb類と同様であるが，肥厚した部分に文様がみられないものである。なお口縁部に凸帯を廻らしているものもこの類に含めて扱った。

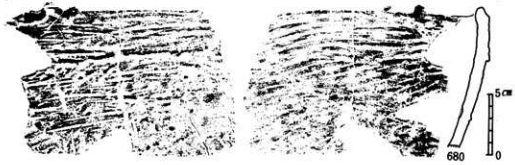
器形はいずれも深鉢で，口縁部が内彎するもの（第98図 **680**，第99図 **681**，**683**，**688～691**），直線状に外反しながら口縁端部にきてわずかに内彎するもの（第99図 **684**，**685**，**687**，**695**）や外反するもの（第99図 **686**）がある。

第99図 **685**，**693**はやや幅広の粘土紐を口縁部に廻らすもので，第99図 **681**，**684**，**686**，**689**，**690**は断面三角形の粘土紐を廻らすものである。小さい山形の隆起をもつものもあり第99図 **687**，**690**，**691**はその頂部に刻みを入れているが，第99図 **689**には刻みはみられない。第99図 **680**は内外面とも条痕が顕著にみられる。他に第99図 **685**，**687**，**690**にも条痕がみられる。

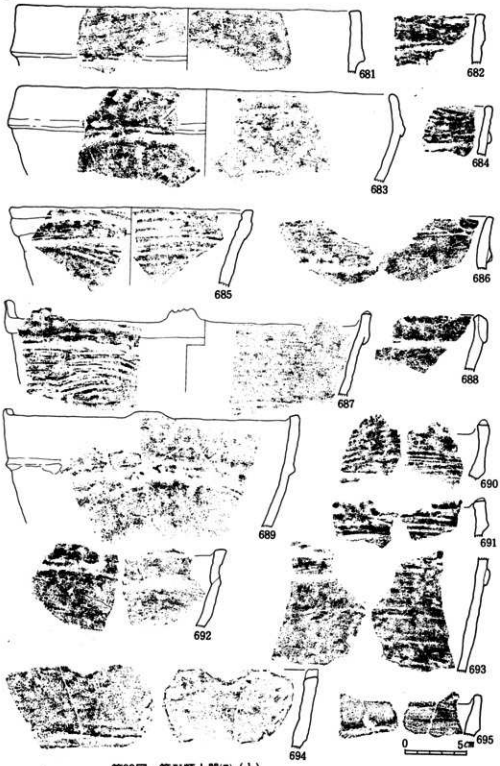
第 100図は第Ⅲ類土器のうち図に示したものの分布状況である。その分布は調査範囲全体に及んでいるが，第Ⅰ類，第Ⅱ類と同様に西側の南部と中央部の2個所にやや集中する傾向にある。

第Ⅳ類　（第101図～第105図）

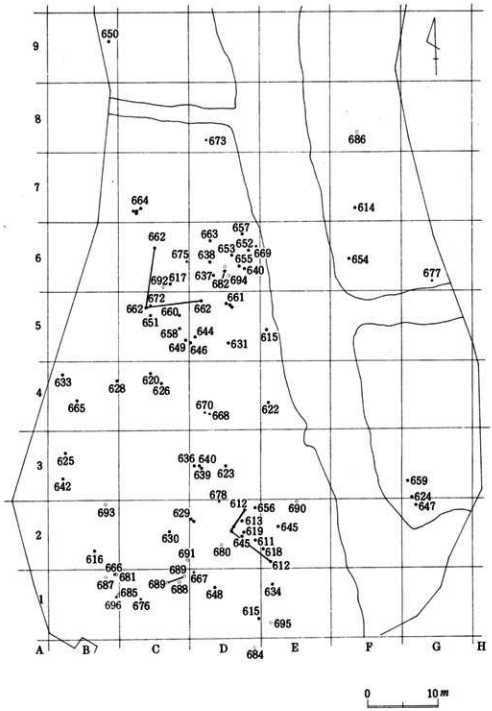
無文もしくは条痕のみられる土器を第Ⅳ類とした。第 101図 **696**や第 101図 **698**のように口縁部に山形の隆起した部分をもつものや，第 101図 **697**のように口唇部に沈線を廻らすものやその他の文様をもつものもこの類に含めて扱った。



第98図　第Ⅲ類土器(6)（1/3）



第99図　第Ⅳ類土器(7)（1/4）



第 100図　第Ⅲ類土器分布状況　（縮尺－1 /500）

器形は深鉢で，口縁部はほぼ直行するもの（第 101図 **696**），外反するもの（第 102図 **697**，**699**，第 103図 **700**，**703**，**719**，**721**），内彎するもの（第 103図 **704**，**705**，**707**～ **709**，第 104図 **711**～ **716**）などがある。口唇は水平なもの（第 103図 **702**，**703**，**708**，**709**，**712**）内傾するもの（第 103図 **701**，**706**，**707**，第 104図 **711**，**719**），わずかに外傾するもの（第 104図 **721**がある。第 103図 **705**は口唇部に浅く狭い刻み目を施すものである。

第 102図 **698**，第 104図 **723**，**724**，**726**，第 105図 **727**は山形の隆起もつものである。第 104図 **725**はわずかに山形口縁をなしている。第 105図 **729**，**731**は口唇部に指頭状のもので押圧したとみられる刻みをもつ。

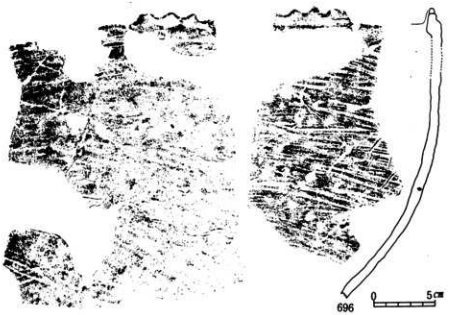
第 105図 **728**，**730**，**732**，**733**は口縁部が波状をなすものである。口縁部は内彎するもの，直線状にわずかに外反するものである。

以上，これらの土器は内外面ともに条痕のみられるものが多いが，第 103図 **708**，**710**，第 104図 **717**，第 105図 **728**，**730**，**732**のようにみられないものもある。

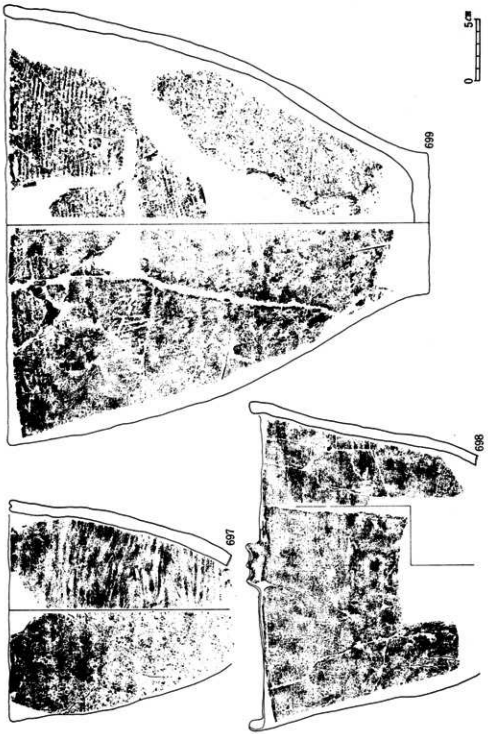
第 106図はⅣ類土器の分布状況を示したものである。

底部　（第107図～第109図）

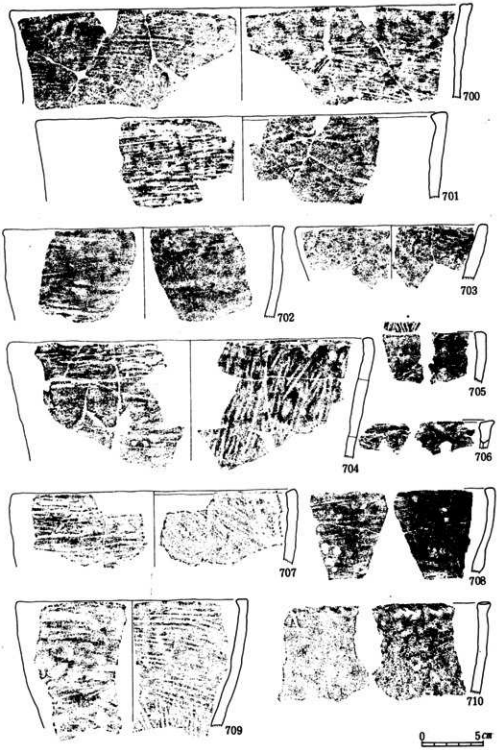
底部は全て深鉢のものとみられる。裾部が広がり端部の断面がほぼ垂直に切れるもの（第107図 **734**～ **747**），裾部が広がるものの端部の断面は丸みをおびているもの，もしくはややとがりぎみのもの（第 108図 **749**～ **755**，第 109図 **773**～ **782**），裾部の広がりがほとんどみられないもの等がある。胎土に滑石を含むものと含まないものとがあるが，前者は断面端部が垂直に切れるものに含まれる傾向にある。



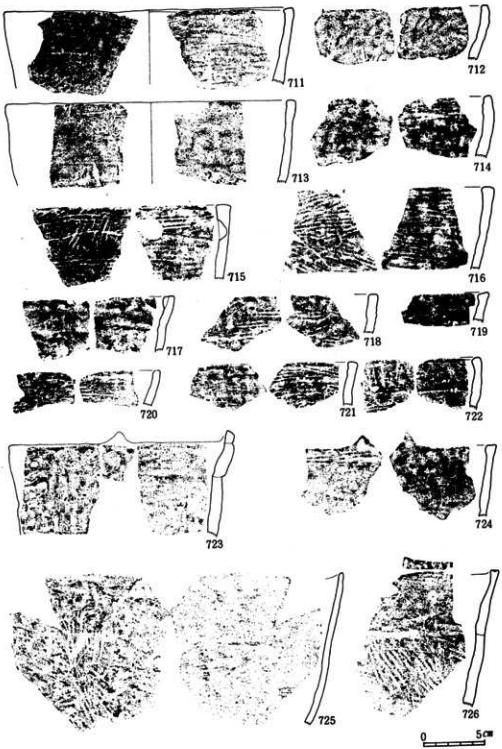
第 101図　第Ⅳ類土器(1)（1/3）



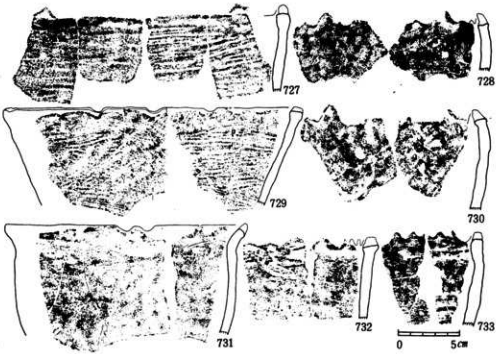
第 102図　第Ⅳ類土器(2) (1/4)



第 103図　第Ⅳ類土器(3) (1/4)



第 104図　第Ⅳ類土器(4) (1/3)



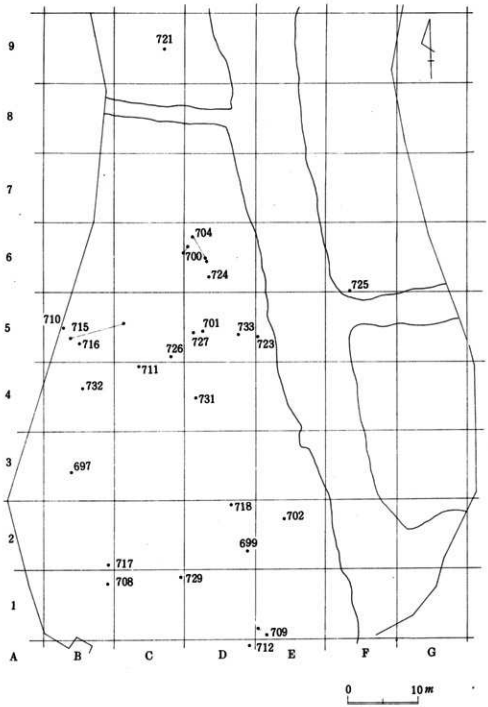
第 105図　第Ⅳ類土器(5)　(1/3)

第 107図 **735**，**740**は2格の粘土板をはりあわせて底を作っているものである。これらの土器は器壁の本体を斜めに接合しており，その接合部分を内面または外面，もしくは両面から補強している。第 107図 **737**はくびれの部分に指頭状のものによる押圧整形の痕跡がみとめられる。第 107図 **739**，**741**等は上げ底になっている。第 108図 **770**は底部裾がほぼまっすぐたち，器本体は大きく広がり，裾部に押圧によるとみられる文様をもつ。第 108図 **767**も裾部に同様の文様をもつが，裾部は広がり，器壁本体はわずかに広がるがほぼまっすぐ立ちあがるものである。第 109図 **783**，**785**，**786**，**788**，**789**，**792**，**793**は底部裾がほぼまっすぐにたち，器壁本体はほぼ直線状にわずかに外傾するものである。**789**，**792**は器壁本体との接合部分の内面を補強している。**783**，**786**には内外面とも条痕がみられる。

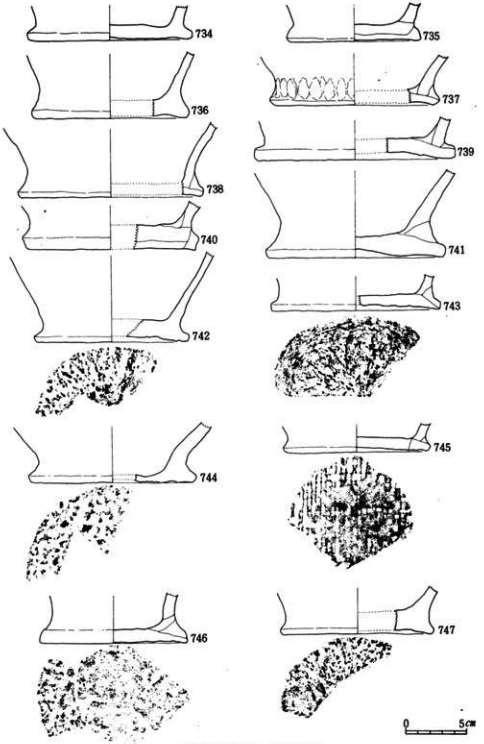
これらの底部には数種類の圧痕がみられる。鰐の背稚によるもの（第 107図 **742～744**，**746**，**747**，第 108図 **751**），木葉によるもの（第 108図 **756**），アンペラ状のものによるもの（第 107図 **745**，第 108図 **748**，**752**，**771**，第 109図 **772**，**774**，**776**，**777**，**779**，**784**，**792**）等がある。

第Ⅴ類　（第110図）

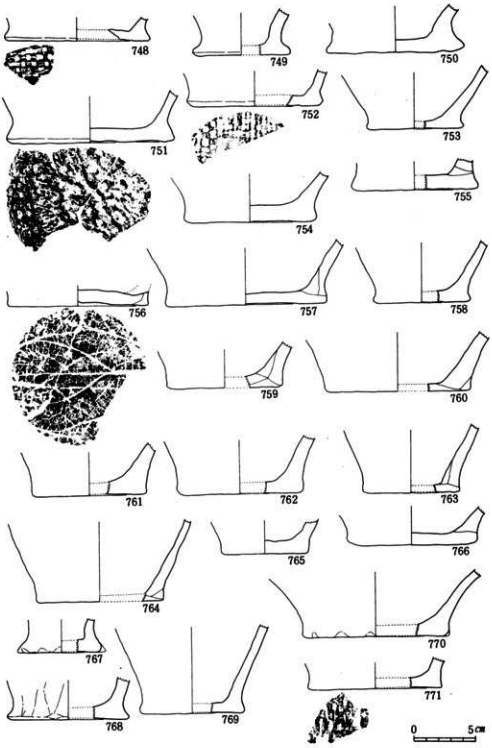
口縁部が外反し，口唇部が平坦面をなし，肩が張り出して円底につづく浅鉢形土器と思われる。口唇部には明良ではないがキザミ目を施した痕跡がみられる。文様は竜状施文具をもちい外面は縦列横線文を基調し，口縁端部下より肩部にかけ斜状に沈線を施している。内面は押し



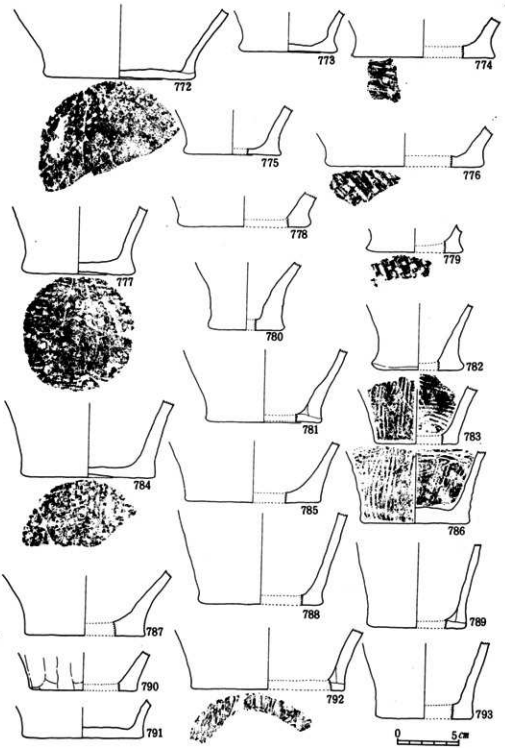
第 106図　第Ⅳ類土器分布状況（縮尺－1／500）



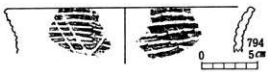
第 107図　底　部(1) (1/4)


748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
0
5cm

第 108図　底　部(1) (1/3)



第 109図　底　部(3) ($\frac{1}{3}$)



第 110図　第Ⅴ類土器（⅓）

引き状の縦列横線文を施している。色調は外面が赤褐色，内面は明黄褐色である。焼成は良好で，胎土に石英砂粒，小礫粒を含み滑石は含んでいない。

第Ⅵ類　（第111図）

第Ⅲ層（アカホヤ）中より出土の土器で，第Ⅱ類の土器と伴って出土したものである。

第 111図 **795**は器形的には第Ⅱ類の器形に相当すると思われる。口縁部が内彎し，口唇部を平担にしたのち棒状の施文具で部分的に押しつけて凹状のキザミ目を施している。尚，復元口径は29cmである。内外面とも篦ケズリで，特に外面はナデ調整を二次的に行って器面の調整を行っている。文様は，棒状の施文具により押し引き手法による横位２列横点文を１組にして２段施し，それを区画するように凹線文を施している。色調は暗茶褐色である。焼成は良好で，胎土に滑石を多く含む。

第 111図 **796**は **795**と同一個体で口縁下付近と思える。調整，色調，焼成，胎土ともに **795**と同一である。

第 111図 **797**は口縁部がやや内彎し，口唇部は平担面をなすと思われる。内外面の調整は **795**と同様である。文様は押し引き手法による横位の凹点文であるが，**795**に比べやや雑に施している。色調は暗茶褐色である。焼成は良好で，胎土に滑石を多く含む。

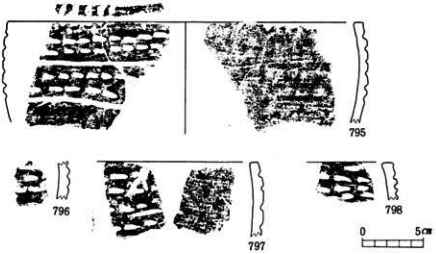
第 111図 **798**は口縁部が内彎し，口唇部は平担面をなす。また口縁端部内側はやや張り出す器形をなす。調整は **795**と同様である。文様は横位３列凹点文を施している。色調は暗茶褐色を呈し，焼成は良好である。胎土に滑石を多く含む。

第Ⅶ類　（第112図）

第 112図 **799**は復元口径約24.8cmの口縁部である。器形としては深鉢形を呈すると思われる。口縁部が直行するもので，口唇部は平担面をなす。外面は口縁端部下より横位に押し引き手法による４条の文様を施し，口縁部下より胴部にかけて荒く横位に篦状施文具による条痕がみられる。内面はやはり横位の条痕を施している。色調は暗褐色である。焼成は良好で胎土に砂粒を含む。

第 112図 **800**は口縁部がほぼ直行するもので，口唇部がやや凹状を呈する。これは内外面の調整時にできたもので意図的ではないと思える。押し引きによる。凹点文を横位に２列に施したのちにナデ調整を器面に行っている。また，２列凹点文下に凹線による文様もみえる。内面は篦による条痕が見られる。色調，焼成，胎土ともに同じである。

第 112図 **801**は器形的には同一であるが，口唇部がかまぼこ状になり口縁端部内側が肥厚する感じである。文様は横位に数列の押し引き手法によるものであるが，雑な文様の施し方である。やはり **800**と同様に文様をつけたのちにナデ調整を施している。内面はヘラによる。横位のナデ調整である。色調，焼成，胎土ともに同一である。



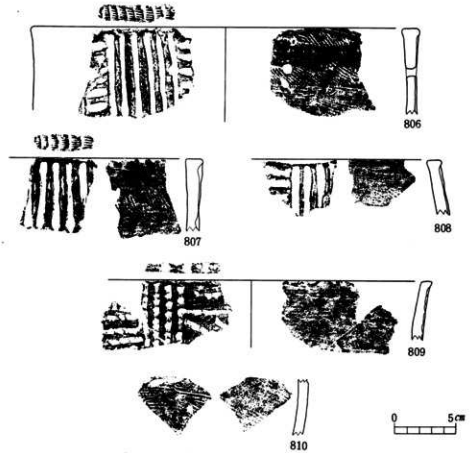
第 111　第 Ⅵ 類 土 器　(1/3)

第 112図　第 Ⅶ 類 土 器　(1/3)

第 112図 **802**は口縁部がやや内彎するもので，調整，文様の施し方は **800**，**801** と同様である。色調，焼成，胎土ともに同一である。

第 112図 **803**は口縁部がほぼ直行し，口唇部が外下りである。口縁端部内側に粘土帯をはりつけている。凹点文を施す部分に粘土帯を張り付け肥厚した後文様を付けており口縁下より胴部にかけて，篦ケズリを行っている。色調は明黄色で，焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。

第 112図 **804**は口縁部がやや内彎し，口唇部を平坦にしている。また，凹点文を施す部分に粘土帯をベルト状に張り付けて肥厚した上に横位の凹点を施すもので，口縁下より胴部にかけ



第113図　第Ⅷ類土器（1/3）

て篦ケズリを行っている。また凹点を施したのち篦ナデ調整を肥厚部分に施している。色調，焼成，胎土ともに同一であるが部分的にススが付着している。

第112図 **805**は復元口径21.2cmで，ほぼ器形，調整ともに **804**に同じであるが凹点文が4列に横位に施されている。色調，焼成，胎土ともに同一である。

第Ⅷ類　（第113図）

第113図 **806**は復元口径31.6cmで，口縁部が直行するものである。肥厚した口縁部には半截竹管により5条1組の縦位の押引を行い，横位に5～6条の押引を行っておりほぼ一定間隔による文様である。また，口唇部は数個所を凸状にし，その部分に貝殻による押引を行っている。内面は口縁端部下には右下りの斜状の条痕を施し，横位に一条の篦によるナデ調整を行っている。また口縁部下より胴部にかけては荒く篦調整を行っている。口縁端部下 3.2cmの位置に補修孔がみられ，その下にも未完成の補修孔の痕跡が見られる。 **807**も同様な施文方法をとっているが半截竹管の押引が始終が強くおさえており，長さも **806**よりは短い。内面は篦ナデ調整である。 **808**は半截竹管による文様は同じであるが，口縁部が内傾し，口唇部が平担平をなし，

凸状の口唇部とはならない。内面は篦ナデ調整である。色調は淡赤褐色で，焼成は良好である。胎土に石英砂等を含む，滑石は含まない。

第 113図 809は口縁部がやや外反するもので，口唇部がやや山形となり，篦状施文具による押しナデを等間隔に凹文として施している。外面は，横位，縦位，斜状に篦による押引を施し，内面は篦ナデ調整である。色調は明茶褐色で，焼成は良好である。胎土に石英砂粒を含む。

第 113図 810は胴部付近のもので，口縁部下に篦状施文具による押引がみられる。胴部は条痕文を施し，内面は篦ナデ調整を行っている。色調は黄褐色で焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。

第Ⅸ類 （第114図 811）

胴部が張り口縁部が内彎する深鉢形の土器である。口唇部は平坦で山形の小さい隆起をもつ。口唇部直下から口縁部にかけてやや幅広の粘土紐を廻らしており，その上に指頭状のものの押圧によるとみられる連点文を施す。なおこの隆帯は口唇部に山形をもつ個所では２段め，３段めは橋状になり，土器本体の外面と隆帯の内面を整形した痕跡がみられる。内外面とも条痕文が一部にみられ，そよからさらに整形したものと観察される。胎土には石英その他を混入する砂を含み，焼成は良好である。

第Ⅹ類 （第114図 812，813）

口縁部に円筒状の突起を有する土器である。この突起は断面の内側が半円形状になっている。口縁部に粘土帯をはりつけその上に棒状のもので押引文に近い連点文を施す。円筒状突起の口唇部や土器本体の口唇部にも同様の文様を施文する。813はこの文様を施文した後一部ナデにより文様の消えている部分がみられる。内面にはわずかであるが条痕文がみられる。

第Ⅺ類 （第114図 814，815）

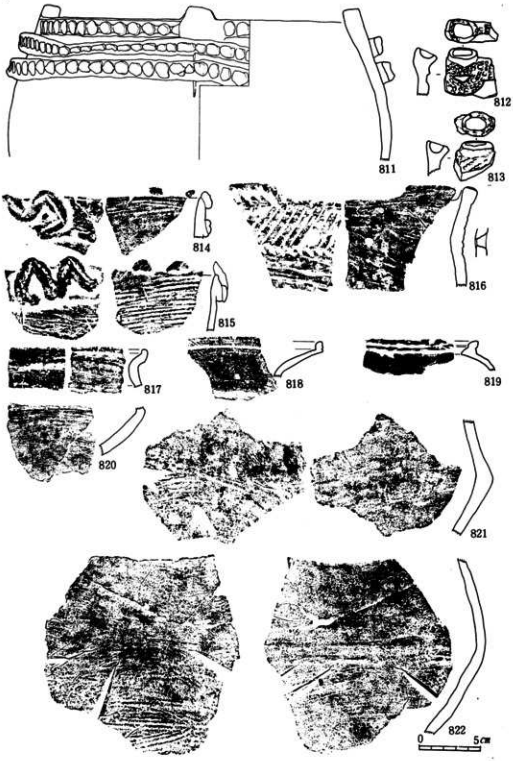
口縁部に粘土帯をはりつけて肥厚させ，さらにその上に粘土紐をはりつけその上に貝殻腹縁を押圧した文様をもつ土器である。Ⅲｂ類に類似しているが，はりつけている粘土帯の幅やその厚さ，その上にはりつけている粘土紐上の文様等の差によりⅨ類として別に扱った。いずれれも内外面とも条痕文がみられる。

第Ⅻ類 （第114図 816）

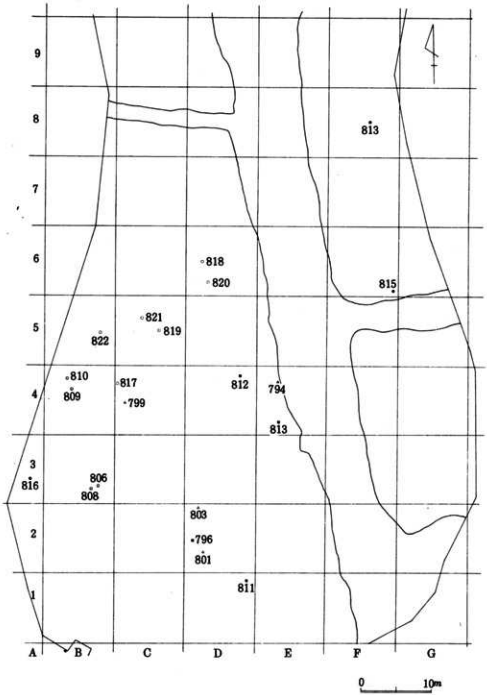
口縁部が直線状に外反深鉢形の土器である。口唇部に山形の隆起をもちその頂部に浅い刻みを入れている。文様は口縁部に左下りの直線の沈線を施しさらにその下にこれとそれぞれ垂直になるように短い直線の沈線文を施す。内外面ともわずかに条痕文がみられる。補修孔と思われる穿孔がみられる。

第ⅩⅢ類 （第114図 817～820）

精製研磨土器の浅鉢である。817は口縁部は外反し，口縁端部に至り直行するものである。わずかな山形になる。818は大きく外反し口縁端部がやや内傾ぎみに直行するもので，口唇部が丸みをおびる。819は胴部の大きく張るもので，口縁部外面に２条の浅い沈線を廻らしており，内面にも１条の沈線を廻らし，これにより段を形成している。口縁部はやや外反し，口唇



第 114図　第Ⅸ，Ⅹ，Ⅺ，Ⅻ，ⅩⅢ，ⅩⅣ類土器（$\frac{1}{3}$）



第 115図　第Ⅸ，Ⅹ，Ⅺ，Ⅻ，ⅩⅢ，ⅩⅣ類土器分布状況　（縮尺－1／500）

第30表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層	類別	器種	法量cm	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
465	D－6	土拡	Ⅱ	深鉢	器厚 1	口唇部に鳥巻状の装飾	棒状のものによる直線状の凹線文	石英	良好	褐色	
466	C－2 D－5	Ⅲ Ⅲ	Ⅰ	深鉢	口径 33.6 器厚 0.7	口縁部ほぼ直行	凹線文の間に2列の押引文	滑石	良好	明褐色	
467	E－5 D－5	掘 域	Ⅰ	深鉢	器厚 0.9	口縁部わずかに内彎		滑石	良好	褐色	
468	C－6 C－7	Ⅲ Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8			滑石	良好	灰褐色	
469	C－1	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 1.0		凹線文の間に貝殻腹縁による押引文	砂	普通	暗茶褐色	
470	C－7	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.9			砂	普通	淡褐色	
471	C－2	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.9			砂	普通	黒褐色	
472	C－7 E－2	Ⅲ Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.7		凹線文の間に2列の押引文	滑石(少)	普通	褐色	
473	F－5	掘	Ⅰ	深鉢	器厚 0.9			滑石	良好	黄褐色	
474	D－5	域	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8			滑石	良好	黄褐色	
475	C－8	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 1.1		凹線文の間に貝殻腹縁による押引文	砂(少)	普通	淡赤褐色	
476	C－9	域	Ⅰ	深鉢	器厚 0.9			砂	普通	淡褐色	
477	D－2	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.7	口縁部わずかに外反	凹線文の間に沈線文	滑石多	良好	褐色	
478	E－1	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8		凹線文の間に貝殻腹縁による押圧文	砂	普通	黒褐色	
479	D－1 D－2	Ⅲ Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.9	口縁部わずかに外反	凹線文の間に沈線文	滑石(やや大きめ)	良好	淡褐色	
480	E－2	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8			滑石(やや大きめ)	良好	淡褐色	
481	D－2	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.7	口縁部内彎	凹線文の間に貝殻腹縁押圧文	砂(石英)	普通	褐色	
482	D－5	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8			砂(石英)	普通	褐色	
483	D－4	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 1.1			砂	普通	黄褐色 褐色	
484	D－2	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.7			砂(石英)	普通	黄褐色 褐色	
485	B－5	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8			砂	普通	灰褐色	
486	F－8	Ⅱ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.7		凹線文の間に貝殻腹縁を横住に押圧	砂	普通	黄褐色	
487	B－5	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.7			砂(少)	良好	暗黄褐色	
488	B－5	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.9			砂	普通	灰褐色	
489	D－5	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8			砂	普通	黄褐色	
490	F－6	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8			砂	普通	黄褐色	
491	B－4	Ⅳ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.7			砂(少)	普通	黄褐色	
492	D－5	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.9			砂(少)	普通	褐色	
493	C－2	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 1.1			砂あらい	普通	褐色	
494	C－3	Ⅰ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.7			砂	普通	灰褐色	
495	A－3	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8			砂	普通	黒褐色	
496	D－4	域	Ⅰ	深鉢	器厚 1.1		凹線文の間に貝殻腹縁による押引	砂(少)	普通	黄褐色	
497	B－5	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.7		凹線の間に貝殻腹縁による押圧文	砂(少)	普通	暗黄褐色	
498	C－2	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 1.0	口縁部わずかに内彎	凹線の間に貝殻腹縁による押引	砂(少)	普通	黒褐色	

第31表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
499	C－2	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 1.0			砂（少）	良好	褐色	
500	D－2	Ⅲ	Ⅰ	深鉢	器厚 0.8			砂（少）	普通	黒褐色	
501	B－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	口径24.4器厚 1.0 底部径12.6高さ28.8	口臀部内臀	太形凹線による直線文、曲線文	砂（ややすし）	普通	黄褐色	
502	E－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	口径 30.2 器厚 0.8	口縁部わずかに外反	太形凹線によるやや直線化した文様	滑石やや荒い砂	良好	上半褐色 下半赤褐色	
503	C－3	地層横転内Ⅲ	Ⅱ	深鉢	口径 33.2 器厚 1.1			滑石	良好	褐色	
504	B－4 B－4 B－11	Ⅳ Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部内臀		滑石・石英	良好	暗赤褐色	
505	D－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	口径 26.8 器厚 1.0	口縁端部がわずかに外反		滑石・石英	普通	黄褐色	
506	B－5 F－7	掘 Ⅳ	Ⅱ	深鉢	口径 27.4 器厚 0.7			滑石	良好	褐色	
507	F－6 C－6	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部内臀		滑石	良好	黄褐色	
508	D－7	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0			滑石	普通	褐色	
509	D－6	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0		太形凹線文による直線文で直線端部が曲線化	滑石・石英	良好	黄褐色	
510	D－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部内臀		滑石・石英	良好	褐色	
511	C－3	城	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7			滑石・雲母	普通	褐色	
512	A－3	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部わずかに内臀		滑石	普通	褐色	
513	B－1 C－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0			滑石	良好	暗赤褐色	
514	B－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9			滑石	良好	明赤褐色	
515	B－5 B－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7			滑石	良好	褐色	
516	D－3	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.1	口縁部内臀		滑石	良好	赤褐色	
517	D－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9			滑石	良好	褐色	
518	B－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7		太形凹線による直線文	滑石(少)石英	良	褐色	
519	C－1	Ⅰ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0	口縁部内臀		石英・雲母	普通	明褐色	
520	E－8	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0			滑石	良好	赤褐色	
521	C－2	Ⅱ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			石英・雲母 滑石	良好	褐色	
522	D－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	口径30.4器厚 1.0 底部径 7.2高さ29.9		凹線による直線文、曲線文	滑石	良好	暗赤褐色	
523	D－3	Ⅰ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0	口縁部内臀	凹線による入組文	滑石	良好	淡赤褐色	
524	C－5 C－6	Ⅲ 城面	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9		凹線による直線文で端部がやや曲線化	石英・雲母	良好	褐色	
525	D－5 D－5	城 Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			石英・雲母	良好	褐色	
526	E－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7	口縁部やや内臀	凹線による曲線文	滑石	良好	褐色	
527	C－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部を直線状に外反		石英	ややしらい	淡赤褐色	
518	D－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8		凹線による端部が曲線化する直線文	滑石	良好	褐色	
529	D－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7			滑石	良好	褐色	
530	D－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7	口縁部内臀		石英・小石	良好	黄褐色	外面スス付着
531	D－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			石英・小石	良好	黄褐色	
532	D－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.6			滑石	良好	明褐色	

第32表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
533	D－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部内傾		滑石	良好	明褐色	
534	D－5 D－6	Ⅲ Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8		凹線による直線文	滑石	良好	暗赤褐色	
535	D－3	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0		凹線による入組文	砂・滑石少し	良好	黄褐色	
536	D－6	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0		凹線による直線文	砂・雲母 滑石	普通	黒褐色	
537	C－3	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部内傾		滑石	良好	褐　色	
538	D－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0		凹線による入組文	滑石	良好	暗赤褐色	
539	E－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0			滑石・雲母	良好	褐　色	
540	E－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0		凹線による直線文と曲線文	滑石	普通	褐　色	
541	C－2	Ⅰ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.6	口縁部直行		滑石・石英 雲母	良好	黄褐色	
542	E－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部わずかに外反		雲　母	普通	褐　色	
543	C－9	城	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部わずかに内傾	凹線による入組文	石英・雲母	普通	褐　色	
544	B－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部ほぼ直行	凹線による直線文と曲線文	石英・雲母	良好	暗褐色	
545	C－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8		凹線による場部の強化する直線文	砂・雲母 滑石	良好	褐　色	
546	C－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部内傾		滑　石	普通	褐　色	
547	H－4	城	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			雲　母	普通	黄褐色	
548	D－3 E－1 C－5	Ⅲ 城	Ⅱ	深鉢	口径 11.0 器厚 0.9	口縁部ほぼ直行		砂・滑石	良好	褐　色	
549	C－7	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.1			石英・滑石	良好	褐　色	
550	D－6	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部内傾		滑　石	良好	暗赤褐色	
551	B－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9			滑　石	普通	褐　色	
552	C－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.1	口縁部ほぼ直行		小　石	普通	褐　色	
553	C－5	Ⅰ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.1		凹線による直線文	滑　石	良好	黄褐色	
554	C－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部わずかに内傾		滑　石	良好	黄褐色	
555	C－8	城	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0	口縁部ほぼ直行		滑石・石英	良好	淡赤褐色	
556	E－5	掘	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部わずかに外反		滑　石	良好	褐　色	
557	B－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			滑石・小石	良好	褐　色	
558	B－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0			石英・小石	普通	黄褐色	
559	C－7	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			滑　石	良好	黄褐色	
560	B－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0			石　英	普通	黄褐色	
561	D－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部わずかに内傾		滑石・雲母	良好	黄褐色	
562	B－5	Ⅱ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.2			滑石・小石	良好	褐　色	
563	E－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9			滑　石	普通	褐　色	
564	B－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9			滑石・石英 雲母	普通	褐　色	
565	F－8	Ⅳ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0			雲母・滑石	普通	褐　色	
566	C－1	Ⅰ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8		曲線による曲線文	石　英	普通	褐　色	

第33表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
567	B－5	掘	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9		隆線による曲線文	滑石・長石	良好	黄褐色	
568	E－1 D－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7		隆線による直線文	石英	普通	黄褐色	
569	C－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9		隆線による直線化した曲線文	石英・雲母 滑石	普通	褐色	
570	D－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9		隆線による曲線文	滑石	良好	黄褐色	
571	E－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9		隆線による直線と曲線文	石英・小石	普通	褐色	
572	D－8	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7		隆線による直線文と連点文	石英	普通	褐色	
573	B－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9		隆線による直線文	石英・小石	普通	褐色	
574	C－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0		隆線による直線文と曲線文	滑石	良好	褐色	
575	C－3	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0		隆線による曲線文	滑石	良好	褐色	
576	B－5	城	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7			滑石・石英	良好	暗赤褐色	
577	C－6	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.6	口縁部わずかに外反	隆線による直線と連点文	石英・小石	普通	暗赤褐色	
578	D－7	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部わずかに内彎		石英・雲母 小石	普通	褐色	
579	C－0	Ⅰ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部に円形の隆起		滑石	良好	褐色	
580	B－5	掘	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部わずかに内彎	単隆線文と連点文	滑石	良好	赤褐色	
581	D－4	城	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7			滑石	良好	赤褐色	
582	D－8	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.6			石英	良好	黄褐色	
583	C－9	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.1		やや浅い、不規則な直線と曲線	石英	普通	褐色	
584	D－6	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0	口縁部わずかに外反		石英・雲母	普通	褐色	
585	E－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0		隆線による短直線文	石英	良好	黒褐色	
586	D－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	口径 26.8 器厚 1.0		棒状のものによる直線と曲線文	石英・雲母	普通	褐色	
587	D－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			石英	普通	黄褐色	
588	C－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.6	口縁部わずかに内彎		石英	普通	黄褐色	
589	C－4 C－4	城 Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7			砂粒	良好	黄褐色	
590	D－4	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.6	口縁部わずかに外反		石英	普通	黄褐色	
591	D－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			石英・小石	普通	褐色	
592	D－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7			石英	良好	黄褐色	
593	D－4	Ⅲ′	Ⅱ	深鉢	器厚 0.6		棒状施文具による浅い、不規則な直線を主とした文様	石英	普通	褐色	
594	C－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部わずかに内彎	条痕が認められる	雲母	良好	明褐色	
595	D－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			石英	普通	黄褐色	
596	B－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0			石英	普通	褐色	
597	D－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9			石英	普通	黄褐色	
598	D－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			石英	普通	黄褐色	
599	D－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁部外反		石英	普通	黄褐色	スス付着
600	C－8	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			石英	普通	褐色	

第34表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
601	C－0	Ⅰ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.7	口縁部わずかに内彎		石英・小石	普通	褐色	
602	B－5	Ⅱ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部直線状に外反	棒状の施文具による比較的浅い不規則な文様	砂粒・石英及石	やや悪し	茶褐色	
603	D－4	Ⅱ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8			石英	普通	褐色	
604	B－5	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9	口縁端部内彎		石英	普通	褐色	
605	E－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 1.0	口縁部やや内彎	巴線文と貝殻腹縁による疑縄文	石英	良好	明褐色	
606	B－1	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	口径 28.4 器厚 0.6		指頭状のものの押による連点文	滑石	良好	赤褐色	
607	D－2 C－2	Ⅲ Ⅳ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.8	口縁部内彎		滑石	良好	褐色	
608	C－2	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	器厚 0.9			滑石	良好	褐色	
609	C－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	口径 37.4 器厚 0.9	口縁部わずかに内縁	ヘラ撫きの不規則な沈線文	石英	普通	褐色	
610	D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	口径 26.6 器厚 0.9		二本を基本とした沈線文で山形同心円文山形文	砂	良好	黄褐色	ススイ付着
611	D－1 D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	口径30.4器厚 0.8 底部径14.8高さ36.2	口縁部低い山形をなす	押引文	石英	良好	黄褐色	
612	E－2 D－2	Ⅰ Ⅲ	Ⅲ	深鉢	口径 23.4 器厚 0.9	口縁文わずかに外反	二本を基本にした沈線文と爪形文	砂・石英	普通	黄褐色	
613	D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 1.0	口縁部内彎	沈線文	砂	普通	黄褐色	
614	G－7	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 1.1			砂	良好	黄褐色	
615	D－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9	口縁部外反	手竜竹管による押引文	石英	普通	黄褐色	
616	C－2	域	Ⅲ	深鉢	器厚 0.6	口縁部内彎	沈線文	小石	良好	褐色	
617	C－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 1.0			砂	良好	黄褐色	
618	E－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			砂	普通	褐色	
619	D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8		ヘラ状のもので削りとった沈線文で山形を描く	石英	良好	褐色	
620	C－4	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.6			砂	普通	黄褐色	
621	D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9	口縁部わずかに内彎		砂	普通	黄褐色	
622	E－4	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8	口縁部直線状に外反		砂	良好	褐色	
623	D－3	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7			砂	普通	褐色	
624	G－2	Ⅳ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9			砂	普通	褐色	
625	B－4	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7	口縁部直線状に外反		石英	普通	褐色	
626	D－4	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7			砂	良好	褐色	
627	D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			砂	普通	黄褐色	
628	B－4	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8	口縁部わずかに内彎	貝殻腹縁の押圧文	石英	良好	褐色	
629	C－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9			石英	普通	褐色	
630	D－5	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9			砂	普通	褐色	
631	C－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 1.0	口縁部直線状に外反		砂	良好	褐色	
632	C－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9			砂	良好	黄褐色	
633	B－4	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.6			砂	普通	褐色	
634	E－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			砂	良好	黒褐色	

第35表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
635	D－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8		貝殻腹縁押圧文	砂	普通	褐色	
636	D－3	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7			砂	普通	褐色	
637	D－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9			砂	良好	褐色	
638	D－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8	口縁部わずかに内傾		砂	良好	褐色	
639	D－3	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7		押引文	砂	普通	褐色	
640	D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7			砂・石英	普通	褐色	
641	C－7	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			砂・石英	普通	褐色	
642	B－3	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7			砂・石英	普通	黒褐色	
643	D－5	Ⅰ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.6			砂	ややもろい	黄褐色	
644	D－5	城	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7	口縁部わずかに外反		砂	普通	灰褐色	
645	F－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			砂	普通	黄褐色	
646	D－5	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 1.1	口縁部わずかに外反	沈線文	砂・石英	普通	黄褐色	
647	G－2	Ⅳ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9			砂・石英	普通	黄褐色	
648	D－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9	口縁部わずかに内傾		砂	普通	褐色	
649	C－5	城	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			砂・石英	普通	褐色	
650	B－9	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8	口縁部わずかに内傾	沈線文過帯文を描き間を連点でうめる。	石英	普通	褐色	
651	D－5	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			石英	普通	黄褐色	
652	D－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			砂・石英	普通	明褐色	
653	D－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			砂	普通	黒褐色	
654	F－5	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7	口縁部直線状に外反		砂	普通	褐色	
655	D－5	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 1.1	口縁部わずかに内傾		砂	良好	黄褐色	
656	D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.6	口縁部直線状に外反	貝殻腹縁による押引文	砂		褐色	
657	D－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7	口縁部外反		砂	ややもろい	黒褐色	
658	C－5	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9			砂・石英	普通	黄褐色	
659	G－3	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9	口縁部外反		砂	普通	黄褐色	
660	C－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			砂	普通	黄褐色	
661	D－5	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7	口縁端部わずかに内傾		小石	普通	明黄褐色	
662	C－6 D－5	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	口径 19.2 器厚 0.9	口縁端部外反	貝殻腹縁押圧文	砂・石英	普通	褐色	
663	D－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9	口縁部内傾	押引文	砂	普通	褐色	
664	C－7	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8	口縁端部内傾	貝殻腹縁押圧文	石英	普通	明黄褐色	
665	B－4	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 1.0		凹線文と貝殻腹縁押圧文	砂	普通	黄褐色	
666	B－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9	口縁部外反		石英	良好	黄褐色	
667	D－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8	口縁部内傾	貝殻腹縁押圧文	石英	普通	褐色	
668	E－4	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			石英	良好	褐色	

第36表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
669	D－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7			石英	普通	褐色	
670	D－4	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9			石英	普通	褐色	
671	G－3	盛土	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			石英	普通	褐色	
672	C－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7	口縁部内傾		石英・小石	普通	褐色	
673	D－7	Ⅱ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7		口縁部肥厚しその部分に粘土紐をはりつけ、その上に貝殻腹縁の押圧文	石英・小石	普通	明褐色	
674	C－6	城	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			石英・小石	普通	褐色	
675	C－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.6			石英	普通	黄褐色	
676	C－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			石英	普通	褐色	
677	D－3	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7			石英	普通	黄褐色	
678	D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8			石英	普通	黒褐色	
679	B－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7			石英	普通	褐色	
680	C－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 1.0	口縁部肥厚		砂・石英	良好	褐色～黄褐色	
681	B－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	口径 28.2 器厚 0.7	口縁部内傾		砂	普通	淡褐色	
682	B－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7			砂	普通	暗赤褐色	
683	E－5	掘	Ⅲ	深鉢	口径 30.1 器厚 0.7			砂・石英	ややもろい	淡褐色	
684	D－0	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7	口縁部わずかに内弯	口縁部下に断面三角形の突帯文	砂・石英	良好	明黄褐色	
685	B－0	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	口径 20.0 器厚 0.9		口縁部下にやや幅広の突帯	砂		灰褐色	
686	F－8	Ⅱ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.7	口縁部外反	口縁部下に断面三角形の突帯文を施し、その上に押圧文	砂	普通	暗赤褐色	
687	B－0	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	口径 30.2 器厚 0.6			石英・砂	普通	褐色	
688	C－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.9		口縁部に幅広の突帯	石英・小石	普通	褐色	
689	C－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	口径 24.2 器厚 0.7	口縁部内傾	口縁部下に断面三角形の突帯	砂	普通	黄褐色	
690	D－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.6			砂・石英	普通	灰褐色	
691	C－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.6		口縁部下に断面三角形の突帯	砂・石英	良好	淡赤褐色	
692	C－7	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8	口縁部外反		砂	普通	褐色	
693	B－2	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8		幅広の突帯文	砂・小石	普通	黄褐色	
694	D－6	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 1.0	口縁部外反		砂	普通	褐色	
695	E－1	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	器厚 0.8	口縁端部わずかに内弯		砂	普通	灰褐色	
696	D－5	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7	口縁部はぼ直行	口縁部に由形の隆起その頂部に刻み目	砂	ややもろい	褐色	
697	B－3	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 18.0 器厚 1.0	口縁部外反	口縁部に沈線を巡らす。条痕	砂	良好	褐色～黄褐色	スス付着
698	D－2	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 26.6 器厚 0.8	口縁端部やや内傾		石英	良好	褐色～黄褐色	
699	D－2	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径36.0器厚 1.0 底部径11.5高さ34.8			小石	ややもろい	暗黄褐色	スス付着
700	C－6	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 38.0 器厚 0.7	口縁部外反	条痕	砂	普通	黒褐色	
701	D－5 D－6	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 34.0 器厚 1.0			砂・石英	普通	淡褐文	スス付着
702	D－2	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 23.4 器厚 0.8	口縁部やや内傾		砂	普通	褐色	

第37表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
703	B－1	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 16.0 器厚 1.0	口縁部外反		石英	普通	黄褐色	
704	D－6	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 30.0 器厚 0.9		条痕	砂	普通	褐色	
705	D－4	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7		口縁部に細く浅い取り目	石英・砂	普通	褐色	補修孔
706	B－0	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.6			砂	普通	褐色	
707	C－3	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 23.6 器厚 0.8		条痕	石英	良好	褐色	
708	B－1	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7			砂	普通	褐色	
709	E－1	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 19.2 器厚 0.8		条痕	砂	良好	黄褐色	
710	B－5	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7			砂	ややもろい	褐色	
711	C－4	Ⅳ	Ⅳ	深鉢	口径 24.0 器厚 0.7		条痕	砂	普通	淡褐色	
712	D－0	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.6			石英	ややもろい	褐色	
713	B－0	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 24.0 器厚 0.7			砂	普通	褐色	
714	C－6	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.9			石英	普通	淡褐色	
715	B－5	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.8		条痕	砂	普通	淡褐色	
716	B－5	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.6	口縁部内傾		砂	普通	淡褐色	
717	B－2	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7		口縁内側に突帯	砂	普通	褐色	
718	D－2	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7		条痕	砂	普通	褐色	
719	C－7	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7			砂・石英	普通	淡褐色	
720	C－1	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7			石英	普通	褐色	
721	C－9	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.6		条痕	石英・小石	良好	黄褐色	
722	C－5	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7			石英・砂	良好	黄褐色	
723	E－5 D－5	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 18.0 器厚 0.9	口縁部に山形の隆起		砂	普通	明黄褐色	
724	D－6	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.7		条痕	砂	良好	明褐色	
725	F－6	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.5	口縁部外反、山形の口縁		砂	普通	褐色	
726	C－6	地	Ⅳ	深鉢	器厚 0.8	口縁部わずかに内傾	口唇部に連点文、条痕	砂	普通	褐色	
727	D－5	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.8	口唇部は山形に隆起		砂	普通	褐色	
728	C－4	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.8	口縁内傾、波状口縁		石英	普通	褐色	
729	C－1	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 24.6 器厚 0.7	口縁部外反	口唇部を指頭のもの当圧	砂	普通	明褐色	
730	C－4	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.9	口縁部内傾、波状口縁		砂	普通	黄褐色	
731	D－4	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	口径 19.6 器厚 0.7	口縁部外反	口唇部を指頭状のもの当圧	砂	良好	明黄褐色	
732	B－4	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.8	口縁部直線状に外反		砂	普通	褐色	
733	D－5	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 1.0	口縁部内傾		砂	普通	黒褐色	
734	D－4	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.0 底部径 13.6			滑石	良好	灰褐色	
735	D－7	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.2 底部径 11.0	胴部端がほぼ垂直に切れる。		滑石・小石	良好	赤褐色	
736	C－4	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.3 底部径 12.5			滑石	普通	暗赤褐色	

第38表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No.	区	層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
737	D－3	Ⅳ	底部	深鉢	底厚 1.1 底部径 13.0	裾部がほぼ垂直に切れるもの。		石英・雲母	良好	明赤褐色	
738	B－3 B－4	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.0 底部径 14.9			砂・石英	良好	暗黄褐色	
739	D－5	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.1 底部径 16.0			砂・滑石	良好	暗赤褐色	
740	A－3	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.9 底部径 14.0			砂・滑石	普通	黄褐色	
741	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.2 底部径 14.0			滑石	良好	赤褐色	
742	D－3	域	底部	深鉢	底厚 1.4 底部径 12.4			砂・滑石	良好	明褐色	
743	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 13.8		網の背痕の圧痕	滑石・小石	良好	明赤褐色	
744	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.5 底部径 13.4			砂・石英	普通	暗赤褐色	
745	D－7	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 11.8		アンペラ状の圧痕	石英	普通	黄褐色	
746	D－5	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.0 底部径 12.2		網の背痕の圧痕	砂・滑石	良好	淡赤褐色	
747	C－1	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.6 底部径 12.3			滑石・長石	良好	暗赤褐色	
748	E－8	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 12.0		アンペラ状の圧痕	石英	普通	黄褐色	
749	B－5	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 8.0			石英	普通	明黄褐色	
750	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.0 底部径 11.4			砂	普通	赤褐色	
751	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.1 底部径 14.0		網の背痕の圧痕	砂・滑石	良好	黄褐色	
752	D－7	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 10.5		アンペラ状の圧痕	砂	普通	黄褐色	
753	E－1	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.6 底部径 8.0			石英	普通	黄褐色	
754	E－1	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.4 底部径 11.0			砂・石英	普通	黄褐色	
755	H－4	撹	底部	深鉢	底厚 1.1 底部径 5.4			石英	普通	赤褐色	
756	D－4 C－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.0 底部径 11.4		木葉の圧痕	砂・石英	普通	黄褐色	
757	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 13.0			砂・石英	普通	黄褐色	
758	D－5	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 8.0			石英	良好	黄褐色	
759	D－3	Ⅱ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 9.6			石英	普通	暗黄褐色	
760	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.6 底部径 12.0			石英	良好	黄褐色	
761	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 9.4			石英	普通	暗赤褐色	
762	D－2	Ⅰ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 10.4			砂・石英	普通	暗黄褐色	
763	E－1	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.5 底部径 8.2			石英	良好	黄褐色	
764	E－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.6 底部径 10.4			石英	普通	明褐色	
765	G－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.0 底部径 7.2			石英	普通	黄褐色	
766	D－1	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.0 底部径 10.7			砂	普通	黄褐色	
767	E－7	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 7.2		裾部に指頭状のものによる押圧	石英・小石	普通	黄褐色	
768	D－7	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 10.0			石英・小石	普通	黄褐色	
769	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 8.6			石英・小石	普通	黄褐色	
770	D－3	Ⅳ	底部	深鉢	底厚 1.0 底部径 12.0		裾部に指頭状のものによる押圧	石英	普通	黄褐色	

第39表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
771	C－4	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 11.0		アンペラ状の圧痕	小石	良好	明褐色	
772	D－1	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.7 底部径 12.6			砂	普通	黄褐色	
773	D－7	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.5 底部径 8.0			石英	普通	黄褐色	
774	H－4	掘	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 11.6		アンペラ状の圧痕	石英	良好	明褐色	
775	D－5	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.4 底部径 8.0			石英・砂	普通	黄褐色	
776	D－4	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 13.0		アンペラ状の圧痕	石英	普通	明褐色	
777	C－4	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 9.4			砂	普通	黄褐色	
778	C－5	域	底部	深鉢	底厚 0.6 底部径 11.0			石英・砂	普通	暗黄褐色	
779	C－4	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 8.0		アンペラ状の圧痕	小石	普通	黄褐色	
780	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 6.2			石英	普通	黄褐色～褐色	
781	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.5 底部径 9.6			砂	普通	黄褐色	
782	E－9	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.6 底部径 7.6			石英	普通	黄褐色	
783	B－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 6.8	胴壁体がほぼ直線状にたちあがる	条痕	石英・小石	普通	黄褐色	
784	D－4	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.7 底部径 11.0		アンペラ状の圧痕	砂	普通	褐色	
785	D－3	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 11.2			石英	普通	黄褐色	
786	E－7	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.3 底部径 9.0	胴壁体がほぼ直線状にたちあがる	条痕	砂	普通	暗黄褐色	
787	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.0 底部径 10.0			石英	普通	暗赤褐色	
788	B－0	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 10.2			砂	普通	黄褐色	
789	D－5	Ⅱ	底部	深鉢	底厚 0.5 底部径 8.2	胴壁体がほぼ直線状にたちあがる		砂・石英	普通	黄褐色	
790	B－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.5 底部径 8.8			石英・砂	普通	黄褐色	
791	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.9 底部径 10.0			石英・小石	普通	黄褐色	
792	D－2	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 0.8 底部径 12.6		アンペラ状の圧痕	砂・石英	普通	黄褐色	
793	C－4	Ⅲ	底部	深鉢	底厚 1.1 底部径 8.0	胴壁体がほぼ直線状にたちあがる		石英	普通	黄褐色	
794	E－6	Ⅰ	Ⅴ	深鉢	口径 23.4 器厚 0.7	口縁部外反	外面沈線文、内面押引文	石英・砂	良好	赤褐色	
795	D－2	Ⅲ	Ⅵ	深鉢	口径 29.2 器厚 0.7			滑石	良好	暗茶褐色	
796	D－2	Ⅲ	Ⅵ	深鉢	器厚 0.9		刻線文と隆線文の組みあわせ	滑石	良好	暗茶褐色	
797	C－5	Ⅲ	Ⅵ	深鉢	器厚 0.9			滑石	良好	暗茶褐色	
798	E－3	Ⅰ	Ⅵ	深鉢	器厚 0.8			滑石	良好	暗茶褐色	
799	C－2	Ⅰ	Ⅶ	深鉢	口径 25.0 器厚 0.9	口縁部肥厚		砂	良好	暗褐色	
800	B－0	Ⅲ	Ⅶ	深鉢	器厚 0.8		口縁部に数条の押引文	砂	良好	暗褐色	
801	C－2	Ⅲ	Ⅶ	深鉢	器厚 0.9			砂	良好	暗褐色	
802	C－2	Ⅰ	Ⅶ	深鉢	口径 20.0 器厚 0.9			砂	良好	暗褐色	
803	C－2	Ⅲ	Ⅶ	深鉢	器厚 0.9			石英・砂	普通	明暗色	
804	B－5	Ⅲ	Ⅶ	深鉢	器厚 0.6			石英・砂	普通	明暗色	

第40表　第Ⅲ層出土土器一覧表

No	区	層	類別	器種	法量	形態の特徴	文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
805	A－3	Ⅲ	Ⅷ	深鉢	器厚 0.7	口縁部内彎	口縁部に5条の押引文	石英・砂	普通	明暗色	
806	B－3	Ⅲ	Ⅷ	深鉢	口径 31.6 器厚 0.8		数条の沈線を縦横に施文	石英	良好	赤褐色	補修孔
807	B－3	Ⅲ	Ⅷ	深鉢	器厚 0.9			石英	良好	褐色	
808	B－3	Ⅲ	Ⅷ	深鉢	器厚 1.0			石英・砂	良好	淡赤褐色	
809	B－4	Ⅲ	Ⅷ	深鉢	器厚 0.9	口縁部外反	数条の押引文を縦横に施文	石英・砂粒	良好	明茶褐色	
810	B－4	Ⅲ	Ⅷ	深鉢	器厚 0.8			石英・砂	普通	黄褐色	
811	D－2	Ⅲ	Ⅸ	深鉢	口径 25.8 器厚 0.8	口縁部内彎	三条の粘土紐を押圧しその上に不規則な連点文	砂	普通	黄褐色 褐色	
812	D－4	Ⅲ	Ⅹ		器厚 0.9	円筒状の突起をもつ	口縁に隆帯をはりつけその上に押引状の連点	砂・石英	普通	黄褐色	
813	B－4	Ⅲ	Ⅹ		器厚 0.9			石英	普通	黄褐色	
814	F－8	Ⅲ	Ⅺ	深鉢	器厚 0.7	口縁部ほぼ直行	口縁部肥厚，その上に粘土紐をはりつけその上に貝殻腹縁の押圧	石英	普通	褐色	
815	F－6	Ⅲ	Ⅺ	深鉢	器厚 0.5			石英	普通	褐色	
816	A－3	Ⅲ	Ⅻ	深鉢	器厚 0.9	口縁部外反	斜位の沈線文	石英	良好	黄褐色	補修孔
817	C－1	Ⅲ	Ⅻ	浅鉢	器厚 0.5	口縁端部内彎	内外面とも研磨	砂（少）	良好	黄褐色	
818	D－6	Ⅲ	Ⅻ	浅鉢	器厚 0.5			砂（少）	良好	黄褐色	
819	C－7	Ⅲ	Ⅻ	浅鉢	器厚 0.4	胴部が張る		砂（少）	良好	褐色	
820	D－6 D－7	Ⅲ	Ⅷ	浅鉢	器厚 0.8			砂（少）	良好	褐色	
821	E－6	撹埋土	Ⅳ	深鉢	器厚 0.8	胴部がく字状にはる。	外面に条痕	石英・雲母	普通	褐色	
822	B－5	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	器厚 0.8			石英・雲母	普通	褐色	

部はとがっている。820は胴部の破片であり，内外面ともヘラ状のものによる研磨の痕跡がみられる。

第Ⅳ類　（第114図 821，822）

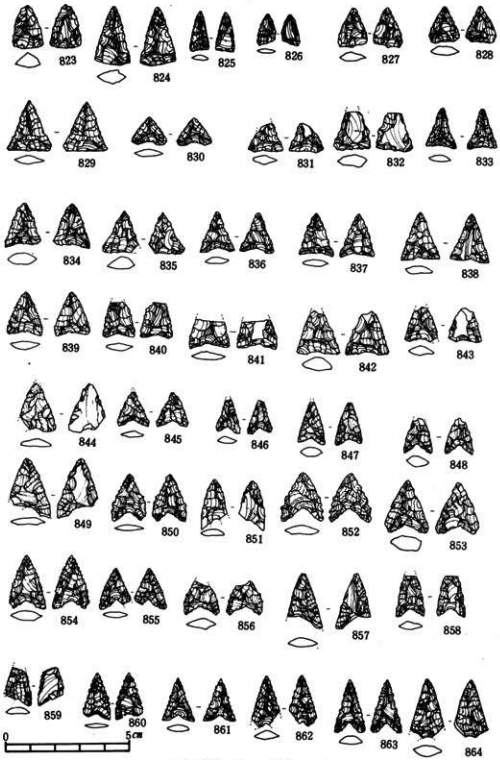
胴部の大きく張る粗製の深鉢形の土器である。822の外面の下部には条痕がみられ，上半部はナデ整形によると思われる痕跡がみられる。外面下部にはススが付着している。

（2）石器

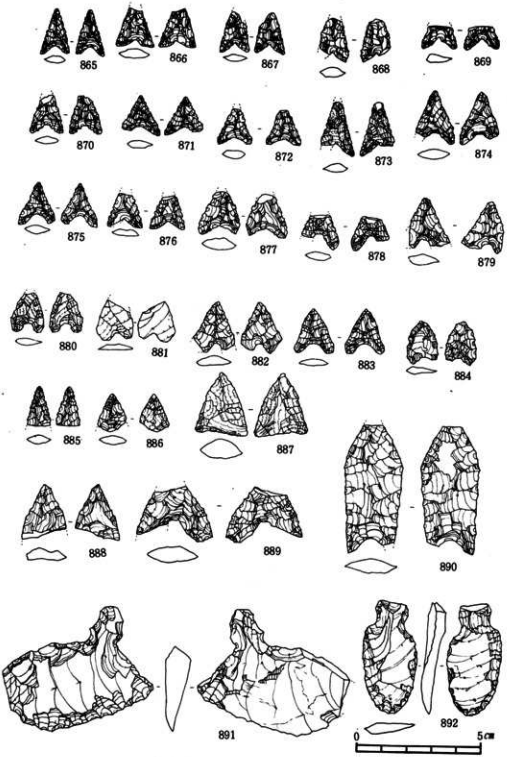
Ⅲ層から出土した石器は石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿などがある。

石鏃　（第116図，第117図 865～890）

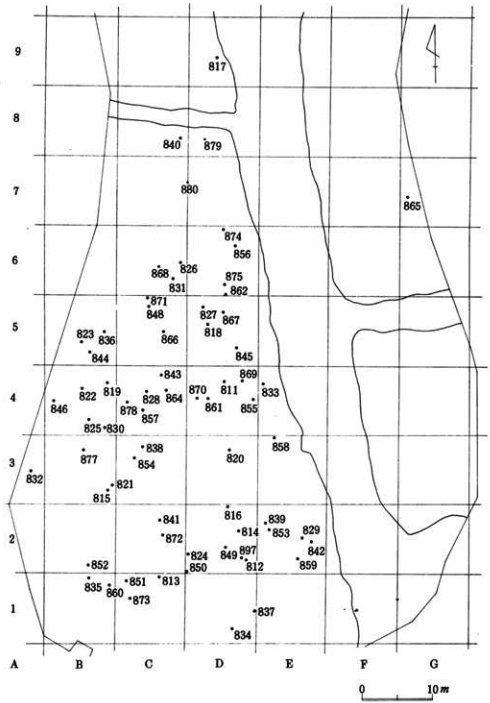
石鏃は68点出土した。これらはその基部の形状により大きく2つに分けられる。いわゆる平基式と呼ばれる基部が平担でえぐりのないものと基部にえぐりをもち凹基式と呼ばれるものである。第116図 823～829は基部のえぐりのみられないものである。石材は829を除き全て黒曜石である。829は石英を用いている。823は両側辺がややふくらみ，基部にもわずかなふくらみをもつ。調整がややあらい。824は両側辺がほぼ直線状になっている。825，826は両側辺がやや鋸歯状を呈する比較的小形のものであり，いずれも主要剥離面を残す。第116図830



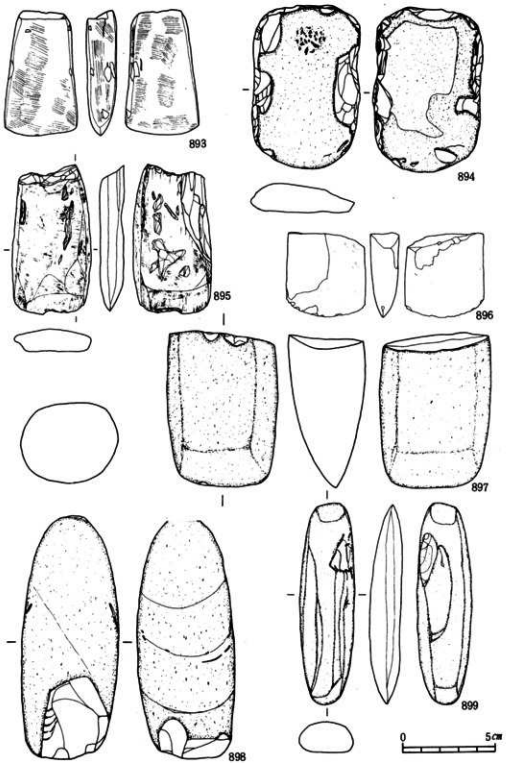
第 116図　石　鏃(1)　(縮尺－1／1.5)



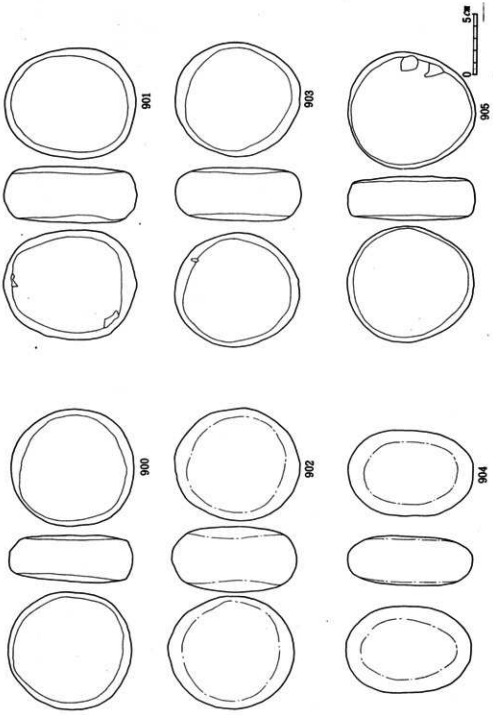
第 117図 石 鏃(2) 石 匙 (縮尺－1 /1.5)



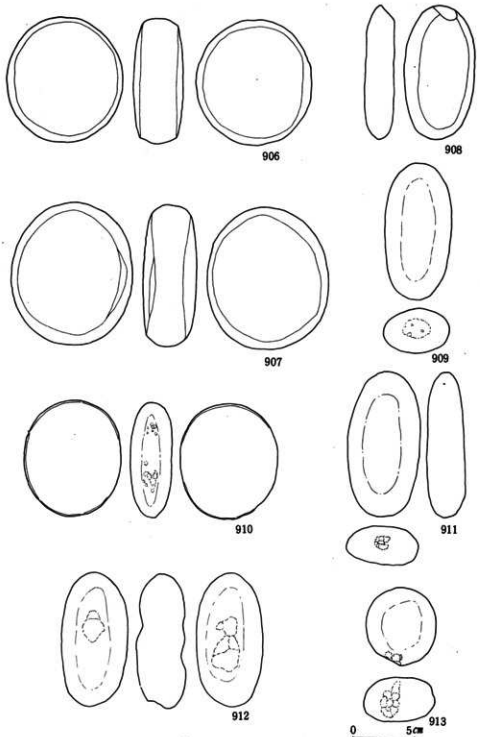
第 118図　石鏃分布状況　(縮尺－1 / 500)



第 119図　石　斧　（縮尺－1 / 2）



/51 第120図 磨 石(1) (縮尺－1／3)



第 121図　磨　石(2)　敲　石　(縮尺－1／3)

第41表　Ⅲ層出土石鏃計測表(1)

No	出土区	層	石　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考
823	D－4	Ⅲ	黒曜石	(17.5)	12.2	5.7	(1.07)	
824	D－2	Ⅲ	黒曜石	24	14	6	1.08	基部欠損
825	C－1	Ⅲ	黒曜石	16.5	8	2.3	0.18	
826	D－2	Ⅲ	黒曜石	14.3	7	2	0.15	
827	B－3	Ⅲ	黒曜石	16	12.5	6	0.6	
828	D－2	Ⅲ	黒曜石	14	12	3.8	0.47	
829	D－9	Ⅲ	石英	20	17.8	3.5	0.78	
830	C－5	Ⅲ	石英	11.5	14	3.2	0.34	
831	B－4	Ⅲ	黒曜石	(12)	14	4	0.43	先端部欠損
832	D－3	Ⅲ	黒曜石	(15.5)	14.5	5.2	(0.85)	先端部欠損
833	B－3	Ⅲ	黒曜石	16.5	12	3	0.26	
834	B－4	Ⅲ	黒曜石	18.3	14.5	5	(0.72)	片脚欠損
835	B－5	Ⅲ	黒曜石	17	(14.2)	5	(0 65)	片脚欠損
836	D－2	Ⅲ	黒曜石	16.5	13.5	2.7	0.34	
837	B－4	Ⅲ	黒曜石	17.5	14	2.9	0.39	
837	C－6	Ⅲ	石英	19.5	15.5	3	0.64	主要剥離面を残す
839	D－5	Ⅲ	黒曜石	18	14.2	3.7	0.56	
840	C－4	Ⅲ	黒曜石	(14.5)	13	3	(0.4)	先端部欠損
841	E－2	Ⅲ	黒曜石	(12)	15.7	(3.8)	(0.64)	先端部欠損
842	B－4	Ⅲ	石英	18	12.8	5.3	(1.35)	先端部欠損
843	C－7	Ⅲ	黒曜石	(14.5)	(13)	(4)	(0.49)	先端部・片脚欠損
844	A－3	Ⅲ	石英	20	14.5	3.5	(0.75)	片脚欠損
845	E－4	Ⅲ	黒曜石	(14)	13.6	2.5	(0.31)	先端部欠損
846	D－1	Ⅲ	黒曜石	(13.5)	9.5	2.8	(0.3)	先端部欠損
847	B－0	Ⅲ	黒曜石	(17)	11	4	(0.45)	先端部欠損
848	B－5	Ⅲ	黒曜石	(14)	11.3	4.5	(0.4)	先端部欠損
849	D－1	Ⅲ	黒曜石	24	(16.2)	3	(0.87)	片脚欠損
850	C－3	Ⅲ	黒曜石	19	13.5	2.2	0.34	
851	E－2	Ⅲ	黒曜石	20	10.8	2.5	(0.34)	脚部欠損
852	C－8	Ⅲ	安山岩	19.7	17	4	0.74	
853	C－2	Ⅲ	黒曜石	21	(13.2)	6.3	(1.25)	
854	E－2	Ⅲ	石英	21.5	14.5	4	0.85	

第42表　Ⅳ層出土石鏃計測表(2)

No	出土区	層	石　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考
855	C－4	Ⅲ	黒曜石	17	(12.3)	2.5	(0.29)	片脚先損
856	B－5	Ⅲ	黒曜石	(14)	1.45	4.2	(0.57)	先端部欠損
857	D－5	Ⅲ	黒曜石	(22)	(14.2)	4	(0.55)	先端部，片脚欠損
858	B－4	Ⅲ	黒曜石	(16.5)	11.5	3	(0.4)	先端部欠損
859	D－2	Ⅲ	黒曜石	(15)	(10)	2.8	(0.36)	先端部，片脚欠損
860	C－5	Ⅲ	黒曜石	18.5	(11)	1.8	(0.28)	片脚欠損
861	D－2	Ⅲ	黒曜石	17.5	13	2.8	0.37	
862	C－2	Ⅲ	黒曜石	(21)	(11)	4	(0.47)	脚部欠損
863	C－1	Ⅲ	黒曜石	21.5	12.2	3.5	0.59	
864	B－2	Ⅲ	石英	23.5	(13.5)	4.5	1.05	脚部欠損
865	E－2	Ⅲ	黒曜石	19	11	3	0.32	
866	C－3	Ⅲ	黒曜石	(16)	14.8	4	0.66	先端部欠損
867	D－4	Ⅲ	黒曜石	(16.5)	12	2.7	(0.42)	先端部欠損
868	D－6	Ⅲ	黒曜石	(17)	12.2	4	0.58	先端部・片脚欠損
869	C－4	Ⅲ	黒曜石	(9)	14	3.3	(0.2)	先端部欠損
870	E－3	Ⅲ	黒曜石	(15.5)	13	3	(0.42)	先端部欠損
871	D－7	Ⅲ	石英	16	(15.6)	4	(0.4)	片脚欠損
872	B－0	Ⅲ	黒曜石	(14.5)	14	3.8	(0.43)	先端部欠損
873	D－4	Ⅲ	安山岩	(22)	13.8	3.9	(0.57)	先端部，片脚欠損
874	D－7	Ⅲ	石英	21.5	(15.8)	4	(0.72)	片脚欠損
875	C－4	Ⅲ	黒曜石	17.3	14.5	3.4	(0.46)	
876	C－4	Ⅲ	黒曜石	(14)	14	3	(0.44)	先端部，片脚一部欠損
877	G－6	Ⅲ	黒曜石	(17.5)	(11.9)	5	(1.26)	先端部，片脚一部欠損
878	C－5	Ⅲ	頁岩	(14)	(15.1)	3.5	(0.15)	先端部・片脚欠損
879	D－5	Ⅲ	石英	(20.5)	(16.2)	4.7	(1.12)	片脚一部欠損
880	C－7	Ⅲ	安山岩	(16.5)	13.2	2.8	(0.47)	先端部欠損
881	D－4	Ⅲ	玄武岩	(16.5)	15	3	(0.47)	先端部欠損
882	D－4	Ⅲ	黒曜石	20.5	(16.8)	4	(0.87)	片脚一部欠損
883	C－5	Ⅲ	石英	18	16	2.8	0.49	
884	C－2	Ⅲ	石英	18	12.5	3.3	0.8	
885	C－1	Ⅲ	黒曜石	16.3	(9.5)	(3.9)	(0.35)	基部欠損
886	D－7	Ⅲ	黒曜石	16	(11.1)	(3.9)	(0.47)	基部欠損

第43表　Ⅲ層出土石鏃計測表(3)

No	出土区	層	石　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　　考
887	D－6	Ⅲ	安山岩	25.5	21.2	7.8	2.84	
888	A－3	Ⅲ	石英	(22.2)	18	5	(1.81)	基部欠損
889	B－3	Ⅲ	黒曜石	(22.4)	(30.5)	6.7	(3.01)	先端部・片脚欠損
890	C－4	Ⅲ	石英	(51.3)	23.8	6	(6.16)	先端部・片脚一部欠損

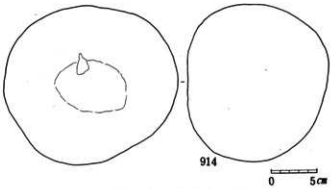
～ 864，第 117図 865～ 890は基部にえぐりをもつものである。 830は比較的小形のもので曲線状の浅いえぐりをもっている。最大幅が全長より長くなる数少い例である。その石材は石英である。 831～ 842はえぐりの浅いものである。これらの中で 831～ 838は両側辺がわずかに中央へくびれているものの一群である。石材は 838，842が石英で他は黒曜石である。 846もやや小形ではあるがこの一群に属するものである。 850，852は両側辺が外側にやや彎曲し鋸歯状をなしておりえぐりも比較的深い。 350は黒曜石，352は安山岩を用いている。 854，860～第 117図 865は長身でスマートな形をしている。えぐりも深い。両側は 864はほぼ直線であるが他は鋸歯状をしている。ていねいな押圧剝離がなされているものが多い。石材は 854，864に石英を用いている他はすべて黒曜石である。第 117図 874，875は両側辺が中央へくびれ脚部がやや彎曲しており尾形鏃と呼ばれるものに近いものである。 874は石英，875は黒曜石を使用している。 879は石英を用いており調整のややあらいものである。 881は玄武岩の剝片を素材としており，基部のえぐりの部分以外はほとんど細かい調整のみられない，いわゆる剝片鏃と呼ばれるものである。 887，889，890は比較的大形のものである。 887は両側辺がわずかに外側へ彎曲している。基部のえぐりはみられない。その素材は安山岩の厚手の剝片である。 890は大形の石鏃で石材は石英である。先端部はほぼ直線状にとがるものと想像され，肩部が張り出し，直線状に脚部へ述びるものである。最大幅を肩部にもつ。

石匙　(第117図 891，892)

石匙は２点出土した。いずれも石英の剝片を素材に用いている。 891は横形のもので，892は縦形のものである。刃部の調整は 892が両面からていねいになされているのに対して 891はは片面のみの調整である。

石斧　(第119図)

石斧は７点出土した。 893，896は比較的小さいものである。 893は石材は砂岩で全面を研磨しており，完形である。全長6.7cm，刃部幅が４cmで，基部の幅は2.9cm，厚さは1.6cmである。 896も砂岩を用いている。基部を欠いており，刃部に細かい剝離がみられる。刃部幅は4.2cmである。横断面は片面がやや平らになりかまぼこ形を呈している。 894は全体的に研磨されてはいるが，剝離面のみられる部分もあり刃部を除くとそれほどていねいになされていない。刃部の平面観は丸みをおびている。全長8.8cm，刃部幅5.2cm，基部幅6.3cm，中央部の厚さ1.9cmを計る。



第 122図　磨　石(3)（縮尺－1／4）

895は蛇文岩を石材に用いており，全面を研磨している。基部を一部欠いている。刃部に細かい剝離がみられる。刃部幅は3.7cmで，厚さは 1.3cmである。397，398は全面に敲打痕がみられる。808は刃部を欠くが 897は刃部のみ研磨されている。897は基部を欠くが 898は乳棒状を呈している。 897は刃部幅は4.7cmである。中央部付近の厚さは4.8cmで幅は 6 cmであり，断面は楕円形である。898の中央部付近の断面は円形に近い。石材は砂岩である。 899は両端に刃部をもつもので，その幅は 1.4cm，1.3cmとせまい。石材は砂光で全面を研磨している。全長は10.9cm，中央部付近の幅が 2.9cm，厚さ 2.8cmで横断面は片面がほぼ平らでかまぼこに近い形を呈している。

磨石　（第120図，121図 **906～ 908**，**910**，第122図）

磨石はいずれも平面形が円，もしくは楕円形をした10cm前後の礫を使用している。両面とも使っているものが多く，**900**，**905**，**906**は使用している面と末使用により稜をなしており，かなり使用したことがうかがえる。**910**は敲石としても使用した痕跡がみられる。石材は **903** **910**が砂岩で **900～ 902**，**904～ 908**，**910**は安山岩を用いている。第 122図は長径18.7cm短径17cm，厚さ15.2cmの大きい安山岩の円礫を用いている。片面がやや平らになり，使用した痕跡がみられる。

敲石，凹石　（第121図 **909**，**911～ 913**）

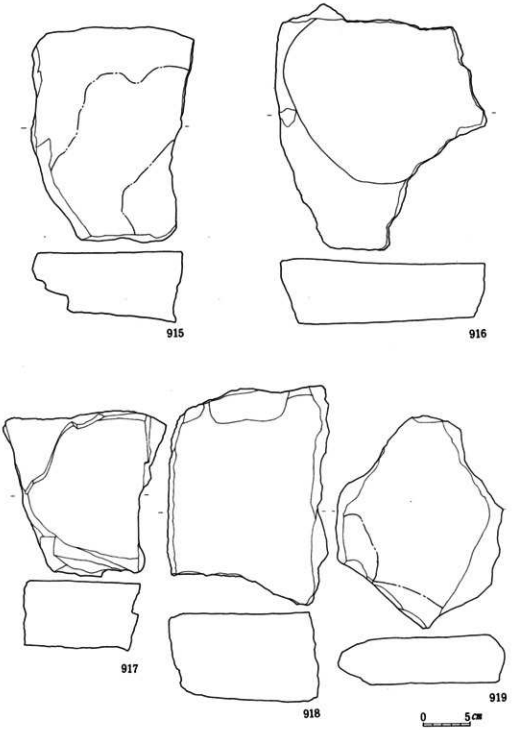
909は長径11.2cm，短径54cm，厚さ3.7cmの砂岩を素材としており，長軸方向の片側に使用痕がみられる。911は長径11.8cm，短径5.9cm，厚さ3.1cmの安山岩を用いている。敲石，磨石として使用された痕跡がそれぞれ１個所みられる。**912**は凹石である。長径10.9cm，短径5.5cm，厚さ 3.7cmの安山岩を用いている。西面とも凹部がみられる。 **913**は長径 6.4cm，短径 5.8cm，厚さ 3.6cmの安山岩を素材にしている。使用痕は１個所みられる。

石皿　（第123図 **915～ 919**）

石皿としたものはいずれも破損品で完形品はない。使用部分が研磨されており，わずかに凹んでいるもの（ **916**，**918**），ほぼ平らなもの（ **915**，**917**，**919**）がある。石材はすべて安山岩である。

第４節　その他

ここでその他として扱ったものは表層より出土した石器で，石鏃，石斧，磨石等である。



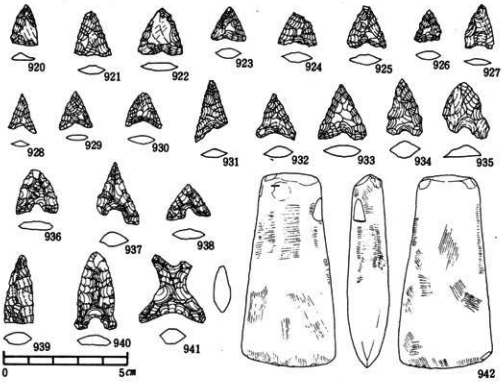
第 123図　石　皿　　(縮尺－1 / 4)

本来ならば章を設けて記述すべきであるが土器はⅣ層，Ⅲ層でそれぞれ類別したものに含めた。ここで扱った石器は明らかに縄文時代に属するものであるがⅣ層に伴うものか，あるいはⅢ層に伴うものか明らかでないためここで表層の石器として一括して説明する。

石鏃　（第124図 920～ 939）

920は基部にえぐりをもたない平基式と呼ばれるものである。黒曜石を素材とし，片面に礫表面を残す。 **922～ 926**はえぐりの浅いもので三角鏃と呼ばれるものの一群である。石材は全て黒曜石である。 **928**は両側が中央部へわずかにくびれ，基部のえぐりが二等辺三角形状のものである。 **931**は長身鏃で`片脚を欠くが基部のえぐりは二等辺三角を呈するとみられる。両側辺はやや鋸歯状をなしている。 **937**は両側辺がわずかにくびれ脚がはり，えぐりは深く丸く鍬形鏃と呼ばれるものに類似している。押圧剝離による細かい調整が先端部まで施されている。 **938**は両側辺がわずかなふくらみをもち，基部のえぐりが逆U字以を呈しているものである。最大幅が全長より長いものである。 **939**は石鏃よりも尖頭器に近い形態をもつ。石材は安山岩である。

940はトロトロ石器と呼ばれるもので先端部がわずかに研磨され，両側辺はわずかにふくらみながら脚部に至る。両脚ともわえぐりをもち外側へ張り出している。えぐりは円形に入っている。石材は石英である。



第 124図　表層出土の石鏃・石斧　（縮尺－1 /1.5）

第44表　表層出土石鏃計測表

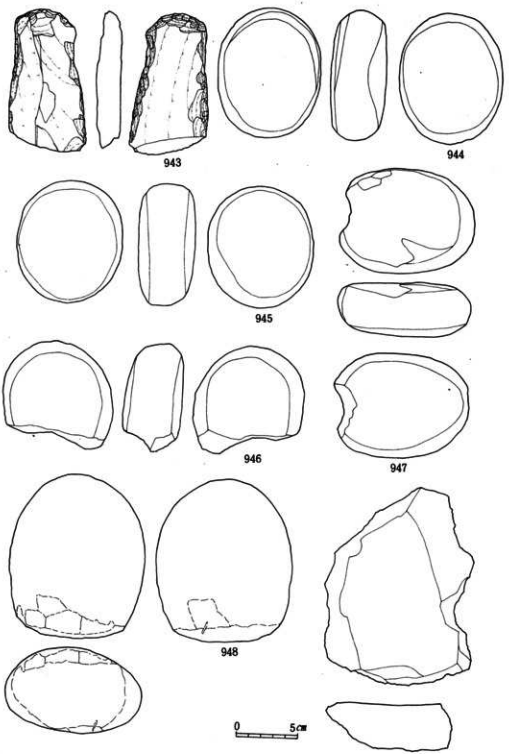
No	出土区	層	石　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考
920	H－4	堀埋土	黒曜石	16.5	10.7	3	0.4	
921	E－4	堀埋土	黒曜石	(18.2)	(14.5)	4	(0.75)	基部欠損
922	G－3	盛　土	黒曜石	18.7	17.5	3.1	0.85	
923	G－7	堅物3	黒曜石	13.6	13.85	4.1	0.535	
924	E－5	堀埋土	黒曜石	13.2	15.2	4.2	(0.625)	先端部欠損
925	F－3	Ⅰ	黒曜石	(17.1)	(15.6)	4.4	(0.85)	
926	E－9	Ⅰ	黒曜石	13.1	(10.8)	3.4	(0.32)	片脚欠損
927	H－4	堀埋土	黒曜石	17.85	11.9	3.15	0.45	
928	D－4	域　面	黒曜石	15	11.6	2.5	0.22	
929	D－5	域　面	黒曜石	15	13.1	3.4	0.42	
930	C－4	域　面	黒曜石	(14.2)	14.2	3.4	(0.45)	先端部欠損
931		Ⅰ	黒曜石	24	(13.45)	3.85	(0.67)	片脚欠損
932	C－7	Ⅱ	黒曜石	18.1	15.75	4.4	0.75	
933	E－2	Ⅰ	黒曜石	21.95	(19.55)	4.6	(1.32)	
934	B－7	表一括	黒曜石	22.9	(14.45)	7.4	(1.73)	片脚一部欠損
935	C－2	Ⅱ	安山岩	22.8	(19.2)	4.1	(1.19)	片脚一部欠損
936	D－1	Ⅱ	黒曜石	18	16.45	3.4	0.85	先端部欠損
937	F－5	堅物3	黒曜石	24.6	(15.8)	5.5	(1.15)	片脚一部欠損
938	D－4	Ⅰ	黒曜石	13.2	17.1	2.75	0.4	
939	E－3	域　面	安山岩	27	11	5	1.475	基部欠損
940		表	石英	30.8	16.25	4.2	2.15	
941	D－4	堀埋土	チャート	27.2	(15.4) 26.2	6.5	2.65	

異形石器　(第124図 **941**)

基部にえぐりをもつ大小の石鏃の先端を接合したように4つの突起をもつ石器である。突起の1つは折れているが残りの形状は先端部が丸みをおびている。縦断面をみると短い突起をもつ方へむけてしだいに薄くなっている。石材はチャートである。

石斧　(第124図 **942**, 第125図 **943**)

942は砂岩製で全面を研磨しているものである。基部の両側辺にわずかなえぐりがみられる。他の部分に比べてこの部分の研磨痕がめだつ，全長 7.9cm，刃部幅 3.7cm，基部幅 3.1cm。**943**は基部にえぐりをもつ打製石斧である。刃部を欠いている。



第 125図　表層出土の磨石（縮尺－1 / 3）

磨石　(第125 **944～ 946**)

磨石として使用されているものはいずれも安山岩である。いずれも両面を使用しているが，**945**は側面も使用したと思われる痕跡があるがはっきりしない。**944**は長径10.7cm，短径 8.5cm，厚さ 4.5cmである。**945**は長径10.1cm，短径 8.6cm，厚さ 4.6cmである。**945**，**946**は欠損している。

敲石　(第125図 **948**)

石材は安山岩を用いており，長径13.5cm，短径11cm，厚さ 6.9cmで重さが1.36kgと敲石としては比較的大形のものである。長軸方向の片側端部だけを使用しており，かなり使った痕跡が認められる。

石皿　(第125図 **949**)

石材に安山岩を用いており中央部がわずかに凹む石皿の破片である。

第6章　山城の調査

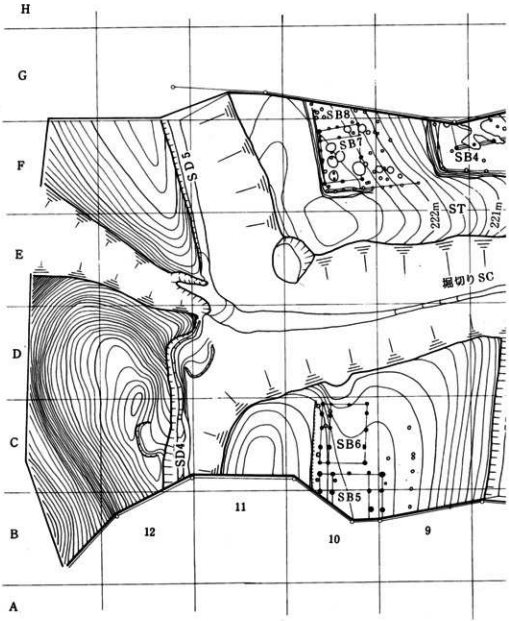
第1節　調査の概要

山城遺構は，これまで報告した第Ⅳ層・第Ⅲ層の縄文時代の調査に先だっておこなったものであり，縦貫道用地全域に中世山城に伴う遺構・遺物が検出された。分布調査および発掘調査の最初の段階の草木伐採後に，用地中央を南北に走る掘状の凹地が発見された。発掘調査は，この凹地の落ち込みが人工的な掘り込みかどうかの確認から始まった。確認トレンチ調査の結果，人工的な掘り込みでこの舌状台地を切断する掘切りであることが確認され，本遺跡は山域の一角であることが判明した。

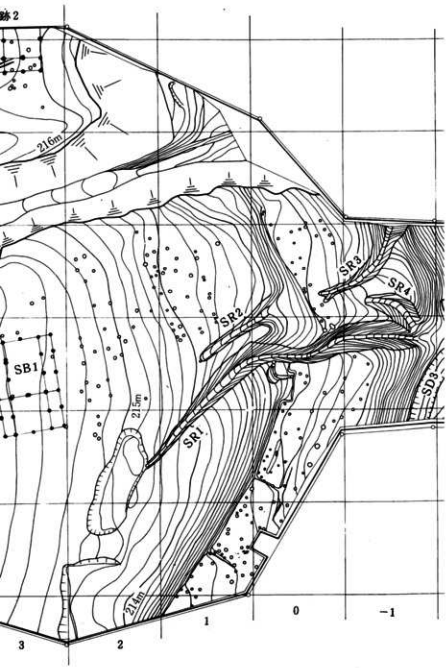
発掘調査は，山域の遺構を検出するため調査対象地の表土排除から順に進めた。掘切りより西側と東側の平坦面の表土排剥ぎと並行して，掘切りの底面までの掘り下げ作業もおこなった。掘切りは，巾が約10m前後，深さ約8m前後の大規模なものでV字状に掘り切られ，現状では約半分から⅓程度は埋没しており，この掘切りを完掘するのに約1ケ月間を要した。さらに，この掘切りの掘り下げに伴ってF－5区付近に，隧道が構築されていることが判明し，合せて調査をおこなった。隧道は，ほとんどが陥没していたが，用地内はほぼ完掘することができた。注目すべき遺構の発見であった。掘切りや隧道の調査と並行して，東側の平坦面や西側の平坦面の検出によって山城遺構が次々と発見された。まず，東側には，階段状に郭が形成され，それぞれの郭に堀立柱建物遺構や柵列・竪穴・排水溝などの遺構が発見された。また，東側の掘切り辺部に土塁が巡っていたことが，土塁基礎盤築の発見で確認された。掘切りより西側は，空掘と柵列の発見があり，これによって郭が区切られるもので東側とは若干構築方法の異りがみられた。これらの郭内には，掘立柱建物遺構が構築されている。D－6・7区付近には，盛土造成部が検出されたが，後の耕作などによって遺構は消滅されている状態であった。

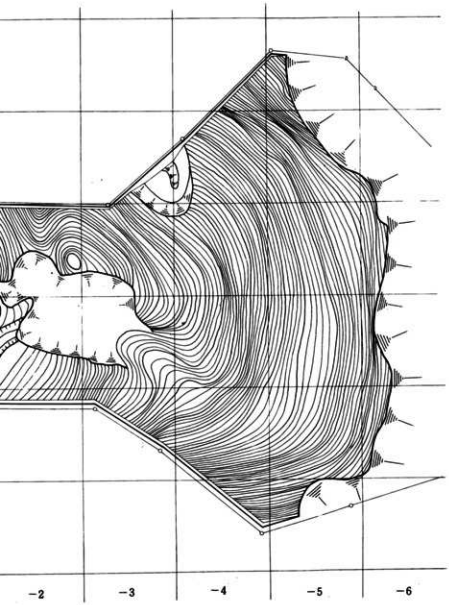
調査対象区は，A～H－1～10区であったが，この山城遺構の発見によって調査は，南・北端を延長する必要が生じた。そのため，北側は，11～13区へグリッドを延長し，南側は，丘陵傾斜面とその下の平地まで調査区域を延長した。調査の結果・南側の平地は，後世の宅地造成によって攪乱を受けており，傾斜面もシラマ土取りなどによって破壊を受けている部分がみられた。傾斜下半には遺構は検出されなかったが，A－3区にあたる傾斜中腹には掘が，さらに上部には，掘状の掘り込みの登道（古道）が検出された。また，北側の延長区においても城壁部の基部に掘が巡り，その外側に腰曲輪様の切り出しが確認された。

山城に伴う遺物は種々出土しているが，遺構の規模に比較すると少量といえる。出土遺物を列記すると次のようなものがある。磁器（青磁・白磁）・土師器・陶器・瓦器・石製品・金銅製装飾品・古銭などである。いずれも表層中や遺構内流入土中の発見であった。


H
G
F
E
D
C
B
A
SB8
SB7
SB4
SD5
222m
ST
221m
堀切り SC
SD4
SB6
SB5
12
11
10
9

第 126図　山城遺構配置図　　(S＝1： 400)


跡2
216m
SR3
SR4
SR2
SB1
SD3
21.5m
SR1
215m
1
0
−1
3
2


−2
−3
−4
−5
−6

第2節　遺　構

概要で述べたように多くの遺構が検出された。これらの遺構を記述順に整理すると次のようになる。( )は整理上の記号。

①堀切り（ＳＣ）　②隧道（ＳＴ）　③城壁　④空堀（ＳＤ）　⑤土塁（ＳＷ）　⑥盛土　⑦登道・古道（ＳＲ）　⑧柵列（ＳＦ）　⑨郭　⑩縄曲輪　⑪排水溝（ＳＨ）　⑫掘立柱建物（ＳＢ）　⑬土坑（ＳＫ）

①堀切り（ＳＣ）　（第126・127図）

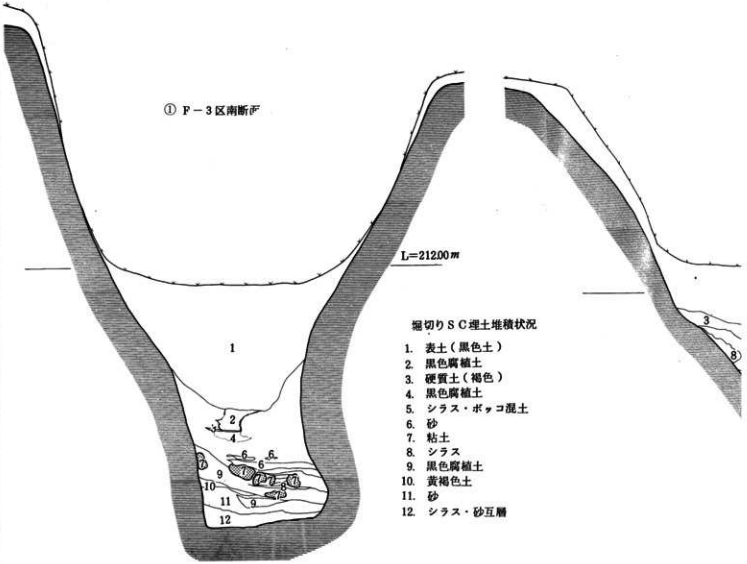
本遺跡の所在する舌状台地を南北に切断する切り通しで，堀切りと呼ばれる。Ｎ－1゜－Ｗの方向に走る。堀切りは，Ｆ－３区付近で最も狭く巾 7.5m，東側の平坦面より深さ 8.2m を測る。最も広いところは，Ｅ－８区付近で巾11.5m，深さ 7.4m を測る。堀切りの底面の巾は，Ｆ－２区から隧道入口のＦ－５区で最も広く 1.5～ 2.0m の平担面をつくり，床面の傾斜は，北へ 3.5°の角度で上る。堀切りの断面は，逆台形状をなす。隧道から北側の底面は，狭いところで 0.5m，広いところで 1.2m を測り，断面は，Ｖ字状になる。傾斜角度は1°と傾斜が強くなる。堀切りの底面は，南側（Ｆ－１・２区）では溶結凝灰岩（阿多火砕流－×層）を堀り切って作っており，隧道付近から北側は，ほとんどシラス（入戸火砕流－Ⅸ層）面である。堀切りから隧道入口は，傾斜して上り一段高いところが隧道の底面となっている（比高差は1.8m）。

このように，堀切りは，Ｆ－５区の隧道入口付近で底面の状態が大きく変化している。これは，堀切りが防備に加えて通路として利用されたことを示している。

第 127図は堀切りの断面図で１が隧道より南側のＦ－３区南断面図，２が隧道より北側のＥ－７区　断面図である。１・２とも床面から約 2.5m 上位のところで壁断面に大きな変化がみられるが，丁度この高さがシラス面であり，これより上が２次シラス・腐植土層・新期火山灰の順で堆積しており，壁面が弱く崩壊したものである。築造時は，下方の傾斜でそのまま上り，堀切り平面は，もう少し狭くなるものと想定される。埋土は，シラス・砂・腐植土が交互に堆積している。尚，２の床面右隅は，流水の浸蝕による溝状の凹みができている。

②隧道（ＳＴ）　（第126・128・129図）

Ｆ－５区からＧ－５区にかけて検出された。Ｆ－５区は天井の一部がアーチ状に残存していたが，他のほとんどは陥没した状態で検出された。隧道の床面は，巾 1.5～２m である。登り口の左隅は，流水によって溝状に浸蝕されている。隧道への登道は急な傾斜をもつが，隧道の床面の傾斜は，わずか 1.5°でありほとんど水平である。床面の保存の状態は良好であったが，側壁は，ほとんどが自然崩壊している。断面の堆積状態を観察すると隧道崩壊の状態が理解される。入口付近のＦ－５区は，第Ⅸ層が床面から１m まで達しているが，Ｇ－５区になるとわずか 0.3m までであり，それより上位は第Ⅷ層の水成層である。第129図－４は，Ｆ－５区の隧

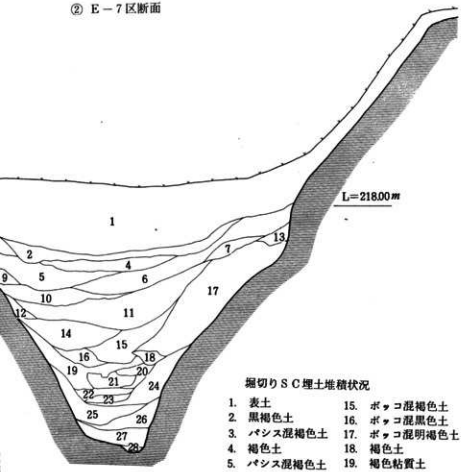


堀切りＳＣ埋土堆積状況

1. 表土（黒色土）
2. 黒色腐植土
3. 硬質土（褐色）
4. 黒色腐植土
5. シラス・ボッコ混土
6. 砂
7. 粘土
8. シラス
9. 黒色腐植土
10. 黄褐色土
11. 砂
12. シラス・砂互層

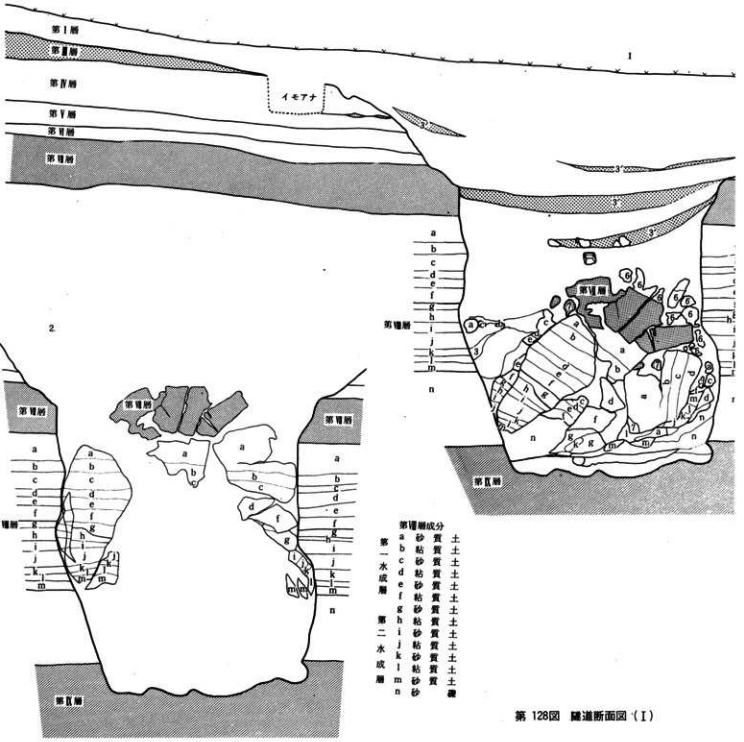
第 127図　堀切り断面図

② E－7区断面

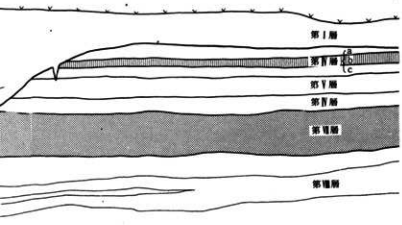


掘切りＳＣ埋土堆積状況

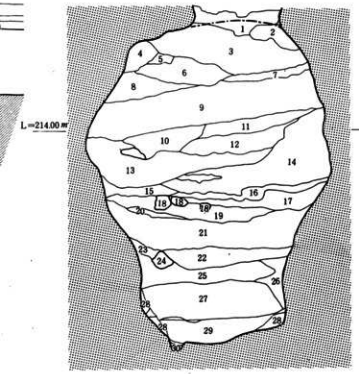
1. 表土
2. 黒褐色土
3. パシス混褐色土
4. 褐色土
5. パシス混褐色土
6. ポッコ混黒色土
7. 明黒褐色土
8. 黄褐色土
9. 白灰色土
10. 暗褐色土
11. ポッコ混黒色土
12. 暗褐色土
13. 白灰色土
14. ポッコ混黒色土
15. ポッコ混褐色土
16. ポッコ混黒色土
17. ポッコ混明褐色土
18. 褐色土
19. 褐色粘質土
20. ポッコ混褐色土
21. シラス混褐色土
22. 砂層
23. 砂層
24. 褐色砂質土
25. ポッコ混明褐色土
26. シラス混黒色土
27. シラス互層
28. 砂層



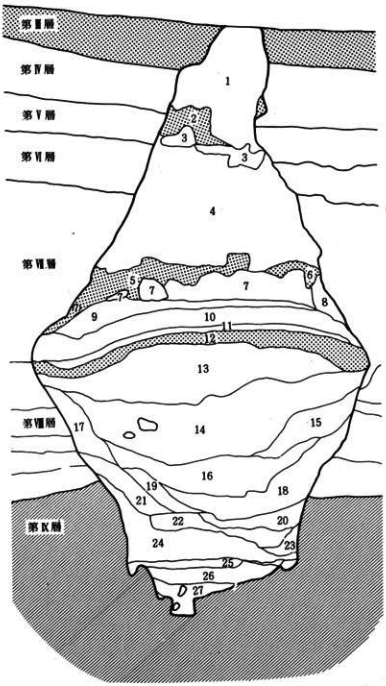
第 128図　隧道断面図（Ⅰ）

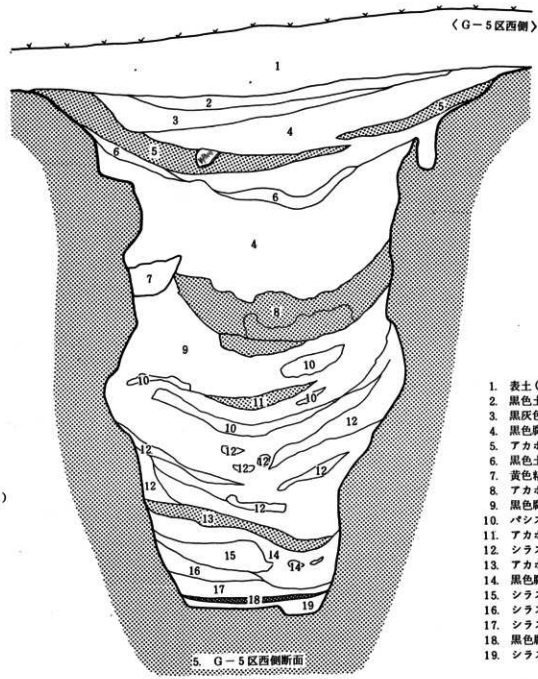


3



1. 黒褐色砂質土
2. 黄色粘質土
3. 第４層（くずれ）
4. 茶褐色砂質土
5. 橙褐色砂質土
6. 黄色粘質土（Ａｈ）
7. 橙褐色土
8. 黄色土（Ａｈ）
9. 茶褐色土
10. 灰色シラス
11. 黄色シラス
12. 黄色シラス
13. 黄色シラス
14. 白黄色シラス
15. 灰色シラス
16. 黒褐色粘質土
17. 黄色シラス
18. 黄色粘土ブロック
19. 黒褐色粘質土
20. 茶褐色土（Ａｈ）
21. 黄色シラス
22. 黒褐色粘質土
23. 〃
24. 黄色粘土ブロック
25. 黄色シラス
26. 灰色シラス
27. パミス混シラス
28. シラス
29. 褐色粘質土
30. 砂


第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層
第Ⅵ層
第Ⅶ層
第Ⅷ層
第Ⅸ層
1
2
3
3
4
5
6
7
7
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27



1. 褐色土
2. アカホヤ（２次堆）
3. 第４層（くずれ）
4. 第５・６層（くずれ）
5. アカホヤ（２次堆）
6. 〃
7. 第６層くずれ
8. アカホヤ（２次堆）
9. 第７層（くずれ）
10. 褐色土（アカホヤ？）
11. 第７層（くずれ）
12. 褐色土
13. 第７層（くずれ）
14. 灰黄色砂質土
15. 第７層（くずれ）
16. 褐色土（アカホヤ？）
17. 灰色砂質土
18. 黄色シラス（２次堆）
19. 黄色粘質土（アカホヤ？）
20. 黄色シラス（２次堆）
21. 〃
22. 黒褐色土
23. 灰色シラス（２次堆）
24. 黄色シラス（２次堆）
25. 〃
26. 褐色粘質土
27. 黄色シラス

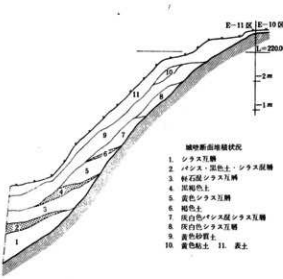
1. 表土（第１層）
2. 黒色土
3. 黒灰色土
4. 黒色腐植土
5. アカホヤ（２次堆）
6. 黒色土
7. 黄色粘土（第７層）
8. アカホヤ（２次堆）
9. 黒色腐植土
10. パミス混黒色土
11. アカホヤ（２次堆）
12. シラス（２次堆）
13. アカホヤ（２次堆）
14. 黒色腐植土
15. シラス（２次堆）
16. シラス（２次堆）
17. シラス・砂互層
18. 黒色腐植土
19. シラス・砂互層

第 129図　隧道断面図（II）

道断面であるが，第Ⅱ層までは床面の巾は，1.8m と狭く，壁は比較的垂直に立ち上っているが，床面より 2.5m 程の高さでは，巾 3.5m に拡がり胴張り状の断面を呈している。3・5の図も同様である。これは，水成層（2次シラス）の側壁が崩壊したため天井部分が陥没したことを示している。側壁の崩壊と天井の陥没による隧道内の堆積状態は，場所によって層序が大きく変化している。たとえば，4の9～12層は，アーチ状に中央部が高くなって堆積しているのに対して，5の堆積は，いずれも中央部が底く堆積している。

入口付近の側壁および天井の一部が残部度が良好で，奥に進むにつれて崩壊度が激しい状態が観察された。これは，先に述べたシラス層の下面からの高さにもよるが，残存度の良い部分の上面には，土塁が構築されていた部分であり，この土塁構築下ということにも起因しているようである。

尚，G－5区東側断面（第 128図－1）で，隧道の天井復元に良好な崩壊塊が確認されたので図化し，さらに，この崩壊塊を復元図化したのが第 128図－2である。これによると，隧道の高さは 2.5m 前後，側壁間の巾が2m 前後と想定れる。



第 130図　城壁断面図（E－11区）

③城壁　（第126図・第130図）

本遺跡では，石垣などによる城壁の構築はまったく確認されなかった。発掘調査によって検出された堀切りや周囲を巡る空堀などを掘ることによって，その側壁がより強固な城壁となっていることが想定された。

そのため，検出された壁面の傾斜角度をみると次のようになる。

東側平坦地に属する側壁面は，E－11区側壁（第 130図）で傾斜角度が45°，E－7区で53°，F－3区で68°である。

西側平坦地に属する側壁面は，C－11区側壁で傾斜角度が59.5°，E－7区で55°，F－3区で72.5°となる。

C－11区を除けば，F－3区に近くなればいずれも傾斜角度が強くなる傾向がみられる。これは，V字掘りと逆台形掘りの元々の形によるものか，掘り方の傾斜によってシラスの崩壊の進行が異なるものが興味ある問題である。

④空堀（SD）　（第126図）

空堀は，五本検出された。そのうち，ＳＤ１とＳＤ２の２本は，堀切りに直行して西側平担地の中央に並行して築かれたものである。他の３本は，いずれも壁面下や傾斜面中腹に築かれたものである。

㋐空堀ＳＤ１　（第126図）

Ｂ－Ｆ－４区，５区の間を，Ｎ－88°－Ｗ方向のほぼ東西に走る空堀りである。空堀の規模は，巾 3.1m，底巾1.45m，深さ 0.9m（Ｄ－５区西壁）を測り，平面はＥ－５区付近で狭くなっている。空堀は，Ｄ・Ｅ－５区付近で2°の傾斜をもち，Ｃ・Ｂ－５区付近で1°のゆるやかな東から西へのゆるやかな傾斜をもつ。残存状況からみて，大部分は削平されているものと考える。

尚，Ｃ－４・５区で，櫛列ＳＦＩと切り合っているが，櫛列の方が新しい。

㋑空堀ＳＤ２　（第126図・第132図）

Ｂ～Ｄ－８区を，Ｎ－83°－Ｗ方向に走る空堀で，堀切りとは直交してＳＤ１とは並行する。規模は，Ｃ－８区西側で巾 3.4m，底巾0.75m，深さ1.53m を測る。Ｄ－８区では，巾3.05m，底面0.45m，深さ1.68m を測る。ＳＤ２の底面は，２次シラス上部の固い黄褐色粘土層に達している。ＳＤ１とは逆に，Ｃ区からＤ区へわずか1°の傾斜をもち，Ｃ区よりＤ区が低くなる。

床面上には，10cm程度の踏み固められた粘土質の層が存在する（Ｃ－８区では11・12層，Ｄ－８区では13層）。空堀の流入土は，第１流入土が黒色腐植土層で第２流入土が黄褐色（アカホヤ２次堆積）であり，それより上部も交互にこの堆積をくりかえす。

㋒空堀ＳＤ３　（第136図）

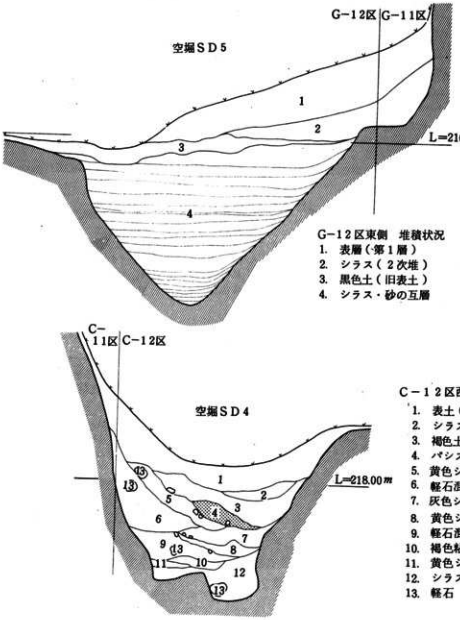
Ｎ－63.5°－Ｅ方向からＤ区でＮ－27°－Ｗ方向へ屈折する。巾　m，底面　m，　深さ　mを測る。ＳＤ３は，Ｂ・Ｃ・Ｄ－０区などの帯状曲輪の下端を走るものである。流入土は，傾斜面のためか，腐植土とシラス土の混在したものが堆積している。

㋓空堀ＳＤ４　（第126図・第131図）

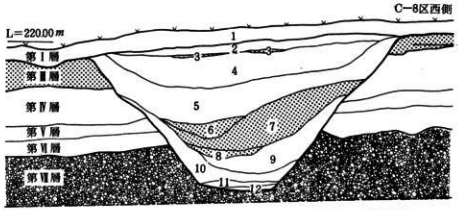
西側の平担地側壁面に沿って，Ｎ－89°－Ｗ方向のほぼ東西に走り，堀切りと合流する。Ｃ～Ｄ区付近では，10°以上の傾斜となって堀切りに落ちる。ＳＤ１やＳＤ２とは底面の作りは異なり，流水の浸蝕のため溝状の凹みがみられる。流入土は，砂混りの２次シラスと色調が異なる２次シラスが交互に堆積し，黒色腐植土が混入するのは上層の段階である。ＳＤ４は，Ｃ・Ｄ－12区の丘状の施設（膝曲輪）を作り出し，西方用地外に続いている。

㋔空堀ＳＤ５　（第126図・第131図）

東側平担地の側壁面に沿ってＮ－80°－Ｅ方向に走る。ＳＤ５は，Ｆ区かＥ区へ走り，Ｅ区で堀切と合流するが底面は，段差はなく同じ高さである。Ｄ・Ｅ－12区には，ＳＤ４と同じく，丘状施設を作り出している。堆積堰土は，ほとんどがシラス（２次）と砂の互層であり，水平の堆積が観察される。南側掘り方にあたる東平担地の側壁面のシラス部分は，大きくえぐられており，このシラス壁面の自然崩壊土が堆積したことが想定される。



第 131図　空堀断面図 ＳＤ４・ＳＤ５

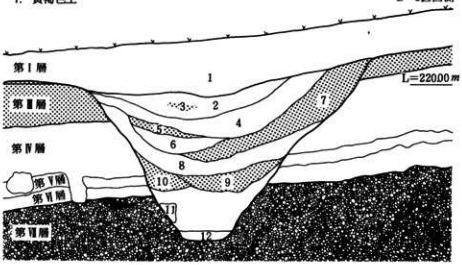


D−8区西側SD2堆積状況

1. 表土（第1層）
2. 黒褐色土
3. 黄褐色ブロック（Ah）
4. 黒色土
5. 黄褐色土（Ah）
6. 黒色土
7. 黄褐色土
8. 黒褐色土
9. 黄褐色土
10. 黄褐色粘質土
11. 黒色土
12. 黄色粘質土
13. 茶褐色硬質土

C−8区西側SD2堆積状況

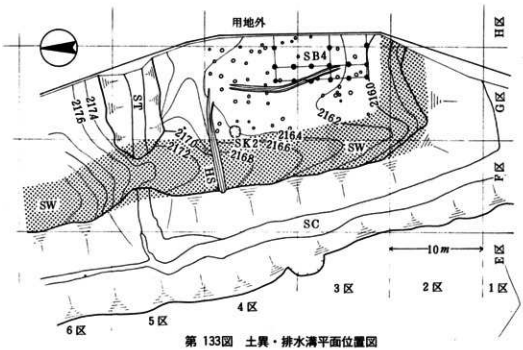
1. 表層（第1層）
2. 褐色土層
3. 黄褐色土（Ah）
4. 黄色パミス混褐色土
5. 黒褐色土
6. 褐色土
7. パミス混褐色土
8. 褐色土
9. 黒色粘質土
10. やわらかい褐色土
11. パミス混褐色土
12. 灰色硬質土



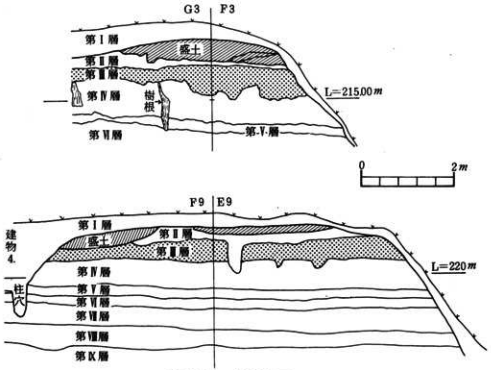
第132図　空堀SD2断面図

⑤土塁（ST）　（第133・134図）

城面遺構検出の段階で東側平坦地の堀切側の辺部が，若干凸面状になっていることに気づきミニトレンチを設定し確認したところ，第133図断面図にみるような造成盛土面が検出された。平面を水平に検出すると，盛土と盛土間に下層の黒色腐植土層が帯状に確認される。このような状態は，F−8区付近からF−5区の隧道上を通り，G−3区（第134図）付近まで確認された。このような造成盛土は，この東側平坦地の縁部に土塁状の構築物が存在したこと示すものである。



第 133図　土異・排水溝平面位置図



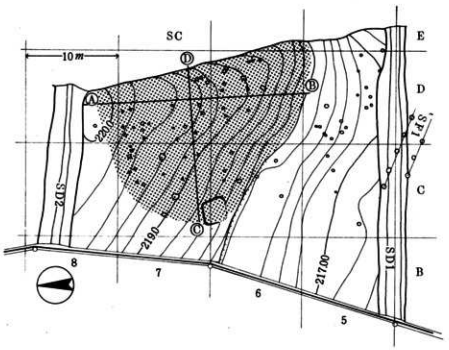
第 134図　土壌断面図

尚，このような層位確認の他に，土塁が存在したことを示す他の証左がある。一つは，F－4区の排水溝（SH）である。G－3・4区の建物跡が所在する平担面は，ほぼ水平面を保ち排水溝に向って流れるようになっている。これは，G－3区の南側とF－3・4区に土塁状の施設が存在したことを立証している。もう一つは，隧道天井の残存状態であり，土塁下にあたる隧道天井部分は比較的良好な残りがみられるが，土塁のないG－5区付近は，陥没が激しい状態であった。このような土塁状の施設を示す痕跡は，西側平担地では検出されていない。

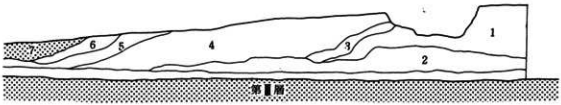
⑥盛土　（第135図）

D・C－6・7区を中心に，シラスと黄褐色土（アカホヤ）の2次堆積土で盛土盛成がおこなわれている。第136図がその堆積断面であり，第Ⅱ層の黒色腐植土層の上面からが盛土部分である。最も厚く残存しているところは，断面A－BとD－Cの交差付近で70cm前後の厚さがあり，D区付近が厚く，周辺部にあたるC区付近が薄くなっている。堆積状態は，層の形成が土を引き均した急な状態で，人工的な層の形成が観察される。

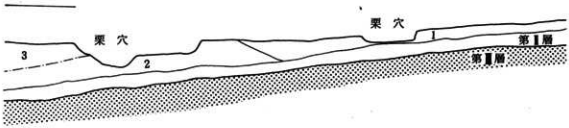
このように，空掘SD1とSD2に囲まれた平担面は，かなり厚い盛土造成がおこなわれていたことが想定される。SD1とSD2の掘肩上面を比較すると3mの比高があり，この間にある程度の盛土を行うと，SD1の深さも検出時の90cmよりは，かなり深くなることが想定される。盛土の下層は，黒色腐植土層が存在するが，この腐植土層中より成川式の土器片が散出

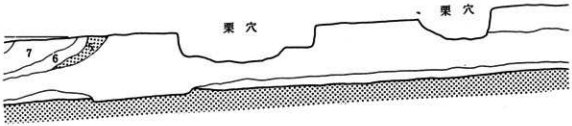


第135図　盛土範囲図



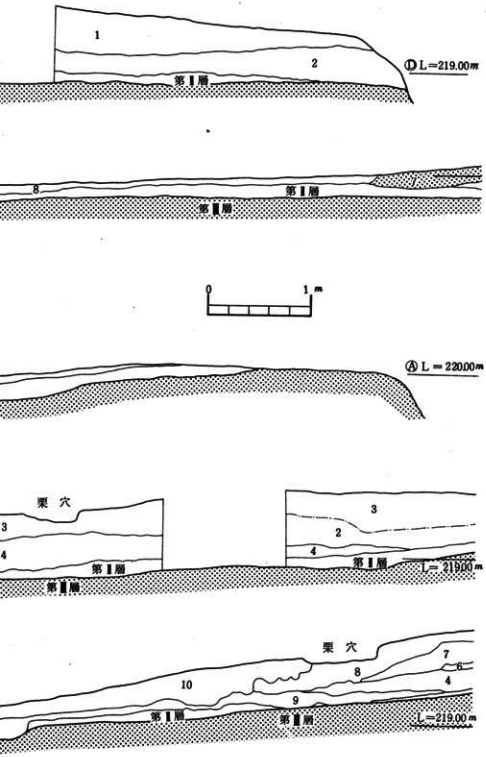
1. パミス混黄色シラス
2. 黄色粘土塊混褐色土
3. パミス混褐色土
4. パミス混黄色シラス
5. パミス混褐色土
6. シラス（２次性）
7. 褐色土（Ａｈの２次堆）
8. アカホヤ混褐色土





1. 黄色粘土と褐色土の混在
2. パミス混黄色シラス
3. 茶色粘土混黄色シラス
4. 黄色粘土塊混褐色土
5. 褐色土（Ａｈの２次堆）
6. 黄色粘土塊混シラス
7. 褐色土とシラスの混在
8. シラス
9. シラス・黄色粘土塊混黒褐色土
10. 黄色粘土塊混褐色土
11. 褐色土（Ａｈの２次堆）

第 136図 盛土



断面図

して出土した。この成川式土器は，盛土周辺や他の調査区からはほとんど出土していない。

⑦登道（ＳＲ）　（第126図）

西側平担地の南傾斜面に，数本の溝状の掘り込みが検出された。この溝状の遺構は，各平担地（Ｅ－０区などがの平担面）を結ぶ形で検出され，登道であることが想定された。

㋑登道ＳＲ１

Ｄ－-1区から屈曲しながらＣ－２区にかけて検出された。その規模は，Ｄ－-1区付近で巾３m，底巾 0.8m，深さ　cmを測る。底面の傾斜は，16°を測る。平担面に近いＤ－１区付近では巾 2.2m，底巾 1.1m，深さ 0.6m を測り，傾斜角度も10°と緩やかになる。

この登道と推定される溝状の遺構は，Ｄ-－2区付近ではシラス土取りのため破壊されていて，不明であるが，他の登道と比較すると最も規模が大きく，西側平担面に直接続いているため，西側平担面の主要な登道といえる。

㋺登道ＳＲ２

Ｅ－０区からＤ－１区かけての短いものであるが，Ｅ－０区の狭い平担面と上段の西側平担面を結ぶ登道である。巾 2.8m，底巾 0.5m，深さ 0.4m を測る。登道の傾斜は，10.5°を測る。

㋩登道ＳＲ３

Ｆ－-1区の用地外からＥ－０区平担面への登道である。この登道の先端は，平担面で二股に分れている。規模は，巾 1.6m，底巾 0.5m，深さ 0.4m を測り，底面の傾斜は，11.5°を測る。

㋥登道ＳＲ４

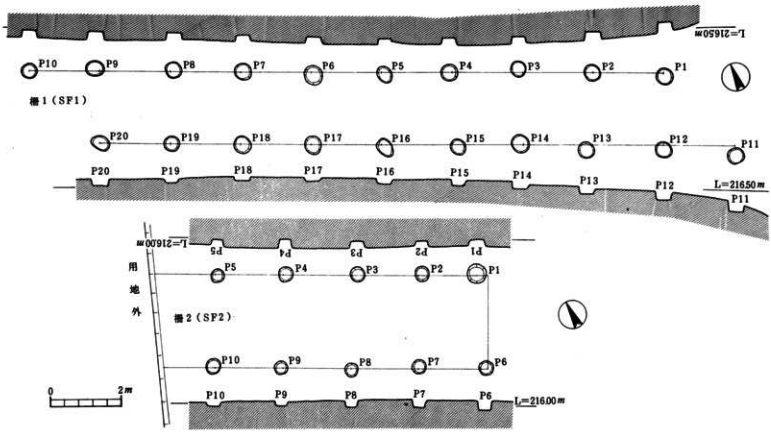
Ｄ・Ｅ－-1区付近の短いものであるが，Ｄ－-1区でＳＲ１から分かれてＥ－０区の平担面に登るものである。規模は，巾 2.5m，底巾 0.7m，深さ 0.7m を測る。底面の傾斜は，16.5°と最も急な傾斜をもつ。

⑧構列（ＳＦ）　（第137図）

柵列は，ＳＦ１とＳＦ２の２つが検出された。ＳＦ１は，Ｃ～Ｅ－４区に位置して堀切りとは鋭角に交う。さらに，空堀ＳＤ１と切り合っている。柵列が新しい。ＳＦ２は，Ｂ－４区に検出され用地外に続くものである。

㋑構列ＳＦ１

堀切りに鋭角に設置されるため，Ｃ－５区付近で空堀ＳＤ１と切り合う。切り合い関係から柵列のほうが新しい。柵列ＳＦ１の主軸は，Ｎ－66°－Ｗである。柱穴は，北側に10本，南側に10本の合計20本検出された。第126図のように，堀切りに鋭角に設置されているため，南側が１間先に始まり，そのかわり１間早く終る。柱穴は，径55cm～65cm大の円形がほとんどであるがＰ16やＰ20のように変円形もある。柱穴の深さは，浅いもので12cm，深いもので35cmを測るが，15～20cmが最も多い。堀切り縁部は傾斜して低くなるが，ここにたてられたＰ１，Ｐ11の柱穴は，深く掘ってある。



第137図 橋 列 SF1・SF2 (縮尺－1／100)

柱穴の桁行間は，230～ 260cm程を測り，Ｐ１～Ｐ20の合計桁行間は，44.0m となり，これを平均すると　　cmとなる。第137図の柱穴上に記載した直線割付は，この平均桁行間であり，ほぼ柱穴上にのる。梁間間のＰ１－Ｐ12……Ｐ９－Ｐ20を合計すると　　m をなり，これを平均すると　　cmである。これによると約31.1尺の８尺間と想定される。

㈣構列ＳＦ２

Ｂ－４区に検出され，用地外に続くものである。主軸はＮ－62°－Ｗである。柱穴は，５本対に10本検出された。柱穴は，径50～70cm大に属し円形がほとんどである。柱穴の深さは，15～30cmであり，おおよそ下面は一致する。

柱穴の桁行間は，Ｐ１－Ｐ２間が極端に狭いが，他は 185～ 200cm間に位置する。Ｐ１～Ｐ10の合計は　　m となり，桁行間の平均値は　　cmとなる。梁間間のＰ１－Ｐ６……Ｐ５－Ｐ10を合計すると　　m となり，梁間間の平均値は　　cmである。

ＳＦ１とＳＦ２を比較すると，桁行間はＳＦ１が大きく，梁間間はＳＦ２が大きい。

㈤構列ＳＦ３

Ｅ－０区にあるテラス面の壁面寄りに，登道ＳＲ１と堀切りにかけて延びる柱穴で，柱穴の桁行間は，不規測であるが，柵列と想定される。柵列の主軸は，Ｎ－64.5°－Ｅの方向である。

⑤郭

これまで，堀切り・空堀・柵列・登道など山城の総体的遺構について報告したが，建物・土抗などの各遺構に入る前に，空堀や柵列などによって区切られた山城の一地域を「郭」として本遺跡の遺構の配置をあげてみることにする。

〈中央の堀切りより東側平担面〉

1．隧道より南で，Ｇ－３・４区以東にあたる区域。調査区域内においては，西側と南側に土塁が巡り，その内側に掘立柱建物跡（ＳＢ１）１棟以上や土抗（ＳＫ２）などが検出されている。排水溝（ＳＨ）も構築されている。堀切り以東では，最南端に位置する。

2．隧道の北側でＦ・Ｇ－６・７区にあたる区域。西側は土塁，北側は壁で囲まれ，用地外に延びる。建物跡が想定されたが柱穴はまとまらなかった（ＳＢ３）。他に，土坑（ＳＫ３・ＳＫ４）が存在する。

3．Ｆ－８・９区の北側は壁，西側は土塁に囲まれる区域。北側壁面に沿って柱穴列が存在し，中央に掘立柱建物跡（ＳＢ４）が存在する。土坑（ＳＫ５）が存在する。また，玉砂利遺構も検出された。

4．Ｆ－９・10区の最北端の区域。削平されているが北側・西側は土塁で囲まれたと推定される。西側は土塁に沿って坑列が検出された。掘立柱建物跡（ＳＢ７・ＳＢ８）２棟以上が検出される。

〈中央の堀切りより西側平担面〉

5．Ｅ－０区で，登道（ＳＲ３・ＳＲ４）が取り付けられたわずかなテラスをもつ区域。柵列

（ＳＦ３）と柱穴痕が検出される。

6．Ｂ－０・１～Ｃ・Ｄ－０区の帯状のテラスをもつ区域。多数の柱穴痕が検出されたが建物跡はまとまらなかった。帯状のテラスは，わずかな段をもち３つ以上に区分される。

7．西側平坦面の南端で空堀（ＳＤ１）または柵列（ＳＦ１・ＳＦ２）で区切られた区域。掘立柱建物跡（ＳＢ１）１棟以上が存在する。他に，土坑（ＳＫ１）がある。

8．北側は空堀（ＳＤ２）で，南側は空堀（ＳＤ１）または柵列（ＳＦ１・ＳＦ２）で区切られた区域。盛土造成面が検出されたが，遺構は確認されなかった。

9．西側平坦面の最北端で南側を空堀（ＳＤ２）で区切られる区域。掘立柱建物跡（ＳＢ５・６）２棟以上存在する。

以上，概略に９つの区域（郭）に分けられた。調査区内だけの区域設定であり，流動的な区分となった。

⑩郭曲輪

空堀ＳＤ４とＳＤ５によってその外部に作られた丘状の施設であり，このような施設が，東側平坦地の用地外傾斜面でも確認することができる。山城遺構に関連するものとして，腰曲輪の名称をあてとりあげた。用地内には，２つ確認されている。

１は，Ｃ・Ｄ－12・13区付近に存在し空堀ＳＤ４によって切り出された小円丘である。表土剥ぎをおこない遺構検出の結果，柱穴などの遺構は検出されなかった。

２は，Ｆ－12区以東に存在し空堀ＳＤ５に切り出された小円丘である。ここも表面の検出をおこなったが，遺構は検出されなかった。

このように，円丘上の切り出し中には，遺構は存在しなかったが，今後，このような施設(?)が，山城遺構のひとつとして確認される遺跡 が発見されるかもしれない。

⑪排水溝（ＳＨ）

Ｆ・Ｇ－４区に，東方向から西側の掘切りに向って約3°の傾斜をもって流れる。排水溝の規模は，断面Ａ－Ｂで，巾53cm，底巾36cm，深さ 100cmを測る。排水溝の掘り形は，排水口より３m程度の部分までは，その壁面はほぼ垂直に掘られている。Ｇ－４区付近の取水口は，南側平坦面の方に向いている。

⑫掘立柱建物跡（ＳＢ）

掘立柱建物跡は，８棟検出された。堀切りより東側に５棟，西側に３棟である。尚，⑨郭の項の郭２にあたる部分は，明確な柱穴は検出されなかったが，形態が，郭３とほぼ同様であり，建物跡が存在した事を想定して建物跡ＳＢ４として記載することにした。他に，Ｅ－１区やＧ－４区などに無数の柱穴が存在し，建物跡が存在したものと考える。

㈠掘立柱建物跡ＳＢ１　（第45表・第138図）

建物跡は，Ｃ・Ｄ・－３区に検出され，梁間２間（3.94m）×桁行間５間（9.97m）を測り，両側桁行に梁間1.38mと1.32mの庇が付いているものである。建物の桁行は，Ｎ－83°－Ｅ方向である。建物柱穴の掘り方は，Ｐ16は楕円形であるが，他は全部円形である。Ｐ７，Ｐ８，Ｐ12，Ｐ24に柱穴の重複がみられるが，他がすべて円形ということからＰ16も重複の可能性が強い。建物跡柱穴の平均径は，34.1cmを測り，両側の庇柱穴の平均径は36.2cmと35.7cmのほぼ同大を測る。

㈡掘立柱建物跡ＳＢ２　（第46表・第139図）

建物跡ＳＢ２は，Ｇ－３・４区に検出されたが，建物跡の半分は用地外に延びており全形は明らかでない。磁北に５間柱間（Ｐ１～Ｐ８）が検出された。柱穴の配置から桁行間と想定され，Ｐ10～Ｐ15は西側庇と考えられる。梁間？間（2.03＋？m）×桁行間５間（9191m）を測り，梁間1.47mの庇が付いているものである。建物跡の柱穴径は47.2cmを測り，深さは75cmを測る。建物跡ＳＢ１と比較すると，建物跡ＳＢ２が柱穴径・深さとも大きい。

㈢建物跡ＳＢ３　（第140図）

隧道の北部，Ｆ・Ｇ－６・７区に検出された先の２郭にあたる部分である。この２郭は，東側が用地外に延びているため正確な大きさは不明であるが，南北17m，東西は調査した部分で最も長い個所が 9.5mを計る。傾斜地に構築しているが，水平な床面を形成するために北壁部は 1.3m掘り下げられている。尚，壁面は，途中で段をもち水平な床面に続く。床面には，柱穴らしきものは34個検出されたが，その大きさは10cm前後のものから90cmのものまでいろいろあり，深さも10cm前後から85cmまで様々で明確に建物を構成するような並びはなかった。郭の西壁に沿って長さ８m，巾約30cm，深さ約７cmの溝があり，南端でピットを重複している。

西壁面の南部には，東西2.16m，南北2.14m，深さ0.96mの土拡が検出されたが，遺物その他のものは認められず，その性格は不明である。

郭２の遺物は，その埋土中から備前焼の破片数点（第 150図）や細かい鉄片が出土しただけであった。

㈣掘立柱建物跡ＳＢ４　（第47表・第141図）

丘陵部のほぼ北側にあり南北に走る堀切りの東側に位置する。グリットでは，Ｆ－８・９区にあたる。北からのゆるやかな丘陵斜面を利用しその北側部分を削平して，南側に向って削平部分が除々に浅くなって，平担面を造り出している。このことは，階段状の削平により一種の郭を形成していると言える。

東側は調査外の為，この郭の全体を知ることはできなかった。現状を見るかぎり，東側にも同様な遺構の広がりがあると思われる。

第45表　掘立柱建物跡ＳＢ１計測表

（単位cm）

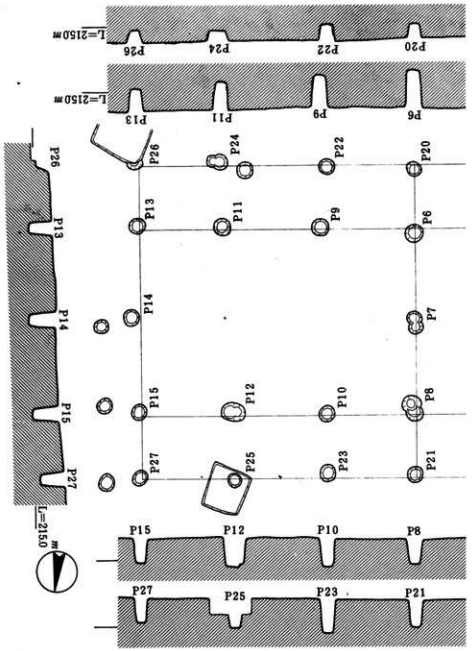
2間×5間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P1～2	195	398	P1～4	191		1	77	34	33	円
2～3	203		4～6	197		2	32	31	28	円
4～5		401	6～9	204	983	3	58	33	28	円
6～7	197	382	9～11	209		4	64	30	29	円
7～8	185		11～13	182		5	73	38	38	円
9～10		397	2～7	400	1,013	6	78	38	38	円
11～12		392	7～14	613		7	80		29	円
13～14	196	398	3～5	204		8	56		34	円
14～15	202		5～8	197		9	69	34	33	円
			8～10	191	995	10	60	33	32	円
			10～12	206		11	60	36	33	円
			12～15	197		12	63	35	35	円
						13	46	34	31	円
						14	58	35	32	円
						15	53	32	29	円
平　均	196.3	394.7	平　均	197.8	997	平均	61.8	34.1	32.1	

建物跡ＳＢ１の庇１

	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P1～16	149		P16～18	216		16	54	54	40	だ円
4～18	140		18～20	180		18	33	33	30	円
6～20	136		20～22	189	994	20	29	33	27	円
9～22	130		22～24	225		22	35	33	31	円
11～24	136		24～26	184		24	21	30	30	円
13～26	137					26	28	34	32	円
平　均	138		平　均	198.8		平均	33.3	36.2	31.7	

建物跡ＳＢ１の庇２

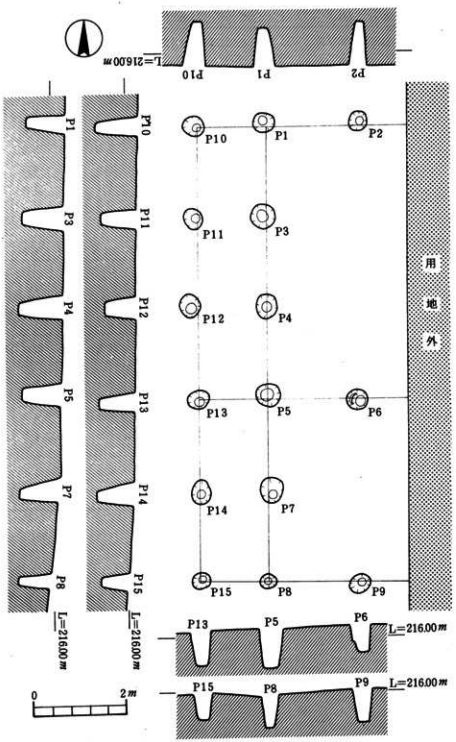
	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P3～17	117		P17～19	201		17	60	37	33	円
5～19	127		19～21	197		19	63	38	37	円
8～21	133		21～23	191	992	21	56	35	33	円
10～23	127		23～25	200		23	70	36	32	円
12～25	149		25～27	203		25	54	30	27	円
15～27	140					27	50	38	30	円
平　均	132.2		平　均	198.4		平均	58.8	35.7	32	



第 138図　掘立柱建物跡ＳＢ

P18
P16
P4
P1
P2
P5
P3
P19
P17
P20
P6
P7
P8
P21
P16
P1
P2
P3
P17
L=215.0m
L=215.0m
2m
0
P18
P16
P4
P1
P5
P3
L=215.0m
P19
P17
L=215.0m

(縮尺－1／20)



第 139図　掘立柱建物跡ＳＢ２（縮尺－１／20）

第46表　掘立柱建物跡ＳＢ２計測表

（単位cm）

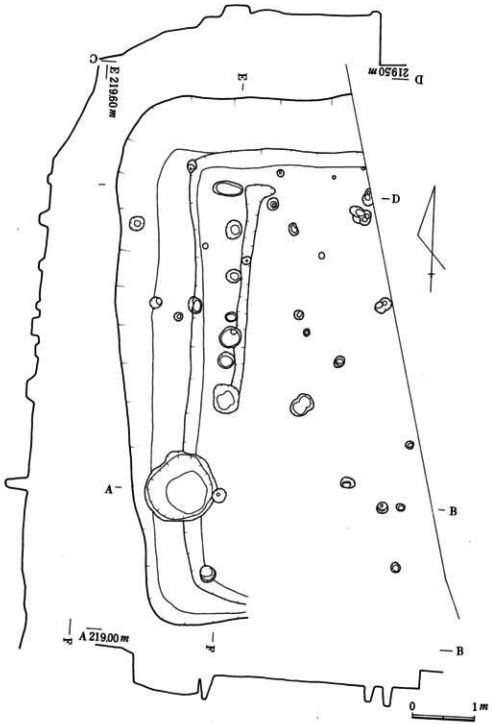
2間×5間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P1～2	206		P1～3	205		1	83	45	40	円
5～6	202		3～4	194		2	93	43	37	円
8～9	201		4～5	189	989	3	91	53	50	円
			5～7	214		4	97	52	46	円
			7～8	187		5	85	53	52	円
			2～6	605	994	6	60	46	43	円
			6～9	389		7	91	53	49	円
						8	72	37	32	円
						9	74	45	38	円
平　均	203		平　均	198.3	991.5	平均	82.9	47.4	43	

建物跡ＳＢ２の庇

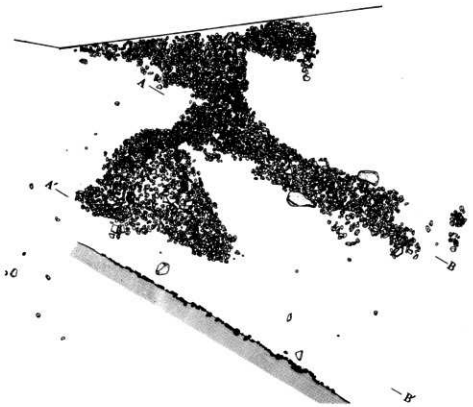
2間×5間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P1～10	140		P10～11	193		10	91	47	42	円
3～11	142		11～12	193		11	76	45	36	円
4～12	165		12～13	201	969	12	66	49	49	円
5～13	145		13～14	198		13	76	47	41	円
7～14	153		14～15	184		14	81	56	41	円
8～15	140					15	60	39	34	円
平　均	147.5		平　均	193.8		平均	75	47.2	40.5	

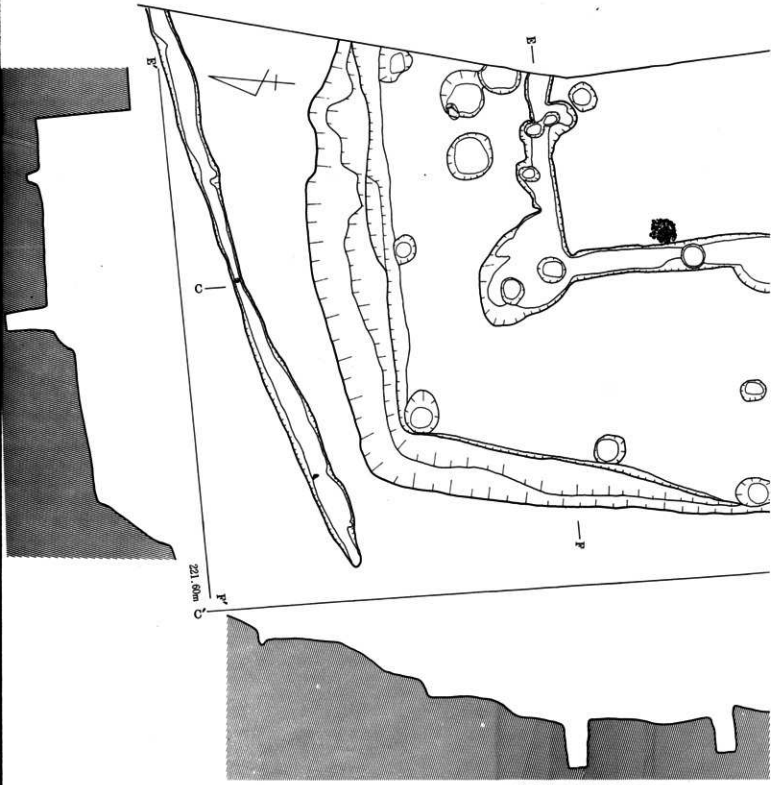
第47表　掘立建物跡ＳＢ４計測表

2間×5間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P1～6	195		P1～2	191		1	105	38	35	だ円
4～5	175		2～3	204	598	2	90	34	33	円
			3～4	203		3	82	47	40	円
			P5～6		618	4	81	33	32	だ円
						5	48	41	38	円
						6	44	27	22	だ円
平　均			平　均	199.3	608	平均	75	36.6	33.3	

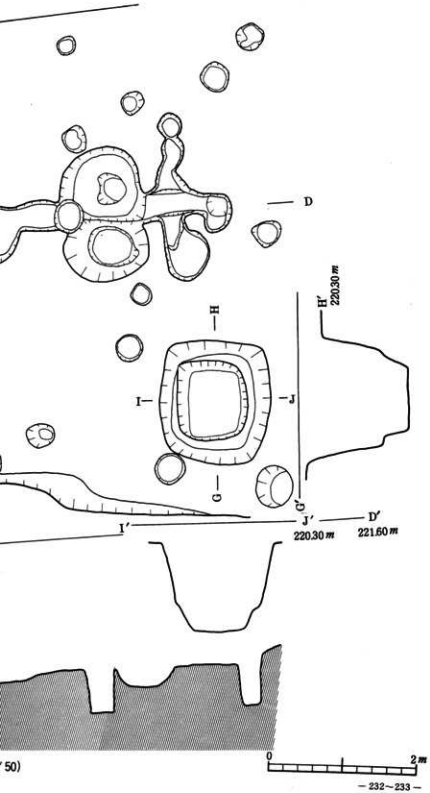


第 140図　掘立建物跡ＳＢ３　（縮尺－１／60）





第 141図　掘立柱建物跡ＳＢ４　（縮尺－１／



50)

このようにして造られた郭内には厚さ10cm位にシラス混りの土が踏み固められておりこれは人為的に敷れたものと思われる，この層は北側が厚く南側面では薄くなっていた。このことは郭内の平担面を造り出すために行れたものではないかと思われる。

郭内には次のような遺構が検出できた。建物跡，玉砂利敷遺構，溝状遺構，柵列遺構及び土拡である。これらの遺構の中で，シラス混りの層を挟んで玉砂利敷遺構と建物跡は時間的差があるのではないかと思われる。

掘立柱建物跡ＳＢ４　（第141図）

位置的には，郭のほぼ中央部にあり一部は玉砂利敷遺構と重った箇所もある。郭内に敷れたシラス混りの層の下より検出できた。

建物跡は郭に沿って造られたと思われ，建物の桁行方向はＮ－８°－Ｗである。梁間および桁行間は東側が不明の為断定はできないが，柱穴に沿って掘られた。溝状遺構を見るかぎり，東西梁間で，桁行間が南北になると思われる。

梁間の１間が平均で1.85m，桁行間が３間で6.08mとなる。柱穴の掘り方は円形ないしだ円形のプランを呈し，建物柱穴の平均径は3.33cmを計る。深さの平均は郭の平担面より75cmである。

建物の柱穴に沿って，溝状遺構が掘ってある。これは，南側には検出されなかったが，多分壁状施設の為の溝であると思われる。

玉砂利敷遺構

郭内の埋土を掘り下げた時点で，北側及び，西側の壁面沿いの柱穴とともに確認できた。遺構は，郭内のほぼ中央に位置し，調査外の地域にもその広がりが考えられる。遺構は不定形な敷方をしているが，南側の大形の角礫２個を見れば両側を保護してるようであり一定の形をしているのではないかと思わる。

また，郭内に玉砂利が散乱してない状態であったためほぼ原形に近い状態で出土したと思われる。あたかも上から見ると動物を形どっているかのように見える。

これらの玉砂利は河原石と思われ，円形，だ円形のへん平な形をしており中には球のものもある。大きさは，４cm前後のものが主で，小さいものは１cm位のものまであり，これらが一段ないしは重った状態で敷れていた。尚，石質は砂岩である。

上面の玉砂利敷遺構の下部から続いて出土した。浅い穴状遺構内に玉砂利を積み重ねた遺構が検出された。これは，土面の玉砂利敷遺構の北西部に位置し，この遺構の性格を示すものではないかと思われた。

構列

北側及び西側の壁面沿に７個の柱穴が確認された。Ｆ７～Ｐ８までである。柱穴間の平均は2.41mである。深さの平均は，70.2cmである。柱穴の掘方はほぼ円形プランを呈し，柱穴の平均径は48.6cmこれらの柱穴は削平により階段状になった郭の壁面に沿って，並んでおりこの，柱穴は郭内および壁面を保護するために築かれた土どめ用の柱穴跡ではないかと思われる。

土　坑

郭の南西部にあり，階段状の削平が一番浅い部分にあたる。長径1.72m で短径1.52cmの方形プランを呈する。深さは1.48m 。下部に行くにつれ段状を呈し，下面では長径89cm，短径72cmである。遺物などの出土はなかった。

㉗掘立柱建物跡ＳＢ５　（第142図）

Ｂ・Ｃ－９・10区付近で，西側平担地の最北端に位置する区域で９郭にあたる。この区域に建物跡２棟が検出され，そのうち西側の１棟である。この区域は，一段掘り込んで平担面をつくり建物跡を構築するが，北側の段上は，わずかな段が残るのみでシラス面まで耕作によって削平されていた。

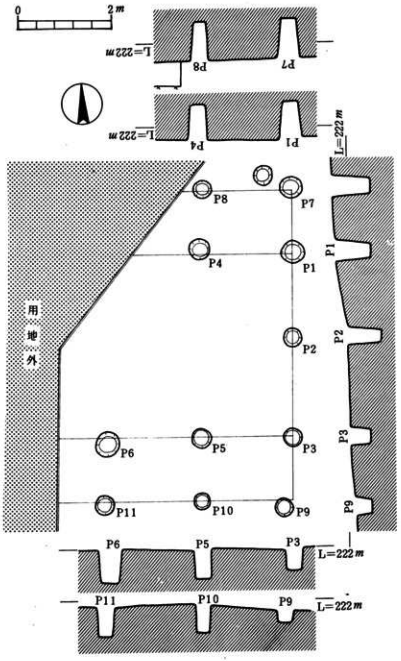
建物跡は，桁行方向の西側部分が用地外に廷びている。そのため桁行柱間は不明であるが，梁間間２間で南，北側に庇の付くものである。桁行方向は，Ｎ－86°－Ｗ方向で略東西方向である。柱穴は，比較的規模が大きく正確に配置する。建物跡は，梁間間の平均は 198cmを測り桁行柱間の平均も 198cmと同大を測る。北側の庇は，梁間柱間の平均が 133cm，桁行柱間が 191cmを測る。南側の庇は，梁間柱間の平均が 137.6cm，桁行柱間の平均が 191cmを測る。

第48表　掘立柱建物跡ＳＢ５計測表　（単位cm）

	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
Ｐ１～２	182	３９７	Ｐ１～４	１９８		1	８１	５０	５０	円
２～３	215		３～５	１９７		2	７０	４１	４０	円
４～５		４４０	５～６	２００		3	４３	４０	４０	円
						4	７７	４６	４５	円
						5	６６	４４	４１	円
						6	７３	５５	５０	円
平　均	198	４１８	平　均	１９８		平均	68.3	４６	44.3	円

建物跡ＳＢ５の庇

Ｐ７～１	１３８		Ｐ７～８	１９１		7	８５	４９	４７	円
８～４	１２９					8	８４	４１	４０	円
平　均	１３３		平　均	１９１			84.5	45.0	43.5	
９～３	１５０		９～10	１７５		9	２６	４１	４０	円
10～５	１３５		10～11	２０７		10	６０	３７	３３	円
11～６	１２８					11	６４	４３	４０	円
平　均	１３７.６		平　均	１９１		平均	５０	40.3	37.5	

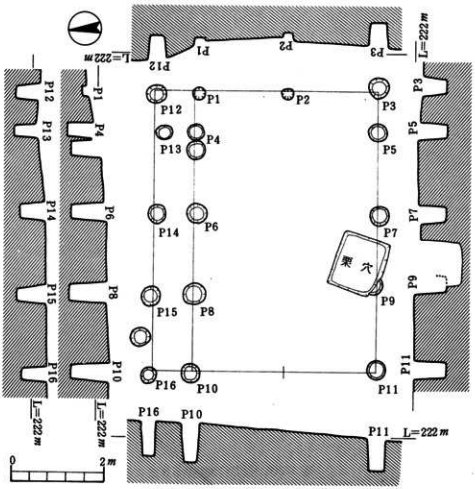


第 142図　掘立柱建物跡ＳＢ５

㉖掘立柱建物跡ＳＢ６　（第143図）

Ｂ・Ｃ－９・10区付近で，西側平坦地の最北端に位置する区域で９棟にあたる。この区域に建物跡２棟が検出され，そのうち東側の１棟である。一段掘り込んで平坦面をつくり建物跡を構築するが，北側の段上は，わずかな段が残るのみでシラス面まで耕作のため削平されていた。

建物跡は，２間×４間で北側に庇の付く柱穴の配例で検出されたが，２，３不明な点がみられる。１は，西梁間の中柱が検出されなかったこと，２は，Ｐ１～Ｐ４とＰ３～Ｐ５の桁行間が他の尺間に合わないこと，３は，Ｐ４～Ｐ13の庇梁間の尺間が合わない点である。Ｐ４～Ｐ10の桁行間は5.15mで，Ｐ５～Ｐ11は5.09mを測り，桁行柱間の平均は 170.6mである。これに対し，Ｐ１～Ｐ４の桁行柱間は84cm，Ｐ３～Ｐ５は96cmと狭い。これは，北側庇の梁間間の平均90.7cmとほぼ同じ尺間である。柱穴は，50cm～40cmの比較的正円形に近いしっかりしたもので深さも50～70cmと深い。



第 143図　掘立柱建物跡ＳＢ６

㈥掘立柱建物跡ＳＢ７　（第144図）

Ｆ－９・10区付近の東側平坦地の最北端に位置する区域で４郭にあたる。この区域は，柱穴が無数に検出され，建物跡２棟以上や柵列（抗列）やピットなど多くの構築物が存在したことが想定される。

構築面は，対面の９郭（掘立柱建物跡ＳＢ５・６）とほぼ同様の状況で平坦面を作る。尚，段状に掘り下げられた平坦面の壁際には，溝が検出された。丘陵頂部にあたるため，表層が浅い。この表層中から備前焼（第 150図）や常滑焼（1005）や青磁など粉々に砕けた細片が多量に出土し，その下面から建物跡が検出された。

建物跡は２棟検出されたが，そのうち西側の１棟を建物跡ＳＢ７とした。柱穴は，２間×２間に配列する。壁面寄りのＰ１～Ｐ３は，Ｎ－87°－Ｅのほぼ東西方向である。これを桁行方向とするとＰ１～Ｐ３の桁行間は平均2.32m を測り，南側のＰ５～Ｐ７の桁行間の平均は2.37m で若干長い。梁間間は，東側のＰ１～Ｐ７は平均2.15m，Ｐ３～Ｐ５は平均2.04m を測り若干短い。柱穴は，大きいもので35～40cm，小さいものは28cm程度のものである。建物内には，ピットが５基（Ｐit１～５）が検出された。Ｐit５がもっとも大きく，長径 1.5m ×短径 1.3m で深さ50cm前後を測る。底面は，スリ鉢状を呈する。さらに，建物西側には，柵列状に柱穴が並ぶ。柱間は，84cm～ 180cmと若干異なるが直線上に並び，堀切りと並行する。柱間の平均は，109.8m を測る。柱穴は，径25～30cmと小さく，深さは35～80cmと様々みられるが，深い柱と浅い柱が一本おきに配置されている。また，柱穴先端が抗状に細くなるものもある。建物跡ＳＢ７の南側にも配列する柱穴（Ｐ24～27）が存在するが，建物跡か柵列か判明しない。

㈦掘立柱建物跡ＳＢ８　（第144図）

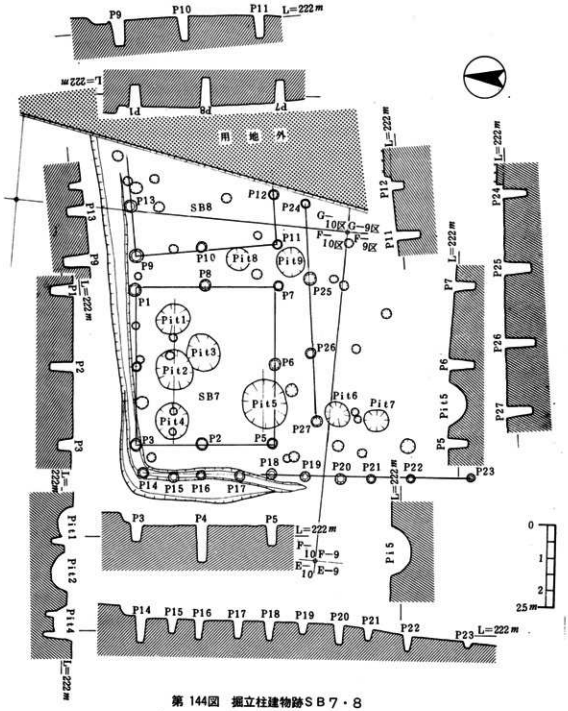
建物跡ＳＢ７の東側に並ぶ建物跡で，用地外に延びるものである。柱穴Ｐ９～Ｐ11を梁間に，Ｐ９～Ｐ13方向を桁行方向と想定した。桁行方向は，Ｎ－81°－Ｅである。Ｐ１～Ｐ13の桁行間は1.48m，Ｐ11～Ｐ12は1.49m である。Ｐ９～Ｐ11の梁間柱間は，平均2.11m を測る。

㈧土　坑　（ＳＫ）

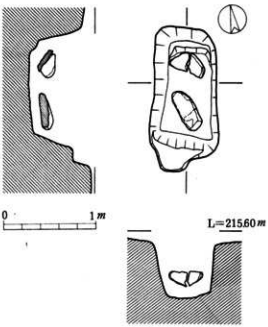
円形状の堅穴で，土坑（ＳＫ）として取りあつかった。土坑ＳＫ１～６まで検出された。そのうち，土坑１は，他の５基と形態が異るようである。尚，土坑６は，下面の痕跡のみを残すだけであった。他に，Ｇ－９・10区の４郭にあたる建物内のピットも土坑とは区別した。

㈨土坑ＳＫ１　（第145図）

Ｄ－４区のほぼ中央に検出された。巾65cm～75cm，長さ 140cmの長方形プランをもち，北側に15cm程度の張り出しをもつ。深さは約65cm前後を測る。主軸の方向は，Ｎ－９°－ｗである。土坑は，第Ⅲ層を切り込み，下面は第Ⅴ層に達しており，土坑内および底面の検出は比較的明確であった。底面は，掘り方と同じ長方形プランを呈し，巾55cm～45cm，長さ 100cmを測る。



第 144図　掘立柱建物跡ＳＢ７・８



第145図 土 坑 S K 1

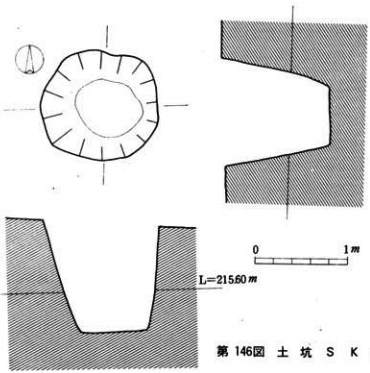
埋土中には，木炭片が多量に含まれている。底面から約10cm上位の位置から，長さ約47cmで巾約21cm程度の大きさの河原石の割石が３個検出された。この割石は，南側に２個枕石状に配置し，他の１個は北側中央に置れていた。なお，この割石は，１個体のものであり，３個がそのまま接合するものである。土拡墓状の遺構であるが，伴出遺物や骨などは，まったく確認されなかった。

㊁土坑ＳＫ２　（第146図）

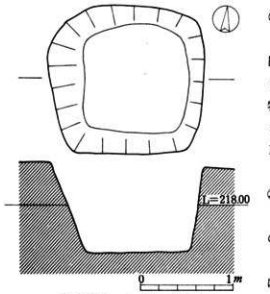
Ｇ－４区にあたり，北側を排水溝が，西側を土塁で囲まれた１郭の北西隅に位置する。118cm× 126cmのほぼ円形のプランを呈し，深さ 115cmの素掘りの竪穴である。底面は，70cm×65cmの円形の平担面をもつ。

埋土中からは，遺物などの出土はなかった。

１郭の北西隅に位置するところから，この郭に属する主要な遺構と考えられるが，性格は不明である。



第146図 土 坑 S K 2



第147図　土　坑　SK4

㈤土坑ＳＫ３

郭２の建物跡ＳＢ３内の南西隅に位置しＦ－６区にあたる。東西 216cm×南北 214cmの不正円形を呈し，深さ96cmの竪穴である。土坑内からは，遺物は発見されなかった。土坑ＳＫ２より一周り大きいが，位置・規模とも類似するもので，建物ＳＢ３の位置する郭２に属する遺構である。

㈥土坑ＳＫ４　（第147図）

Ｆ－７区北側に位置し，郭２を形成する階段状の壁面部分に構築され，壁面とは切り合っている。郭２検出後確認されたものであるが，前後関係は不明であった。土坑ＳＫ４の規模は，東西 165cm×南北 160cmの正方形プランを呈し，検出面の深さは90cmを測る。底面は，正方形の平坦面をもつ。伴出遺物はみられなかった。

㈦土坑ＳＫ５

すでに建物跡ＳＫ４の中で記載したが，郭３の南西隅に検出されたものである。長径 172cm×短径152cmの方形プランの掘り方をもち，底面も長径89cm×短径72cmの方形を呈した平坦面をもつ。底面までの深さは，148cmと最も深い竪穴である。土坑ＳＢ４と同じ形態に属するものと考える。

㈧土坑ＳＫ６

Ｃ－６・７区間に検出された径約 250cmの正方形のプランをもつ竪穴状の遺構である。北側の掘り方は約５cm程度確認されるが，南西隅の掘り方は削平されて消滅している。これまでの土坑より規模の大きいものであり，削平によってほとんど原形をとどめていないため同一視することはできないが，土坑ＳＢ６として取り扱った。空堀ＳＤ１とＳＤ２によって形成された郭８の中央部に位置することになる。

他に，登道ＳＲ１の先端部分にあたるＡ・Ｂ・Ｃ－２区付近に，楕円形と用地外に延びる方形の２つの落ち込みが所在するが，大部分が削平され不定形を呈していたため遺構としては取りあげなかった。

第3節　遺　物

山城に伴う時期の出土遺物には，次のようなものがあるが，いづれも表層中や遺構内流入土中の出土であった。

①磁器　（第148図）

㋑白磁

白磁はわずか4点出土した。

950は平担な底部から直線的に外反する口禿げ皿でD－3区表層の出土。

951は白磁椀で体部は内弯しながらのび口縁部でかるく外反し丸くおさめる。建物跡ＳＢ4流入土出土。

952は，高台は浅く削り出し見込みには沈線をめぐらし中央部がわずかに高くなる。F－6区表層出土。

953は，高台は低くべったりしており底が厚い。B－3表層出土。

950は，13－14世紀前半といわれ，**951～ 953**は，14世紀後半～15世紀前半の明代に比定されているものである。

㋺青磁

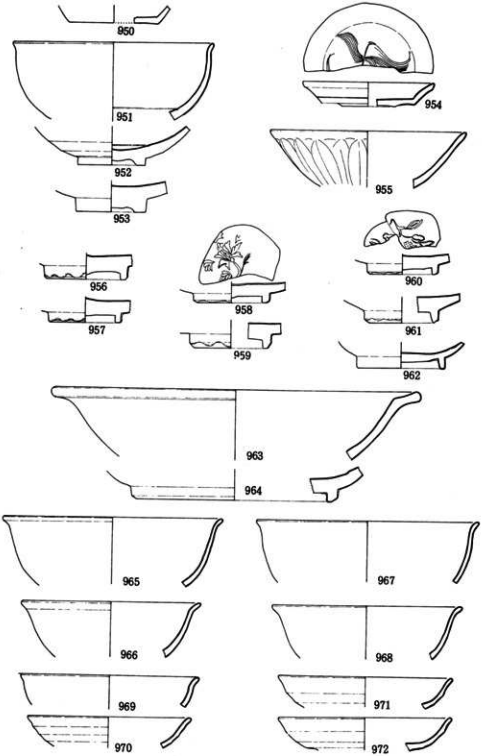
青磁は，総数48点出土し，各種，各時期あるようである。

954は，青磁櫛描文皿で，狭い上げ底から大きく外反しいったん陵をなして立ち上がる。底部全面に櫛描文を描く，12世紀後半から13世紀に比定されているもので，本遺跡出土の青磁では最も古いものである。

955は，鎬蓮弁文椀で体部は内弯気味に外広く口縁部は丸くおさめる。外面には鎬葉文の陽刻があり，釉薬は厚くかかる。13世紀代に比定されているものである。D－3区表層出土。

956～ 961は，青磁高台で14世紀代に比定されているものである。高台は低く垂直に立つものが多く，畳付部は面取りをする。高台外側まで施釉され高台内面にみられない。また，**958**や**960**は，円底全体に草花文などを描く。**956～ 959**は堀切り流入土中から出土し，**960**はD－5区表層，**961**はC－0区とD－8区の表層出土が80m離れて接合している。

962は，畳付部が狭く細い高台で，高台内面も施釉される。14世紀後半～15世紀に比定される。**963～ 964**は，青磁盤であるが，2次的に火を受けたもので黄灰色に変化し表面は剝落しているところもある。体部内弯気味にゆるやかに立ち上り，口縁部は内弯気味に開く。高台は低く垂直で畳付部は面取りされる。同個体が10点出土しているが，建物跡ＳＢ3・ＳＢ4の流入土中やＳＢ8の表土に集中して出土している。14世紀後半～15世紀前半の明代に比定されているものである。**965～ 968**は，端反り椀と呼ばれるもので体部は内弯しながらのび口縁部を軽く外反させ丸くおさめる。建物跡ＳＢ3・ＳＢ4の流入土やＳＢ8の表層中と隣道流入土（H－4区）やB・E－3区付近からも出土し広い分布をもつ。総数15点，14世紀～15世紀の元



第148図 磁　器　（縮尺－1／2）

後半から明前半に比定されるもの。 **969～ 972**は青磁皿である。 **969**は，体部は内弯気味に外広く口縁部は外反して丸くおさめ内端に陵を作る。 **970～ 972**は，体部は内弯気味に外広しそのまま丸くおさめる。体部外面に水引状の陵をつくる。同一個体の可能性もある。7片出土しているが，ＤＥ－２・３区に出土する。15世紀の明代のものに比定されている。

②土師器 （第149図）

土師器は総数96片出土しているが，底部はすべて糸切り底であった。尚，種類は，皿と坏の２種の出土である。

㋑皿 （**973－ 973**）

いずれも体部の立ち上がりが低い小皿ですべて糸切り底である。体部が外反気味に立ち上がるもの（ **973・ 974**），直線的に立ち上がるもの（ **975・ 976**），内弯気味に立ち上がるもの（ **977・ 982**）がある。口縁部は， **973**のように平担面をつくるものや **975**のように鋭角をつくるものもあるが，ほとんどが丸くおさめる。体部外面には，整形上の陵をもつものが特徴である。出土分布は，かなり広いが，郭２－４の流入土中やＤ・Ｅ－２・３区付近の表層出土が多い。

㋺坏 （ **974－ 1,000**）

底部から体部を直線的に引き出すもので，すべて糸切り底である。底部から体部は直線的に引き出すが，体部下半は部厚いが口縁部は細くなり丸くおさめる。 **989**のように，体部外反は横ナデでていねいに仕上げるものもあるが，ほとんどが整形上の陵を１～３残すものが多い。

皿と同様広い分布をもち，郭２－４は比較的多い。

③陶器 （第150・151図）

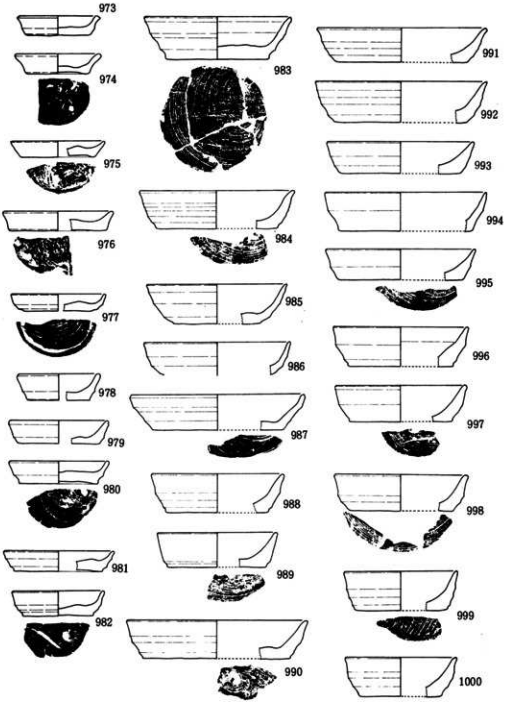
出土陶器には，備前焼と常滑焼があるが，破片は無数に出土するがいずれも大甕で，備前焼２個体分，常滑焼１個体の計３個体に限られた。

㋑備前焼 （第150図）

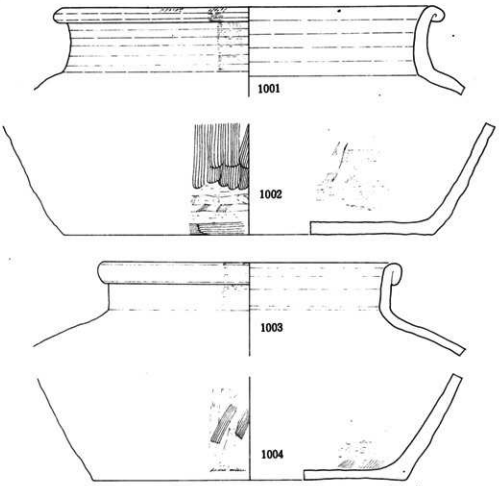
1,001－1,004は，備前焼の大甕の口縁部と底部付近であり，その他胴部もかなり出土しているが細片のため完形に復元は不可能であった。

1,001は復元口径42cm。頸部は外反しながら立ち上り，口縁部は玉縁となっている。器壁の厚さは1.3－1.7cmと厚く，頸部内面はヘラ削りの後口縁部ともに横ナデで仕上げている。頸部外面は横に刷毛調整を施している。青灰色で胎土に砂粒を含み，焼成はやや軟調で底部径は，40.5cmを測る。胴部下半の器面は，ヘラ削り仕上げ後，荒い櫛状のハケ目が部分的に残る。口頸部および口縁部の玉縁の断面から鎌倉時代中期－後期に属すると思われる。

1,002は復元口径33cmを測る大甕の口縁部である。口頸部は比較的垂直に立ち上がり，口唇部を折り曲げ 2.4cm巾の玉縁を作る。赤褐色に近い色調を呈するが，口縁部から頸部外面にかけて黄緑色の厚い胡麻がかかっている。**1,003**は復元径34cmの底部である。底部下面は平担で内面側壁もていねいな仕上げがみられる。色調は口縁部同様赤褐色を呈し底部内面にも胡麻がかか



第 149図　土　師　器（縮尺－1 / 2）



第 150図 備　前　焼　（縮尺－　／　）

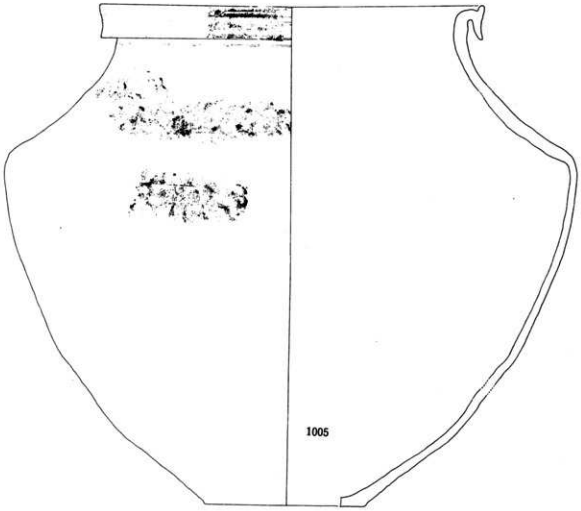
る，室町時代に比定されるものである。

口常滑焼　（第151図）

かなり多量の破片が出土したため，完形に推定復元することができた。口径22cm，胴部径77cm，底部径22cm，高さ67cmを測る大甕である。常滑焼は，１個体の破片であり，郭４にあたるＦ－９・10区付近（建物跡ＳＢ７）で粉々に砕けた多量の細片が出土した。さらに，破片は，傾斜下の郭３，郭２の遺構面や流入土中にも混入し，堀切りＳ，や隧道ＳＴの流入土中からも発見されている。

口縁部は，外側に折り返し肩が張り，口唇部は大きく垂れ下がり縁帯をつくる。縁帯巾は，4.5cmで，上方に 0.7cm立ち上がり，下方 2.5cm垂れ下がり，中央部分は若干凹む。頸部は大きく張り大きな胴部をつくる。胴部最大部分は，⅓の高さ付近で大きく屈曲している。

口縁部内面および縁帯は，横にていねいな刷毛調整が施される。体部は，内外面ともナデ調整がおこなわれるが，ヘラ消り状の痕跡を残すとこもある。



第 151図 常　滑　焼 （縮尺－1／5）

最大胴部の屈曲部の上部や下部に「米」印のスタンプ文が施文されている。色調は，基本的には赤褐色を呈するが，器半分には自然灰釉の黄緑色の胡麻がかかり，その影響で暗褐色を呈する部分もある。室町期前半に比定されているものである。

④瓦　器　（第152・153図）

瓦器質のものは，擂鉢2個と火舎が出土している。

㋑擂鉢

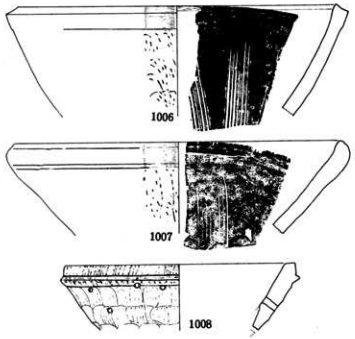
1006と1007である。1006は，底部から内弯気味に外広し，口縁部は平坦におさめる。口径28

cm，器壁厚み 1.2cmを測る。内両は，横位のていねいな刷毛目を施し，その上から６本を単位とする刻線を放射状に施すものである。口縁部平担面と外面は刷毛調整がおこなわれるが，他はナデ整形である。色調は黄灰色を呈する。Ｂ－１区の表層出土。

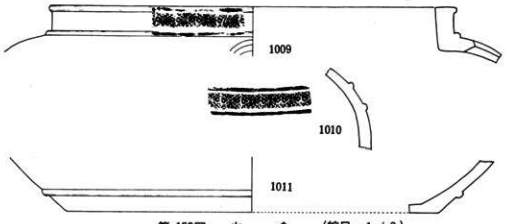
1007は，底部から直線的に大きく外反して口縁部外端はやや丸味をなして下がる。口径28cm，器壁厚み 1.1cmを測る。内面は，横位の刷毛目を施し，８本単位の刻線を放射状に施す。外面は，口縁部の丸味部分だけは刷毛目を施し，体部外面はナデによる整形がみられる。色調は，青灰色を呈する。Ｆ－２区表層出土。

㋺火舎　（第153図）

口縁部・頸部・胴部・底部付近の破片が出土し２おり，大略の形状は知り得るが高さは不明である。口径33.5cm，底径30.5cm，器壁は１～ 1.4cmを測る。口縁部は，球状に内弯してきた肩部から垂直に立ち上がり口唇部は平担面をもつ。口唇部平担面の外方への張り出しは凸帯状になり，口縁部立ち上がり部分に巡った凸帯文との間に花弁状の



第 152図　擂　鉢・石製品（縮尺＝１／３）



第 153図　火　舎　（縮尺＝１／３）

文様を収める菱形文を組み合せた連続文様がスタンプされている。胴部は肩がやや張った球状を呈するものと想定される。内弯した口縁部近くの肩部には，連結の円孔が穿たれている。肩部付近には，２本の並行する凸帯文が巡り，その間に口縁部側面と同じ文様のスタンプが施文されている。底部は平坦で器壁に対して薄く，0.7cmを測る。内外面ともヘラ磨き状のていねいな仕上がりで光沢をもつ。色調は，全体に黒灰色を呈する。類別に乏しく時期は不明。F－9・11区の表層中から出土している。

⑤石製品　(第152・154図)

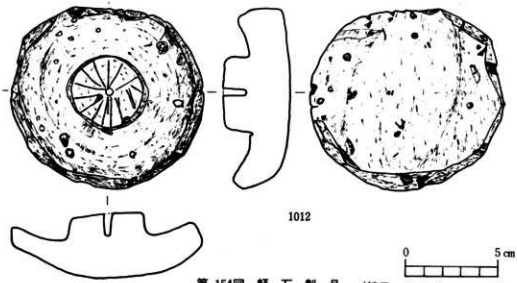
石製品には，滑石製の鍋と菱状の軽石製品が出土している。

㋑滑石製鍋

口縁部上端はなめらかな平担面をつくり，口縁直下にやや狭短な断面三角形の鍔を巡らす。内面はていねいに磨かれているが，外面はノミで整形した痕跡を残す。復元口径は，19cmを測る。つばより下の体部には，内面から外面に貫通する５箇の穿孔が確認される。E－0区表層中から出土している。

㋺軽石製品　(第154図)

B－1区の柱穴埋土上面より出土したもので，軽石（軟質凝灰石）製の菱状のものである。長径10.4cm・短径 9.4cmのほぼ円形をなすもので，高さは中心部で 3.6cmを測る。重さ73.2gである。中心部に径約４cm・高さ 1.4cmのつまみ状の凸起がつくられ，外線から中央の凸起に対してすり鉢状になっている。底面は，孤状に整形された不安定なつくりである。凸起の上面は平担をなし，中心部に径 0.4cmの貫通しない円孔が穿たれており深さは 1.3cmを測る。また，中心の円孔に向け不均等ではあるが放射状に17本の刻線が施されている。これらの製作は，鋭

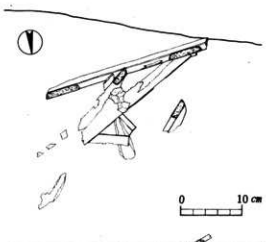


第 154図　軽 石 製 品　(縮尺－1／2)

利な刃物で加工している。

⑥金銅製装飾金具　(第155・156図)

F－5区の隧道内の流入埋土中から漆塗の木製品と，それに装飾された金銅製の金具が出土した。流入埋土は，第129図－5の9層腐植土層にあたり，隧道床面より約2mの位置である。出土状態は，第155図に示すものであるが，金銅製品と漆部分は比較的残りは良いが，木質部はほとんど腐植している。そのため破損したものが多い。木製品の形状は不明であるが，縁部に長さ 5.8cm，幅 1.1cmの金具を2cm間隔に釘付けしている。金具は，夢草様の文様を打ち出すものである。他に，径 1.8cmの円形の鉄金具も出土している。

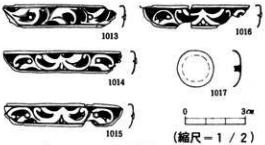


第 155図　金銅製装飾金具出土況態

⑦古銭　(第157図)

中世山城に伴う古銭は淳化元寶・至道元寶元豊通寶の3枚でいずれも表層からの出土である。3枚とも銅銭である。

これらの銅銭は，北宋銭 990～1078年頃鋳造されたものである（第49表参照）。本遺跡で使用されたものか断定しかねるが，鋳造時期により山城の遺物として取り扱った。

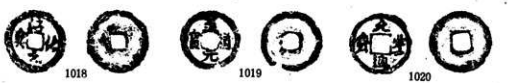


第 156図　金銅製装飾金具

第49表　古　銭　計　測　表

単位（cm,g）

番号	出土区層位	銭貨名	初鋳年　西暦	書体	直径	内面窓径	量目	材質	備　考
1	－8－C表層	淳化元寶	淳化元年　990	草	2.44	0.55	2.48	銅	無背
2	3－G表層	至道元寶	至道年間 995～7	楷	2.31	0.64	1.59	〃	無背
3	表層	元豊通寶	元豊元年　1078	行	2.44	0.71	1.71	〃	無背



第 157図　古　　銭　(縮尺二倍)

第4節　史料から見た横川周辺の中世山城

発掘調査において，舌状台地を南北に走る堀切りを中心として，その両側に建物跡，棚列跡腰郭跡及びトンネル跡等の遺構を検出することができた。また，遺物においても中世陶磁器，古銭，金銅金具等も出土し，中世山城遺構の規模を確認することができた。

本遺跡の山城遺構が文献上どのように記載されているかについては，山城遺構の調査とともに文献資料の集収を行った。文献では，次のような資料に中世の横川についての記載があったが，これらは横川城，鳥越城，陣之尾，宇都里二個所，古城，佐々木城に関する文献が主で，本遺跡において確認された山城遺構については記載されていなかった。

『三国名勝図会・巻之四十一』，『薩藩名勝志・六十四巻』，『横川軍記』，『薩隅日州古戦場記』，『薩隅日地理纂考』

これらの文献で，中世横川の沿革がほぼ記載されているのは『三国名勝図会・巻之四十一』の旧跡の項である。これによれば，承久年間に横川藤内兵衛尉時信がこの地を領地として横川城を居城とした。その後，河内守種名まで六代続いたとされ，永禄年間には真幸院の領主北原伊勢介がこの地を併領している。しかし，永禄5年(1562)に北原氏に内乱があり，一族の家臣の多くが島津氏に属したため，北原伊勢介は跡肥の伊東氏と内応し，伊勢介の息子新助とともに横川城に立籠った。15代島津貴久は特使をつかい伊勢介に招降するように申し入れたが，これを受け入れなかったため，貴久は島津義弘，島津歳久を大将として横川城に攻め入り，落城させ北原親子は城内にて自害した。その後，島津氏は横川を菱刈大和守重猛に与え，この地を治させたが，弟隆秋が球摩の相良義陽と内応し，島津氏に反発したため，永禄10年にこれを征して島津氏の直轄となっている。

また，同文献では島津氏が横川城を攻略した際の陣所についても記載されている。

鳥越（地頭館より卯の方十町余）中ノ村にあり地形平山にて今は樹木森然たり山の半腹に四方堀切の跡残れり，土俗の口伝に横川城攻の時，松齢公の御陣所ならんとソへり。

陣ノ尾（地頭館より午未方八町余）中ノ村にあり，横川城攻めの時，新納忠元の営所なりといひ伝ふ。横川軍記に陣之尾には新納忠元，田代甚助陣を取ると見へたり，山の半腹に堀切の跡残れり。

これら2箇所の陣跡は，文中に「山の半腹に堀切の跡残れり」とあるように現在でもその規模を知ることができる。特に金山川を挟んで本遺跡の東側に位置する鳥越城は，西から北，そして東に流れる金山川がほぼ一周する台地上にあり，自然の要害としては最も堅固な場所と言える。台地中心部を東西に堀切った空堀により，郭を形成しているのではないかと思われる。

鳥越城は永禄5年の横川城攻略時に陣所としての利用は文献に記載されているのであるが，その以前に横川城からの位置からしても，出城としての機能を発揮したのではないかと推察す

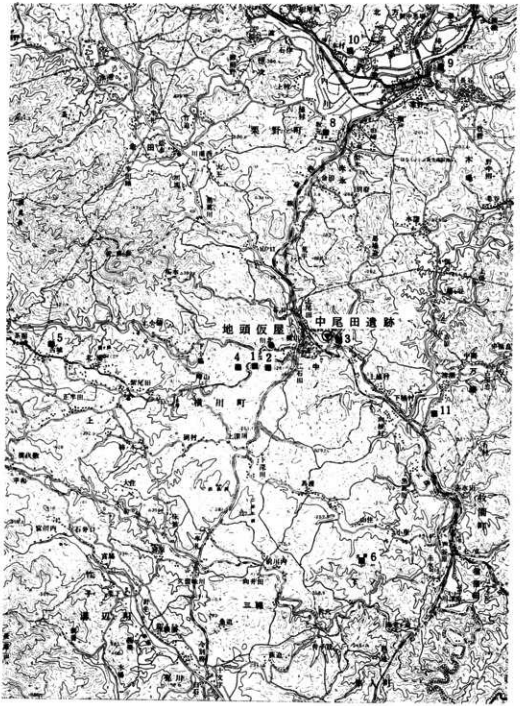
ることができる。その他，横川城の出城と思われるものに第158図・第50表に示した古城あるいは，文献上記載はなかったがその地形上山城遺構とされる無名城等が出城としての機能を持っていたのではないかと推察できる。つまり，横川城を中心として，位置および立地から東は牧園，霧島方面の防備として鳥越城があり，西は宮ノ城方面に対して古城が位置し，南は溝辺方面に対して山城とされる無名城が，それぞれ出城としての機能を果していたのではないかと思える。（第 158図　参照）

本遺跡における山城遺構を横川城の出城として位置にあてると，北の栗野方面に対する防備に築かれた山城ではないかと推察できるが，しかし，鳥越城とは対面する位置にあることや，調査の結果，山城遺構として規模が大がかりで長期間使用されたと思われるのに文献上に記載されてない点からすると一概に断定はできない。

今回の発掘調査において，確認された山城遺構についての文献資料は残念ながらなかったが，遺構の検出により中世山城の構造等について知ることができた。今後，遺構・遺物についての検討および，周囲の中世山城の調査が進めば本遺跡の山城遺構の創建時期あるいは使用時期の年代を解明する手掛りになると思える。

第50表　横川町周辺の中世山城

番号	名　称	所　在　地	創築年代	創　建　者	形　式	遺構・規模・その他	関係文献
1	横川城（長尾城）	姶良郡 横川町中ノ	永久年間（1919～22）	横川藤内衛尉時信	山　城	本丸のほか空堀による郭・土塁 400m × 120m 標高255m 永禄5年横川城の戦い。	『三国名勝図会』『薩藩名勝志』
2	陣之尾	姶良郡 横川町陣之尾	不　詳	不　詳	山　城	掘切，横川城攻めの時，新納忠元の陣営とされる。	『三国名勝図会』
3	鳥　越	姶良郡 横川町中ノ	不　詳	不　詳	山　城	山腹部が四方に掘切られている。横川城攻めの義弘の御陣とされる。	『三国名勝図会』
4	字都怒 二個所	姶良郡 横川町中ノ	不　詳	不　詳	山　城	2ケ所に堀切の跡，山田新助等の陣所	『三国名勝図会 横川軍記』
5	古　城	姶良郡 横川町山野	不　詳	迫田丹後守　？	山　城	2，3段の郭があり，眺望がよい。	横川郷土誌
6	佐々木城	姶良郡 横川町大崩	不　詳	佐々木高網	山　城	幅一間の堀跡，自然の要害と言える。	佐々木校書類より
7	溝辺城	姶良郡 溝辺町有川	元弘建武？	溝辺孫太郎守？	山　城	横川城攻めの時貴久の本陣	『薩隅日州古戦記』
8	坂元城	姶良郡 栗野町来永坂元	不　詳	不　詳	山　城	栗野城の出城？坂元番右衛門が居城	
9	栗野城	姶良郡 栗野町木場	不　詳	不　詳	平山城	本丸，二ノ丸，内堀，外城，中世・後期の形態，甲州流の築城とされる。	『三国名勝図会』『栗野由来記』
10	座崎城	姶良郡 栗野町北方本村	不　詳	不　詳	山　城	別称を北里城，栗野城とは川内川をはさみ，向城となる。	『三国名勝図会』『栗野由来記』
11	万　膳	姶良郡 牧園町万膳	不　詳	不　詳	山　城	万膳氏の居城	



第158図　横川周辺の中世山城

第7章　その他の遺構・遺物

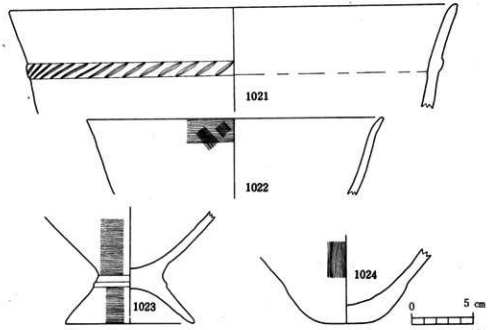
第4～6章で記載した縄文時代及び山城の遺構・遺物以外に，断片的ではあるが，本遺跡ではこれ以外の時代の遺構・遺物が検出されている。ここでこれを取り扱うことにする。

第1節　成川式土器　（第159図）

山城遺構の痕跡とみられるシラス盛土部分の下層から成川式土器が出土した。このシラス盛土部分（第135図）は，C・D－6～8区付近にあたり，後世の削平を免れた部分である。山城調査において，この盛土部分の中央部に確認トレンチを設定した結果，下層には，黒色腐植土層（第Ⅱ層）が存在し，さらに下層にアカホヤ火山灰に対比される黄褐色土層（第Ⅲ層）が確認された。成川式土器は，この第Ⅱ層の黒色腐植土層中に散布し，盛土部分の範囲に限定された。出土土器は，細片であるが1片の甕形土器の口縁部（1022）と丸底の底部（1024）を除けば，他はすべて接合し，同一個体であることが判明した。遺物の整理の結果。成川式土器は，この盛土部分の下から出土したものだけであった。これは，誠に不思議な現象であるが，山城遺構構築によって保護された層序の実体が少なからず確認される貴重な現象でもある。

㋑甕形土器　（1021・1022）

1021は口縁部で復元口径36.9cmを測る。口縁部がやや外反し頸部には凸帯を巡らす。凸帯には，斜状に刻目を施している。口唇部は平担面をなす。口縁部内面に陵をもつ。内外面とも横位の篦磨き調整がみられる。色調は暗茶褐色を呈し，口縁上部にはススが付着している。焼成



第159図　成　川　式　土　器

は普通で，胎土に石英粒を含む。

1021は，復元口径24cmを測る口縁部である。口縁端部付近でやや外反して口唇部は丸味をおびる。内外面とも横位の篦ナデ整形がみられるが，外面は部分的に斜状に荒くナデ整形をおこなっている。色調は暗茶褐色を呈する。焼成は普通であり，胎土に石英細粒を含む。

1023はラッパ状の脚台である。裾と脚台との接合部は，篦による押しつけ整形により凸帯状になる。内外面ともに横位の篦ナデ整形がみられる。色調は明茶褐色を呈し，焼成は普通で，胎土に石英粒を含む。

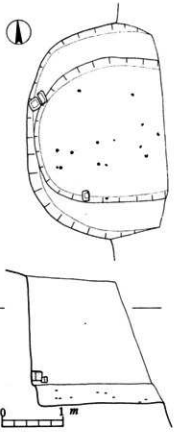
㈣壺形土器　(1024)

砲弾状の丸底の底部である。縦位の篦ナデの整形が確認されるが，胎土に小砂礫を含み焼成は悪い。色調は赤褐色を呈する。

第2節　近世墓

E－3区で，堀切りの西側壁面にあたる部分に検出された。掘り方は，円形プランを呈し，南北約 3.5m，東西約 2.3m を測り，ほぼ垂直に掘り込まれている。下面は，段をもってさらに小円（径約 2.4m × 2.1m）に掘り込まれている。段までの深さは 1.8m で，最下面の深さは 2.1m を測る。

出土遺物は，この段の部分に軽石製の石塔が出土し，段より下の中央付近の埋土中から古銭が出土した。軽石石塔および古銭は，いずれも浮遊した状態で出土しており，撹乱を受けたことが確認される。



第 160図 近 世 墓

出土遺物

①古　銭　(第161図)

近世墓内に副葬された六道銭は，17枚（鉄銭9枚・銅銭8枚）である。完全なものは，銅銭の4枚でその他は破損していた。この中で，字体の伴読できるものが9枚（鉄銭2枚・銅銭7枚）である。これらの六道銭は，判読されるものを見るかぎり，江戸幕府が寛永以降幕末まで統一的銭貨として鋳造発行した寛永通宝といえる。

②軽石石塔　(第162図)

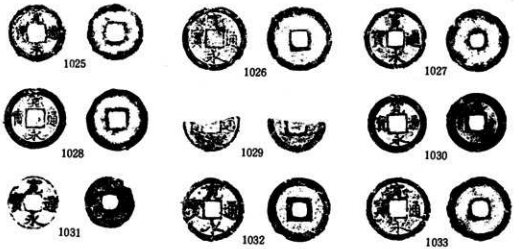
近世墓内発見の軽石石塔は3個であるが，これらはすべて石塔の基礎となる部分である。

1034は，高さ16.8cm，幅24.3×25.2cmのほぼ箱型を呈している。上面には，約13.2×14cmの方形状に浅いぼぞ

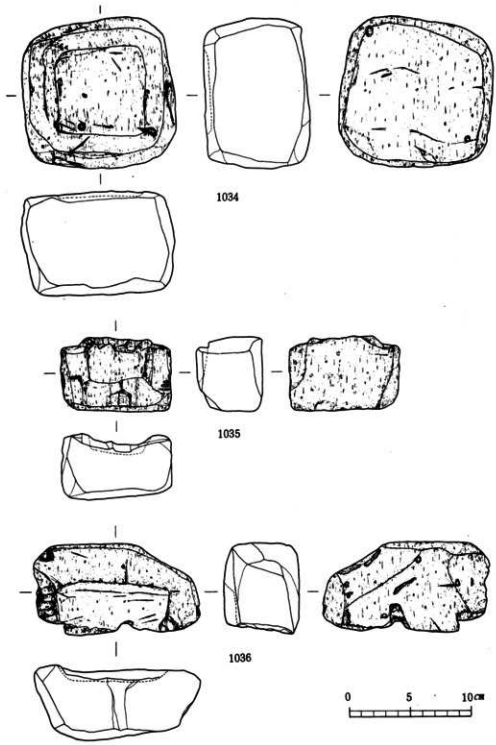
穴をもうけている。ほぞ穴は，何か鋭利な刃物で削ったらしくその削跡が各辺に見られる。また，上面の各縁は，部分的にスス状のものが付着している。

1035は，高さ10.8cm，幅18.4cmのもので，中心部と思われる部分が割られているが箱型を呈すると思われる。上面には深さ約 2.6cmのほぞ穴を設ている。各面とも平面状に整形しており，**1034**と同様，部分的にスス状のものが付着している。

1036は，高さ11.7cm，幅26.5cmで，中央部より二つに割られている。軽石の原石をそのまま利用したと思われる不定形をなしているが，各面は平面状に削られている。上面は，ほぞ穴が設けられている。縁およびほぞ穴にも部分的にスス状のものが付着している。



第 161図　古　　銭　　(縮尺=$\frac{2}{3}$)



第162図　軽　石　石　塔（縮尺－1／3）

付録

装飾金具　　機械金属技術指導センター　　出雲茂人

当該金具の素地材料や内部の組織などを検討する目的で以下のような検討を行った。

（1）蛍光X線分析による定性分析

金具の表面は金メッキ，裏面はウルシと思われる塗膜が認められたが，金属部分を蛍光X線分析装置で定性的に分析したところ，検出された元素は，銅と鉄のみであった。それ故，当該金具の素地は，銅板であろうと思われる。（図1．蛍光X線分析チャート）

金属の精錬技術の発達していなかった時代では，銅板の中には金属系の不純物として，多量の鉄分のほかに，亜鉛，鉛なども相当量含有されていたろうと想像されるが，この不純物としての亜鉛，鉛などは，長期間土中に埋蔵されて方食が進行する中に，脱亜鉛現象その他の方食作用によって，脱落，消失したものと考えられる。

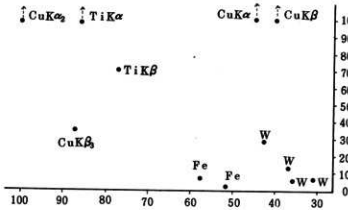
（2）電子顕微鏡による観察

図1に，当該金具の破断面の電子顕微鏡写真を示す。

ここで，白色の帯状に見えるのが，金メッキの層である。その他の球状に見える部分は，銅の酸化物層である。（一部鉄の酸化物も含むと考えられる）

この写真に見るかぎりでは，銅分はもはや金属銅としては存在せず，そのほとんど全部が酸化物の形で存在していることが判る。

素地が，ほとんど金属の酸化物の集合体でありながら，なおかつ装飾金具の原形をとどめているのは，金具表面に施された厚い金メッキ（厚み約2μ）と裏面に塗布されたウルシと思われる塗膜のせいであろう。その証拠には，僅かな外力を加えることによって，金具は簡単に折れてボロボロにくずれてしまう。



第 163図　Cu，Fe　（装飾金具）

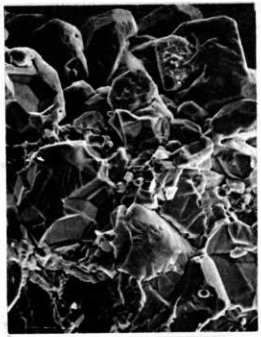


写真　装飾金具

第8章　まとめにかえて

第1節　層位について

中尾田遺跡は，基盤層まで10層に区分されその間に，火山灰層と文化層が挟まれる良好な層序が確認された。そのうち，縄文文化層は，第Ⅳ層と第Ⅲａ層に確認された。また，第Ⅵ層の黒色腐植土層中に旧石器文化の存在が想定されたが，黒曜石のチップが数点出土するにとどまった。これまで明らかにされている火山灰層との関係は，第Ⅹ層＝阿多火砕流(Ata),第Ⅸ層＝入戸火砕流（Ito），第Ⅳ層＝桜島降下軽石（SzP），第Ⅲ層＝アカホヤ火山灰（Ah）に対比される。このうち，第Ⅳ層＝桜島降下軽石は，遺跡中央の平坦な部分の第Ⅳ層黒色腐植土層下位に挟まれて残存しており，第Ⅳ層の縄文土器はこの軽石層より上位に包含されている。次に第Ⅲ層は，アカホヤ火山灰を母胎とするが，ａ層の軟質黄褐色土層中には縄文中期の阿高式土器を中心に大量の土器が包含されているが，第Ⅳ層に接する硬質黄色パミス含層中（ｂ層）には遺物の包含はみられなかった。阿高式土器などは，この下位のｂ層に接する部分からも出土し，包含層内での高低差が大きい。このことは，ａ層は，２次堆積の状態であることが想定される。

第2節　C^{14}年代測定について

C^{14}年代測定は，第Ⅳ層のNo１炉穴（No１）と第Ⅲ層の　　炉址（No２）の２例の木炭を依頼した。その後，No１の試料が不足ということで追試をおこなったものがNo３である。

No１	N－3929	8530± 125y B.P（8280± 120y B.P）	木炭
No２	N－3940	1450± 65y B.P（1410± 60y B.P）	木炭
No３	N－3983	8430± 125y B.P（8190± 120y B.P）	木炭

No１およびNo３は，第Ⅳ層下部に検出され，第Ⅴ層に掘り込んでつくられた炉穴であり，炉穴内からは明確な伴出遺物は出土していないが，周辺からは第９類の山形押型文系の土器が出土しており，おおよそこれに対比されるものかも知れない。No２の得られた炉址は，第Ⅲ層のｂ層面に検出され，第Ⅲ層出土の土器に比定して調査はおこなったが，C^{14}年代は，非常に若い数値が得られた。これは，新しい時期の炉址の掘り込みが２次堆積などの要因によって検出できなかったものか，また，すぐ腐植土および表層に近いことなどの条件から確実な年代が得られなかったものか不明であった。

第3節　第Ⅳ層について

①遺　構

第Ⅳ層からは，炉穴と集石が発見された。炉穴は，この時期においては本県では初見のものであり注目されたが，共伴資料に乏しく，多岐にわたる出土土器の中でどの時期に属するか確実な証左は得られなかった。ただ，No１炉穴出土の木炭から先のようなC^{14}年代測定値が得られた。このような炉穴は，熊本県㉘椛島遺跡で発見されており，１号炉穴は型態上椛島遺跡１号・

2号炉穴に酷似している。

集石は，福岡県・熊本県などで早期から前期に属するものが数多く発見されているが，本県においても多くの遺跡で各時期のものが発見されている。これまで用途を知る確実な資料には乏しいが，集石の形態や礫が肉眼的にみて焼けている状態などから，オセアニア・ミクロネシアなど南洋にみられる石焼料理用の地炉に祖型を求める考えが一般的であり，石焼址・石蒸炉などが想定されている。本遺跡発見の集石にも下部に大きい礫を組み合せ，その上に小礫を投げ込む形態のものもあり，形態上は類似するものと想定される。尚，本遺跡の場合，集石の近くから発見された炉穴内から木炭などと共に多量の小礫が出土していることから，炉穴と集石の組み合せも注目される。このような例は，先の権島遺跡でも同様な状態が検出されている。

②遺　物

土器　非常に種類の豊富な多岐にわたる土器型式の出土がみられるが，これが本遺跡の特徴ともいえる。特異な形態の土器が多いため，整理の結果，繁雑な類別を余儀なくされたが，そのうち特徴的なものについてまとめてみることにする。

第1類土器は，肉厚で器面整形が良好な円筒形土器で，口縁外面に貝殻腹縁で刺突文を飾る特徴的な形態をもつ。本県では，これまで出土例をみないものであるが大分県政所遺跡出土の政所式に酷似するものである。

第3類土器は，貝殻刺突文と条痕文を組み合せた文様を施文するものであり，本遺跡では出土量の多い型式に属する。その特徴から3つに細分されたが，口縁部が直口して口縁外面に貝殻腹縁刺突文を施し胴部は貝殻条痕文を施すもの（a類）と口縁部が外反し若干肥厚して同様な文様がみられるもの（b類）は，石坂式土器に属することが知られている。C類は，胴部に貝殻刺突文で綾杉文を描くもので，これまで西之表市下剝峯遺跡などに類例がみられるが少なく，石坂式土器に属するか今後の資料を待たなければならない。

第6類土器は，撚糸文を施した肉厚な円筒形深鉢が想定されるものであり，これまで類例が少ない。熊本県沈目立山遺跡で撚糸文円筒土器の報告があるが，これらに類似するものか？。

第8類土器は，壺型の器型を呈する特徴的な形態をもつものである。ほぼ1個体の出土であって，これまで類例は知られていないものであり，非常に個性的な土器といえる。

第9類土器は，e類やi類を除けば，個体数は非常に少ないものであるが，形態上の特徴から一括して類別し細分したものである。それぞれの特徴は，表のようである。器形は，比較的薄手であり胴部が屈曲し，外反気味に内傾し口縁部が大きく外反する特徴的な器形をもつものである。文様は，a～d・l・m類など共通する部位（器外面・口縁内面・口唇部）に施文されるが，文様原体に個性的なものが多く出土量が少なく，これらを同類として扱うには，資料の増加を待たなければならない。e・f・i～k類は，2種以上の文様が施文されるものであり，特に，撚糸文や押型文の融合に注目されるものである。i類は，胴部凸帯に山形文を施し，口縁内面や口唇部には，山形文・同心円文・撚糸文など多岐にわたる文様を施すものである。

このような例は，宮崎県田野でミミズバレ文を主体に山形押型文などが口縁内面や胴部下半

第9類　土器の特徴

	主文様	口縁	口頸部	胴部	底部	副文様 胴部	副文様 口縁内部	副文様 口唇部	個体数
第9a類	撚糸文	外反	平担	屈曲	?	凸帯文	(撚糸文)		2以上
第9b類	網目撚糸	＊	＊	?	?		(網目撚糸)	(網目撚糸)	1
第9c類	変型撚糸	＊	＊	屈曲	?				1
第9d類	縄文	＊	＊	＊	?		(縄文)		2
第9e類	山形文	＊	＊	＊	上げ平底		同心円文	同心円文	10以上
第9f類	菱形文	＊	＊	＊	?	円文	(菱形)	(菱形)	5～6
第9g類	同心円文	＊	＊	＊	上げ平底		(同心円文)	(同心円文)	5
第9h類	同心楕円文	＊	＊	＊	?			(同心楕円文)	5
第9i類	みみずばれ	＊	＊	＊	?	凸帯上に山形文	山形文 同心円文 撚糸文 みみずばれ	山形文 撚糸文	10
第9j類	回線文	＊	＊	＊	?	凸帯刻目		刻目	2
第9k類	沈線文	＊	＊	＊	?	円文	(沈線文)		2
第9l類	連点文	＊	＊	＊	?				3
第9m類	貝殻文	＊	沈味	＊	?		(貝殻文)		1

に施文される完形がみられ形態を知ることができる。このような器型・文様の融合したものは，手向山式[中]に比定されている。また，同心円文および同心楕円文と呼んだ特異な押型文が出土したが，同心円文は，溝辺町木佐貫[原]遺跡などで知られているが，熊本県西原においても報告されており，かなり広い分布をもつものかもしれない。同心楕円文は，その原体が判明する硫片が出土して廻転押型文であることが確認された（原体長6cm，円周長 3.2cm）。

石器　土器に比較して非常に少ない。石鏃は，正三角形に近い小型の石鏃が多く，主要剝離面を大きく残し，押圧剝離の比較的荒いものが多い。V類に類別した長身鏃は，最近，指宿市小牧3A遺跡や溝辺町石峰遺跡など出土例が知られており，この時期に属するものであることが判明しつつある。石斧には，円礫を剝離し，その剝片を使用したもので片面に自然礫面を残す特徴的なものもある。

第4節　第Ⅲ層について

第Ⅲ層はa，b2つに分けられ，Ⅲa層は縄文中期の回線文土器を中心とする遺物の包含層であり，Ⅲb層は無遺物層である。Ⅲa層は厚いところで40～50cm堆積しているが，この中からまんべんなく遺物が出土している。また遺物はかなりの距離にあるものでも接合する。このことは遺構の確認の状況と考えあわせるとⅢa層がある程度移動したことが想定される。

遺構について

遺構は炉跡3基，土壙1基が検出された。炉跡はⅢa層の下面で焼土を確認し，Ⅲb層でその輪郭を確認した。おそらくⅢa層中から掘り込んでると考えられるが，その埋土が焼土を混入している点を除くとⅢa層とほぼ同質であるため，明確な上面は確認できなかった。埋土中に時期を決定しうる遺物がなかったため周囲の回線文の土器と同時期として調査したが，2号炉跡の木炭でC^{14}年代測定を行った結果，1450±65（1410±60）という結果が得られた。これ

は周囲の遺物の時期と合致せず後世の遺構ということになる。このことから炉跡が廃棄された後Ⅲ層が移動したことが想定される。土坑も炉跡と同じような状況であり，埋土の上部から第77図 465の遺物が出土したが炉跡のことと考えあわせると明確な時期の決定はしがたい。

遺物について

土器はその形態・文様から14類に類別した。まず第Ⅰ類としたものは凹線の間に押引文，沈線文・貝殻腹縁押圧文を施すもので，胎土に滑石を多く混入するものもあり並木式土器と呼ばれるものである。出土量はそれほど多くはないが凹線の間にヘラ状のものによる沈線を施文するものなど良好な資料が得られた。次に第Ⅱ類としたものは阿高式土器であり，今回出土した中で最も多い土器である。胴部上半から口縁部にかけて施文しており，底部にまで文様のみられるものはないようである。施文は指頭状のものと竹管もしくは木等の棒状のものの2種類によってなされている。また器面の調整はそのほとんどがていねいなナデによっているが第82図503と胎土に滑石を多量に混入し，ほぼ同じような器形であることから凹線文は施文されていないがⅡ類として扱った第91図607，608はヘラケズリによる整形である。また従来阿高式土器の底部と言われている鯨の脊椎の圧痕のみられるものも出土している。胎土には多少の差はあるが滑石を含むものが多くみられる。第88図572，576，578は坂の下遺跡の第2類に類似している。一方第Ⅱ類として扱ったものの中で第89・90図は凹線が浅くなり，そのほとんどに条痕がみられることから岩崎式と考えられる。第90図 605は綾B式に類似している。第Ⅲ類としたものは口縁部が肥厚する土器であるが，Ⅲa，Ⅲb類はその肥厚部分に施文している。口縁部が肥厚しその部分に施文する土器は南福寺式・出水式であるが，当遺跡の土器は押引文，貝殻腹縁押圧文等を多く含みどちらとも決めがたいが出水式に近いものとしておきたい。またⅢ類としたものの中で第95図 613，614，第96図 644はその文様に指宿式に近いものが感じられる。これらの土器に類似したものが給良町の南宮島遺跡でも出土しているが，その明確な時期は不明であり今後の課題として検討したい。土器は他に主なものとして1点ではあるが曽畑式，晩期の研磨土器，粗製土器が出土している。

石器は石鏃，石匙，石斧，磨石，敲石，石皿等が出土した。中でも石鏃が68点と他のものに比べ数が多く注目される。

第4節　山城について

山城の調査は，堀切りを中心にその周辺の調査であり，城全体からみると一部の区域にあたるが，多くの知見と成果をあげた。その重な成果を簡単に述べたい。

丘地を切断する堀切りとその途中から作られた隧道はセットとなっており，山城の重要な防備に加えて通路としての重要な役割を果していたと想定される。また，これらは大がかりな土木工事であり，当時の山城構築の重要性を知る手がかりとなるものであった。

堀切りから東側は，階段状に造成して連郭状に郭を形成して掘立柱建物跡を構築している。さらに，堀切り辺部には，土塁を構築していたことも判明した。西側は若干様相が異なり，空

堀と柵列で各郭を形成している。調査区域でみる限り，通路は，東側の郭は堀切りと隧道を使用し，西側は南傾斜面の登道を使用している。また，南側と北側の傾斜面の構築も大きく異っている。南側は，細く帯状に平担地が造られ柵などが築かれた帯曲輪状の施設が確認されそれぞれ登道が付設されているが，搦手にあたる北側は，空堀などによって腰曲輪状の小丘が切り出されているだけであった。このように郭の配置など山城の構築型態を知る重要な手がかりが得られた。次に，山城の構築および使用時期であるが，遺構の検出状態から若干の時代差を知ることができる。空堀ＳＤ１と柵列ＳＦ１は，切り合い関係にありＳＦ１が新しい。また，建物跡ＳＢ４では，曝数の遺構とそれ以前の掘立柱建物跡の２時期の使用が判明している。その他の郭では，多数の柱穴が検出され数回の建替が想定されるところもあるが，時期差を示すものは確認されていない。出土遺物は，多種存在しながら非常に少ないが，その中で大きな時代差がみられるものが存在する。注目すべきものでは，２個体の備前焼が形態的に大きく異り，編年[28]にあてるとⅡ期に属するものとⅣ期に属するものが存在することである。その他，滑石製石鍋・古銭など鎌倉時代に属するものと常滑焼[29]を代表して室町時代前半の南北朝に属するものがみられる。なお，青・白磁類[30]は，13世紀～16世紀にわたるものが出土し時代幅が大きいが，梁付類の磁器の出土はまったくなかったことも本山城の特徴の一つといえる。このように，本山城の出土遺物の特徴的なものには，鎌倉時代（中～後期）に属するものと室町時代前半に属するものが存在するが，その使用時期の推移を知る遺構・遺物の関係は把握されなかった。

近年，大規模開発や縦貫道建設に伴って加世田市村原（椎ノ原）遺跡[31]・同市上ノ城遺跡[32]・鹿児島市加栗山遺跡[33]など中世山城の調査が行なわれ，資料が増加しつつある。こうしたなかで今回の中尾田遺跡の調査は，広い範囲で調査され，多種の構築遺構が判明したことで中世山城の研究に大きく寄与するものであろう。

(註)

①東京都立大学町田洋助教授・県立指宿高校成尾英仁教諭の御教示による。

②緒方勉・高木正文「久保遺跡（櫛島遺跡）」『熊本県文化財調査報告書』　第18集　1975年

③印東道子「トラック諸島の石焼料理」『えとのす』　第７号　1976年

④賀川光夫「早期縄文式土器の新資料」『考古学雑誌』　46巻３号　1960年

⑤河口貞徳「南九州の条痕土器」『石器時代』　第１号

⑥西之表市教育委員会「下剝峯遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書』　1978年

⑦緒方勉「沈目立山遺跡」『熊本県文化財調査報告書』　第26集　1977年

⑧茂山護「児湯郡高鍋町の縄文土器」『宮崎考古』　第２号

⑨寺師見国「南九州の押型文土器」『古代文化』　２－２　1953年

⑩鹿児島県教育委員会「木佐貫原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（11）』

⑪中村愚他「塩井社遺跡」『研究室活動報告』８　熊本大学文学部考古学研究室　1980年

⑫浜田耕作・島田貞彦「薩摩国出水郡出水町尾崎貝塚調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』　第６冊　1921年

⑬河口貞徳「南九州における縄文式文化の研究・岩崎及び木ケ暮遺跡について」『鹿児島県考古学会紀要』　３号　1952年

⑭三島格「鯨の脊推骨を利用せる土器製作台について」『古代学』　10－１　1961年

⑮森醇一郎「坂の下遺跡の研究」『佐賀県立博物館調査研究書』　２　1975年

⑯西田道世他「黒橋」『熊本県文化財調査報告』　第20集　1976年

⑰西田道世他「阿高貝塚」『城南町文化財調査報告書』　1978年

⑱田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』　第６集　1979年

⑲曝敷の遺構については，不変形の礫床の拡がりに建物跡などとの関係に不明な点が多かったが，河野治雄氏から庭園遺構の一部ではないかとの御教示を得た。一部の検出ではあり連断はできないが可能性は充分考えられる。

⑳間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート　１・２・３」『倉敷考古館研究集報第１・２・３号』　1966年～1968年

㉑赤羽一郎・小野田勝一「常滑・渥美」『日本陶磁全集』８　中央公論社　1977年　尚，備前焼・常滑焼については，岡山県教育委員会伊藤晃氏から御教示を得た。

㉒磁器類については，九州歴史資料館亀井明徳氏から御教示を得た。

㉓加世田市教育委員会「村原（椎ノ原）遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書１　1977年

㉔加世田市教育委員会「上ノ城遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書２　1980年

㉕鹿児島県教育委員会「加栗山遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書13　1981年

図版　1

遺跡全景
（北から）

図版　2

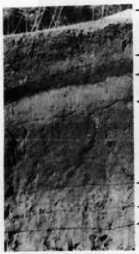
1．遺跡遠景（南から）

2．調査前遺跡近景（北から）

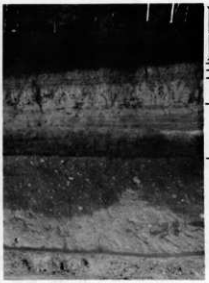
図版 3

1.

2.

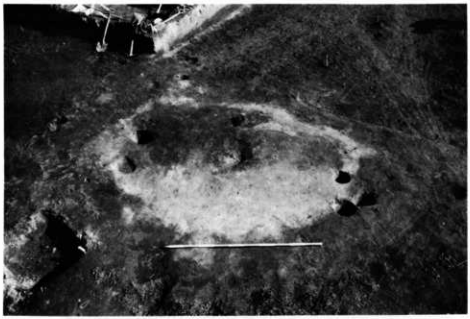


3．層 序



4．層 序

図版 4



1．地層横転（北から）

2．同・断面（北から）

図版　5

1．第Ⅳ層調査風景

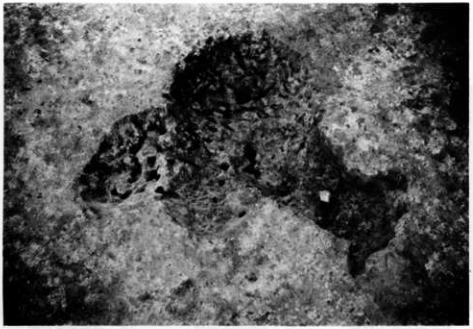
2．軽石製品出土状態

3．土器出土状態

4．土器出土状態

図版　6

1．炉穴No1　検出状態

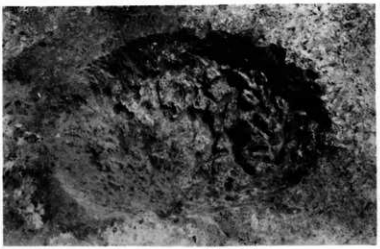


2．炉　穴　No1

図版　7

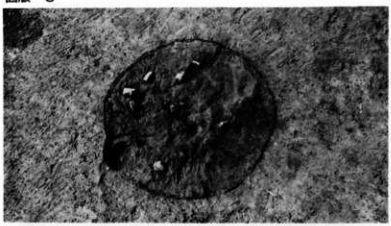
1．炉穴No2（南から）

2．炉穴No2（北から）

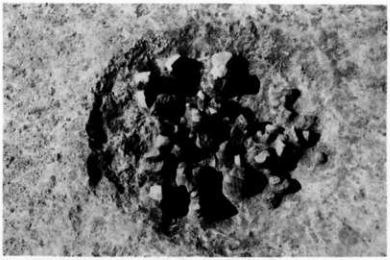


3．炉穴No2（南から）

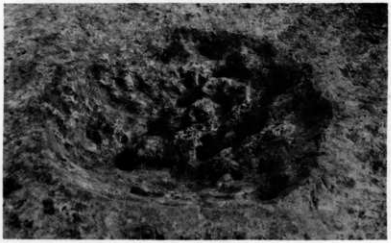
図版 8



1．炉 穴 No3（西から）



2．炉 穴 No3（西から）



炉 穴 No3（西から）

図版 9

1．集 石 2 号（東から）

2．集 石 5 号（北から）

図版 10

1．集 石 6 号（南から）

2．同 断 面（東から）

図版 11

1．集 石 8 号（南から）

2．集 石 7 号（南から）

図版 12

1．集 石 9 号（北から）

2．同 断 面（北から）